

大仁町埋蔵文化財調査報告第12集

長者原大平遺跡群発掘調査報告書

第Ⅰ次調査(昭和53年～55年)第Ⅱ次調査(昭和57年～58年)

—北伊豆における縄文時代早期前半(燃糸文・押型文期)の遺跡群—

1993

静岡県大仁町教育委員会

長者原大平遺跡群発掘調査報告書

第Ⅰ次調査(昭和53年～55年) 第Ⅱ次調査(昭和57年～58年)

—北伊豆における縄文時代早期前半(撚糸文・押型文期)の遺跡群—

1993

静岡県大仁町教育委員会

卷首図版 1



大平 A 遺跡第 I 次調査区全景（昭和53年11月）



大平 A 遺跡第 II 次調査風景（昭和57年 7月）

卷首図版2



大平A遺跡第II次調査遺物出土状態（昭和57年8月）



大平B遺跡調査区全景（昭和54年7月）

卷首図版3



大平C遺跡第I次調査区調査状況（昭和54年11月）



大平C遺跡第I次調査区遺構全景（昭和55年3月）

卷首図版4



大平C遺跡第II次調査区全景（昭和57年10月）



大平C遺跡第II次調査風景（昭和57年11月）

卷首図版5



山形押型文土器（大平A遺跡第II次調査出土）

卷首図版6



撚糸文・押型文土器（大平C遺跡第II次調査出土）

卷首図版 7



斜繩文土器（大平C遺跡第II次調査出土）

卷首図版8



撲糸文土器（大平B遺跡出土）



諸磯b式土器（大平A遺跡第II次調査出土）

例　　言

1. 本書は、静岡県田方郡大仁町長者原字大平(おおびら)に所在する、大平A・B・C各遺跡の、第Ⅰ次調査(昭和53年～55年)および第Ⅱ次調査(昭和57年～58年)についての報告書である。
2. 発掘調査は、日産自動車株式会社による、同地域内の研修所建設計画(当時)に伴う事前調査であり、日産自動車株式会社と大仁町が委託契約を結び、当教育委員会がこれを実施した。
3. 調査は、昭和51年11月1日の現地踏査および、昭和53年5月14日～26日まで行った予備調査の結果を踏まえて本調査を行った。まず大平A遺跡については、同53年11月20日～翌54年1月21日(第Ⅰ次調査)と昭和57年6月13日～9月7日(第Ⅱ次調査)まで、大平B遺跡については、昭和54年7月16日～9月17日(第Ⅰ次調査のみで終了)まで、大平C遺跡については、同年9月18日～翌55年3月21日(第Ⅰ次調査)と昭和57年9月9日～12月14日、翌58年1月27日～2月14日(第Ⅱ次調査)までそれぞれ実施した。
4. 本書の執筆は主に漆畠稔がこれにあたり、鳥海嘉奈子・碓井恵美子が分担し、秋本真澄・鍵山一郎が一部を分担および補筆した。
5. 文体の統一および総括的編集・校正は漆畠が行い、碓井・竹上紀代美・秋本・鍵山がこれを補佐した。
6. 遺物の実測および各測図の整理・トレース・拓本等は、秋本真澄の指導のもと鍵山一郎の協力を得て、鳥海嘉奈子・碓井恵美子・竹上紀代美および漆畠が行った。また、写真撮影は漆畠が行った。
7. 調査期間中および整理作業については、以下の方々の助言・協力を頂いた。(順不同・敬称略)
江坂輝弥、野口義磨、中山清隆、町田　洋、小野真一、瀬川裕市郎、関野哲夫、波谷昌彦
可児通宏、鈴木保彦、館野　孝、原川雄二、戸田哲也、土肥　孝、山形真理子、高橋　豊
8. 本書にかかるる遺物および実測図等は、すべて大仁町教育委員会で保管している。
9. 本遺跡群の発掘調査および本報告書の作成にあたり、日産自動車株式会社をはじめ地元長者原地区、そして関係された多くの方々に対し心より御礼申し上げる次第である。

長者原大平遺跡群発掘調査関係者一覧

〈第Ⅰ次調査〉

発掘主体者 大仁町教育委員会

教 育 長	堀江三郎	(前任・昭和54年9月30日まで)
	土屋憲次	(後任・昭和54年10月1日より)
事 務 局 長	柳原一彦	(前任・昭和53年3月31日まで)
社会教育課長	土屋長一	(後任・昭和53年4月1日より)
係 長	野沢俊英	
文 化 財 係	上野泰英	(前任・昭和54年5月31日まで)
	内田英夫	(後任・昭和54年6月1日より)

大仁町文化財保護審議会 沼田 勇、鈴木 柳、佐野丹山、山川勇治、菊地 尊(昭和53年6月30日まで)、渡辺敏夫、(同)、土屋四衛(同)、室伏 脩(昭和53年7月1日より)、白砂 智(同)、友野 博(同)

発掘担当者 漆畠 稔 日本考古学協会々員・大仁町文化財保護審議会委員
鍵山一郎 土肥町文化財専門委員

調査指導者 秋本真澄 日本考古学協会々員・加藤学園高等学校教諭

調査参加者

○現地踏査(昭和51年11月1日)

小野真一、長倉紫朗、原 茂光、柳原一彦、野沢俊英、浜口 昭、漆畠 稔

○予備調査(昭和53年5月14日～26日)

秋本真澄、漆畠 稔、鍵山一郎、漆畠裕江、山口弘美、森野弘保、小坂義雄、山田 実、山田豊子
鈴木まつの、杉山まさ子、手老さつよ、牧野とく、森野きく、内田浜雄、梅原信代、川口とめ
川口ふみ子、石倉岩男、佐々木弘、鶴田昌二

◎大平A遺跡（昭和53年11月20日～昭和54年1月21日）

秋本真澄、漆畠 稔、鍵山一郎、梅原邦一、立田伸子、秋山文子、渡辺まさ子、高橋よし子
鈴木道子、泉 輝子、中原圭子、若城くみ子、岡崎喜予子、塩崎美代江、小堀千津子、大野田公枝
沢木三之、菊田花子、西島みつえ、松川ヒデ、足立晴美、近田つじ、近田しづえ、植松基至
渡辺秀治、漆畠裕江、山口弘美、土屋和寿、小坂義雄、立田俊彦、高橋さゆり、樽沢 光
杉山まさ子、手老さつよ、牧野しづえ、森野ヨシエ、日吉きみ、後藤久江、相磯和枝、日吉よし江
岡崎ふみ、浅田 章、鈴木崇文、久保田末、古口 茂

◎大平B遺跡（昭和54年7月16日～9月17日）

秋本真澄、漆畠 稔、鍵山一郎、梅原邦一、菊田要次郎、山谷周助、立田伸子、秋山文子
渡辺まさ子、高橋よし子、岡山幸枝、泉 輝子、中原圭子、若城くみ子、野寄清美、沢木三之
菊田花子、西島みつえ、松川ヒデ、足立晴美、鍵山たみ、漆畠裕江、秋山幸子、中島陽子
立田秀信、植松基至、渡辺秀治、渡辺英昭、立田雅之、土屋和寿、土屋英樹、鈴木信正、小坂義雄
前原克吉、石井 巧、岡ノ谷正男、高梨 薫、百沢克也、溝口洋一、桧山明男、森野ヨシエ
後藤久江、日吉よし江、日吉きみ、杉山まさ子、牧野しづえ、加藤学園郷土研究部

◎大平C遺跡（昭和54年9月18日～昭和55年3月21日）

秋本真澄、漆畠 稔、鍵山一郎、梅原邦一、菊田要次郎、立田伸子、秋山文子、渡辺まさ子
高橋よし子、岡山幸枝、泉 輝子、中原圭子、沢木敦子、若城くみ子、野寄清美、沢木三之
菊田花子、松川ヒデ、立田雅之、小坂義雄、森野ヨシエ、杉山まさ子、牧野しづえ、日吉きみ
後藤久江、日吉よし江

〈第II次調査〉

発掘主体者 大仁町教育委員会

教育長 土屋憲次
社会教育課長 土屋長一
文化財係 内田英夫

大仁町文化財保護審議会 沼田 勇、鈴木 柳、山川勇治、室伏 侑、白砂 智、友野 博

発掘担当者 漆畠 稔 日本考古学協会々員・大仁町文化財保護審議会委員
鍵山一郎 土肥町文化財専門委員

調査指導者 秋本真澄 日本考古学協会々員・加藤学園高等学校教諭

調査参加者

◎大平A遺跡（昭和57年6月13日～9月7日）

秋本真澄、漆畠 稔、鍵山一郎、梅原邦一、菊田要次郎、山谷周助、小坂義雄、杉山哲也
秋山文子、渡辺まさ子、高橋よし子、岡山幸枝、泉 輝子、中原圭子、若城くみ子、野寄清美
鳥海嘉奈子、美崎陽子、勝又裕代、碓井恵美子、山下静子、笠井初枝、松川ヒデ、沢木三之
菊田花子、相川はな、相川よしえ、森野ヨシエ、西島みつえ、井上喜代子、今村しま子
島田千香子、土屋千代美、渡辺ひろ子、生田和代、西島弘子、橋本幸子、吉野京子

◎大平C遺跡（昭和57年9月9日～12月14日、昭和58年1月27日～2月14日）

秋本真澄、漆畠 稔、鍵山一郎、梅原邦一、菊田要次郎、山谷周助、小坂義雄、秋山文子
渡辺まさ子、岡山幸枝、鳥海嘉奈子、美崎陽子、勝又裕代、碓井恵美子、山下静子、笠井初枝
野寄清美、松川ヒデ、菊田花子、相川はな、相川よしえ、中川原トシ、原田良子、島田千香子
土屋千代美、西島弘子、西尾敬子、宮石みや子

目 次

例言

長者ヶ原大平遺跡群第Ⅰ次調査関係者一覧

長者ヶ原大平遺跡群第Ⅱ次調査関係者一覧

目次

挿表目次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章 発掘調査の経過.....	1	円形土壙.....	63
第1節 調査に至る経緯.....	1	3 遺物.....	63
第2節 調査の経過.....	2	A 土器.....	63
第3節 日誌抄.....	5	B 石器.....	76
第Ⅱ章 地理的環境と周辺の遺跡.....	13	第V章 大平C遺跡発掘調査報告.....	82
第1節 遺跡群の位置と環境.....	13	第1節 第Ⅰ次発掘調査.....	82
第2節 周辺の遺跡.....	14	1 遺跡の層序.....	82
第Ⅲ章 大平A遺跡発掘調査報告.....	18	2 遺構.....	91
第1節 第Ⅰ次発掘調査.....	18	A 住居址.....	91
1 遺跡の層序.....	18	B 集石土坑.....	97
2 遺物.....	25	C 配石土坑.....	117
A 土器.....	25	D 配石遺構.....	117
B 石器.....	39	E 集石炉.....	124
第2節 第Ⅱ次発掘調査.....	40	F 円形土壙.....	124
1 遺跡の層序.....	40	3 遺物.....	128
2 遺構.....	42	A 土器.....	128
A 住居址.....	42	B 石器.....	158
B 集石土坑.....	43	第2節 第Ⅱ次発掘調査.....	186
3 遺物.....	47	1 遺跡の層序.....	186
A 土器.....	47	2 遺構.....	189
B 石器.....	47	A 住居址.....	189
第Ⅳ章 大平B遺跡発掘調査報告.....	52	B 集石土坑.....	193
第1節 第Ⅰ次発掘調査.....	52	C 河川跡.....	200
1 遺跡の層序.....	52	3 遺物.....	201
2 遺構.....	63	A 土器.....	201

B 石器	213	第1節 遺構について	236
第VI章 特 論	227	第2節 遺物について	239
第VII章 調査総括	236	第3節 まとめ	242

挿 表 目 次

第1表 大平遺跡周辺遺跡一覧表	17	第10表 第I次調査石器計測一覧表(4)	183
第2表 第I次調査石器計測一覧表(1)	38	第11表 第I次調査石器計測一覧表(5)	184
第3表 第I次調査石器計測一覧表(2)	39	第12表 第I次調査石器計測一覧表(6)	185
第4表 第II次調査石器計測一覧表	51	第13表 第I次調査集石土坑一覧表	199
第5表 石器計測一覧表	81	第14表 第II次調査石器計測一覧表(1)	224
第6表 第I次調査集石土坑一覧表	116	第15表 第II次調査石器計測一覧表(2)	225
第7表 第I次調査石器計測一覧表(1)	180	第16表 第II次調査石器計測一覧表(3)	226
第8表 第I次調査石器計測一覧表(2)	181	第17表 各遺跡出土の石器数	240
第9表 第I次調査石器計測一覧表(3)	182	第18表 各遺跡出土石器比較対照表	241

挿 図 目 次

第1図 調査風景(大平A第II次).....	3	第17図 第I次調査出土土器拓影(6).....	31
第2図 大平遺跡群調査区域図.....	4	第18図 第I次調査出土土器拓影(7).....	32
第3図 大平遺跡群の位置.....	13	第19図 第I次調査出土土器拓影(8).....	34
第4図 上ノ田遺跡.....	15	第20図 第I次調査出土土器拓影(9).....	35
第5図 阿原遺跡.....	15	第21図 第I次調査出土石器実測図(1).....	36
第6図 大平遺跡群周辺遺跡分布図.....	16	第22図 第I次調査出土石器実測図(2).....	37
第7図 古い遺跡が密集する浮橋地区.....	17	第23図 第II次調査上層断面図.....	40
第8図 第I次調査土層層序.....	18	第24図 第II次調査遺構関連実測図.....	41
第9図 第I次調査土層断面図(北壁) 19・20		第25図 第II次調査第1号住居址実測図.....	42
第10図 第I次調査土層断面図(西壁) 21・22		第26図 第II次調査第1号～第8号集石土坑 実測図.....	44・45
第11図 第I次調査出土遺物分布図.....	23・24	第27図 第II次調査第9号集石土坑実測図.....	46
第12図 第I次調査出土土器拓影(1).....	26	第28図 第II次調査出土土器実測図.....	46
第13図 第I次調査出土土器拓影(2).....	27	第29図 第II次調査出土石器実測図(1).....	49
第14図 第I次調査出土土器拓影(3)及び 出土土器実測図.....	28	第30図 第II次調査出土石器実測図(2).....	50
第15図 第I次調査出土土器拓影(4).....	29	第31図 第II次調査出土石器実測図(3).....	51
第16図 第I次調査出土土器拓影(5).....	30	第32図 土層層序.....	52

第33図 土層断面図（北壁）	53	第51図 出土石器実測図(3)	79
第34図 土層断面図（北壁）	54	第52図 出土石器実測図(4)	80
第35図 土層断面図（東壁）	55・56	第53図 第Ⅰ次調査土層層序	82
第36図 遺構関連実測図	57・58	第54図 第Ⅰ次調査土層断面図（北壁）	83
第37図 円形土壙A群実測図	59・60	第55図 第Ⅰ次調査土層断面図（東壁）	84
第38図 円形土壙B群実測図	61	第56図 第Ⅰ次調査遺構関連実測図	85・86
第39図 土壙C群実測図	62	第57図 第Ⅰ次調査遺構関連実測図	87・88 (縄文時代早期)
第40図 出土土器拓影(1)	67	第58図 第Ⅰ次調査遺構関連実測図	89
第41図 出土土器拓影(2)	68		(縄文時代中期)
第42図 出土土器拓影(3)	69	第59図 第Ⅰ次調査円形土壙実測図	90 (平安時代)
第43図 出土土器拓影(4)	70	第60図 第Ⅰ次調査第1号住居址実測図	91
第44図 出土土器拓影(5)及び出土土器 実測図	71	第61図 第Ⅰ次調査第2号住居址実測図	92
第45図 出土土器拓影(6)	72	第62図 第Ⅰ次調査第3号住居址実測図	93
第46図 出土土器拓影(7)	73	第63図 第Ⅰ次調査第4号住居址実測図	94
第47図 出土土器拓影(8)	74	第64図 第Ⅰ次調査第5号住居址実測図	95
第48図 出土土器拓影(9)	75	第65図 第Ⅰ次調査第1号2号集石土坑 実測図	96
第49図 出土石器実測図(1)	77	第66図 第Ⅰ次調査第3号集石土坑実測図	97
第50図 出土石器実測図(2)	78		

第67図 第Ⅰ次調査第4号5号6号7号 8号9号10号集石土坑実測図(1)98・99	第80図 第Ⅰ次調査第37号38号39号集石 土坑実測図..... 112
第68図 第Ⅰ次調査第4号5号6号7号 8号9号10号集石土坑実測図(2).... 100	第81図 第Ⅰ次調査第40号41号集石土坑 実測図..... 113
第69図 第Ⅰ次調査第11号集石土坑実測図 101	第82図 第Ⅰ次調査第42号43号集石土坑 実測図..... 114
第70図 第Ⅰ次調査第12号13号集石土坑 実測図..... 102	第83図 第Ⅰ次調査第1号・2号配石土坑 実測図..... 118
第71図 第Ⅰ次調査第14号15号16号17号 集石土坑実測図..... 103	第84図 第Ⅰ次調査配石造構関連図..... 119
第72図 第Ⅰ次調査第18号19号集石土坑 実測図..... 104	第85図 第Ⅰ次調査第1配石実測図..... 120
第73図 第Ⅰ次調査第20号集石土坑実測図 105	第86図 第Ⅰ次調査第2配石実測図..... 121
第74図 第Ⅰ次調査第21号22号集石土坑 実測図..... 106	第87図 第Ⅰ次調査第3配石実測図..... 122
第75図 第Ⅰ次調査第23号24号25号26号 27号28号集石土坑実測図..... 107	第88図 第Ⅰ次調査第4配石実測図..... 123
第76図 第Ⅰ次調査第29号30号集石土坑 実測図..... 108	第89図 第Ⅰ次調査集石炉実測図..... 124
第77図 第Ⅰ次調査第31号32号集石土坑 実測図..... 109	第90図 第Ⅰ次調査第1号2号3号円形 土壤実測図..... 125
第78図 第Ⅰ次調査第33号34号35号集石 土坑実測図..... 110	第91図 第Ⅰ次調査第4号5号円形土壤 実測図..... 126
第79図 第Ⅰ次調査第36号集石土坑実測図 111	第92図 第Ⅰ次調査第6号7号8号9号 円形土壤実測図..... 127
	第93図 第Ⅰ次調査第10号円形土壤実測図 128
	第94図 第Ⅰ次調査出土土器拓影(1)..... 130

第95図 第Ⅰ次調査出土土器拓影(2).....	131	第113図 第Ⅰ次調査出土土器拓影(20).....	149
第96図 第Ⅰ次調査出土土器拓影(3).....	132	第114図 第Ⅰ次調査出土土器拓影(21).....	150
第97図 第Ⅰ次調査出土土器拓影(4).....	133	第115図 第Ⅰ次調査出土土器拓影(22).....	151
第98図 第Ⅰ次調査出土土器拓影(5).....	134	第116図 第Ⅰ次調査出土土器拓影(23).....	152
第99図 第Ⅰ次調査出土土器拓影(6).....	135	第117図 第Ⅰ次調査出土土器拓影(24).....	153
第100図 第Ⅰ次調査出土土器拓影(7).....	136	第118図 第Ⅰ次調査出土土器拓影(25).....	154
第101図 第Ⅰ次調査出土土器拓影(8).....	137	第119図 第Ⅰ次調査出土土器実測図(1).....	155
第102図 第Ⅰ次調査出土土器拓影(9).....	138	第120図 第Ⅰ次調査出土土器実測図(2).....	156
第103図 第Ⅰ次調査出土土器拓影(10).....	139	第121図 第Ⅰ次調査出土石器実測図(1).....	160
第104図 第Ⅰ次調査出土土器拓影(11).....	140	第122図 第Ⅰ次調査出土石器実測図(2).....	161
第105図 第Ⅰ次調査出土土器拓影(12).....	141	第123図 第Ⅰ次調査出土石器実測図(3).....	162
第106図 第Ⅰ次調査出土土器拓影(13).....	142	第124図 第Ⅰ次調査出土石器実測図(4).....	163
第107図 第Ⅰ次調査出土土器拓影(14).....	143	第125図 第Ⅰ次調査出土石器実測図(5).....	164
第108図 第Ⅰ次調査出土土器拓影(15).....	144	第126図 第Ⅰ次調査出土石器実測図(6).....	165
第109図 第Ⅰ次調査出土土器拓影(16).....	145	第127図 第Ⅰ次調査出土石器実測図(7).....	166
第110図 第Ⅰ次調査出土土器拓影(17).....	146	第128図 第Ⅰ次調査出土石器実測図(8).....	167
第111図 第Ⅰ次調査出土土器拓影(18).....	147	第129図 第Ⅰ次調査出土石器実測図(9).....	168
第112図 第Ⅰ次調査出土土器拓影(19).....	148	第130図 第Ⅰ次調査出土石器実測図(10).....	169

第131図第Ⅰ次調査出土石器実測図⑪	170	実測図及び出土土器拓影④	192
第132図第Ⅰ次調査出土石器実測図⑫	171	第148図第Ⅱ次調査第3号集石土坑実測図 及び出土土器拓影⑤	193
第133図第Ⅰ次調査出土石器実測図⑬	172	第149図第Ⅱ次調査第4号集石土坑実測図	194
第134図第Ⅰ次調査出土石器実測図⑭	173	第150図第Ⅱ次調査第5号集石土坑実測図 及び出土土器拓影⑥	194
第135図第Ⅰ次調査出土石器実測図⑮	174	第151図第Ⅱ次調査第6号集石土坑実測図 及び出土土器拓影⑦	195
第136図第Ⅰ次調査出土石器実測図⑯	175	第152図第Ⅱ次調査第7号集石土坑実測図 及び出土土器拓影⑧	195
第137図第Ⅰ次調査出土石器実測図⑰	176	第153図第Ⅱ次調査第8号集石土坑実測図 及び出土土器拓影⑨	196
第138図第Ⅰ次調査出土石器実測図⑱	177	第154図第Ⅱ次調査第9号集石土坑実測図 及び出土土器拓影⑩	196
第139図第Ⅰ次調査出土石器実測図⑲	178	第155図第Ⅱ次調査第10号集石土坑実測図 及び出土土器拓影⑪	197
第140図第Ⅰ次調査出土石器実測図⑳	179	第156図第Ⅱ次調査第11号集石土坑実測図 及び出土土器拓影⑫	197
第141図第Ⅱ次調査土層断面図	186	第157図第Ⅱ次調査第12号集石土坑実測図 及び出土土器拓影⑬	198
第142図第Ⅱ次調査発掘風景	186	第158図第Ⅱ次調査第13号集石土坑実測図 及び出土土器拓影⑭	198
第143図第Ⅱ次調査造構関連実測図	187・188	第159図第Ⅱ次調査第14号集石土坑実測図	199
第144図第Ⅱ次調査第1号住居址実測図 及び出土土器拓影①	189		
第145図第Ⅱ次調査第2号住居址実測図 及び出土土器拓影②	190		
第146図第Ⅱ次調査第3号住居址実測図 及び出土土器拓影③	191		
第147図第Ⅱ次調査第1号2号集石土坑			

第160図第Ⅱ次調査E-2 グリッド西壁 断面図	200	第171図第Ⅱ次調査出土石器実測図(1)	213
第161図第Ⅱ次調査河川跡実測図	200	第172図第Ⅱ次調査出土石器実測図(2)	214
第162図第Ⅱ次調査出土土器拓影⑯	204	第173図第Ⅱ次調査出土石器実測図(3)	215
第163図第Ⅱ次調査出土土器拓影⑰	205	第174図第Ⅱ次調査出土石器実測図(4)	216
第164図第Ⅱ次調査出土土器拓影⑯	206	第175図第Ⅱ次調査出土石器実測図(5)	217
第165図第Ⅱ次調査出土土器拓影⑯	207	第176図第Ⅱ次調査出土石器実測図(6)	218
第166図第Ⅱ次調査出土土器拓影⑯	208	第177図第Ⅱ次調査出土石器実測図(7)	219
第167図第Ⅱ次調査出土土器拓影⑯	209	第178図第Ⅱ次調査出土石器実測図(8)	220
第168図第Ⅱ次調査出土土器拓影⑯	210	第179図第Ⅱ次調査出土石器実測図(9)	221
第169図第Ⅱ次調査出土土器拓影⑯	211	第180図第Ⅱ次調査出土石器実測図(10)	222
第170図第Ⅱ次調査出土土器拓影⑯	212	第181図調査風景（降りしきる雪の中で）	223

図版目次

- 図版1 大平A遺跡第I次調査区の遠景
遠景（東南方より）
遠景（調査前・西方より）
- 図版2 大平A遺跡第I次調査区の近景と土層
近景（西方より）
土層と遺物の出土状態
- 図版3 大平A遺跡第I次調査の遺物出土状態
土器の出土状態－1
土器の出土状態－2
- 図版4 大平A遺跡第I次調査の出土遺物(1)
土器(1)
押型文土器
- 図版5 大平A遺跡第I次調査の出土遺物(2)
土器(2)
縦条体压痕文土器
- 図版6 大平A遺跡第I次調査の出土遺物(3)
土器(3)
縦条体压痕文土器
- 図版7 大平A遺跡第I次調査の出土遺物(4)
土器(4)
無文土器
- 図版8 大平A遺跡第I次調査の出土遺物(5)
土器(5)
条痕文土器
- 図版9 大平A遺跡第I次調査の出土遺物(6)
土器(6)
茅山下層式比定土器・貝殻文を有する土器
- 図版10 大平A遺跡第I次調査の出土遺物(7)
土器(7)
斜繩文を有する土器・爪形文を有する土器・諸磯式に比定できる土器
勝坂式に比定できる土器
- 図版11 大平A遺跡第I次調査の出土遺物(8)
土器(8)
口縁部に沈線と刺突文を有する土器
加曾利E式に比定できる土器
平行沈線を有する土器
- 図版12 大平A遺跡第I次調査の出土遺物(9)
石器(1)
石槍・石鎌・石核
- 図版13 大平A遺跡第I次調査の出土遺物(10)
石器(2)
局部磨製石斧・打製石斧
定型磨製石斧・磨製石斧・磨石
- 図版14 大平A遺跡第II次調査区の近景
近景（西方より）
調査状況（東側より）
- 図版15 大平A遺跡第II次調査区の土層
大平A遺跡第II次調査における層序

調査中の町田 洋先生

その他

無文土器

図版16 大平A遺跡第Ⅱ次調査の遺構(1)

第1号住居址（東側より）－1

第1号住居址（西側より）－2

図版24 大平A遺跡第Ⅱ次調査の出土遺物(2)

土器(2)

山形押型文土器・諸礎b式土器の出土状態・諸礎b式土器

図版17 大平A遺跡第Ⅱ次調査の遺構(2)

第3号集石土坑－1

第3号集石土坑－2

図版25 大平A遺跡第Ⅱ次調査の出土遺物(3)

石器(1)

石槍・スクレーバー・石鎌

磨石

図版18 大平A遺跡第Ⅱ次調査の遺構(3)

第8号集石土坑－1

第8号集石土坑－2

図版26 大平A遺跡第Ⅱ次調査の出土遺物(4)

石器(2)

礫器

図版19 大平A遺跡第Ⅱ次調査の遺構(4)

集石土坑群（南東側より）－1

集石土坑群全景（東側より）－2

図版27 大平B遺跡の遠景と近景

遠景（西方より）

近景（東方より）

図版20 大平A遺跡第Ⅱ次調査の遺物出土状態

(1)

山形押型文土器の出土状態

無文土器の出土状態

図版28 大平B遺跡の調査風景と遺構(1)

調査風景

円形土壙（A群・確認された状態）

－1

図版21 大平A遺跡第Ⅱ次調査の遺物出土状態

(2)

石槍の出土状態

スクレーバーの出土状態

図版29 大平B遺跡の遺構(2)

円形土壙（A群・南方より）－2

円形土壙（B群・南方より）－3

図版22 大平A遺跡第Ⅱ次調査の遺物出土状態

(3)

礫器の出土状態

磨石の出土状態

図版30 大平B遺跡の遺構(3)

円形土壙（C群・確認された状態）

－4

図版23 大平A遺跡第Ⅱ次調査の出土遺物(1)

土器(1)

山形押型文土器・撲糸文土器

図版31 大平B遺跡の遺構(4)

円形土壙（C群・南方より）－5

第19号円形土壙（B群・西方より）
第21号円形土壙（B群・西方より）

図版32 大平B遺跡の遺構(5)

第28号円形土壙（C群・西方より）
第30号円形土壙（C群・西方より）

図版33 大平B遺跡の土層と出土遺物

土層の状態
土層と遺物（礫器）の出土状態
(Iトレンチ)

図版34 大平B遺跡の遺物出土状態(1)

礫器の出土状態（M-6グリッド）
礫器の出土状態（E-6グリッド）

図版35 大平B遺跡の遺物出土状態(2)

土器の出土状態
(O-4グリッド)-1
土器の出土状態
(N-6グリッド)-2

図版36 大平B遺跡の遺物出土状態(3)

土器の出土状態
(E-4グリッド)-3
土器の出土状態(Hトレンチ)-4

図版37 大平B遺跡の遺物出土状態(4)

土器の出土状態
(E-3グリッド)-5
土器の出土状態
(F-4グリッド)-6

図版38 大平B遺跡の出土遺物(1)土器(1)

押型文土器・撚糸文土器

図版39 大平B遺跡の出土遺物(2)土器(2)
微隆起線文と刺突文を有する土器
条痕文と刺突文を有する土器
沈線文と刺突文を有する土器

図版40 大平B遺跡の出土遺物(3)土器(3)
隆起線文と列点状刺突文及び繩文
を有する土器
条痕文土器

図版41 大平B遺跡の出土遺物(4)土器(4)
条痕文土器

図版42 大平B遺跡の出土遺物(5)土器(5)
早期の土器（底部）
撚糸文土器（早期）
諸磯b式土器（前期）

図版43 大平B遺跡の出土遺物(6)土器(6)
隆起文と刺突文を有する土器
諸磯a式に比定できる土器
諸磯b式に比定できる土器

図版44 大平B遺跡の出土遺物(7)土器(7)
諸磯b式に比定できる土器
諸磯c式に比定できる土器

図版45 大平B遺跡の出土遺物(8)土器(8)
勝坂式に比定できる土器

図版46 大平B遺跡の出土遺物(9)土器(9)
勝坂式に比定できる土器
加曾利E式に比定できる土器
土師器

図版47 大平B遺跡の出土遺物(10)石器(1)

石槍・石鎌・ピエス・エスキュー
礪器・石斧
(確認された状態) - 1
第18号集石土坑(完堀後の状態) - 2

図版48 大平B遺跡の出土遺物⑩石器(2)
磨石
図版56 大平C遺跡第I次調査の遺構(5)
第29・30号集石土坑

図版49 大平B遺跡の出土遺物⑪石器(3)
磨石
(確認された状態) - 1
第29・30号集石土坑
(完堀後の状態) - 2

図版50 大平C遺跡の第I次調査区の遠景と近景
遠景(西方より)
近景(東南方より) - 1
図版57 大平C遺跡第I次調査の遺構(6)
集石土坑(A群・完堀後)と第3号
住居址
集石土坑(A群・完堀後)部分 - 1

図版51 大平C遺跡第I次調査区の近景と調査
風景
近景(東方より) - 2
調査風景
図版58 大平C遺跡第I次調査の遺構(7)
集石土坑(A群・完堀後)部分 - 2
集石土坑(A群・完堀後)部分 - 3

図版52 大平C遺跡第I次調査の遺構(1)
配石遺構
(中期・確認された状態・南方より)
配石遺構と円形土壙
(歴史時代・南上方より)
図版59 大平C遺跡第I次調査の遺構(8)
炉穴群(早期)
集石炉(中期)

図版53 大平C遺跡第I次調査の遺構(2)
配石遺構(東方より)
第1号配石遺構(西方より)
図版60 大平C遺跡第I次調査の遺構(9)
発見された遺構(全体)
第2号住居址(早期・東方より)

図版54 大平C遺跡第I次調査の遺構(3)
第2号配石遺構と第1号土壙
(西方より) - 1
第2号配石遺構と第1号土壙
(南方より) - 2
図版61 大平C遺跡第I次調査の遺構⑩
第4号住居址(早期・東方より)
第5号住居址(早期・東方より)

図版55 大平C遺跡第I次調査の遺構(4)
第18号集石土坑
図版62 大平C遺跡第I次調査の遺構⑪
第1号住居址(中期・西方より)
第1号住居址の炉址の状態

図版63 大平C遺跡第I次調査の遺構⑫
第3号住居址(中期・東方より)

第3号住居址の第1号炉址の状態

(A-3グリッド)-3

図版64 大平C遺跡第I次調査の遺構13

第3号住居址の第2号炉址の状態

土器の出土状態
(第2号配石遺構)-4

第3号住居址の埋設土器と石皿・磨石の出土状態

図版70 大平C遺跡第I次調査の遺物出土状態
(6)

図版65 大平C遺跡第I次調査の遺物出土状態
(1)

石槍の出土状態 (F-1グリッド)
礫器の出土状態 (A-5グリッド)

土器の出土状態
(B-4グリッド)-5
土器の出土状態
(D-2グリッド)-6

図版66 大平C遺跡第I次調査の遺物出土状態
(2)

局部磨製石斧の出土状態
(第3号住居址)-1
局部磨製石斧の出土状態
(A-1グリッド)-2

図版71 大平C遺跡第I次調査の遺物出土状態
(7)
土器の出土状態(第3号住居址)-7
土器の出土状態(第3号住居址)-8

図版67 大平C遺跡第I次調査の遺物出土状態
(3)

磨石の出土状態
(第22号集石土坑)-1
磨石の出土状態
(第1号集石土坑)-2

図版73 大平C遺跡第I次調査の出土遺物(2)
土器(2)

図版68 大平C遺跡第I次調査の遺物出土状態
(4)

土器の出土状態
(第7号集石土坑)-1
土器の出土状態
(C-1グリッド)-2

図版75 大平C遺跡第I次調査の出土遺物(4)
石器(2)

礫器・打製石斧・磨石

図版69 大平C遺跡第I次調査の遺物出土状態
(5)

土器の出土状態

図版76 大平C遺跡第I次調査の出土遺物(5)
石器(3)

磨石

図版77 大平C遺跡第I次調査の出土遺物(6)

石器(4)	遺構内出土遺物
磨石	第12号集石土坑
図版78 大平C遺跡第Ⅰ次調査の出土遺物(7)	第2号住居址(1~6)
石器(5)	第3号住居址(7~20)
図版79 大平C遺跡第Ⅱ次調査区の遠景	斜縞文土器
遠景(南西方より) - 1	
遠景(西方より) - 2	
図版80 大平C遺跡第Ⅱ次調査区の調査風景	押型文土器・撚糸文土器
調査状況(北東方より)	
調査風景(北側より)	
図版81 大平C遺跡第Ⅱ次調査の遺構(1)	撚糸文土器
第1号住居址(南側より)	
第2号住居址(南側より) - 1	
図版82 大平C遺跡第Ⅱ次調査の遺構(2)	撚糸文土器・縞文土器
第2号住居址(南側より) - 2	
第3号住居址(北側より) - 1	
図版83 大平C遺跡第Ⅱ次調査の遺構(3)	押型文土器
第3号住居址(北側より) - 2	
第1・2号集石土坑	
図版84 大平C遺跡第Ⅱ次調査の遺構(4)	縞文土器・条痕文土器・絡条体圧痕
第8号集石土坑 - 1	文土器・田戸下層式比定土器
第8号集石土坑 - 2	沈線文土器
図版85 大平C遺跡第Ⅱ次調査の遺構(5)	大平C遺跡第Ⅱ次調査の出土遺物(7)
第9号集石土坑 - 1	土器(7)
第9号集石土坑 - 2	無文土器
図版86 大平C遺跡第Ⅱ次調査の遺構(6)と	大平C遺跡第Ⅱ次調査の出土遺物(8)

土器(8)

勝坂式比定土器・曾利Ⅱ式土器

図版95 大平C遺跡第Ⅱ次調査の出土遺物(9)

土器(9)

曾利Ⅱ式土器・土師器・須恵器

図版96 大平C遺跡第Ⅱ次調査の出土遺物(10)

土器(10)

勝坂式土器の出土状態及び復元土器

図版97 大平C遺跡第Ⅱ次調査の出土遺物(11)

石器(1)

石槍・局部磨製石斧・石鎌・礪器

図版98 大平C遺跡第Ⅱ次調査の出土遺物(12)

石器(2)

礪器・打製石斧・石匙

図版99 大平C遺跡第Ⅱ次調査の出土遺物(13)

石器(3)

磨石

図版100 大平D遺跡の遺構

第1号住居址（中期・南方より）

第1号住居址の炉の状態

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経緯

長者原地区において、考古学的な資料の存在が確認されたのはそれほど古い事ではない。しかし、故佐野丹山氏や森野弘保氏等によれば、戦前において地区東側の畑から土器を採集したと言う事であり、森野弘保氏宅西側の畑からは完形の土器（縄文時代中期？）が出土したと言われる。（現在大平D遺跡と呼んでいる場所と思われる）さらに森野氏によれば、自宅へ通じる道路で炉址と思われる石組みを発見したと言われる。

昭和36年頃筆者は、知人の山本文男氏と同地区を訪れた際、偶然にも盆地西北部の峠鞍部（修善寺町と境を接する場所）の切り通しから、平安時代の所産と思われる浅鉢形土器（土師器）を発見している。つづいて、昭和38年～39年になると当時沼津商業高等学校の生徒であった須磨満氏（沼津市在住）および筆者等による踏査が行われ、ナイフ形石器やブレイド・フレイク等を採集している。（この時はおそらく、現在大平A遺跡と呼んでる場所を中心に採集したと記憶している）

その後、昭和45年～47年の県教育委員会主催による遺跡分布調査では、小野真一氏、秋本真澄氏および筆者により6ヶ所の遺跡が確認されている。そこでこれらを便宜上、北側から南側にかけてそれぞれ大平A～F遺跡として呼称する事にした。

そして、昭和51年になると同地区に開発の話が持ち上がった。すなわち、日産自動車株式会社による研修所建設計画がそれである。この事により、日産自動車側からの依頼を受けた当教育委員会では、計画対象地域内における遺跡の有無、および分布状況の確認調査を計画した。そして、同年11月1日に現地踏査を実施した。その結果、建物予定地にはA遺跡が、またグラウンドとテニスコート予定地にはB・Cの2遺跡が存在する事が分かった。

そこで、当教育委員会は日産自動車側と再三の話し合いを行い、まず予備調査を行う事に決定、昭和53年5月14日～26日までの13日間これを実施した。この調査では、A遺跡に2本、B遺跡に5本、C遺跡に2本、それぞれトレンチを設定し、遺物の包含層と範囲確認のための発掘を行った。

これにより、A遺跡は削土されてはいるものの、若干の包含層が残存しており、前述のとおり先土器時代の遺物が発見されている点などを考慮して、本調査を実施する事にした。また、B遺跡は土壤状の遺構が確認され、縄文時代の遺物が比較的多く出土する地点もあったので本調査の対象とした。さらに、C遺跡については大小の石が集中して確認されたため、配石遺構の存在も考えられたのでこれもまた本調査を実施する事にした。

こうした調査結果を基にして、当教育委員会では日産自動車側と本格的な発掘調査のための話し合いを行った。そして、双方により委託契約が締結された後、昭和53年11月20日より本調査の運びとなり、大平A・B・C遺跡の順に実施した。このことにより、本町における発掘調査としてはこれまでの最大規模のものとなった。

第2節 調査の経過

大平遺跡群（A・B・C）の発掘調査は、昭和51年11月の現地踏査および昭和53年5月の予備調査の結果を踏まえて、昭和53年11月～55年3月に行われた第Ⅰ次調査と、昭和57年6月～58年2月に行われた第Ⅱ次調査に大別される。ここでは、遺跡別に第Ⅰ次調査・第Ⅱ次調査の経過と概要について述べておきたい。

◎大平A遺跡（第Ⅰ次調査） 昭和53年11月20日～昭和54年1月21日

第2図に示すように、対象面積約2000m²の範囲に、5m四方のグリッドを南北に1～6までの6区と、東西にA～Jまでの10区を設定した。ここはかつて、段畑にするためかなり削平されており、耕作も深くまで及んでいたため、遺物包含層の大部分が破壊されていたが、調査の結果縄文時代早期・前期・中期・後期の土器や、石器などが出土した。（第12図～第22図、図版4～13）また、遺構らしきものは搅乱が激しく検出されなかった。そこで、北側の畑との境（南壁中央付近）を垂直に削土したところ、約1mの客土の下に旧表土が現れ、縄文時代早期と中期の土器片が検出された。また層位も比較的安定している事が分かり、引き続き調査の必要性が認められた。ところが、土地問題等の事情もあり今回の調査対象からは除外して、改めて第Ⅱ次調査を行う事で調査を終了した。

◎大平A遺跡（第Ⅱ次調査） 昭和57年6月13日～9月7日

第Ⅰ次調査の結果を踏まえて、第2図のように対象面積約1800m²の範囲に、5m四方のグリッドを南北に1～6までの6区と、東西にA～Iの9区を設定し、さらに東側を拡張した、調査はまず、厚い客土を除去し旧表土（耕作土）を確認する事から始まった。その結果、縄文時代早期前半の住居址1基、同時期と思われる集石土坑9基が確認された。また、遺物については住居址および集石土坑に伴う、山形押型文土器や無文土器（擦痕文が見られる）が出土し、この他微量の撫糸文土器（稻荷台式に類似）、前期後半の諸磯b式土器などが出土している。

◎大平B遺跡（第Ⅰ次調査のみ） 昭和54年7月16日～9月17日

対象面積約4000m²の範囲に、予備調査で確認された平安時代の円形土壇状遺構と土器片が集中的に出土した部分を中心に、第2図に示すように、5m四方のグリッドを南北に1～7までの7区と、東西にA～Jの10区を設定し、また予備調査の際確認出来なかった部分については、さらにトレンチ8本を設定して調査を行った。しかし円形土壇30基を除き、遺構らしきものは確認されなかった。遺物については、縄文時代早期・前期・中期の土器や石器、それに土師器などが出土している。

◎大平C遺跡（第Ⅰ次調査） 昭和54年9月18日～昭和55年3月21日

予備調査の際出土した大小の石組は、配石遺構としての可能性が考えられたので、対象面積約1500m²の範囲に、第2図に示すように、5m四方のグリッドを南北に1～7までの7区と、東西にA～Hの8区を設定した。調査の結果、平安時代の円形土壇10基、縄文時代中期後半の住居址2基、配石遺構4、集石炉1基、同時代早期前半の住居址3基、炉穴3基、集石土坑43基、配石土坑2基

など多くの遺構が確認され、これらに伴う土器や石器（とりわけ磨石が多い）が出土した。このため調査は、当初の予定より大幅に伸びてしまった。また精査の結果、遺構等はさらに北側へ分布している事が分かったため、その部分については改めて調査する事とした。

◎大平C遺跡（第II次調査） 昭和57年9月9日～12月14日・昭和58年1月27日～2月14日

第I次調査区北側の、対象面積約1600m²の範囲に、第2図のように5m四方のグリッドを南北に1～6までの6区と、東西にA～Hの8区を設定した。ここは以前、営業用としての庭木が植えられていた所であり、広く深い根により随所において遺物包含層は擾乱を受けていた。調査の結果、縄文時代早期前半の住居址3基、同時期の集石土坑14基が確認され、これに伴う土器や石器、さらに同時代中期中葉～後半の土器や石器が出土している。



第1図 調査風景（大平A II次）



第2図 大平遺跡群調査区域図

第3節 日誌抄

大平A遺跡第1次調査（昭和53年11月20日～昭和54年1月21日）

11月20日（月）

資料及び道具類の運搬を行う。グリッドの設定をする。

11月21日（火）

A-1・2・3、B-1・2・3、C-1・2・3、D-

1グリッドの第I層を削土する。

11月22日（水）

B・C-3、D-2・3、E・F-1・2、G-1グリッドの第II層を削土する。

11月23日（木）

D・E・F-3、G・H-1・2・3、I-1グリッドの第I層を削土する。

11月24日（金）

E・G-3、F・H-1、I・J-2・3グリッドの第I層、A-1・2・3、B-1・2グリッドは第II層を削土する。

11月26日（日）

A-1・2・3、B-1・2・3、C-1・2グリッドの第II層を削土する。

11月28日（火）

A・C・J-3、D・E-1・2・3、F-1グリッドの第II層を削土する。

11月29日（水）

E・F・G-1・2・3、H-1・2グリッドの第II層の削土をする。

11月30日（木）

H-1・2・3、I-1・2、J-2・3グリッドは第II層を削土し、A-1グリッドは第III層を精査する。

12月1日（金）

J-3グリッドの第II層を削土し、A-1・2・3、B-1・2グリッドは第III層を精査した。

12月2日（土）

J-3グリッドの第II層を削土し、B-1・2・3グリッドは第III層を精査した。

12月3日（日）

B・C・D-1・2・3グリッドの第III層を精査した。

12月4日（月）

D・E-1・2・3グリッドの第III層を精査した。

12月5日（火）

E-3、F-1・2・3、G-1グリッドの第III層を精査した。

12月6日（水）

F-2・3、G・H-1・2・3グリッドの第III層を精査した。

12月7日（木）

E-3、H-I-J-2・3グリッドの第III層を精査した。

12月8日（金）

A・B・C・D・E-4グリッドの第I層、A・B・Cグリッドの第II層を削土する。J-2・3グリッドは第III層を精査し、D・E-1グリッドは北壁、西壁の土層断面を実測した。

12月9日（土）

F・G・H-4グリッドの第I層、B・C・D・E-4グリッドの第II層を削土する。F・G・H-1グリッドの北

壁、西壁の土層断面を実測した。

12月10日（日）

F-5グリッドの第I層を削土する。

12月12日（火）

A・B・F・G・H-5、I-4グリッドの第I層、A-5、G・H・I-4グリッドの第II層を削土し、H・J-2、I-1グリッドの北壁、西壁の土層断面を実測した。

12月13日（水）

C・D・E-5グリッドの第I層、B・H-5、F-4・5、G-4グリッドの第II層を削土し、F・G-2グリッドは北壁、西壁の土層断面の実測をする。D・E-1、F-1のグリッドのレベリングを行なう。

12月14日（木）

B・D・E-5、C-4・5グリッドの第II層の削土をし、A-4・5、B-4グリッドは第III層を精査する。B・D・E-2、C-3グリッドは北壁、西壁の土層断面の実測を行い、A・B・F-1、D・G-1・2、H・I-2グリッドはレベリングを行なう遺物の収納をした。

12月15日（金）

A・B・E-6グリッドの第I層、A・B-6、H-5グリッドの第II層を削土する。B・C・D・E-5グリッドは第III層を精査した。

12月16日（土）

C・D・F-6グリッドの第I層、B・C・D・E-6グリッドの第II層を削土した。

12月17日（日）

F-6グリッドの第II層を削土し、A-6、C・D・E-4・5グリッドを精査する。C-1グリッドの北壁、A-2、C-1グリッドの西壁土層断面を実測した。

12月18日（月）

B-6、C・D・E-5・6グリッドの第III層を精査し、A-2・3、B-3グリッドは北壁土層断面の実測をした。

12月19日（火）

E-6、F・G-4・5、H-5グリッドの第III層を精査し、C・D・E・F-3グリッドの北壁、A・B・C・D・E・F-3グリッドの西壁土層断面を実測した。

12月20日（水）

F-6、G-5、H-4、I-3・4グリッドの第III層を精査しF-4、G・H-3グリッドの北壁、G・H-3グリッドの西壁土層断面の実測をした。A-6、B・C-4、D-6、F・F・G・H-3・4・5・6、I-3・4・5、J-3・4グリッドのレベリングを行い遺物の収納をした。

12月21日（木）

G・H-5、I-4、J-3グリッドの第III層を精査し、C・D-4グリッドの北壁、D-4グリッドの西壁の土層断面の実測を行なった。

12月22日（金）

G・H-6、I-5、J-4グリッドの第I層、G・H-6グリッドの第II層を削土する。A・B-4グリッドの北壁、A・B・C-4グリッドの西壁土層断面の実測をした。

12月23日（土）

I-5、J-4グリッドの第I層、G・H-6、I-5、J-4グリッドの第II層を削土する。E・G-4グリッドは

北壁、E・F・4グリッドは西壁土層断面の実測をした。

12月24日（日）

D・5、H・4、I・3グリッドの北壁、A・B・C・D・5、G・H・4グリッドの西壁土層断面の実測を行う。

12月25日（日）

E・F・G・5、J・3グリッドの北壁、E・F・G・H・I・5、J・3グリッドの西壁土層断面の実測を行う。

大平B道跡第1次調査（昭和54年7月16日～10月1日）

7月16日（月） 晴

資材及び道具類の運搬を行う。グリッド設定個所の草刈りをする。

7月17日（火） 曇のち小雨

道具対の運搬を行いテントの設営をする。A～Fまでのグリッドを設定し、A、B・5・6グリッドの第Ⅰ層、A・5グリッドの第Ⅱ層を削土する。

7月19日（木） 晴

B・2・3・4・5、C・D・5グリッドの第Ⅰ層、B・5グリッドの第Ⅱ層を削土する。

7月21日（土） 晴

C・4・5、D・E・F・5グリッドの第Ⅱ層を削土する。

7月22日（日） 晴

B・6、C・3、A・E・F・4グリッドの第Ⅰ層、B・C・D・E・F・4、E・6グリッドの第Ⅱ層を削土する。

7月23日（月） 晴

C・D・6グリッドの第Ⅰ層、A・4、A・D・6グリッドの第Ⅱ層削土をし、C・4、E・6グリッドは第Ⅲ層精査に入れる。

7月24日（火） 晴

A・4、C・6グリッドの第Ⅱ層を削土し、B・C・4グリッドは第Ⅲ層を精査する。トレンチを設定し、A・Bトレンチの第Ⅰ層、Aトレンチの第Ⅱ層を削土する。

7月25日（水） 薄曇

トレンチを設定し、D・E・F・Gとする。A・B・Cトレンチの中にテストピットを設け第Ⅲ層まで掘り下げる。B・5・6グリッドの北壁と東壁の土層断面の実測を行う。

7月26日（木） 晴

D・E・Fトレンチの第Ⅰ層とCトレンチの第Ⅱ層を削土する。A・C・6グリッドの北壁と東壁の土層断面の実測を行う。

7月27日（金） 薄曇

E・F・6グリッドの第Ⅰ層、第Ⅱ層を削土する。E・G・H・Iトレンチの第Ⅰ層とE・Fトレンチの第Ⅱ層を削土する。A・5、D・6グリッドの北壁と東壁の土層断面の実測を行う。加藤学園の学生が来訪した。

7月28日（土） 薄曇

D・3グリッドの第Ⅰ層、E・F・5・6グリッドの第Ⅱ層を削土する。Iトレンチの第Ⅰ層、Dトレンチの第Ⅱ層を削土し、D・Fトレンチの第Ⅲ層Fトレンチの第Ⅳ層の精査を行う。原点を3ヶ所設定する。

7月29日（日） 晴

A・3、K・6、B・4グリッドの第Ⅰ層とD・3グリッドの第Ⅱ層を削土する。Dトレンチは第Ⅲ層を精査し、C・D・5、B・A・5・6グリッドは北壁、東壁の土層断面の実測を行う。A・5・6、B・6グリッドはレベリングを行う。新たに北東方面にK・L・M・1～6グリッドを設定し

12月26日（火）

D・F・6、H・5、I・2・5、J・4グリッドの北壁、A・B・C・D・E・F・6、I・2、J・4グリッドの西壁土層断面の実測を行う。

昭和54年1月15日（月）

E・F・G・5、G・1グリッドのレベリングを行い遺物の収納をする。少量の残務作業が残っているが、作業員は本日にて調査を終了とする。

た。

7月30日（月） 晴

F・3、K・5・6グリッドの第Ⅰ層を削土。A・B・4・5、C・D・E・F・4・5・6、L・1・2・3・4・5・6グリッドのレベリングを行いIトレンチは、平面実測及びレベリングA・B・C・D・E・F・Gトレンチの北壁、東壁の土層断面に区画線を記入する。

7月31日～8月3日

お盆休み

8月4日（土） 曇のち晴

K・1・2・3・4・5グリッドの第Ⅰ層削土。草刈りの後G・II・Iのグリッド設定。Hトレンチの第Ⅱ層を削土しGトレンチの第Ⅲ層を精査した。

8月5日（日） 晴

G・3・4・5・6グリッドの第Ⅰ層削土。Hトレンチの第Ⅱ層を削土しA・B・Cトレンチ北壁、東壁の土層断面の実測を行う。

8月6日（月） 晴

D・E・F・2グリッドの第Ⅰ層、Hトレンチの第Ⅱ層を削土しHトレンチは第Ⅲ層の精査も行う。B・C・Dトレンチは東壁、北壁の土層断面の実測を行う。

8月7日（火） 薄曇

B・C・D・E・2グリッドの第Ⅰ層、Hトレンチの第Ⅱ層を削土しHトレンチは第Ⅲ・IVを精査した。D・F・Gトレンチは北壁、東壁の土層断面の実測を行う。

8月8日（水） 晴

B・C・2・I・3・4・5・6グリッドの第Ⅰ層削土、Hトレンチの第Ⅲ層を精査する。E・Gトレンチの土層実測を行いHトレンチの平面実測をする。

8月9日（木）

Hトレンチのレベリングを行う。

8月10日（金） 晴

G・2、H・2・3・4・5・6、I・2・3、J・1・2・3・4・5・6グリッドの第Ⅰ層を削土。Hトレンチの北壁、Iトレンチの東壁の土層断面の実測を行う。多くの学生が来訪し発掘作業に参加してくれた。

8月11日（土）

A・C・G・H・2、H・6、J・1・2・3・4・5・6グリッドの第Ⅰ層、J・1・2・3・4・5グリッドの第Ⅱ層削土、Hトレンチの北壁の土層断面の実測を行う。

8月12日（日）

B・C・D・E・F・1、A・2、C・4、J・5・6グリッドの第Ⅰ層を削土する。Hトレンチは、北壁の土層断面の実測を行い、遺物の収納をする。

8月15日（水） 晴

B・I・2、D・E・F・1・2グリッドの第Ⅰ・Ⅱ層、

B-1・J-6グリッドの第II層を削土する。B-2・3グリッドより円形土壌を検出。

8月16日（木）

J・Kのトレンチを設定しJトレンチは、第I層を削土しA・B・C・D・E-2・3・4、F-2・4、G・H・I・J-2・3・4・5・6グリッドは東壁の上層断面を実測しC-3グリッドは北壁の土層断面を実測した。

8月17日（金）

G・H・I-1グリッドの第I層削土、Jトレンチの第I層削土、Jトレンチの第I層、第II層削土、第III層の精査をする。J-2・3・5グリッドは、北壁の土層断面を実測する。

8月18日（日）

J・KトレンチのII層を削土し、第III層を精査する。

8月23日（木）

H、I-1グリッドの削土、Jトレンチの第III層を精査する。C・E・F-1・2・3グリッド、D-1・2・4グリッド、I-3・4・5・6グリッド、J-4・6グリッドの北壁の土層断面の実測を行う。

8月24日（金）

K-5・6グリッド第I層を削土する。A・B・C・E・F-1グリッドは北壁、東壁の土層断面を実測し、A・B-2・3・4グリッド、G・H-1・2・3・4・5・6・グリッド及びI-1・2グリッドは北壁の土層断面の実測を行う。

8月27日（月）

K-1・2・3・4・5グリッド、M-5・6グリッドの第I層を削土する。K-6グリッドは第II層の削土をする。

8月28日（火）

O-2・3・4・5・6グリッド、Lトレンチの設定、M-2・3・4・5・6グリッドの第I層、M-3・4・5グリッドの第II層Lトレンチの第I層、第II層の削土をする。J-1グリッドは北壁、I・J-1グリッドは東壁土層断面の実測を行う。

8月29日（水）

M-1・O-3・4・5・6グリッドの第I層、M-2・3・4・5・6グリッドの第II層の削土する。Jトレンチは南壁の土層断面を実測した。

8月31日（金）

B-5グリッドのベルトを外す。M-1、O-2・3・4・5・6グリッドの第I層、M-2グリッドの第II層を削土する。G・H-1グリッドは東壁の土層断面を実測し、Jトレンチは昨日途中までしか出来なかった南壁の土層断面図を作成した。

9月1日（土）

O-1・2・3・4・5グリッドの第I層及び第II層を削土する。Kトレンチは土層断面の実測を行う。A-2、A・B・C・D・E・F・G・H-1、F-2グリッドは写真撮影をする。

9月2日（日）

B-2・5グリッドのベルトを外す。B-2・3グリッド内で検出されたB群の円形土壌の実測を行う。C-2、D-3・4、E-2・3・4、F-3・4・5グリッドは清掃の後、写真撮影に入る。写真撮影の間、休憩室にて今までに出来上っている写真的整理を行う。

9月3日（月）

D-4・5、E-4グリッドのベルト外しとE-3、F-2・3グリッドの第III層の精査をする。A-6グリッドは清

掃を行い写真撮影をする。C-1・3・5、D-1・2・3・5、E-3・6、F-1・2・3・4、G-1・4グリッドのレベリングを行い遺物の収納をする。

9月4日（火）

I-4、J-5グリッドのベルトを外す。F-1・2・3・4・5グリッドは第III層の精査を行う。I-5・6、J-6グリッドより円形土壌が検出され、確認をする。A群の円形土壌の実測をし、写真撮影も行う。E-6・7グリッドより出土の遺物のレベリングをし、J-4グリッドの遺物を収納した。

9月5日（水）

J-1・2・3・4・5・6グリッドのベルトを外す。A-4・5、I-4・5・6、J-1・2グリッドの第III層を精査をする。I-5・6、J-6グリッドより検出された円形土壌は5基となりC群とし、全掘後写真撮影をする。円形土壌のA・B群の実測を行う。B-2・5、C-5・6グリッドは遺物の平板測量を行う。

9月6日（木）

J-1・2・3グリッドの第III層を精査をする。A-1・2・3・4・5、B-2・3・4・5グリッドの遺物の収納を行い円形土壌のA・B群の実測を行う。

9月7日（金）

K-5・6グリッドの第II層削土、Iトレンチの第III層を精査する。円形土壌B・C群の実測を行い、A・I-5グリッドの出土遺物の写真撮影をし収納した。

9月8日（土）

K-4・5・6グリッド及びIトレンチの第III層を精査し円形土壌C群の実測を行った。

9月10日（月）

K-1・2・3・4・5・6グリッド及びIトレンチの最終精査をする。円形土壌A群の実測を行った。

9月11日（火）

K-1・2・3・4・5・6グリッド及びIトレンチの遺物のレベリングを行い収納する。円形土壌A・B群の実測を行った。

9月12日（水）

O-4グリッドの第II層を削土し、K-1・2、O-3・5・6グリッドは第III層の精査をする。Iトレンチは出土遺物の写真撮影をし、収納する。K-5グリッドはレベリングを行う。

9月13日（木）

M-3・4グリッドの削土をし、O-2・3・4・5グリッドの第III層の精査をする。円形土壌A群の実測を行い、K-1・3・4・6グリッドはレベリングをし、遺物は収納した。遺構、遺物の写真撮影も行った。

9月14日（金）

M-1・2グリッドの第I層、第II層を削土し、M-3・4、O-1・2・4・5の第III層を精査した。実測は円形土壌のA群とIトレンチの東壁土層断面図を作成した。

9月15日（土）

散歩の日の為、作業員が少人数なので、昨日の続きの円形土壌A群の実測をした。

9月16日（日）

M-2・3・5・6、K-4グリッドの第III層の精査をし、K-1・2グリッド東北部にサブトレンチを入れる。O-4グリッドは出土遺物のレベリングを行い、円形土壌A群

は実測をする。Iトレントチは東壁の土層断面の実測を行った。

9月17日（月）

J-4、M-1・3・4・6、K-5・6グリッドの第Ⅲ層を精査する。円形土壌A群の実測をし、Iトレントチは東壁の上層断面の写真撮影を行う。明日より実測担当者のみを残し大平C遺跡第1次調査を始める。

9月18日（火）

M-1・2・3・4・5・6、K-5・6、O-3・4・5グリッドの出土遺物のレベリングを行い収納する。O-2・3・4グリッドは、北壁の土層断面の実測をする。

9月19日（水）

O-1・5・6グリッドは北壁、O-1・2・3・4・5・6グリッドは東壁の土層断面の実測を行う。

大平C遺跡第1次調査（昭和54年9月18日～昭和55年3月21日）

9月19日（木） 晴

午後3時よりグリッド組みの為のポイントを設定する。

9月21日（金） 曇

草刈りの後ポイントを設定してグリッドを組んだ。（A・B・C・D・E・F・G・H-1・2）

9月22日（土） 晴

テントの設営をして道具の運搬をする。昨日の続きでグリッドを組む。（A・B・C・D・E・F・G・H-3・4）A・B-1グリッドの第Ⅰ層を削土する。

9月25日（火） 雨のち曇

A・B-1グリッドの第Ⅰ層を削土する。

10月1日（月） 晴

C・D・E-1グリッドの第Ⅰ層、A・B-1グリッドの第Ⅱ層を削土する。

10月2日（火） 曇

D・E・F-1グリッドの第Ⅰ層、C・D・E-1グリッドの第Ⅱ層を削土する。

10月5日（金） 曇

A-2・3・4、B-2、F-1グリッドの第Ⅰ層、A-2、E・F-1グリッドの第Ⅱ層を削土する。

10月13日（土）

A-4、B・C-2グリッドの第Ⅰ層、A-4、B-2グリッドの第Ⅱ層を削土する。A・B-2グリッドのベルト上に遺構を検出する。C・D・E・F-1グリッドは写真撮影を行う。

10月15日（日）

B・C-3、D-2・3、E-2グリッドの第Ⅰ層、C・D・E-2グリッドの第Ⅱ層を削土する。B-3グリッドより集石坑を、E-2グリッドより土壌と柱穴を検出した。

10月16日（火）

B・C・D-4、E-3グリッドの第Ⅰ層、A-2・3・4、B-4、C-3・4、E-3グリッドの第Ⅱ層を削土しB-4グリッドは第Ⅲ層を精査した。E-3グリッドより土壌をD-4グリッドより焼土を検出した。D-4グリッドより磨製石斧が出土した。

10月17日（水）

F-2グリッドの第Ⅰ層、A-2・3・4、B-1・2・3、C-2・3、D・E・F-2グリッドの第Ⅱ層を削土し、A-1、B・C-2グリッドは第Ⅲ層を精査した。A-4グリッドの北壁に焼土が検出された。A・B-1、C・D

9月20日（木）

M-1・2・3・4・6、K-1・2・3・4・5・6グリッドの北壁、K-1・2・3・4・5・6グリッドは東壁の土層断面の実測を行う。

9月21日（金）

M-5グリッドの北壁、M-2・3・4・5・6グリッドの東壁の土層断面の実測を行う。

9月22日（土）

M-1グリッドの東壁土層断面の実測を行う。

10月1日（月）

M-1・2・3・4・5・6グリッドの写真撮影とJ・Kトレントチの出土遺物の写真撮影、遺物収納をして調査を終了とした。

・E-2グリッドの写真撮影を行う。

10月22日（月）

E・F-4、F-3グリッドの第Ⅰ層、A・B・E・F-3グリッドの第Ⅱ層を削土し、A・B・C・D-4グリッドの第Ⅲ層を精査した。F-3グリッドより土壌を3基検出し遺物は石鏃・磨製石斧、磨石が出土した。

10月23日（火）

C-4グリッドの第Ⅱ層を削土し、A・B・C・D・E・F-1・2・3グリッドの第Ⅲ層を精査した。E-2グリッドより土坑を2ヶ所検出する。遺物はB-3グリッドより石鏃が出土した。又A-Dグリッドは2グリッドづつ拡張し、南北6グリッドとなつた。

10月25日（木）

A・B・C-5グリッドの第Ⅰ層、A・B・C-5、F-4グリッドの第Ⅱ層を削土した。C-5グリッドより焼土を検出する。各グリッド及び遠景の写真撮影を行う。

10月26日（金）

A・B・C-6、D-5・6グリッドの第Ⅰ層、A・B・D-6、C・D-5グリッドの第Ⅱ層を削土する。A・B・C・D・E・F-1・2・3グリッドの遺構遺物のレベリングを行う。A・B・C・D・E・F-1グリッドの遺物を収納する。

10月27日（土）

G-1・2グリッドの第Ⅰ層、第Ⅲ層を削土する。A・B・C・D・E・F-3、A・B・C・D・E-4、A・B・C-5グリッドの遺構遺物のレベリングを行う。A・B・C・D・E・F-1グリッドの遺物を収納する。

10月29日（月） 曇

A-1・2グリッドの第Ⅱ層を削土しA・B-1のグリッドの第Ⅲ層を精査する。A-1グリッドより磨石が7点A-2グリッドより多数の土器片が出土した。A・B・C・D・E・F-2・3・4、A・B・C・D-5、A・B-6グリッドからの出土遺物は収納した。

10月30日（火） 晴

A-4グリッドの第Ⅱ層を削土しA-2・3・4、B-1・2・3・4、C-1・2・3グリッドの第Ⅲ層を精査する。

C-1グリッドで遺構を検出する。

10月31日（水） 晴

A-5、B-3・4・5、C-3・4、D-1グリッドの第Ⅲ層を精査する。

C-4グリッドより打製石斧、D-1グリッドより石鏃が出土した。

A・B・C・D-1・2・3・4グリッドの北壁と東壁の土層断面を実測した。

11月1日(木) 晴

B-6、C-4・5、D-2・3・4グリッドの第Ⅲ層を精査する。A-5・6、B-4・5・6グリッドのベルトを外す。A・B-5・6、C-1・2・3・1・5・6、D-1・2グリッドの北壁とA・B・C-5・6、E-1・2・3・4グリッドの東壁土層断面を実測する。

11月2日(金) 晴

A-3・4・5・5・6、B-3・4グリッドの北壁ベルトとA-3・4・5、B・C-3・4グリッドの東壁ベルトを外す。D-3・4・5グリッドの北壁土層断面を実測する。

11月3日(土) 晴

A-1、B-2グリッドの南壁ベルトを外す。A・B-1・2・3グリッドの東壁土層断面を実測する。

11月4日(日) 晴

A-1、C-1・2グリッドの南壁ベルトを外す。A-1、B-2グリッドの東壁土層断面を実測する。

11月6日(火) 晴

D-2・3・4グリッドの第Ⅲ層を精査する。C-1・2・3・4・5・6、B-6グリッドの西壁ベルトをC-5グリッドの南壁ベルトを外し、A・B・C-1・2、D-1グリッドの清掃をする。大平B遺跡のG・H・Oトレントで遺物のレベリングを行い収納する。

11月7日(水) 晴

A・B・C-5・6、D-4・5グリッドの第Ⅲ層を精査し、A・B・C-3、D-2・3グリッドの清掃を行う。A・B・C-5・6、D-4・5グリッドの北壁土層断面の実測を行う。

11月8日(木) 晴

E-1・2・3・4サブトレントの第Ⅱ層を削土し、A-5・6、B-6トレントの第Ⅲ層を精査する。D-1・2グリッドは西壁ベルトを外す。A-6グリッドより土壌を検出する。A・B・C・D-4・5・6グリッドの清掃をし、B-2・3グリッドより検出されていた配石遺構の写真撮影を行なう。

11月9日(金) 小雨のち曇

F・G・H-1・2・3・4サブトレントの第Ⅲ層を精査する。A・B-5・6、E-1・2・3・4グリッドの北壁及び東壁の土層断面の実測を行う。A-2、F-3グリッドより検出された土壌を半截し、断面の実測をする。

11月13日(火) 晴

E-1・2・3グリッドの第Ⅲ層を精査する。石礫が2点出土した。E-1・2・3グリッドの南壁ベルトを外す。F-1・2・3・4、G-1・2・3、H-1・2グリッドの北壁及び東壁の土層断面の実測を行う。第1号、2号、3号、4号集石土坑を半截し、断面の実測をする。

11月14日(水) 晴

E-2・3グリッドの第Ⅲ層を精査する。石礫が1点、磨石が6点出土した。第1号、2号、3号集石土坑に微細図用のポイントを打ち実測を行う。

11月15日(木) 晴

E-3・4、F-1・2グリッドの第Ⅲ層を精査した。E-1・2グリッド西壁ベルト及びF-1・2グリッド南壁ベルトを外す。第3号、4号集石土坑の実測を行う。

11月16日(金) 晴

F-1・2グリッドの第Ⅲ層を精査する。E-3・4グリッド西壁ベルト及びF-3グリッド南壁ベルトを外す。B-

3グリッドの清掃を行い完掘した第1号、2号、3号集石土坑の写真撮影をする。

11月17日(土) 曇

F-2・3グリッドの第Ⅲ層を精査する。土坑の微細図作成準備でポイントを設定する。

11月19日(月) 曇

G-1・2グリッドの第Ⅲ層を精査する。F-4、G-1・2グリッドの南壁ベルトを外す。第5号、6号、7号、8号、9号、10号集石土坑を半截し実測を行い完掘する。

11月20日(火) 晴

H-1、G-1・2・3グリッドの第Ⅲ層を精査する。F-3グリッドの西壁ベルト及びG-2、H-1グリッドの南壁ベルトを外す。集石土坑の微細図作成用のネット張りをする。

11月21日(水) 晴

D-1グリッドに微細図作成の準備をする。

11月26日(月) 曇

C・D-1グリッドより検出された第2号住居址の微細図を作成する。

11月27日(火) 曇

C-1、D-2・3・4グリッドより検出された住居址及び集石土坑の実測を行う。

11月29日(木) 曇

27日に引き続C-1、D-2・3・4グリッドより検出された住居址及び集石土坑の実測を行う。

11月30日(金) 晴

C-2・3グリッドより検出された第8号集石土坑の実測を行う。

12月1日(土) 薄曇

A-1グリッドの石の出土状態を実測する。

12月3日(月) 薄曇

B-1・2グリッドのⅢ層を削土する。D-1・2・3・4グリッドより検出された遺構、遺物のレベリングを行い遺物は収納する。又写真撮影も行なう。

12月4日(火) 曇

D・E-1・2・3グリッドの第Ⅲ層を精査する。A・C-1・2グリッドより検出された遺構、遺物のレベリングを行い遺物は収納する。又写真撮影も行なう。

12月5日(水) 晴時々曇

B-1、C-1・2・3、D-3グリッドの第Ⅲ層を精査する。A-3、B-1・2・3、C-2・3グリッドより検出された住居址、集石土坑の微細図、レベリングを行い遺物は収納した。又写真撮影も行なう。

12月6日(木) 晴

A-3・4、B-3、C-4グリッドより検出された遺構遺物の微細図を作成する。

12月7日(金) 晴

A-4、B-3・4、C-3グリッドより検出された遺構、遺物のレベリングを行い遺物は収納する。写真撮影も行なう。

12月8日(土) 晴

A・B・C-3・4グリッドより検出された遺構、遺物のレベリングを行い、遺物は収納する。写真撮影も行なう。

12月9日(日) 晴

A・B・C・D-1・2グリッドより出土した鰐石の整理をする。

12月10日(月) 晴

A・B・1グリッドの北壁土層断面の実測をする。G-3

・4グリッドの遺構、遺物のレベリングを行う。

12月11日（火） 晴

A・B・1・2グリッドの北壁土層断面の実測を行ないE-1・2グリッドより検出されている住居址の微細図を作成する。A・B・C・D-3・4グリッドより出土している雑石の整理をする。

12月12日（水）

C・D-1・2グリッドの東壁土層断面の実測を行う。E-2、F-1グリッドより検出されている住居址の微細図を作成する。

12月13日（木） 晴

A・B・3・4グリッドの北壁土層断面の実測を行う。E-3・4、F-2・3グリッドより検出されている集石土坑の微細図を作成する。

12月14日（金） 晴

H-1・2グリッド北壁土層断面の実測を行う。A・B-6グリッドより検出された集石土坑の微細図を作成する。E-1・2・3・4、F-1・2・3グリッドの遺構、遺物のレベリングを行う。

12月15日（土） 晴

A・B-5・6グリッドの遺構、遺物のレベリングを行う。

12月17日（月） 晴

C-6グリッドの第II層を削土し、D・E・F-4・5、H-6グリッドの第III層を精査する。H-1グリッドの北壁土層断面を実測する。

12月18日（火） 晴

B・C-5・6、H-1グリッド東壁土層断面の実測を行い、A-1・2・3・4、B・C-1・2・3グリッドより検出された遺構の微細図を作成する。

12月19日（水） 晴

A・B-3、C-3・4グリッドより配石遺構が検出される。

12月20日（木） 曇のち晴

C-5・6グリッドの第III層を精査し、A・B・C-5・6グリッドの清掃をする。D-2・3グリッドより配石遺構が検出される。

12月21日（金） 晴

C・D-4グリッドの第III層を精査し、D-2グリッドの配石遺構の検出をする。A・C-1グリッドより検出されている集石土坑の微細図を作成する。

12月22日（土） 晴

B・C・D-3・4グリッドの第III層を精査する。A、C-1グリッドより検出されている集石土坑の微細図を作成する。

12月23日（日） 晴

A・C-1グリッドより検出されている集石土坑の微細図を作成する。

12月25日（火） 曇

A・B・C-1グリッドの集石土坑を作成する。

12月26日（水） 晴

E-2・3・4グリッドの第III層を精査する。A・C-1グリッドの集石土坑及びB-1・2・3・4・5グリッドより出土した配石遺構の微細図を作成する。

12月27日（木） 晴

D-2・3グリッドの第III層を精査する。B・C-1グリッドの集石土坑及びB・C-1・2・3・4グリッドの配石

遺構の微細図を作成する。

昭和55年1月7日（月） 晴

A・B-1グリッドの集石土坑の微細図を作成する。

1月9日（水） 晴

A・B-1グリッドの集石土坑の微細図を作成する。

1月10日（木） 晴

E-2グリッドの第III層を精査する。A・B・C-1グリッドの集石土坑の微細図を作成する。

1月11日（金） 曇

F-2グリッドの第III層を精査する。B・C-1グリッドより検出された第5号、6号、7号、8号、14号、15号集石土坑の微細図を作成する。

1月12日（土） 晴

B・C-1グリッドの第4号、5号、6号、14号、15号集石土坑の微細図及びセクション図を作成する。

1月14日（月） 晴

C-2グリッドの第III層を精査する。B-1・2、C-1グリッドより土坑の検出をする。B-1グリッドの第4号、9号、10号集石土坑の微細図及びセクション図を作成する。

1月15日（火） 晴

F-2グリッドの第III層を精査する。B-1グリッドの第4号、5号、6号、7号、8号、9号、10号集石土坑とC-1グリッドの第14号、15号、16号、17号集石土坑の微細図を作成し完了した。

1月16日（水） 晴

G・F-2グリッドの第III層を精査する。C-1グリッドの第12号、13号、18号集石土坑の微細図及びセクション図を作成する。

1月17日（木） 晴

G・F-2グリッドの第III層を精査する。B-1グリッドより第11号集石土坑が検出される。遺物の整理も行う。

1月18日（金） 晴

G-2グリッドの第III層を精査する。B-1グリッドの第11号、12号C-1グリッドの第13号集石土坑及びE・F-1・2グリッドの遺構の微細図を作成する。土器洗いを行う。

1月19日（土） 晴

E・F-1・2グリッドの第III層を精査する。B-1グリッドの第11号、12号集石土坑及びA-2グリッドより検出された遺構の微細図を作成する。

1月20日（日） 曇

G-2・3グリッドの第III層を精査する。A-2グリッドの第21号、22号集石土坑の微細図を作成した。

1月21日（月） 曇

F-1・2グリッドの第III層を精査する。E-1グリッドの第1号住居址、B-2グリッドの第19号集石土坑の微細図を作成する。土器の洗いを半日行う。

1月22日（火） 晴

A-3グリッドの第21号、22号集石土坑の微細図を作成する。実測以外の人は土器の洗いを行う。

1月23日（水） 晴

F-3、G-1・2グリッドの第III層を精査する。C-1グリッドの第18号集石土坑の微細図及びセクション図の作成を行い完了する。

1月24日（木） 晴

A - 3 グリッドの第21号、22号集石土坑、C - 3 グリッドの第31号集石土坑の微細図を作成する。土器洗いも行う。

1月26日（土） 晴

A - 3 グリッドの第21号、22号集石土坑、C - 3 グリッドの第31号、32号集石土坑の微細図を作成する。土器洗い及び注記を行う。

1月28日（月）

A - 3 グリッドの第21号、22号集石土坑のセクションの実測を行い微細図は完了とする。C - 3 グリッドの第32号集石土坑の微細図を作成する。

1月31日（木） 晴

B・C - 7 グリッドの第I層を削土する。C - 3 グリッドの第31号、32号集石土坑のセクションの実測を行い微細図は完了した。出土土器の洗いと注記を行う。

2月1日（金） 晴

A・B - 7 グリッドの第I層を削土する。C - 3 グリッドの集石土坑の微細図を作成する。土器洗いと注記を行う。

2月2日（土） 晴

C - 3 グリッドの集石土坑の微細図を作成する。土器洗いと注記を行う。

2月3日（日） 晴

F - 1 グリッドより検出された第2号住居の微細図を作成する。土器洗いと注記を行う。

2月4日（月） 晴

C - 3 グリッドの第31号、D - 3 グリッドの第36号集石土坑の微細図を作成する。G - 1・2、H - 2 グリッドの遺物のレベリングを行い収納する。土器の注記を行う。

2月5日（火） 晴

A・B - 7 グリッドの第II層を削土する。B - 1 グリッドの第11号、12号、C - 1 グリッドの第13号集石土坑の微細図及びセクション図を作成し完了する。D - 3 グリッドの第36号集石土坑の微細図を作成する。土器の注記を行う。

2月6日（水） 晴

A・B - 7 グリッドの第II層を削土する。A・D・E - 1・2、B・C - 1 グリッドの微細図を作成する。土器洗いと注記を行う。

2月7日（木） 墓雪のち晴

A・B - 7 グリッドの第III層を精査する。B - 3、C - 3 グリッドの集石土坑の微細図を作成する。C・D - 3 グリッドの配石構造のセクション図を作成する。

2月8日（金） 晴

A・B - 7 グリッドの第II層を精査する。土器洗いと注記を行う。

2月10日（日） 晴

A・B - 7 グリッドの第III層を精査する。

2月11日（月） 晴

A - 2 グリッドの第2号住居址、D - 2 グリッドの第4号住居址の実測を行う。土器洗いと注記をする。

2月12日（火） 晴

A - 2 グリッドの第3号住居址及びB - 3 グリッドの第23号、24号、25号、26号、27号、28号、29号集石土坑D - 3 グリッドの第38号集石土坑の微細図を作成する。土器洗いと注記を行う。

2月13日（水） 晴

A - 2 グリッドの第3号住居址、D - 2 グリッドの第4号住居址の実測を行う。C - 3 グリッドの第30号、集石土坑の

微細図、セクション図を作成する。土器の注記も行った。

2月14日（木） 曇

A - 2 グリッドより検出された第3号住居址、D - 2 グリッドより検出された第4号住居址の実測をする。D - 3 グリッドの第35号、36号集石土坑の微細図を作成する。土器洗いと注記も行う。

2月15日（金） 晴

A - 2 グリッドより検出された第3号住居址の実測を行う。D - 2・3 グリッドより検出された第34号、35号、36号集石土坑の微細図を作成する。

2月16日（土） 曇

A - 2 グリッドより検出された第3号住居址とD - 2・3 グリッドの第33号、34号、35号、36号の微細図を作成し第35号、36号はセクション図を実測して完了した。

2月17日（日） 曇時々晴

A - 2 グリッドより検出された第3号住居址、E - 2 グリッドの第4号住居址の実測を行う。第3号住居址は完了した。

2月20日（水） 晴

土器の洗いと注記を1日中する。

2月21日（木） 晴

E - 1・2 グリッドより検出された第1号住居址及び第4号住居址の実測を行う。

2月22日（金） 曇

A・B - 7 グリッドの第III層を精査する。E - 2 グリッドより検出の第4号住居址の実測を行う。霜が降りるので土壌を作り住居壁面の保護を行う。土器の注記をする。

2月23日（土） 晴

A・B - 7 グリッドより検出の遺構の微細図を作成する。土器洗いと注記を行う。

2月24日（日） 晴

E - 1・2 グリッドより検出された第1号住居址と第4号住居址の実測を行う。B - 2 グリッドの第19号、20号集石土坑の微細図を作成する。土器の注記を行う。

2月25日（月） 晴

A・B - 7 グリッドより検出の第37号、38号、39号、40号、41号集石土坑の微細図を作成する。

2月26日（火） 晴

A・B - 7 グリッドの集石土坑の微細図、セクション図の作成をする。配石構造のプランを検出する。ネットを20cm方眼に張る。

2月27日（水） 晴

E - 2・F - 3 グリッドの第III層を精査する。B - 6・7 グリッドより検出された第37号、38号、39号、40号、41号集石土坑及びB - 2 グリッドの第19号、20号集石土坑の微細図の作成をする。

3月2日（土） 晴

江坂輝弘教授が野口、中山氏を同行し来町するので遺構や遺物について意見が伺えるように整理、清掃を行う。

3月3日（日） 晴のち曇

A・B - 3・B - 4 グリッドの第III層を精査をする。C - 3 グリッドより検出された第30号集石土坑の微細図を作成する。

3月4日（月） 曇

A - 3・B - 4 グリッドの第III層を精査をする。B - 2 グリッドより検出された第19号、20号集石土坑の微細図を作成する。

3月6日（水） 晴

NHK静岡テレビ局が遺跡の撮影に来る。

3月7日（木） 雨

B-5・7グリッドより検出の第37号、38号、39号、40号、41号集石土坑の微細図を作成し、B-C-D-2・3グリッドの遺物のレベリングを行い収納する。その他仕上げた図面をもう一度見直し整理をする。

3月8日（金） 晴

A・B・C・D・E・F-1・2・3・4、A・B・C・D-5、C-6グリッドの遺構、遺物のレベリングを行い遺物の収納をする。B-2グリッドの第19号、20号集石土坑の微細図を作成し完了する。

3月10日（日） 晴

A-3・4グリッドより検出された第5号住居址の実測図を作成する。A-B-1・2グリッドの清掃を行う。

3月11日（月） 晴

A・B・C-1・2・3グリッドの清掃を行い第1号～第11号集石土坑の写真撮影をする。

3月12日（火） 晴

E-2グリッドの第4号住居址の平面図、セクション図、B-C-3グリッドの第2配石微細図及びセクション図を作成し完了させる。第1号～第5号住居址、第12号～第28号集石土坑の清掃をし写真撮影を行う。

3月13日（水） 晴

B-3グリッドより検出された第23号～第28号集石土坑の

微細図及びセクション図の実測を行い完了する。第4号住居址の写真撮影をする。

3月14日（木） 雨

土器の注記をする。大平B遺跡出土の土器拓本を行い、大平C遺跡出土の土器を覆元をする。

3月15日（金） 雨

B-3グリッドの第29号集石土坑、C-3グリッドの第30号、D-2グリッドの第33号集石土坑の微細図及びセクション図を作成し完了する。午後より遺跡見学会を行う。

3月16日（土） 雨

第5号住居址の微細図及びセクション図を実測し遺物の収納をした。

3月17日（日）

C-1、D-1・2、H-2・4グリッドの遺構、遺物の実測を行い遺物は収納する。

3月18日（月）

第1号、2号住居址の実測を行い遺物を収納する。第34号集石土坑の微細図及びセクション図を実測し完了する。

3月19日（火）

第37号～第43号、集石土坑の微細図とセクション図の実測を行う。遺物の収納をする。

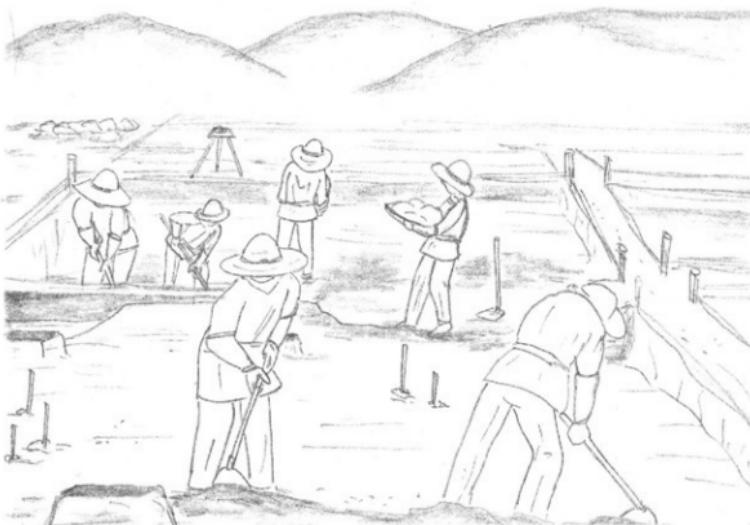
3月20日（水）

第37号～第43号、集石土坑の微細図とセクション図の実測を行う。遺物の収納をする。

3月21日（木）

遺構の実測図を見直し、遺構に上妻を詰める。遺物を収納

しすべての作業を終了する。



第 II 章 地理的環境と周辺の遺跡

第 1 節 遺跡群の位置と環境

長者原大平遺跡群は、伊豆半島北東部に位置し宇佐美火山系に属する巣雲山（標高580.7m）西方下の小盆地縁部に存在する。国道136号線の三福インターから、県道19号沼津—伊東線を東進する事およそ10km、伊豆スカイライン亀石峠手前の「長者原入口」と言うバス停から550mほど南下すると長者原地区に入る。ここはかつて、湿地あるいは沼地のような所であったらしく、現在でもなお地区の西側崖地には、これを裏付ける植物が多く自生している。

盆地の中を南北に流れている年川は、修善寺町大野と中伊豆町上和田を通り、大見川（狩野川の支流）にそいでいる。これに沿っている道は、今でこそ人々の往来は少なくなってしまったが、古来中伊豆からこの長者原を経て宇佐美など東海岸へ抜けるための重要なルートであった。人家は、以前は東側の丘陵裾部に多くあったが、開発によってそのほとんどが西側に移転している。現在その戸数は20戸（21戸の時もあった）であり、これは数十年来変わっていない。

南北約1km、東西500mほどの盆地内にはいくつかの丘陵が張り出しており、その端部上に大平A～Fの6遺跡が点在しているのである。（大平A・B・C遺跡の調査に先立ち、D遺跡を緊急調査している）

大平A遺跡は盆地北側に位置し、南に突き出た丘陵上にある。標高は320～340mであり、長者原地区全体を見渡せる場所にある。この丘陵は削土されて数段にわたり畑となっている。

大平B遺跡は、盆地北東側の丘陵斜面および小扇状地的な場所に位置している。標高は310～330mを測る。遺跡の第2地点はやや高位にあるが、年川に注ぐ小河川の度重なる洪水などによって崩壊が著しかった。

大平C遺跡はB遺跡の南側に隣接しており、西南方に突き出た低台地上に位置している。標高は310～315mを測る。この台地の西側には年川があり、東側の山からは湧水が滲み出て、細い流れをつくっている。

大平D遺跡は、C遺跡からさらに南側の低地の畑にある。道路を挟んで東西に広がる遺跡である。標高は310m前後を測る。



第3図 大平遺跡群の位置

第2節 周辺の遺跡

狩野川の一支流をなしている深沢川（ふかさわがわ）の上・中流域には、数多くの遺跡が残されている。とりわけ、浮橋（うきはし）盆地や田原野（たわらの）周辺の丘陵や台地には、古い時期の遺跡が存在している。すなわち、後期旧石器時代から縄文時代早期に属するものだけで、浮橋地区に10ヶ所、田原野地区で2ヶ所確認されており、この他、縄文時代前期から後期にかけてのものは浮橋・田原野地区で10ヶ所存在する。

さて、この地域において考古学的な踏査・研究が行われるようになったのは、今から57～58年も前の事になる。まず、芹沢長介氏や加藤明秀氏による、中伊豆方面の踏査があった。この事は後に、『考古学論叢5輯』—伊豆駿河の古式繩紋式土器とその伴出石器—の中へ、「浮橋口」と言う名前で遺跡紹介されている。（芹沢氏の言われる浮橋口遺跡とは、現在の上西之窪遺跡なのか、あるいはアイノ山A遺跡なのかは不明）また、これに前後して井出太一郎氏も浮橋・田原野方面を踏査されており、その結果を『静岡県郷土研究8輯』—北伊豆に於ける先史原史時代の遺跡—に発表されている。諸先達の業績に対して、改めて敬意を表したい。

昭和30年代になると、輕部慈恩氏を中心とした日本大学考古学研究室により、田原野の阿原（あわら）遺跡の発掘調査が行われている。この時には、縄文時代後期と思われる敷石住居址の一部が確認されている。また、昭和58年には同地区の上ノ田（うえのた）遺跡が調査され、さらに59年には阿原遺跡の第Ⅱ次調査が、それぞれ当教育委員会によって行われている。

〈浮橋地区〉

1. 八丁平遺跡（はっちょうだいら） 浮橋・八丁平

浮橋地区的北側に位置し、大沢橋から北へ300mほど行った丘陵の南西斜面に存在する。標高は340m前後。現河床との比高は約40mである。遺物の分布は比較的狭い範囲に限られており、出土量もそれほど多くない。後期旧石器時代と思われる礫器や、縄文時代早期末の条痕文土器、磨石、それに土師器などが出土している。

2. アイノ山A遺跡 浮橋・アイノ山

浮橋と田原野地区境の舌状台地上に位置し、ゴルフ場へ向かう道路の東南斜面に存在する。（山田と呼ばれる所の東方）標高は約300m。縄文時代早期の、やや粒の大きい楕円押型文土器、絡条体圧痕文土器、田戸下層式併行土器と石鏃、磨石、同時代中期中葉の土器などが出土している。

3. 上西之窪遺跡（かみにしのくぼ） 浮橋・上西之窪

県道19号沼津伊東線の、浮橋辻（さつきヶ丘公園東）から北東へ約300m入ると、県農業畜産振興公社田方哺乳場がある。この前には「安野口」というバス停があり、ここから約600mほど坂道を下ると、安野地区に入る。この哺乳場東側の丘陵一帯が上西之窪遺跡である。標高は約280m。石核および打製石斧・磨製石斧・石槍・石鏃・石棒などの石器と、縄文時代中・後期の土器片が出土している。特に石鏃については、当町の遺跡中最も出土量が多い。（以前は、雨上がりの後などに行くと数十本以上拾えた）

4. 茅野A遺跡（かやの）

下畑・茅野

大仁東小学校西北側に広く張り出した舌状台地上に位置している。その按部付近が中心地点と思われる。標高は約260m。およそ30年前に須磨満氏の注意する所となり、後期旧石器時代の刃器やナイフ形石器・尖頭器片などが採集されている。この他、縄文時代早期前半の楕円押型文土器（楕円の粒は小さい）や、同時代前期の関山式および諸磧式土器、磨石・石鏟などが出土している。

〈田原野地区〉

1. 上ノ田遺跡（うえのた）

田原野・上ノ田

田原野地区西縁の丘陵上に位置している。子神社北側の畠地がそれで、丘陵下には宮川が流れている。標高は約270m。昭和58年5月～6月、宮川の改修工事に伴い発掘調査が行われている。その結果、縄文時代中期中葉の住居址3基と配石遺構2ヶ所が確認された。また第1号住居址からは阿玉台式および勝坂式併行の土器が出土している。この他、縄文時代早期の押型文（山形・楕円）土器、撚糸文土器、条痕文土器、無文土器、同時代前期の諸磧a・b式土器、同時代中期後半の曾利式土器、同時代後期の堀ノ内式土器と石器類、それに土師器などが出土している。



第4図 上ノ田遺跡

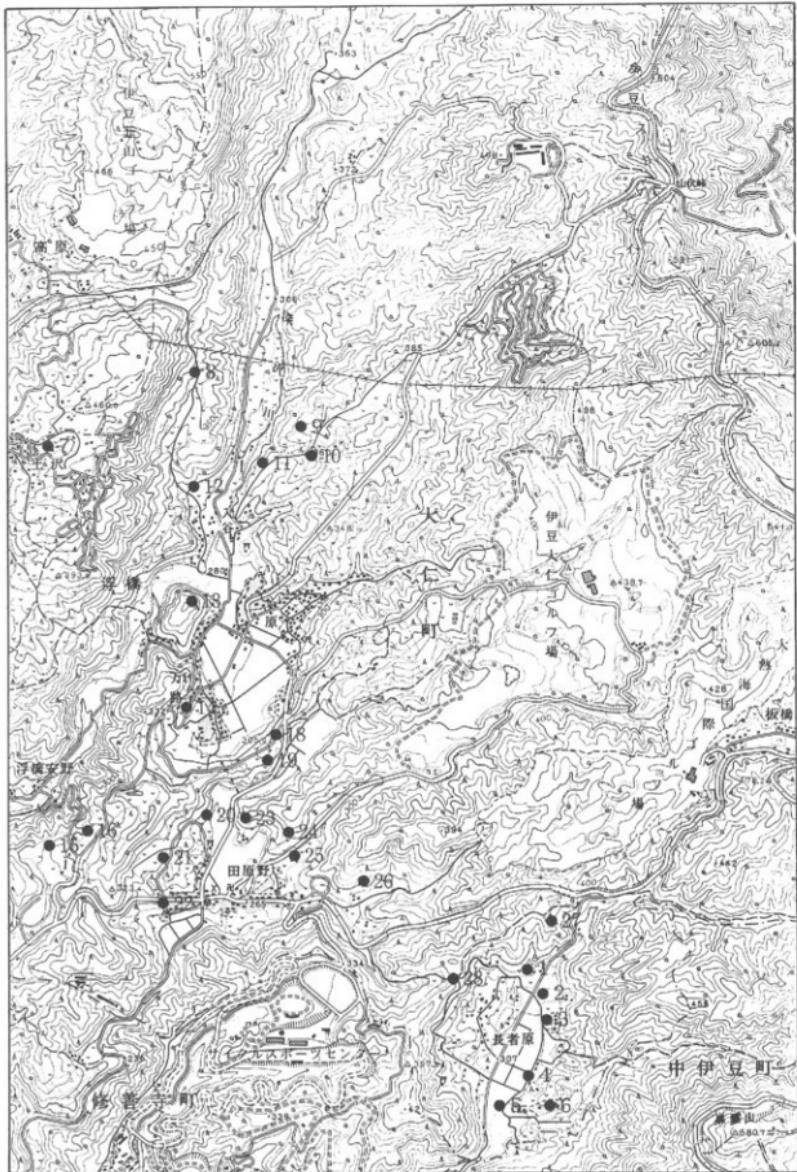
2. 阿原遺跡（あわら）

田原野・阿原

上ノ田遺跡の東方約150mに位置しており、南面に張り出した丘陵上にある。（今井一清氏宅および周囲の茶畠がそれである）標高は約265m。昭和39年には東側の茶畠から、敷石住居址の一部が発見されている。また、同59年には団体営ほ場整備事業に伴い、当教育委員会により西南側の畠地の調査が行われ、縄文時代と思われる住居址4基や土坑8基が確認され、また縄文時代早期～中期の土器片（撚糸文土器、押型文土器、諸磧式土器、曾利式土器、加曾利E4式土器）と石鏟・剝片、それと土師器などが出土している。



第5図 阿原遺跡



第6図 大平遺跡群周辺遺跡分布図



第7図 古い遺跡が密集する浮橋地区

遺跡名	所在地	時代	遺構・遺物	備考
1 大平 A 遺跡	長者原字大平	旧石器 縄文・古墳	住居址・土坑・石棺・縄文土器等	昭和53~54・57年調査
2 大平 B 遺跡	長者原字大平	縄文(早~晩) 平安	土壙・縄文土器・躰器・磨石・石鏡等	昭和54年調査
3 大平 C 遺跡	長者原字大平	縄文(早・晩) 平安	住居址・土坑・石棺・磨石・縄文土器・石鏡等	昭和54~58年調査
4 大平 D 遺跡	長者原字大平	縄文(中)	住居跡・縄文土器	
5 大平 E 遺跡	長者原字大平	縄文(中)	縄文土器	
6 大平 F 遺跡	長者原字大平	縄文(後)	縄文土器	
7 土沢 遺跡	浮橋字土沢	縄文(草・速) 古墳	尖頭器・縄文土器・土師器	
8 八丁平 遺跡	浮橋字八丁平	旧石器 縄文・古墳	躰器・縄文土器・土師器・磨石	
9 小辻洞 B 遺跡	浮橋字小辻ノ洞	縄文(前)	縄文土器	
10 小辻洞 A 遺跡	浮橋字小辻ノ洞	縄文(早・中)	縄文土器	
11 上宮ノ上 遺跡	浮橋字上宮ノ上	縄文(中)	縄文土器	
12 上の畑 遺跡	浮橋字上の畑	旧石器	ナイフ形石器	
13 古根 遺跡	浮橋字古根	縄文(中)	縄文土器	
14 西畑 遺跡	浮橋字西畑	旧石器・古墳	搖器・土師器	
15 向山 遺跡	浮橋字向山	旧石器 縄文(早・中)	ナイフ形石器・縄文土器	
16 上西ノ森 遺跡	浮橋字上西ノ森	縄文(中・後)	搖器・縄文土器・石鏡	
17 アイノ山 A 遺跡	浮橋字間ノ山	縄文(早・中) 古墳	縄文土器・土師器	
18 アイノ山 B 遺跡	浮橋字間ノ山	旧石器 縄文・古墳	搖器・縄文土器・土師器	
19 入合 遺跡	田原野字入合	縄文(中)	縄文土器・打製石斧	
20 上ノ田 遺跡	田原野字上ノ田	縄文(中)古墳	住居址・縄文土器・打製石斧	昭和58年調査
21 平戸 遺跡	田原野字平戸	縄文(中)	縄文土器・打製石斧	
22 越路 遺跡	田原野字越路	縄文(中)	縄文土器・打製石斧・石鏡・磨石	
23 阿原 遺跡	田原野字阿原	縄文(早~後)	住居址・縄文土器	昭和59年調査
24 寺ノ後 遺跡	田原野字寺ノ後	縄文(中)	縄文土器	
25 鈴ヶ下 遺跡	田原野字鈴ヶ下	縄文(中)	縄文土器	
26 上藤原 遺跡	田原野字藤原	縄文(中)	縄文土器	
27 冲荒久 遺跡	長者原字冲荒久	古墳	土師器	
28 待場 遺跡	長者原字待場	平安	土師器	

第1表 大平遺跡周辺遺跡一覧表

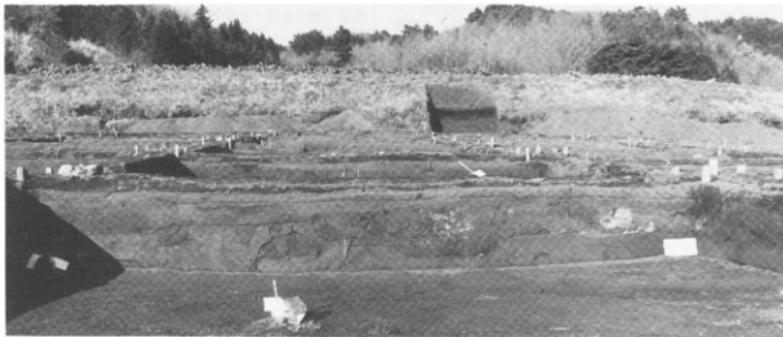
第III章 大平A遺跡発掘調査報告

第1節 第I次発掘調査

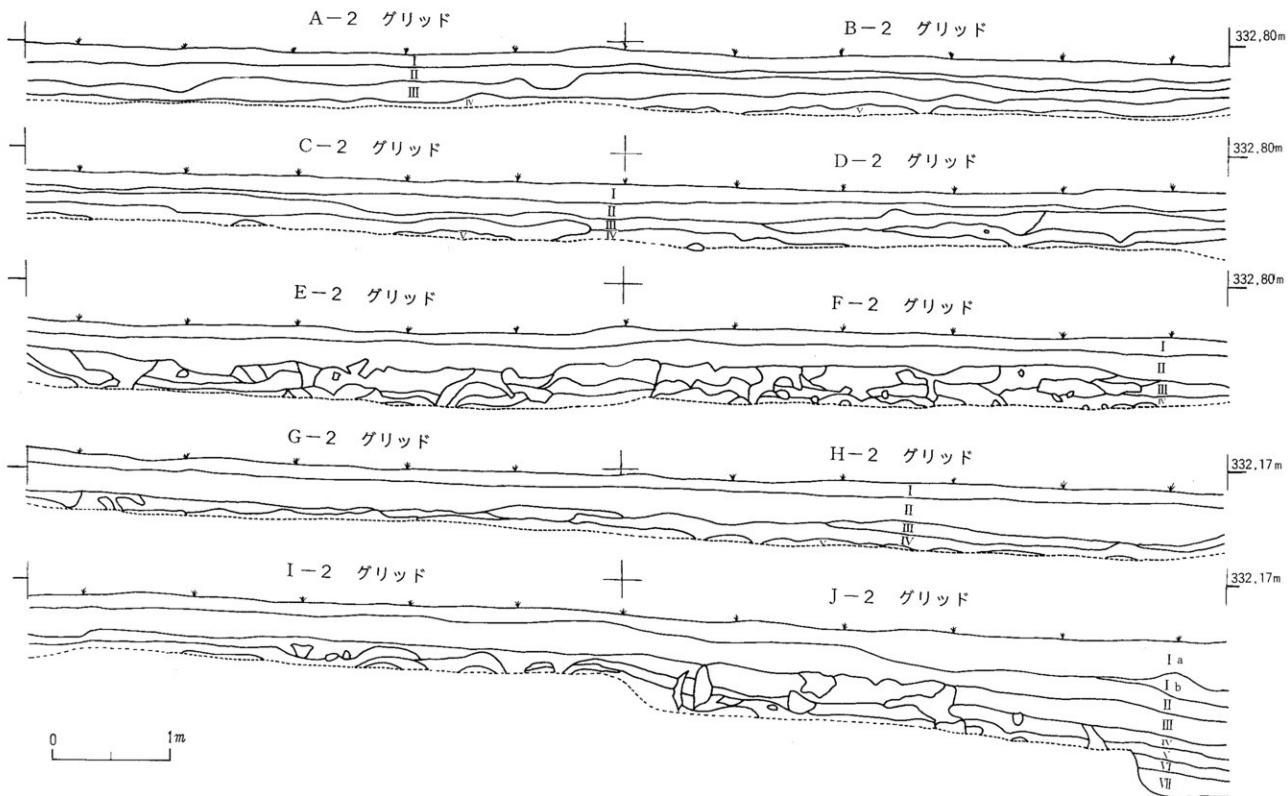
1. 遺跡の層序

第I次調査によって確認された層序は、表土層から赤褐色土層まで第I層～第VII層に分ける事ができる。第9図～第10図に示すとおりであるが、天地返しによって遺物包含層の大部分が消滅していた。また、第III層以下は隨所で搅乱しており、特に焼土や炭化物の混入するブロック塊は第III層から第V層にまで及んでいた。精査の結果、こうした状況は調査区のかなり広い範囲で認められた。おそらく当時、このあたりにはかなり大きな木が繁茂しており、山火事等によって焼失したものであろう。そこで基本層序は、比較的安定しているC・Dの2グリッド北壁や、G～Iの2グリッド北壁にこれを求めた。遺物は、第III層下部から第IV層にかけて出土している。

第I層	黒色土	現耕作上であり、層厚は15cm～25cm。
第II層	灰褐色土	搅乱層であり、場所によっては若干のバーミスと焼土が混入している。
第III層	明褐色土	土地の改良によって盛られた土であり、部分的にはかなりの層厚がある。 若干のバーミスを含んでおり、縄文時代中期から前期・早期の遺物が混在。炭化物の混入する搅乱層が見られる。
第IV層	黄褐色土	第II次調査で検出された、第IV層（黄褐色土）の下部に相当する。漸移層である。僅かにスコリアを含んでいる。縄文時代早期の遺物が若干出土している。
第V層	暗褐色土	赤味の強いスコリアを含んでいる。遺物は確認されなかった。搅乱層はこの第V層まで及んでいた。やや堅くなっている。
第VI層	赤褐色土	全体が赤味を帯びた土層であり、第V層と同様のスコリアが含まれる。
第VII層	赤褐色土	堅くしまり、赤味を帯びたブロック状のスコリアが多くなる。

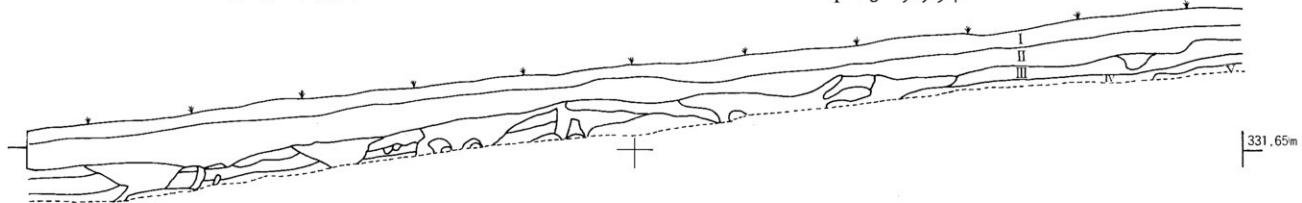


第8図 第I次調査層序



第9図 第1次調査土層断面図（北壁）

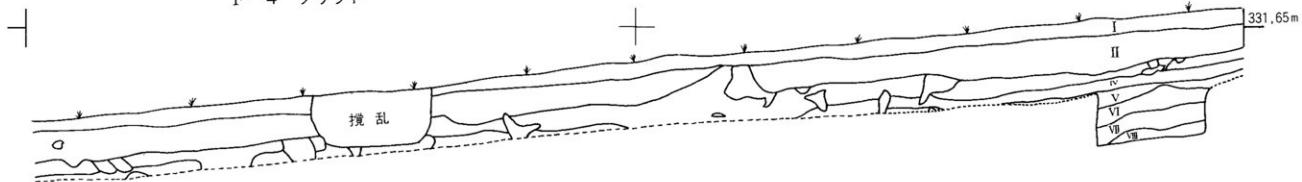
F-2 グリッド



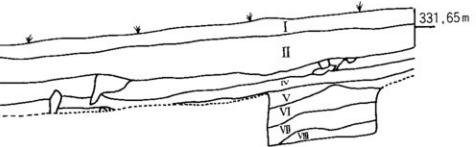
F-3 グリッド



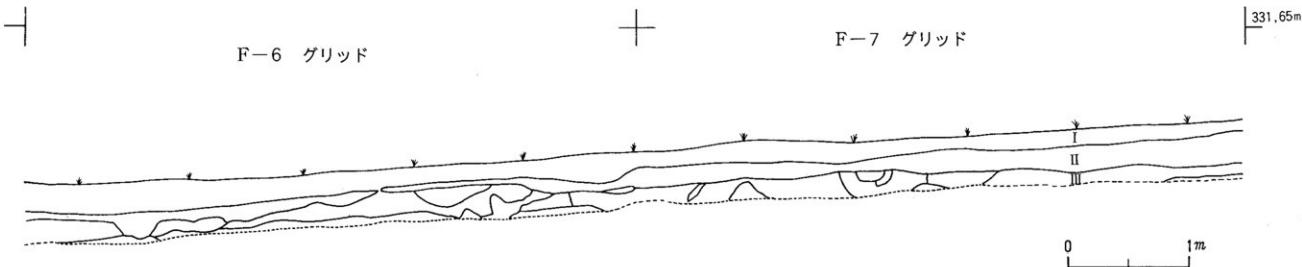
F-4 グリッド



F-5 グリッド



F-6 グリッド



第10図 第1次調査土層断面図（西壁）

A

B

C

D

E

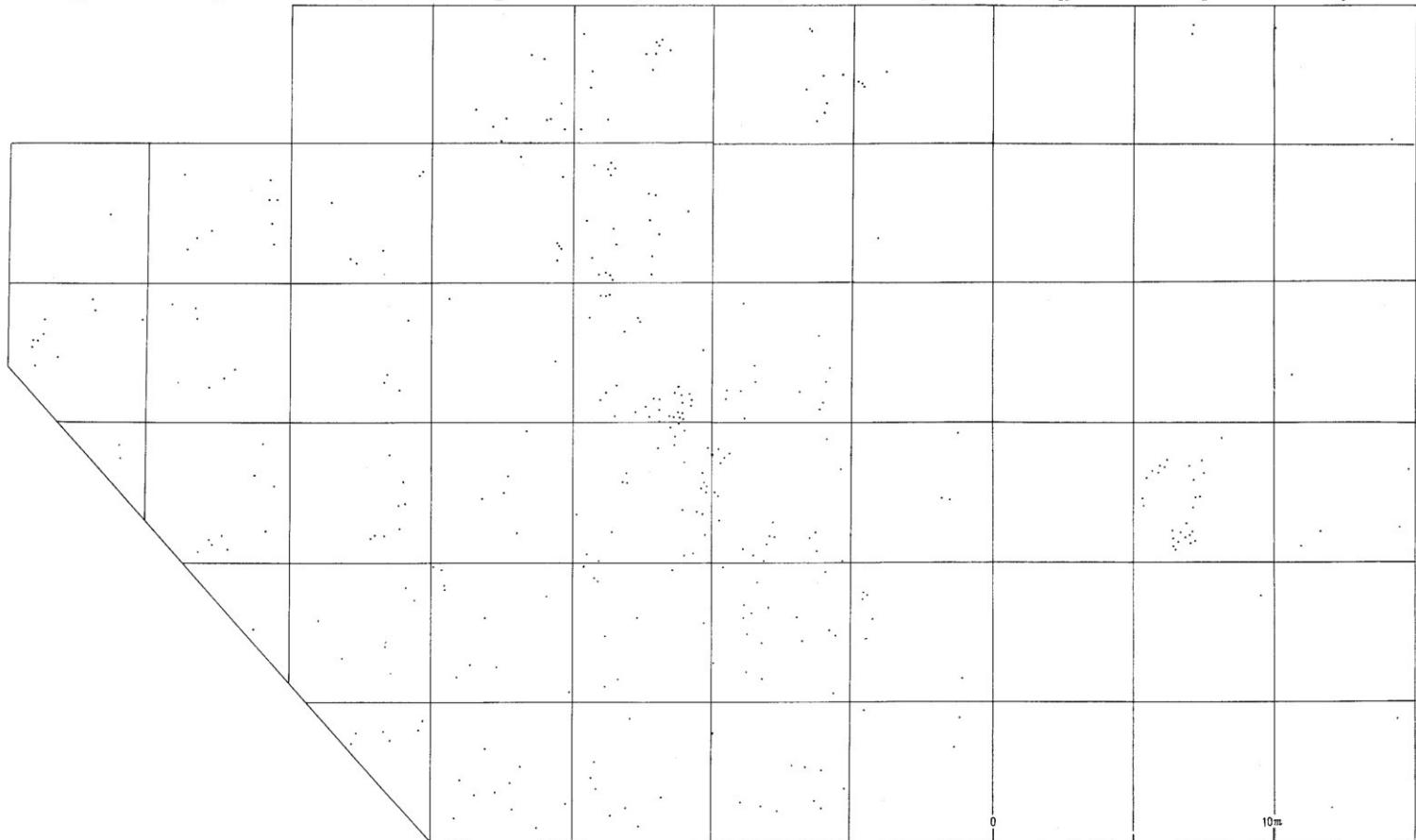
F

G

H

I

J



第11図 第1次調査出土遺物分布図

2. 遺 墓 物

A. 土器（第12図～第20図・図版4～11）

第1次調査では、縄文時代早期・前期・中期・後期の土器が出土している。このうち、早期前半の土器を第1群土器、早期後半の土器を第2群土器、前期の土器を第3群土器、中期の土器を第4群土器、後期の土器を第5群土器として分類して述べる。

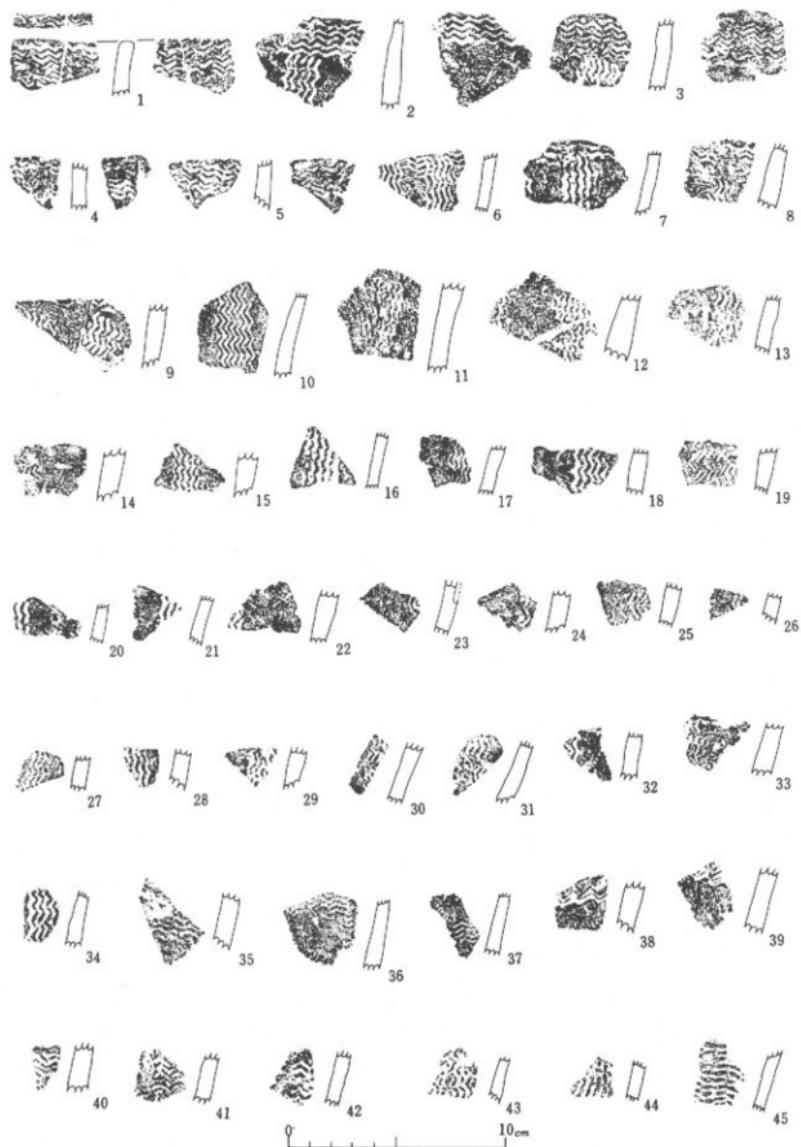
第1群土器（早期前半の土器）

山形押型文土器（第12図1～45・図版4） 縄文時代早期前半の土器を本土器群とした。押型文土器であり45点出土している。すべて帶状の山形文を有するもので、綾横に施されている。山形文は、その陰刻が太いものと細いものがある。1は、整った山形文を口縁上に施文、口縁に添って横位施文した後これに継続して綾位施文している。さらに裏面にも横位施文している。器厚は7.8mm。2は、やや幅広の山形文を口縁に添い横位施文し、これに接続して綾位施文している。裏面も1と同様に横位施文している。口縁部については、磨耗しており不明。器厚は5.6mm。4は、口縁最上部に横位に山形文が一条、僅かではあるが施されているのが確認される。その下部は無文帶をおいて、再び施文が見られるがよく分からぬ。裏面にも横位施文されている。器面は6.8mm。1・4は口縁が平面で、その傾きはほぼ直行している。5は、丁度輪積みの接合部から剥離している。表裏とも横位施文されている。器厚は7.2mm。45は、一見すると楕円のように見えるが、やや間延びしたような山形文になっている。器厚は6mm。全体に焼成は良好であり、色調は、黒褐色・灰褐色・褐色・赤褐色を呈する。胎土中には、石英粒・砂粒が含まれている。

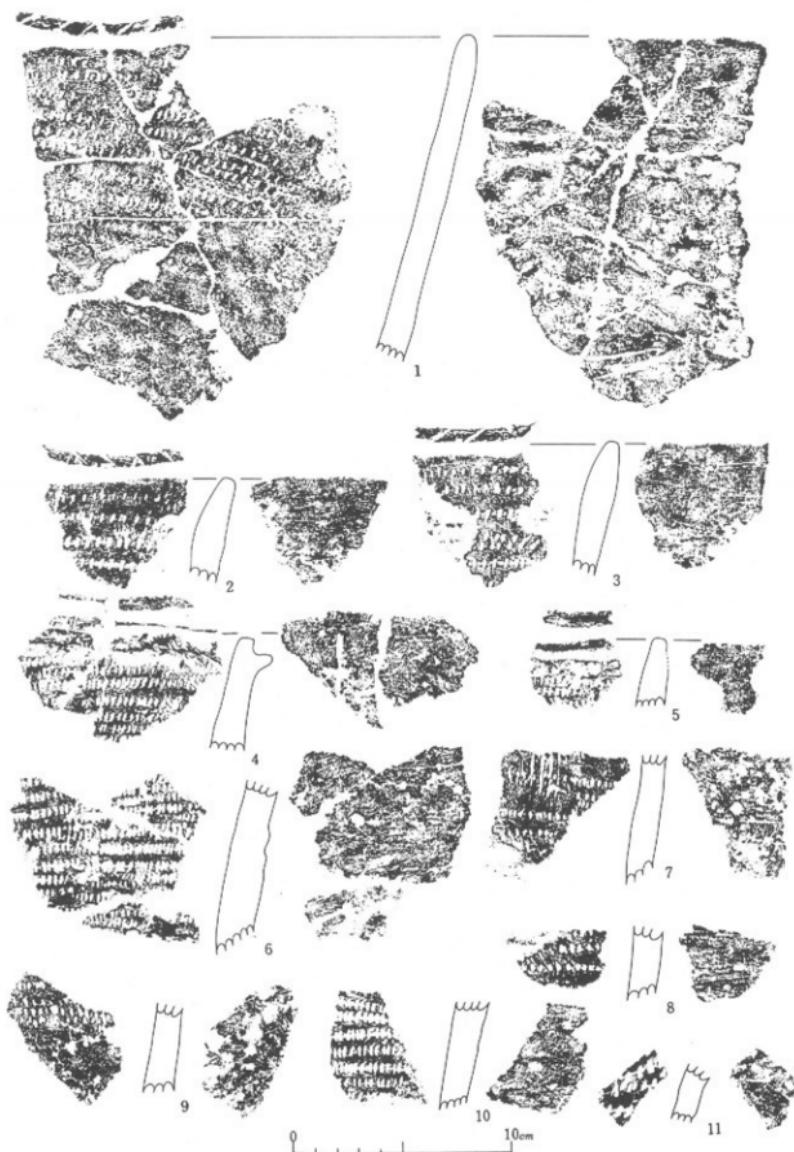
第2群土器（早期後半の土器）

第1類 格条体圧痕文土器（第13図1～11、第14図3、4・図版5～6） 格条体圧痕文を有するもので、撚糸の原体を横位に押捺しながら描き出した圧痕が、数条に亘って平行あるいは斜め方向に施文されている。第13図の1～3は口縁上に斜めに刻み目が付けられている。口縁は外反し直行しているが、口縁部が細くなっている。このうち1には、最下段の圧痕部にヘラ状工具によって、沈線が一条横位に描出されている。表裏とも割合い粗い調整がされており、とりわけ裏面は難になっている。また裏面の下部には炭化物が付着している。器厚は口唇部で7mm、胴部で16mm。（第14図3は第13図1～3の推定復原図）また4・5は、口縁に鰐状の突起が付いており、5は最大9mmほど張出している。第14図の3・4（第14図4の推定復原図）は、口縁部がかなり外反しており口唇部は尖っている。口縁部には一条の微隆起帶が巡り、この上に圧痕が見られる。また表面には、圧痕部にヘラあるいは竹管状工具により綾横に沈線が施されている。表裏共調整は粗く、裏面にはヘラによる調整痕が多く残っている。表面には多くの炭化物が付着している。器厚は口縁部で6mm、胴部で12mm。第13図の土器は焼成が悪く、第14図の土器は比較的良好である。色調は、黒褐色・灰褐色・赤褐色を呈する。胎土中には、砂粒・淡黄褐色粒・白色粒が多く含まれている。

第2類 無文土器（第15図1～13・図版7） 無文の土器で、表面に粗い擦痕が全面に見られるものと、ヘラ状工具で綾方向に整形痕を残すものなどがある。裏面は丁寧に調整されている。口縁



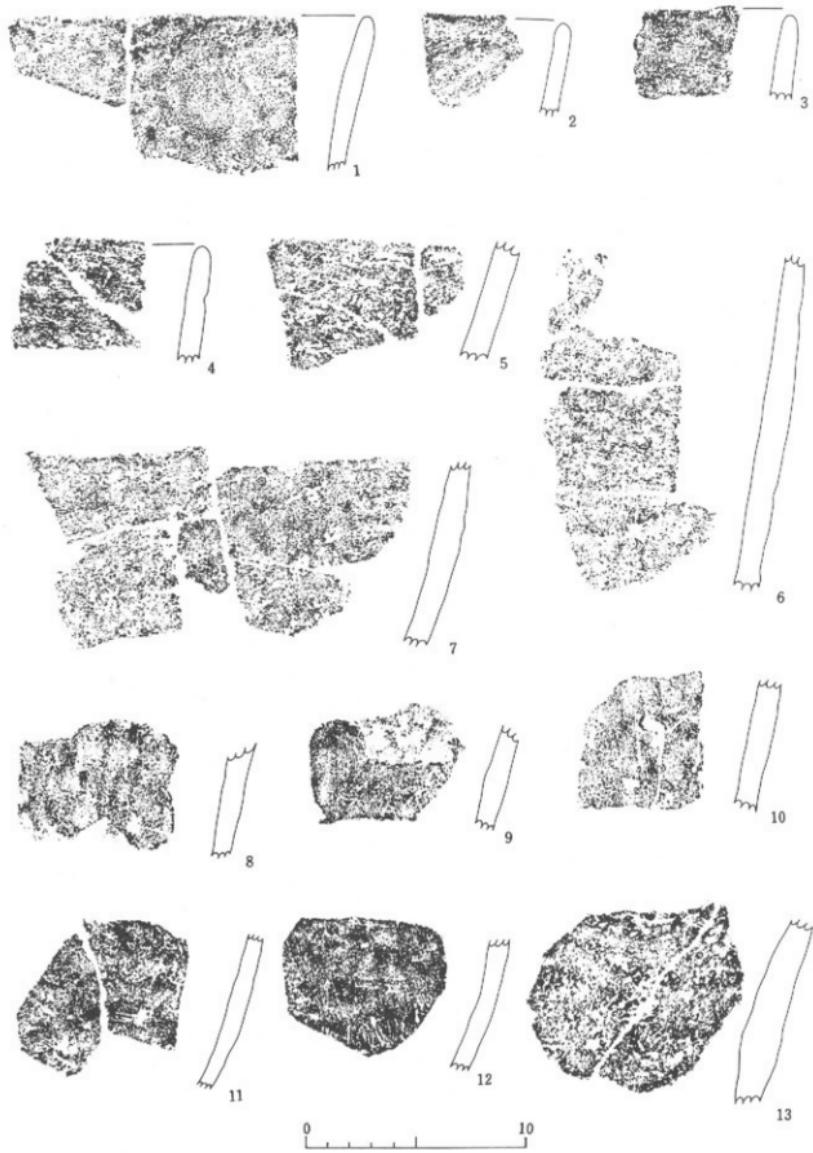
第12図 第1次調査出土土器拓影（1）



第13図 第1次調査出土土器拓影（2）



第14図 第1次調査出土土器拓影(3)及び出土土器実測図



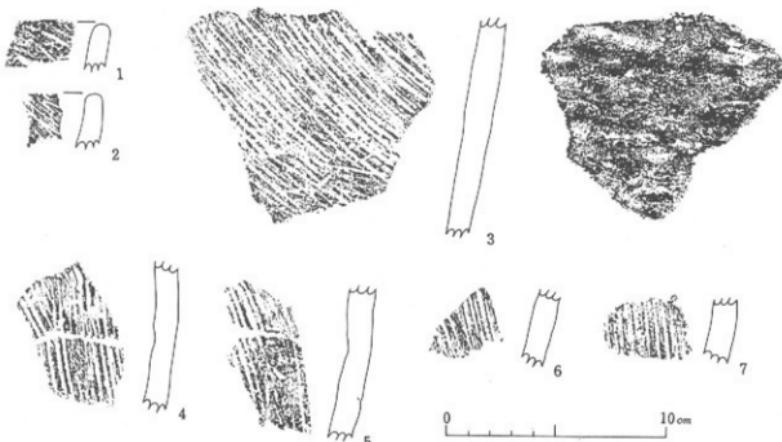
第15図 第1次調査出土土器拓影(4)

は平縁で、その傾きは外反するものと直行するものがある。口唇部は円頭状を呈する。器厚は7～8mm。焼成はわりあいに良く、色調は暗褐色・褐色を呈する。胎土中には、多量の砂粒が含まれる。

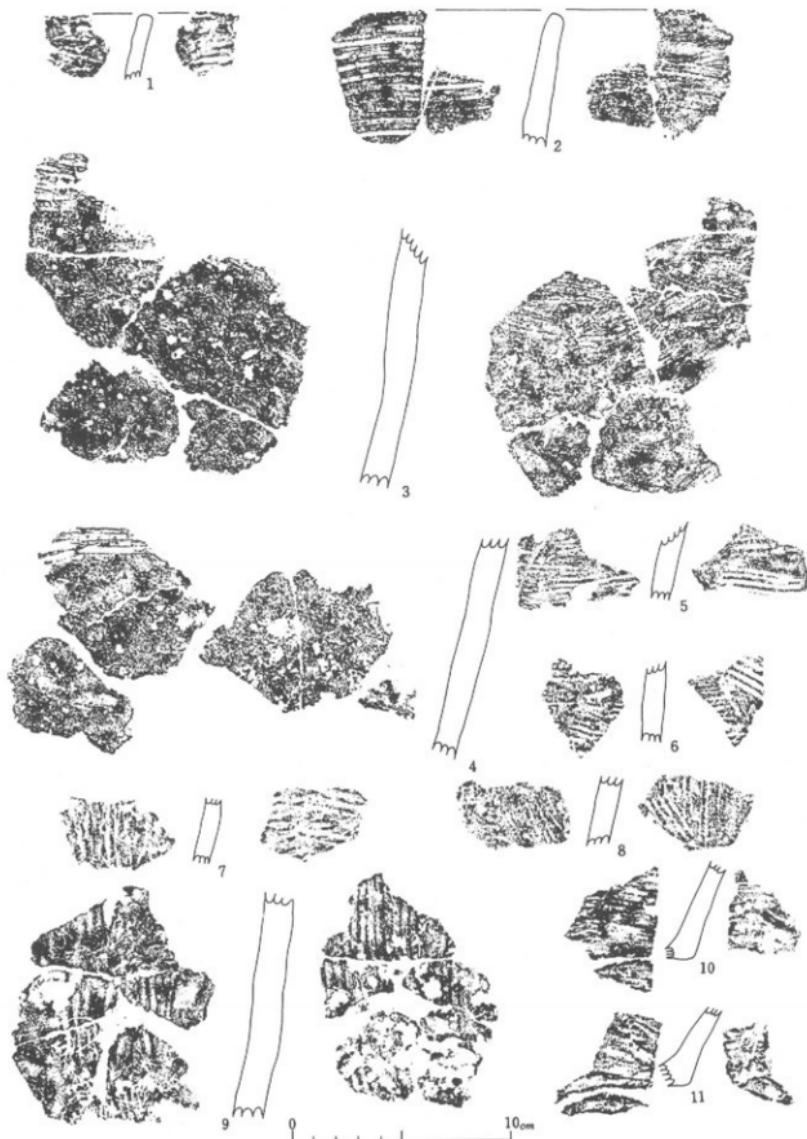
第3類 条痕文土器（第16図1～7、第17図1～11・図版8） 条痕文のみを有するもので、第16図1～7は撚糸の原体で器面に斜行する条痕を施したと思われるものである。裏面には粗い調整痕が見られる。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。胎土中には、多量の砂粒と石英・雲母が含まれている。器厚は11～12mm。第16図1～4は、口唇部のみに横行する条痕文（竹管状工具による）を施したもので、裏面および胴部以下には施されていない。裏面には纖維束によると思われる擦痕が見られる。5～9は、器面の内外に貝殻によると見られる条痕文が、縦・横・斜め方向に施されている。このうち9の裏面には、貝殻の腹縁によって刺突が付けられている。器厚は12～15mm。11は底部破片であり、いずれも平底である。焼成はあまり良くない。色調は赤褐色を呈する。胎土中には、砂粒が含まれている。

第4類 茅山下層式比定土器（第18図1～12・図版9） 沈線文によって口縁部を区切り、区画状文様を描き出して条間あるいは区画状文様の周囲に刺突文を施してある。口縁部はほぼ平縁で直行しており、口唇部は内削げ状を呈する。口唇部上には刻目状の沈線を有するものもある。裏面には貝殻による条痕文を横位に施してある。器厚は11～12mm。焼成は良好で堅い。色調は、黒褐色・灰褐色・褐色を呈する。胎土中には、砂粒と纖維が多く含んでいる。

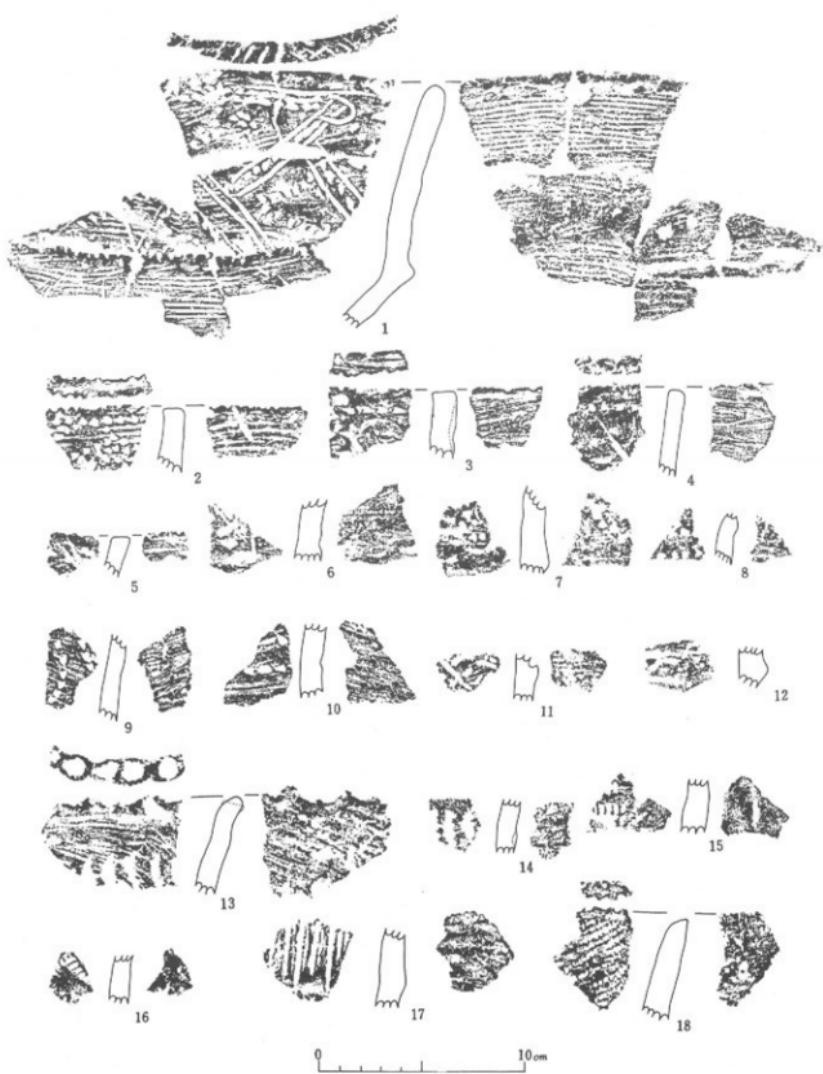
第5類 貝殻文を有する土器（第18図13～16・図版9） 貝殻の腹縁部を押圧した、いわゆる貝殻腹縁文を有する土器である。第18図13のように、口縁部に指先によって圧痕を作り出す事によって、波状口縁となっているものがある。口縁はやや外反している。表面には、纖維束によると思われる擦痕が見られる。器厚は9.5mm。14は、貝殻腹縁文の上部に角頭状工具によると思われる刺突文を施してある。焼成は良好で、色調は灰褐色・褐色を呈する。胎土中には、砂粒・石英粒と纖維を多く含んでいる。



第16図 第1次調査出土土器拓影（5）



第17図 第1次調査出土土器拓影（6）



第18図 第Ⅰ次調査出土土器拓影（7）

第3群土器（前期の土器）

第1類 斜縄文を有する土器（第19図1～9・図版9） 薄手の土器である。1は、口縁部がかなり外反している。器厚は口唇部で4mm、胴部で6.5mm。1～9のいずれも表面に斜縄文を施している。また表裏とも丁寧な器面調整がなされている。焼成はきわめて良好であり、色調は褐色・赤褐色を呈する。胎土中には、砂粒と多量の雲母が含まれている。

第2類 爪形文を有する土器（第19図10～12・図版10） 横位に連続した爪形文を施し、その下に斜めの爪形文、さらにその下に横位の連続した爪形文を施した土器である。薄手と厚手がある。器厚は薄い方が6mm、厚い方は11mm。焼成はあまり良くない。色調は、灰褐色・暗褐色を呈する。胎土中には、砂粒・石英粒が含まれている。

第3類 諸磯b式に比定される土器（第19図13～15・図版10） 地文に縄文を施し、その上から半截竹管状の工具によって文様が描出されている。その文様は、ゆるやかなカーブをなすものと渦巻によって構成される。13の器厚10.5mm前後。焼成はわりあいに良い。色調は、赤褐色・褐色を呈する。胎土中には、若干の砂粒と石英粒が含まれている。

第4群土器（中期の土器）

第1類 勝板式に比定される土器（第19図16～23・図版10） 直線あるいは渦巻の隆線が、半截竹管状工具によって描出され、この隆線上に爪形文が施されている。21～23は、口縁に二条の幅広の沈線を有し、太い隆帶に半截竹管状工具による沈線が見られる。また、隆帶上には大きな爪形文が施されており、胴部下半には縄文のみが施されている。器厚は9.2～9.5mm。焼成はきわめて良好。色調は、暗褐色と赤褐色を呈する。胎土中には、砂粒・石英粒が含まれる。21～23には多量の雲母と砂粒が含まれている。

第2類 口縁部に沈線と刺突文を有する土器（第20図1～3・図版11） 平坦な口唇部に二条の平行沈線と、棒状工具の先端を交互に押圧した文様が付けられている土器で、器形は鉢状を呈すると思われる。口縁部は、10～14mmの幅を持つ隆帶で以下は無文である。器内外はヘラ状工具による調整痕が見られる。器厚は7.5～9.5mm。焼成は良好。色調は明褐色を呈する。胎土中には、砂粒が多く含まれている。

第3類 加曾利E式に比定される土器（第20図4～22・図版11） 櫛歯状工具による集合沈線と、隆帶の渦巻文を施したものや、渦巻状や波状などに粘土紐を貼り付けたもの、縄文を施したものなどがある。器厚は9mm前後。焼成は全体にあまり良くない。色調は、灰褐色・褐色・赤褐色・黒褐色を呈する。胎土中には、砂粒が多く含まれている。

第5群土器（後期の土器）

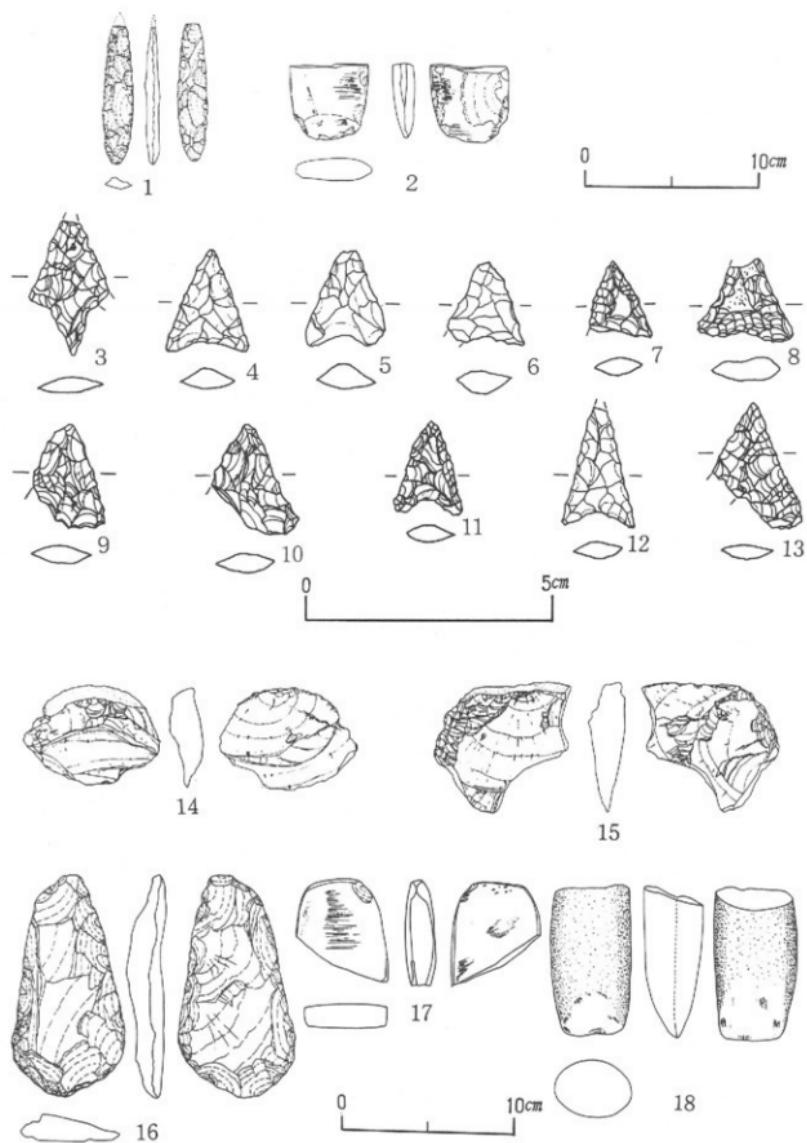
第1類 平行沈線を有する土器（第20図23・図版11） 薄手で良く調整された器面に、平行して沈線が施されている。器厚は6.3mm。焼成はわりあいに良好。色調は黒褐色を呈する。胎土中には、若干の砂粒が含まれている。



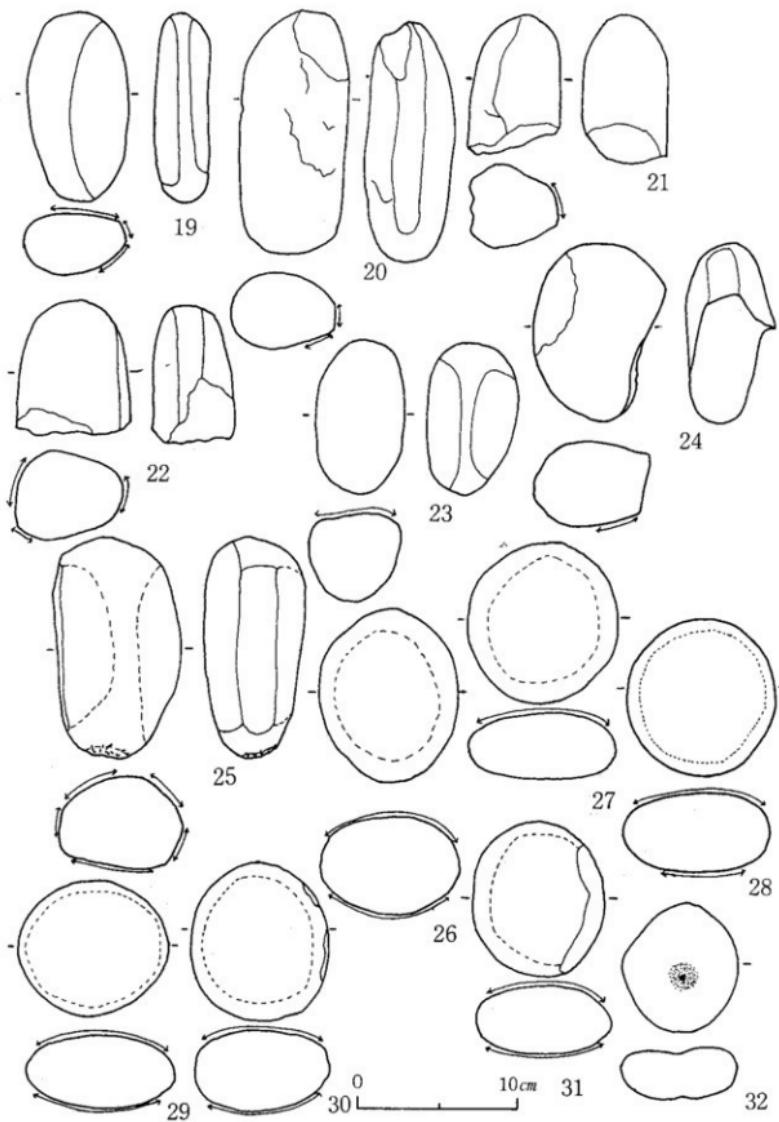
第19図 第1次調査出土土器拓影 (8)



第20図 第Ⅰ次調査出土土器拓影 (9)



第21図 第Ⅰ次調査出土石器実測図(1)



第22図 第1次調査出土石器実測図（2）

(単位mmおよびg)

器種	出土区	分類	区番号	図版番号	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
石 槌	J - 5		21 - 1	12	80.0	18.0	7.0		黒ち密丸磨	
局部磨製石斧	A - 2		21 - 2	13	43.2	44.9	13.9	42.0	"	
石 鋸	表 採		21 - 3	12	27.5	16.5	3.0	1.1	黒曜石	頭部欠損
"	G - 5		21 - 4	"	21.0	16.5	4.0	1.1	黒ち密丸磨	
"	E - 3		21 - 5	"	19.0	16.0	5.0	1.2	"	
"	D - 5		21 - 6	"	16.2	15.5	4.0	0.9	"	片脚欠損
"	F - 5		21 - 7	"	14.5	11.5	3.5	0.6	黒曜石	"
"	I - 4		21 - 8	"	16.9	19.0	5.1	1.2	"	頭部欠損
"	E - 3		21 - 9	"	21.5	12.0	4.0	0.9	"	片脚欠損
"	G - 4		21 - 10	"	23.2	13.0	4.0	1.0	"	"
"	B - 6		21 - 11	"	19.0	14.0	3.1	0.7	"	"
"	表 採		21 - 12	"	24.1	14.5	4.0	0.9	黒ち密丸磨	頭部欠損
"	B - 5		21 - 13	"	28.0	14.0	3.0	0.8	黒曜石	片脚欠損
"	E - 4 + 5	圓化せず			15.0	10.1	2.0	0.3	"	
"	表 採				19.0	12.0	4.0	0.8	黒ち密丸磨	
"	F - 4 + 5				18.5	12.0	4.2	0.8	"	
"	F - 4				20.1	14.0	5.7	1.1	黒曜石	
"	H - 5				17.0	15.1	3.1	0.7	"	
"	B - 4				17.0	16.0	4.9	0.9	"	
"	I - 6				13.0	16.1	3.0	0.5	"	片脚欠損
"	B - 5				14.0	20.3	3.8	0.8	"	頭部欠損
"	G - 4				24.0	19.0	3.9	1.0	"	片脚欠損
"	表 採				31.0	17.1	3.5	1.9	"	
"	I - 4				20.0	11.2	2.9	0.5	"	頭部欠損
"	不 明				14.2	17.0	4.0	0.8	"	頭部・脚欠損
"	F - 3				15.5	15.0	3.2	0.7	"	片脚欠損
"	I - 6				10.0	12.0	3.0	0.6	"	頭部・片脚欠損
石 槌	不 明		21 - 14	12	63.0	83.0	18.5	70.1	"	
"	"		21 - 15	"	78.2	92.0	24.1	125.2	"	
鍬 器	圓化せず				148.1	87.0	45.0	582.8	安山岩	
打 製 石 斧	C - 3		21 - 16	13	126.5	63.7	17.9	154.0	"	
"	表 採	圓化せず			53.8	58.6	17.5	65.4	玄武岩	
定 形 磨 製 石 斧	F - 2		21 - 17	13	59.5	47.1	15.5	66.1	砂岩	
磨 製 石 斧	E - 2		21 - 18	"	86.0	46.0	35.1	221.9	安山岩	
磨 石	E - 4	I - a	22 - 19		129.0	67.1	44.0	643.2	"	
"	H - 5	"	22 - 20	13	163.0	68.0	57.0	996.0	"	
"	F - 2	I - c	22 - 21		91.0	56.0	53.1	385.1	"	
"	F - 2	"	22 - 22		69.0	53.5	48.0	246.4	"	
"	I - 4 + 5	I - a	圓化せず		94.0	36.0	30.0	133.0	"	
"	G - 5	II - a	22 - 23	13	102.0	67.0	62.0	526.8	"	
"	F - 2 + 3	"	22 - 24		114.0	96.0	57.0	588.4	"	
"	B - 8	"	圓化せず		118.4	65.0	55.5	667.8	"	
"	不 明	"	22 - 25	13	143.0	82.5	62.0	1130.0	"	
"	"	III - b	22 - 26		111.0	89.0	61.0	902.6	"	
"	D - 4	III - c	22 - 27		99.0	88.2	51.0	648.6	"	
"	B - 4	"	22 - 28	13	95.0	90.0	35.1	455.6	閃綠岩	
"	J - 4	"	22 - 29	"	108.0	100.0	43.5	685.8	安山岩	

第2表 大平A遺跡第I次調査石器計測一覧表(1)

(単位mmおよびg)

器種	出土区	分類	図番号	図版番号	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
磨石	G-4	Ⅲ-d	22-30		103.0	86.0	59.0	718.2	安山岩	
"	C-4	"	22-31		94.0	86.0	46.0	566.3	玄武岩	
"	C-4	Ⅲ-b	圓化せず		110.0	90.2	42.0	628.3	"	
"	D-4	"	"		88.0	52.0	41.0	263.1	安山岩	
"	H-4	Ⅲ-d	22-32	13	87.0	76.6	34.0	321.6	"	

第3表 大平A遺跡第1次調査石器計測一覧表(2)

B. 石器（第21図～第22図・図版12・13）

第1次調査では、石槍1点、局部磨製石斧1点、石鎌25点、石核2点、礫器1点、打製石斧2点、磨製石斧2点、磨石18点などが出土している。

石槍（第21図1） 1点出土している。J-5グリッドにおいて第IV層下部から第V層を削土中に検出された。先端部を若干欠損している。現存の長さ8cm、幅1.8cm、厚さ0.7cm、最大幅は胴部下半部に持つ。比較的粗い両面調整された柳葉形の石槍である。材質は黒色ち密安山岩であり、全体的にやや灰黄色を呈する。

局部磨製石斧（第21図2） 1点出土している。A-2グリッド内から検出された。頭部を欠損している。また剥離面を大きく残すが、全体に研磨を加えて先端は刃部を作り出している。現存の長さ4.32cm、幅4.49cm、厚さ1.39cm。黒色ち密安山岩製。

石鎌（第21図3～13） 25点出土しているが、このうち11点を図示した。材質は黒曜石・黒色ち密安山岩からなる。3はいわゆる有茎鎌であるが、草創期の有茎尖頭器に良く似ている。先端の一部を欠損しているが、現存の長さ2.75cmを測る。他はいずれも凹基無茎鎌である。7は、一部欠損しているものの、長さ1.45cmと小型である。12は先端部を欠いているが、器幅との対比から長身鎌であろう。非常に丁寧な調整が施されたものである。

石核（第21図14・15） 2点出土している。最大長6.3～7.8cm、最大幅8.3～9.2cm。おそらくにぎり拳大の球形もしくは偏球形した原材であったと思われる。上方の両側から打撃を加えて材料を取り出した残核である。貝殻状に割れ口もあざやかなもので、素材としては良質である。

礫器 1点出土している。図示しなかった。

打製石斧（第21図16） 2点出土している。図示した石斧16は、H-3グリッドから出土したもので、大きな剥離面を表裏に残し、縁辺に粗い加工を施してある。長さ12.65cm、最大幅6.37cm、厚さ1.79cm。

磨製石斧（第21図17・18） 2点出土している。17は定形の磨製石斧であり、F-2グリッドから出土したもので全面が良く磨かれている。18はE-2グリッドから出土、頭部を欠損しているが乳棒状の石斧である。

磨石（第22図19～32） 18点出土しているが、14点を図示した。第I類a種・c種=多面の磨面を持ち、いわゆる棒状磨石と呼ばれる磨石。断面が柱状・欠損のもの（19～22）を本類とした。第II類a種=横楕円形で右面のもの（23～25）を本類とした。第III類b種・c種・d種=やや長円・円形・楕円形のもの（26～32）を本類とした。このうち（32）は、中央に凹部を持っている。

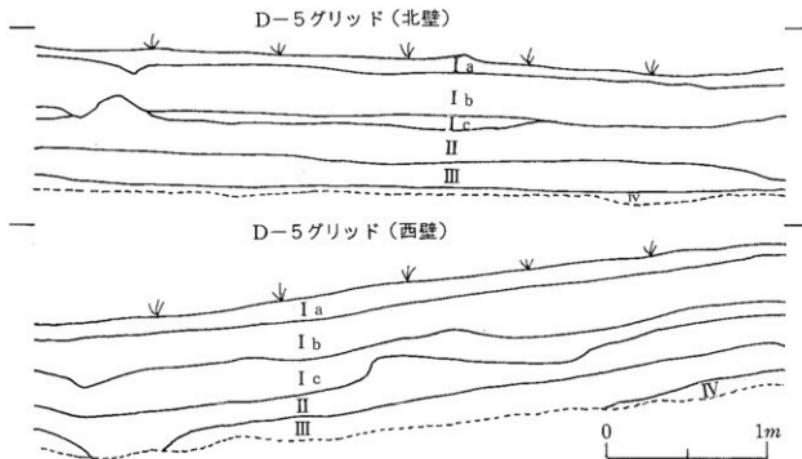
第2節 第II次発掘調査

1. 遺跡の層序

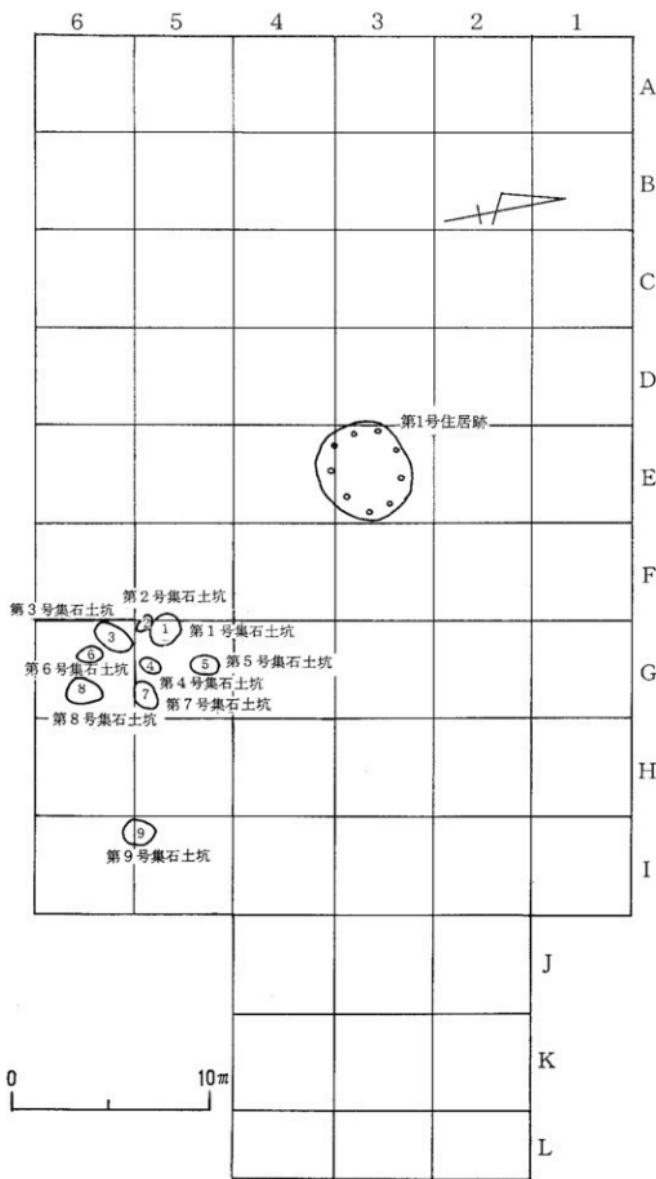
第II次調査によって確認された層序は、客上層から遺構確認面のローム漸移層まで、第I層から第IV層に分ける事が出来る。基本層序は、調査区内において比較的安定した堆積を示しているD-5グリッドにこれを求めた。遺物は、第III層から第IV層中位にかけて出土している。

調査区は全面に客土が覆っており、その下にはかつて畑だった当時の耕作土が存在していた。当初の予想に反して遺物包含層は薄く、また出土地点も狭い範囲に限られていた。

- | | | |
|-------|------|---|
| 第I a層 | 褐色土 | 客土層である。第I次の調査区とは異なり、畑としていた場所に他所からの土を乗せて新たな畑としている。 |
| 第I b層 | 灰褐色土 | 旧耕作上であり、調査区全体で検出されている。層厚は平均20~30cmほどである。 |
| 第I c層 | 黒色土 | 有機質土であり、当方においては歴史時代遺物の包含層となっているものである。 |
| 第II層 | 明褐色土 | バーミスを含んでおり、層厚は10~30cmである。当地では普遍的に見られる層で、縄文中期の包含層となる。今回の調査では、該期の遺物は検出されなかった。 |
| 第III層 | 明褐色土 | スコリアを含んでおり、層厚は20~25cmである。本層からは縄文前期の土器が検出されている。また、下部からは早期後半の遺物が検出される。 |
| 第IV層 | 黄褐色土 | 漸移層である。本層からは縄文早期前半の土器が検出されている。復元された山形押型文土器や無文土器は、本層の中位より検出された。 |



第23図 第II次調査土層断面図



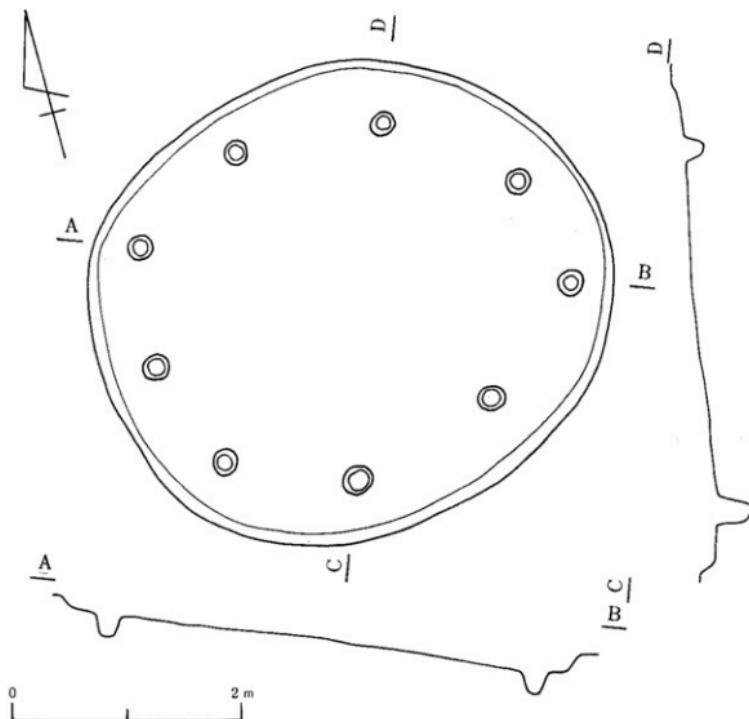
第24図 第II次調査遺構関連実測図

2. 遺構

A. 住居址

第1号住居址（第25図・図版16）

調査区のほぼ中央部、E-3グリッドにおいて検出された住居址である。長径4.45m、短径4.26mで、プランは不整円形を呈する。斜面に検出された住居であり、残存する壁高は6~18cmであった。柱穴は壁近く9本確認された。いずれも壁より16~32cmほど内側に位置している。柱穴の径は18~25cmで、深さは16~30cmであった。床面は南側面が貼床であった可能性もあるが、確認するに至らなかった。また遺物に関しては、ごく僅かながら山形押型文土器が出土している。しかし、本住居址の構築時期についてはあまりに資料が乏しく、不明と言わざるをえない。ただ、南東側に隣接して山形押型文土器を伴う集石土坑9基が検出されており、他時期の遺物がない点を考慮すると、縄文早期前半のものと考えられる。



第25図 第II次調査第1号住居址実測図

B. 集石土坑（第26・27図図版17～19）

本遺跡において検出された遺構は、前述の住居址の他集石土坑9基であった。その内8基は、G-5・6グリッドに集中して存在している。カワゴ平層下の、第Ⅲ層を削土すると、その下部より礫群とともにプランが確認された。また、土坑周辺からは山形押型文土器と無文土器が、同一レベルで検出されている。

第1号集石土坑（第26図）

規模は直径1.59m、短径1.35mであり、最深部での深さは0.09mを測る。主軸の方向はN-60°-Wを示し、プランは不整な楕円形を呈する。覆土中からは、復元された山形押型文土器（第28図・図版24）の一部が検出されている。この他、多数の礫が混在していた。

第2号集石土坑（第26図）

規模は直径0.9m、短径0.52mであり、最深部での深さは0.09mを測る。主軸の方向はN-49°-Wを示し、プランは小形の楕円形を呈する。

第3号集石土坑（第26図・図版17）

規模は直径1.9m、短径1.03mであり、最深部での深さは0.16mを測る。主軸の方向はN-46°-Eを示し、プランは長円形を呈する。覆土中には大小の礫が混在していた。

第4号集石土坑（第26図）

規模は直径1.08m、短径0.08mであり、最深部での深さは0.13mを測る。主軸の方向はN-36°-Eを示し、プランは小形の楕円形を呈する。

第5号集石土坑（第26図）

規模は直径1.28m、短径0.8mであり、最深部での深さは0.19mを測る。主軸の方向はN-21°-Eを示し、プランは楕円形を呈する。

第6号集石土坑（第26図）

規模は直径1.18m、短径0.75mであり、最深部での深さは0.1mを測る。主軸の方向はN-8°-Eを示し、プランは第2号・4号集石土坑と同様、小形の楕円形を呈する。

第7号集石土坑（第26図）

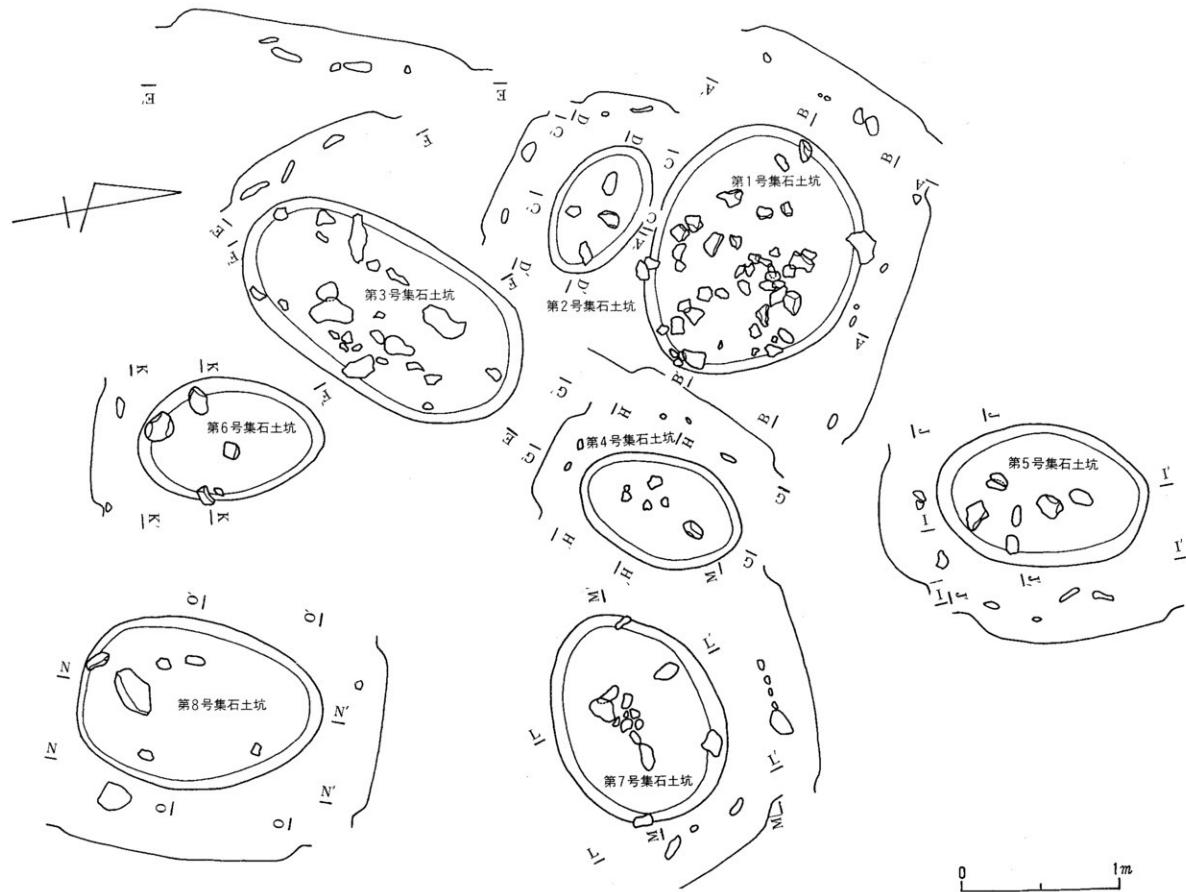
規模は直径1.36m、短径1.08mであり、最深部での深さは0.13mを測る。主軸の方向はN-75°-Eを示し、プランは不整の楕円形を呈する。

第8号集石土坑（第26図・図版18）

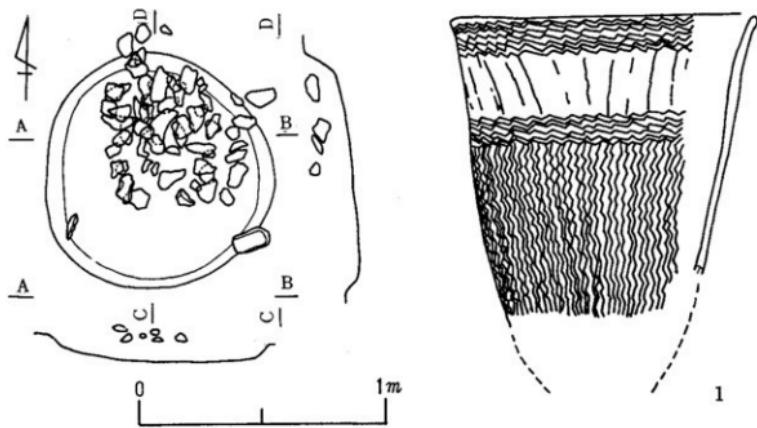
規模は直径1.57m、短径1.07mであり、最深部での深さは0.12mを測る。主軸の方向はN-26°-Eを示し、プランは不整の楕円形を呈する。

第9号集石土坑（第27図）

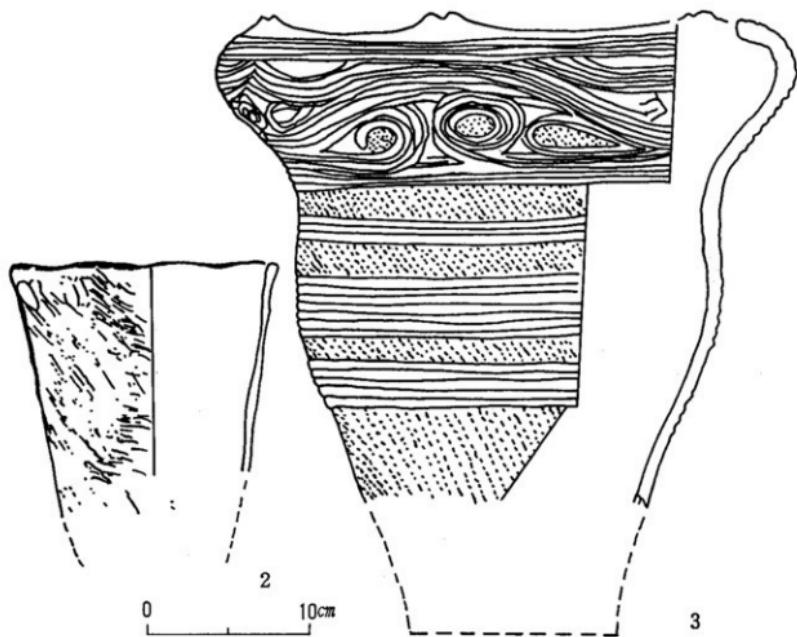
第1号～8号集石土坑群からは、およそ6mほど離れた位置に存在する。H-5・6グリッド内で検出されたものである。規模は直径1.34m、短径1.25mであり、最深部での深さは0.16mを測る。主軸の方向はN-10°-Wを示し、プランはほぼ円形に近い形状を呈する。覆土中には大小の礫が混在していた。



第26図 第11次調査第1号～第8号集石土坑実測図



第27図 第II次調査第9号集石土坑実測図



第28図 第II次調査出土土器実測図

3. 遺物

A. 土器（第28図1～3・図版23～24）

第II次調査では、縄文時代早期・前期の土器が出土しているが、復元された3個体分の土器の他は、拓本もとれぬほどの微小なものばかりであり、従ってあえて紹介しなかった。ただ、これらはいずれも早期の土器である事は間違いない、とりわけ、その胎土から判断すれば山形押型文土器に良く似ていると言えようか。

山形押型文土器 G-5・6 グリッド内から出土している。傾斜地の狭い範囲に、投棄されたように散乱していたが、その一部は第1号集石土坑の覆土中より検出されている。口径約19.5cm、推定器高24.5cmで、尖底深鉢型をなしている。外反する口縁の口唇上に施文され、口縁に横位施文、約4cmの無文帯をおいて、再び横位施文されている。また、胴部から底部近くにかけては器面全体に縦位に密接施文されている。器厚は約5mmと薄手であり、焼成は良く硬緻である。色調は燻黒色・明褐色を呈し、胎土中には雲母・砂粒が含まれている。（全体の約60%の破片があり、これによって復元を行った）

擦痕文土器 H-6 グリッド内から出土している。山形押型文土器の出土地点より東に約5mの場所から投棄されたような状態で検出された。口径約17cm、推定器高20cmで、尖底深鉢型をなすものと思われる。口縁はやや外反しており、文様はなく器面全体に擦痕が見られる。また器面の内外には炭化物が付着している。器厚は約4mmと薄いが、焼成は極めて良く硬緻である。色調は明褐色を呈し、胎土中には多量の雲母が含まれている。胎土などを見る限り、前述の山形押型文土器に極めて酷似している。その出土状況などから、両者はおそらく共伴関係にあるものと思われる。（全体の約50%の破片が残存していた）

諸磈b式土器 I-6 グリッド内から出土している。単独出土であり、倒置した状態で検出されている。口径約36cm、器高約34cmの深鉢型をなしている。口縁が大きく内彎するキャリバー形の土器である。波状口縁であり、口縁より胴部にかけて浮線文が発達、深線による平行沈線や曲線文が描出されている。さらに、これらの文様間あるいは胴部下半には磨消縄文が見られる。器厚は約10～12mm。焼成は良い堅い。色調は暗褐色・赤褐色を呈する。胎土中には、砂粒が多く含まれている。（全体の約60%の破片があり、これによって復元を行った）

B. 石器（第29図～第31図・図版25～26）

第II次調査では、石槍1点、スクレーバー1点、石鎌4点、剥離痕のある剝片2点、石鏁1点、礫器5点、磨石6点などが出土している。

石槍（第29図1） 1点出土している。G-3グリッド内において旧耕作土を削土中に検出された。長さ9.2cm、幅1.7cm、厚さ0.7cm、最大幅を胴部下半部に持っている。細身で良く両面調整さ

れたシャープな石槍である。材質は黒色ち密安山岩であり、全体に灰黄色を呈する。

スクレーパー（第29図2） 1点出土している。F-4グリッドの第Ⅲ層中より検出されている。長さ5.85cm、幅3.6cm、厚さ1.0cm。黒曜石の縦長剝片を使用しており、上部には打面、裏面にはバルブが認められる。刃部は両側縁に作られ、右側縁は両面より、また左側縁は表面よりそれぞれ調整がなされている。抉りは上部の両側縁に付けられ、つまみ部が作られている。

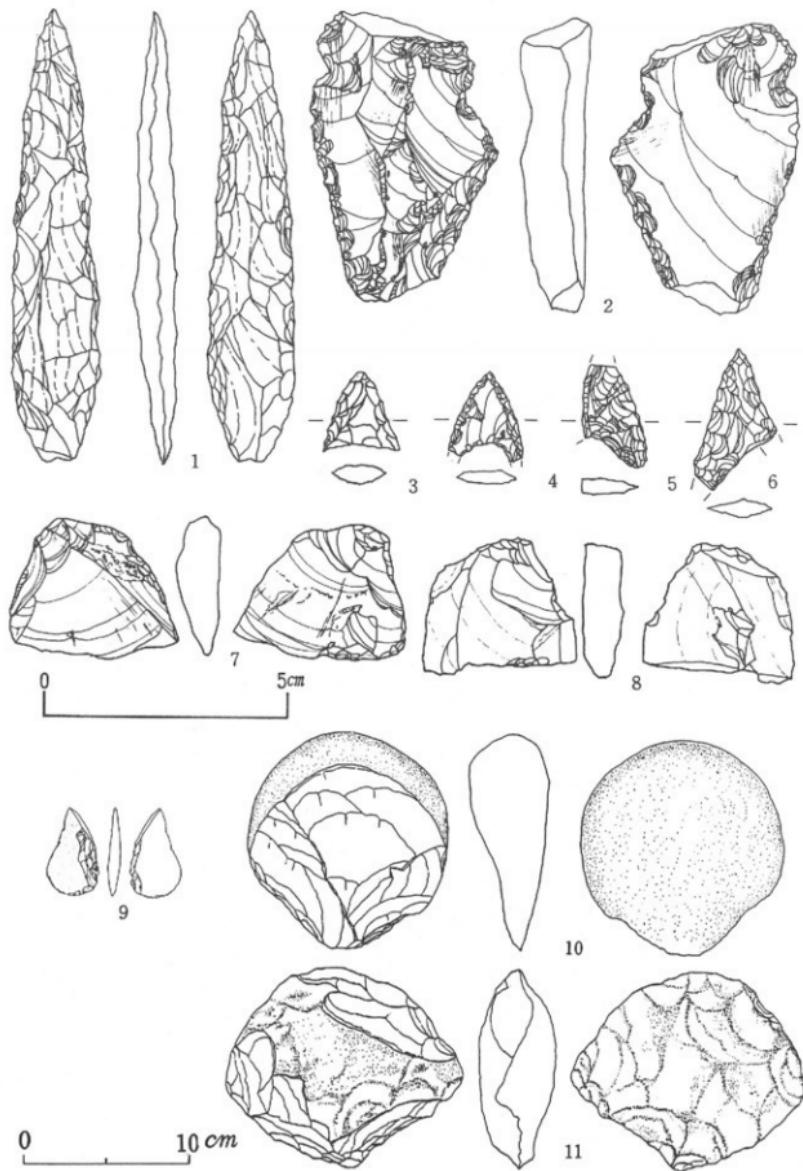
石鎌（第29図3～6） 4点出土している。A-4、F-6、G-6グリッド内からそれぞれ検出されている。材質は黒曜石3点、黒色ち密安山岩1点である。3は、小型で基部にほとんど抉りを持たない凹基無茎鎌である。縄文時代草創期の所産である、いわゆる三角鎌であろうか。出土土地点はA-4グリッドであるが、残念ながら層位は不明である。黒色ち密安山岩からなる。4は、両脚の一部が欠損している凹基無茎鎌である。調整は石鎌の周縁を丹念に行っており、中央部は両面とも簡単に調整されている。黒曜石製。5は、基部に深い抉りを持ち、脚の先端部が丸みを帯びる凹基無茎鎌である。先端部と半身が欠損している。黒曜石製。6は、長脚鎌と思われるが両脚部が欠損している。両面とも丁寧な調整が行われている。黒曜石製。

剥離痕のある剝片（第29図7・8） 2点出土している。G-6とH-6グリッド内から出土している。いずれも、母岩から剥離した二次加工前の剝片である。7は黒曜石、8はチャートである。

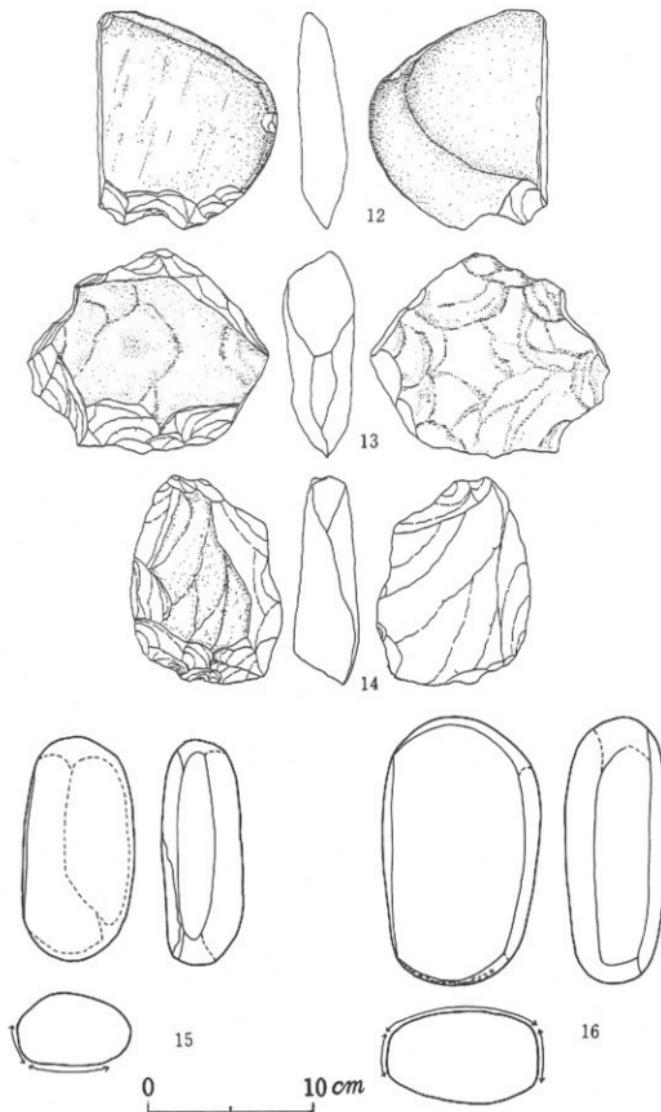
石籠（第29図9） 1点出土している。I-6グリッド内から検出されている。長さ5.45cm、幅3.1cm、長さ0.9cm。黒色ち密安山岩からなる。右側縁部を欠損しており、左側縁部および下部に細かな調整痕が見られる。

礫器（第29・30図10～14） 5点出土している。10は、G-6グリッド内から客土中より検出されたものである。円礫の片面を打割し、刃部を作り出している。裏面は自然面のままである。長さ12.6cm、幅12.0cm、厚さ4.6cm。玄武岩製。11・13は、角礫の片面から調整を行い、礫の一辺に刃部を作りだしている。平面は略三角形を呈しており、当地方においては普遍的に見られるものである。12は、平坦な面を持った偏平な礫の一辺に、片面より調整を加えて刃部としている。長さ13.0cm、幅10.0cm、厚さ3.2cm。14は、礫の正面からその一辺に調整を加え刃部としている。裏面は平坦であるため、角度のある刃部となっている。長さ12.1cm、幅9.2cm、厚さ3.7cm。11～14は玄武岩製。

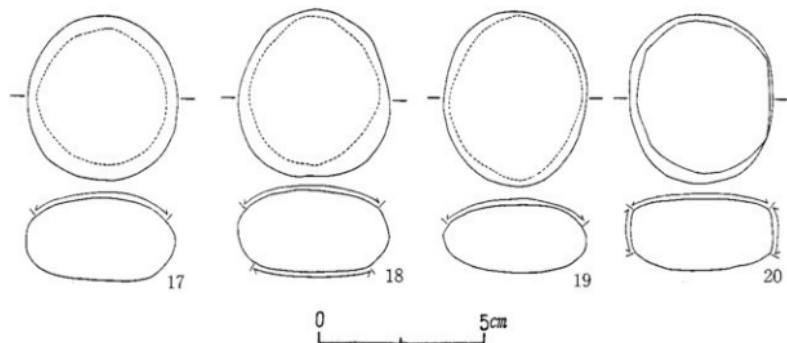
磨石（第30・31図15～20） 6点出土している。その形状からI類・Ⅲ類の2つの型に分類した。第I類a種=棒状磨石と呼ばれる磨石。断面が柱状を呈するもの15を本類とした。第Ⅲ類b種・c種・d種=円形・楕円形（b種・c種）および箱形（e種）を本類とした。16・20は、箱形をなし平坦な磨面を持つ。また16は先端部に鼓打痕が見られる。17・18・19は、円形および楕円形の磨石。平坦な磨面を持たないものを本類とした。磨面は片面にのみ認められるもの（17・19）と、両面に認められるもの（16）がある。



第29図 第II次調査出土石器実測図（1）



第30図 第II次調査出土石器実測図（2）



第31図 第II次調査出土石器実測図（3）

(単位mmおよびg)

器種	出土区	分類	図番号	因版番号	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
石 檜	G - 3		29 - 1	25	91.0	16.5	17.1	11.2	黒曜石	丸み有り
ス ク レ パ ー	F - 4		29 - 2	"	58.2	36.0	13.5	23.4	黒曜石	
石 鋸	A - 4		29 - 3	"	15.5	15.0	4.0	0.7	黒曜石	丸み有り
"	A - 4		29 - 4	"	18.0	14.1	2.5	0.7	黒曜石	両脚欠損
"	F - 4		29 - 5	"	22.0	11.5	4.0	0.8	"	頭部・片脚欠損
"	F - 6		29 - 6	"	28.9	14.1	4.1	1.2	"	両脚欠損
"	G - 6		29 - 7	"	26.0	14.1	4.9	1.4	"	
剥離表のある剥片	G - 6		29 - 8	"	27.5	35.0	10.0	9.3	"	
"	H - 6		29 - 9	"	27.0	31.1	8.0	6.7	硅岩(チャート・茶色)	
石 跡	I - 6		29 - 10	26	54.5	32.0	9.0	13.9	黒色ち密白山房	
蹄 器	G - 6		29 - 11	"	126.0	120.0	46.0	750.5	玄武岩	
"	H - 6		29 - 12	"	117.0	139.0	43.0	740.5	"	
"	I - 5		30 - 13	"	130.0	100.0	32.0	636.2	"	
"	J - 6		30 - 14	"	124.0	140.0	40.0	862.5	"	
"	E - 4		30 - 15	"	121.0	92.0	37.0	544.6	"	
磨 石	G - 6	I - a	30 - 16	25	131.1	66.5	47.0	634.4	安山岩	
"	K - 5	III - e	30 - 17	"	156.0	89.0	56.5	1140.7	玄武岩	
"	I - 5	III - c	31 - 17	"	99.5	89.0	50.0	701.1	"	
"	複 亂	III - d	31 - 18	"	101.0	89.5	50.0	611.4	"	
"	F - 4	"	31 - 19	"	107.0	84.5	42.0	596.7	安山岩	
"	F - 4	III - e	31 - 20	25	102.0	84.0	46.0	446.4	玄武岩	

第4表 大平A遺跡第II次調査石器計測一覧表

第Ⅳ章 大平B遺跡発掘調査報告

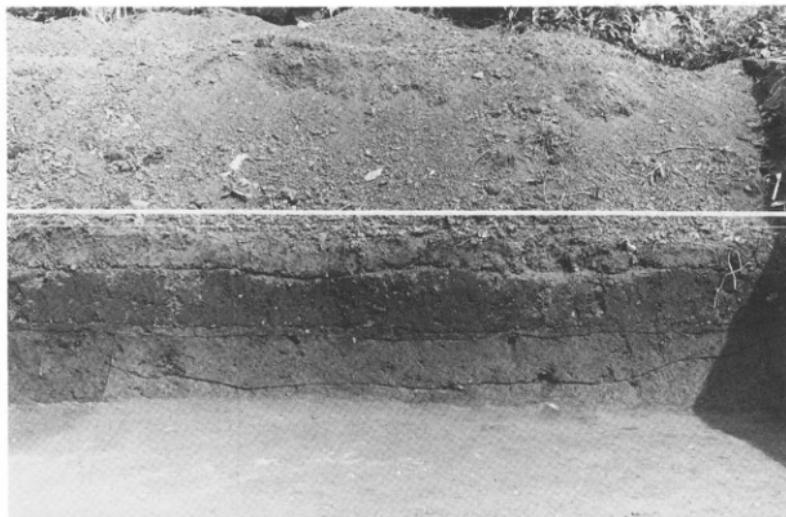
第1節 第I次発掘調査

1. 遺跡の層序

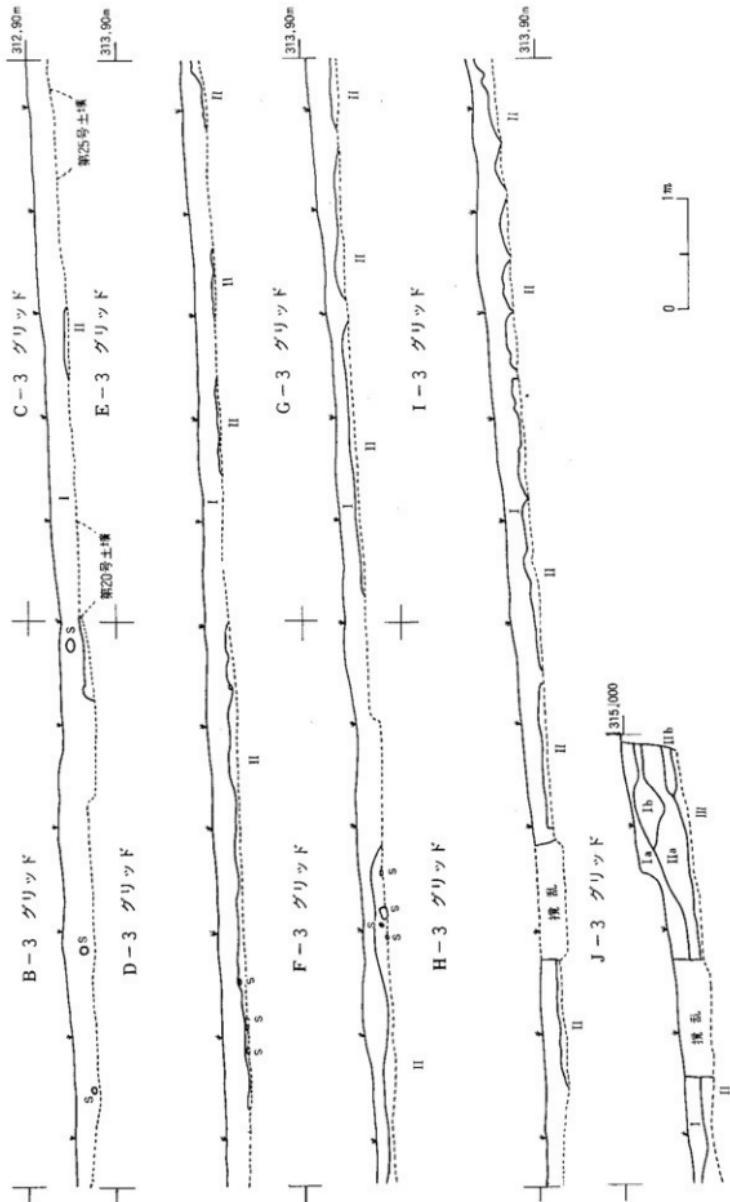
第I次調査によって確認された層序は、表土層から明褐色土層まで第I層～第II層に分ける事ができる。第32図～第35図に示すとおりである。遺物包含層は、全体的に土砂崩れあるいは洪水等によりかなりの部分が破壊されており、遺物のほとんどは断片的に検出されている。調査区の北東側すなわちK～Oトレント付近では、かつて土砂崩れなどがあったものと見られ、おそらく杉山界氏宅があった場所に住居等があったものと推定される。そこで基本層序は、K～Oを避けて比較的安定しているB～Jグリッド3・7の北壁や、A・Bグリッド1～7の東側にこれを求めた。遺物は、第I層下部から第II層にかけて出土している。

第I層 黒褐色土 現耕作土であり、第II層のかなりの部分を削上して、これを耕作の土としている。バーミスを含んでおり、洪水等で押出された土砂の混じった土であり。層厚は10～25cm。

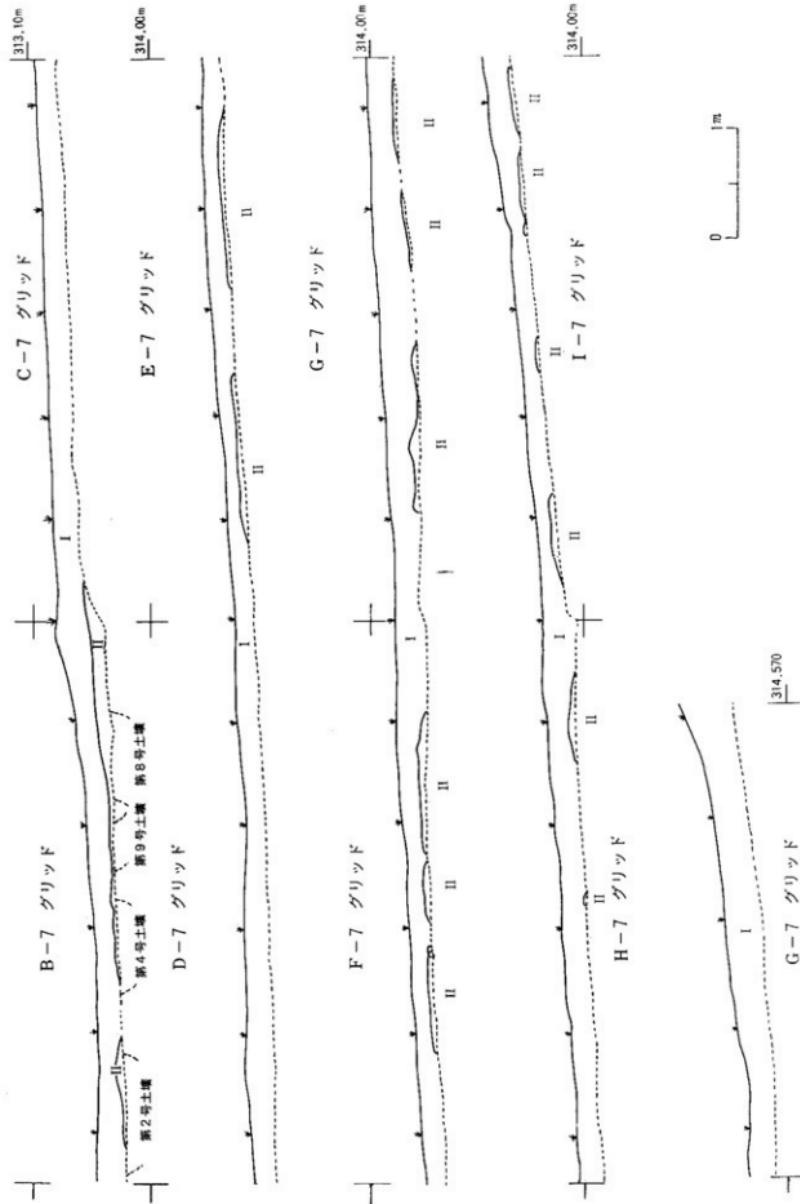
第II層 明褐色土 バーミスを含んでおり、ところどころで確認する事が出来た。当地では、極めて普遍的に見られ、縄文時代中期から前期・早期の遺物が含まれる層である。



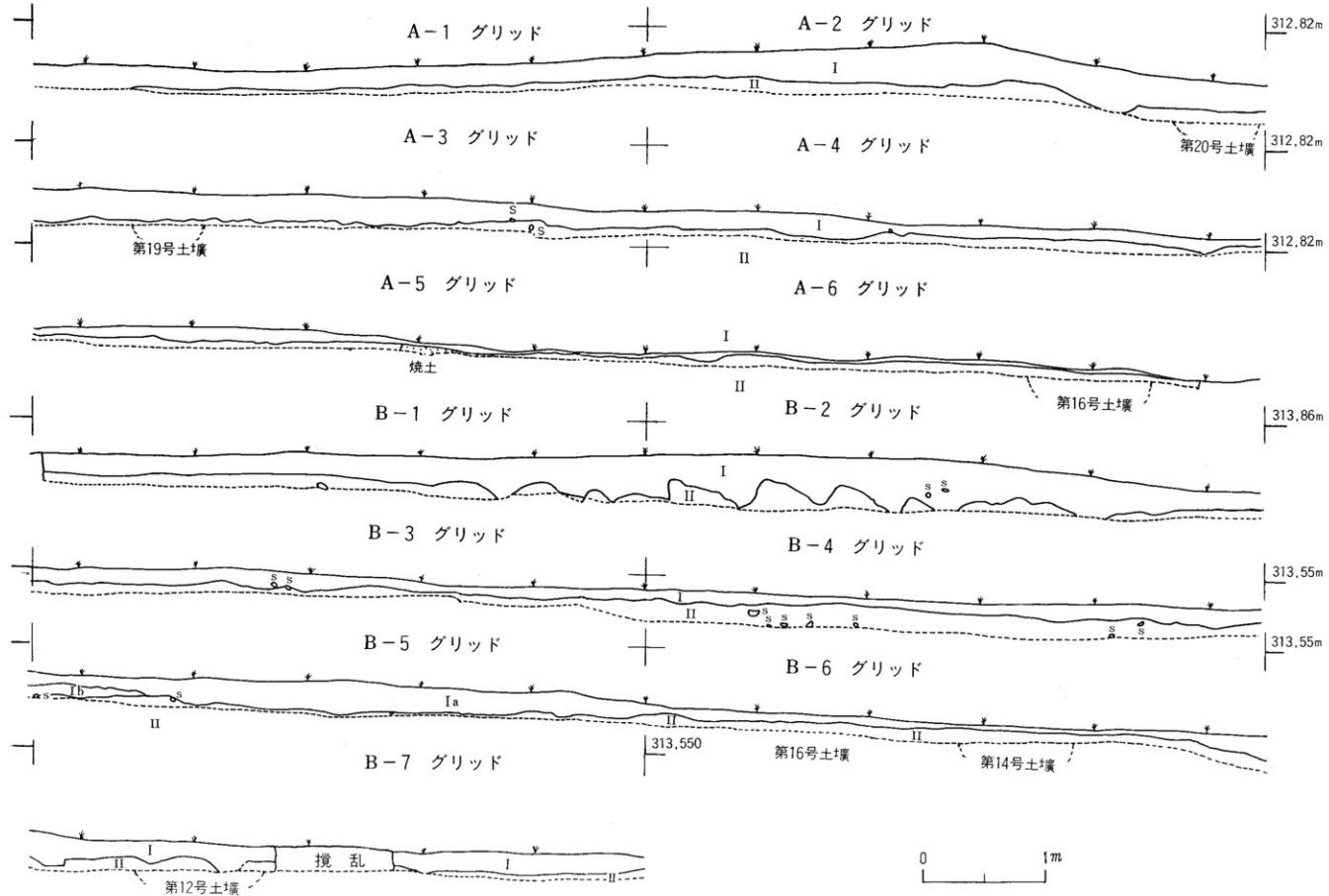
第32図 土層層序



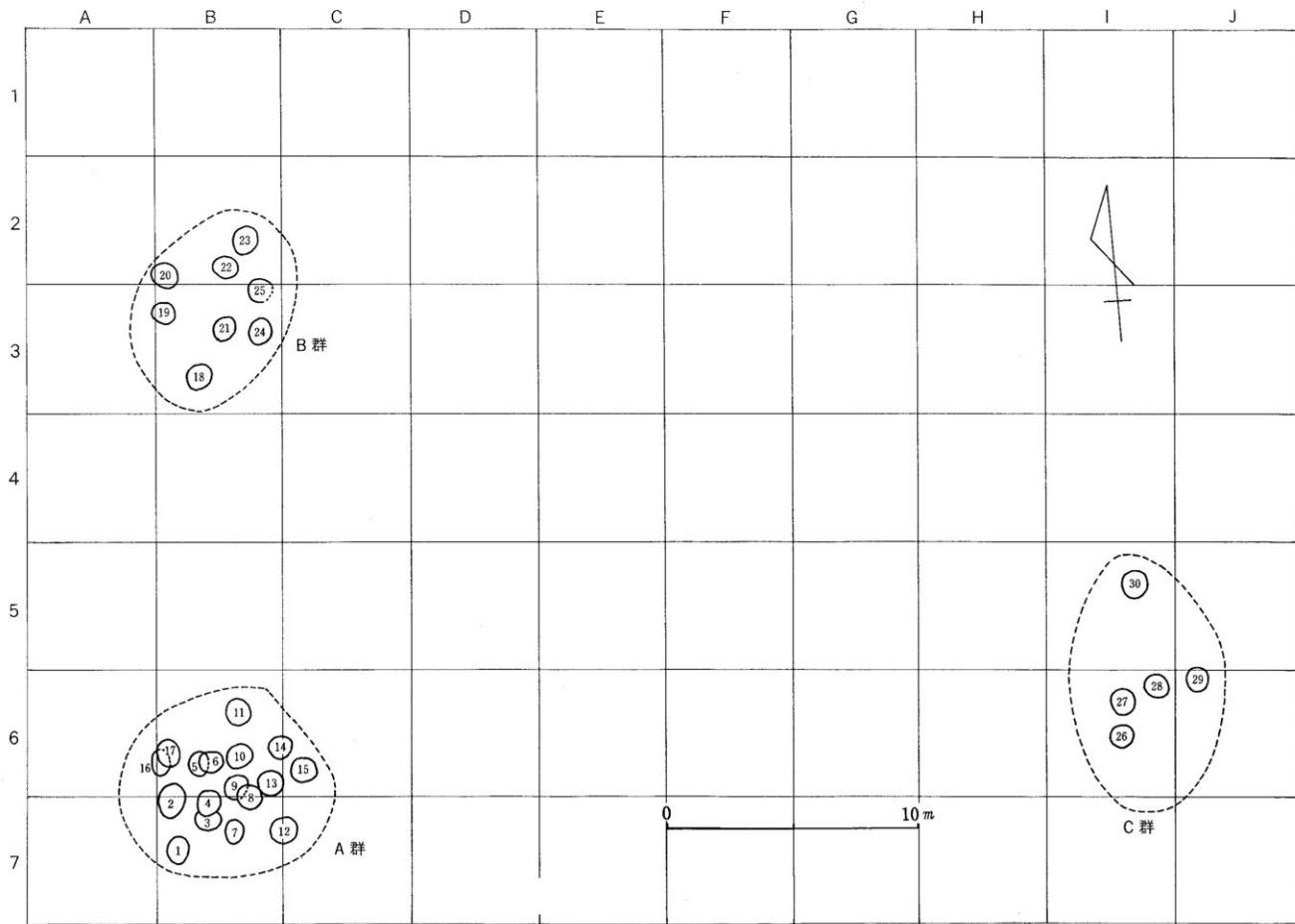
第33図 土層断面図（北壁）



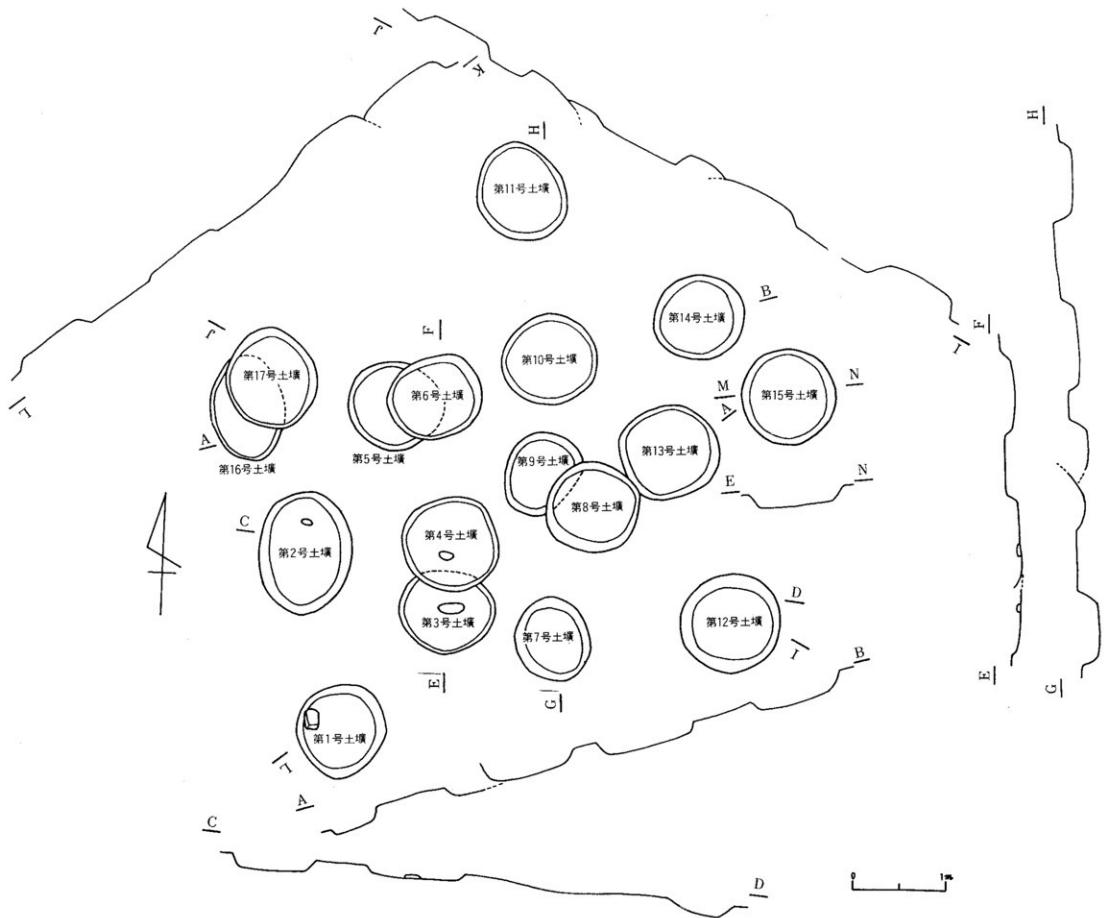
第34図 土層断面図（北壁）



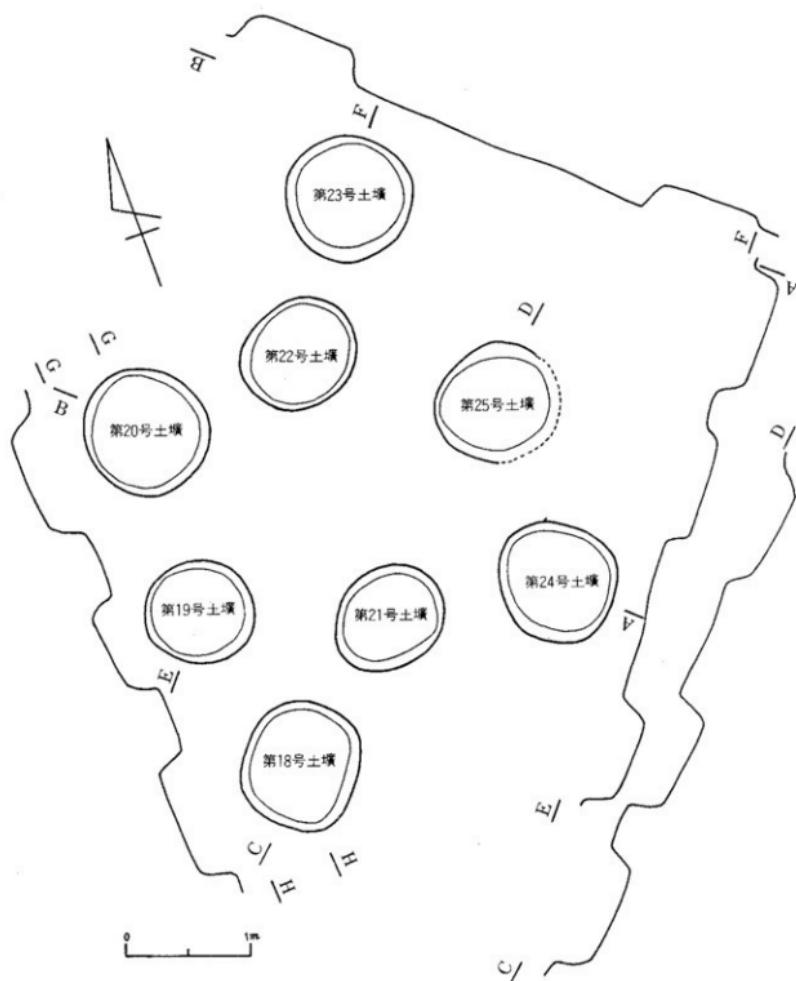
第35図 土層断面図（西側）

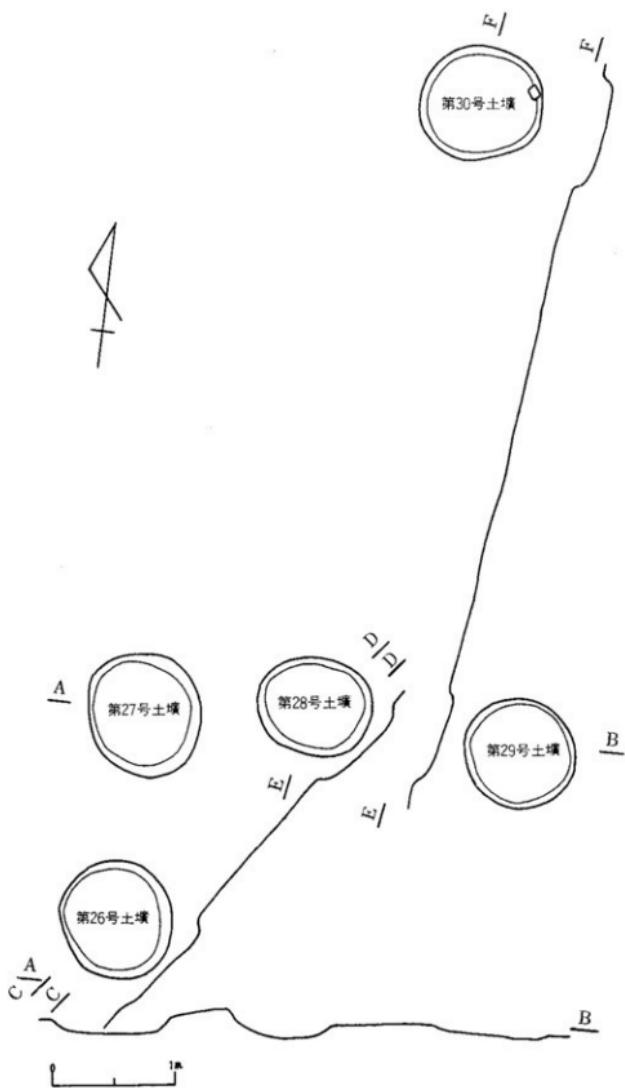


第36図 造構間連実測図



第37図 円形土壤A群実測図





第39図 円形土壤C群実測図

2. 遺 構

円形土壙（第36図～第39図・図版29～32）

調査区の西南部にある平坦地から、30基ほど確認されている。その分布状況は、道路沿いの西南側（A群－1～17）に集中するもの、西北側に集中するもの（B群－18～25）と、東南側の微高地に集中するもの（C群－26～30）の3群に分ける事ができる。いずれも直径1m前後の円形を呈しており、西北側のB群を除いては、全般的に堀込み面から底面までは浅くなっている。遺物は、A群の土壙内から土師器が若干検出されたが、他の土壙からはほとんど出土しなかった。時期はおそらく平安時代以降のものと思われる。

3. 遺 物

A. 土器（第40図～第48図・図版38～46）

大平B遺跡から出土した土器は、大別して縄文式土器と土師器に分けられる。前者は早期・前期・中期であり、後者は歴史時代（平安時代）の所産と考えられる。遺物の分布状況を見ると、遺跡そのものが扇状地的な場所に立地しており、山崩れや洪水等によって押し流されたという感じが強い。つまり年川の左岸にある事と、東の山側から流れ出した小河川も、ひとたび大雨が降ると鉄砲水となっていっきに斜面を流れ落ち、幾度となく土砂が覆ったものと思われる。また、調査地区を東西に貫く農道の北側のグリッド内からは、比較的まとまって遺物が出土しており、ある程度復元出来るものもあった。（第44図8・図版42）しかし、各時代の土器が混在しており、層位的に分類する事は極めて困難であった。出土した土器のうち、早期前半の土器を第1群土器、早期後半を第2群土器、前期の土器を第3群土器、中期の土器を第4群土器、土師器を第5群土器として分類して述べる。

第1群土器（早期前半の土器）

第1類 押型文土器（第40図1～9・図版38） 山形文と楕円文に分けられる。このうち山形文は、その文様が縦位に施文されたものと、横位に施文されたものがある。前者のうち1は、縦位の山形文の波動間が密接施文されている。器厚は約7mm。焼成は極めて良い。2～7は、口縁部近くに横位施文されており、波動間は広く粗雑である。2は口唇部が尖頭状をなしている。また2以外はやや厚手であり（10.5～11.5mm）焼成もあまり良くない。色調は黒褐色を呈し、胎土中には、多量の白色粒や淡黄色粒が含まれている。次に楕円文（8・9）は、比較的粒子が小さいもの（8）や、やや大きいもの（9）があり、いずれも斜め方向に押捺している。8の器厚は約6mm。焼成は良くない。色調は暗褐色および赤褐色を呈し、胎土中には、砂粒を多く含んでいる。9は焼成はあまり良くない。色調は赤褐色を呈し、胎土中には、砂粒が含まれている。

第2類 撫糸文土器（第40図10～23、第44図8・図版38・42） 撫糸原体は無節で太く、条間が粗いものが多く見られる。また、原体が細かく条間の密なものも若干ある。無文法は縦方向を主としているが、やや斜行するものもあり、また重複して施文されているものもある。第40図10は、口唇上に斜めに施文し、口縁部にも斜めの施文が見られる。11は、口縁部が外反しており、口縁全体

に縦位施文されている。また口縁上に斜めに施文。裏面には横位の施文が見られ、さらに調整の際のヘラおよび指頭圧痕が認められる。器厚は7.5～9mm。焼成は良く堅い。色調は明褐色を呈し、胎土中には、多量の淡黄色粒と砂粒が含まれている。第44図8は、O-4グリッドとIトレンチから出土したもので、僅かに尖底部を欠くが、ほぼ胴部下半を復元する事が出来た。粗い原体を縦位に施してある。内面には調整痕が見られる。器厚は、13～15mmと厚く重量感がある。焼成は極めて良く堅い。色調は黒褐色・赤褐色を呈する。胎土中には、多量の淡黄色粒と砂粒が含まれている。

第2群土器（早期後半の土器）

第1類 微隆起線文と刺突文を有する土器（第41図1・2・図版39） 微隆起線文上に、あるいはその接点に刺突文を施した土器であり、鶴ヶ島台式に比定されるものである。1は、波状口縁をなしており、口唇上にヘラ状工具による刻み目が付けられている。口縁部には、縦位や横位あるいは斜位1～4mmの微隆起線文が付けられ、この微隆起線上や接点・端部、さらに無文部には竹管状工具による刺突文が付けられている。また、口縁下部から胴部にかけてのくびれ部には一巡する微隆起線文があり、これに接続して、微隆起線文が15～18mm間隔で垂下し、この両端に刺突文が付いている口縁には補修孔が外から穿たれている。器厚は10～13mm。焼成は良く堅い。色調は暗褐色・明褐色を呈し、胎土中には、砂粒が多く含まれている。

第2類 条痕文と刺突文を有する土器（第41図3～6・図版39） 横位あるいは斜位の条痕文の上、および条間に刺突文が付けられている。4・5は、口縁上にヘラによる刻み目があり、口縁には並列する2段の刺突が見られる。この下に横位の条痕文が巡っている。器厚は6～9mm。焼成は良く堅い。色調は黒褐色・明褐色を呈し、胎土中には、雲母・砂粒が多く含まれている。6は、口唇を斜めに調整してあり、やや外反した口縁となっている。口唇上と口縁に刺突が付けられ、有段状を呈する。

第3類 沈線文と刺突文を有する土器（第41図7～12・図版39） 浅く幅の広い沈線文が弧状あるいは渦巻状に施されており、その沈線の縁部に若干の刺突文が見られる。7は、口縁が波状をなしておりやや内彎している。器厚は口唇部で7mm、下部で10mm。焼成は比較的良好。色調は明褐色を呈し、胎土中には、纖維と細砂・淡黄色粒が含まれている。

第4類 隆起線文と列点状刺突文および繩文を有する土器（第42図1～11・図版40） 低い隆起線文の上に、列点状の刺突文を施してあり、さらにこの上下間には繩文が施されている。器厚は8.5～11.5mm。焼成は良く堅い。色調は灰褐色・明褐色を呈し、胎土中には、多量の纖維と赤色粒・白色粒および砂粒を含んでいる。3と11の裏面には貝殻による条痕文が施されている。

第5類 条痕文土器（第41図13～16、第42図12～15、第43図1～13・図版39～41） 縦・横・斜めに条痕文が施され、内面に擦痕文を施してある。第41図14は、口唇上にヘラ状工具による刻み目が付けられ、さらに口縁部に横走する条痕文上に棒状工具によると思われる刺突がある。口縁下部において有段状を呈する。器厚は口唇部で9.5mm、下部で12.5mm。焼成は良く堅い。色調は灰褐色を呈し、胎土中には多量の纖維と砂粒が含まれている。16は底部破片であるが、条痕の他に稜の部分にヘラ状工具による刺突文が並列して付けられている。裏面にも条痕文が見られる。胎土中には、

多くの織維を含んでおり、また全体的に脆い。

第6類 隆帯文と刺突文を有する土器（第45図1・図版43） 波状を呈すると思われる口縁の直下に数段の隆帯があり、帶上に押し引きの刺突文が施されている。いわゆる、入海II式土器と呼ばれるものであろう。器厚は6.5～8.5mm。焼成は良く堅い。色調は灰褐色を呈し、胎土中には、多量の砂粒が含まれている。

第3群土器（前期の土器）

第1類 諸磯a式に比定される土器（第45図2～13・図版43） 口縁が波状をなし、縦・横・斜めに平行した沈線が施されている。2は、間隔の広い沈線文の間に爪形文が施され、地文には纏文が施されている。裏面は良く調整されている。器厚は6～7.5mm。焼成は極めて良く堅い。色調は暗褐色を呈し、胎土中には、砂粒と雲母が含まれている。また、炭化物の付着が見られる。6は、口縁が大きく内彎し、口唇部は尖頭状をなしている。波状部に沿う斜めの沈線と、口縁の凸部以下は横位の沈線が見られる。また、地文の纏文が沈線文間に残り、波状部下には丸棒状工具による刺突がある。器厚は口唇部で5mm、下部で7mm。焼成は極めて良く堅い。色調は赤褐色を呈し、胎土中には、多量の砂粒と雲母・淡黄色粒が含まれている。

第2類 諸磯b式に比定される土器（第44図9、第45図14～26、第46図1～20・図版42・43・44）

口縁部はキャリバー状をなしており、胴部で張りを有する器形となる。地文に纏文を施し、その上から細い粘土紐を張り付けて、さらに粘土紐の上に刻み目を付けている。第44図9は、口縁部を欠損しているが、その欠損部を研磨し新たな容器として再利用をした跡が伺えるものであり、極めて興味深いものである。現存部の口径は約12.6cm、高さは9.5～10cm。焼成は極めて良く堅い。色調は赤褐色を呈し、胎土中には小礫と雲母・砂粒が含まれている。第45図17は、波状をなす口縁の頂部にドーナツ状をした粘土を張り、口縁部にはやや稚拙とも思えるミズ腫れ状の粘土紐が貼り付けられている。器厚は6.5～7.5mm。焼成はあまり良くない。色調は赤褐色を呈し、胎土中には、小礫および淡黄色粒が含まれている。

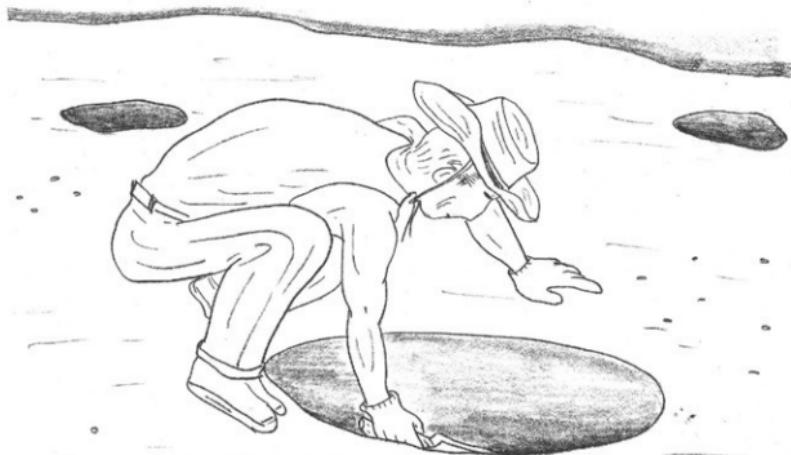
第3類 諸磯c式に比定される土器（第46図21～24・図版44） 地文に櫛齒状工具による集合沈線が施され、半截竹管による結節状浮線文を有する。21は集合沈線の上にドーナツ状あるいはボタン状をなす粘土の貼り付けが見られる。器厚は約6.5mm。焼成は良く堅い。色調はやや黒褐色に近く、胎土中には、砂粒・石英粒が含まれている。

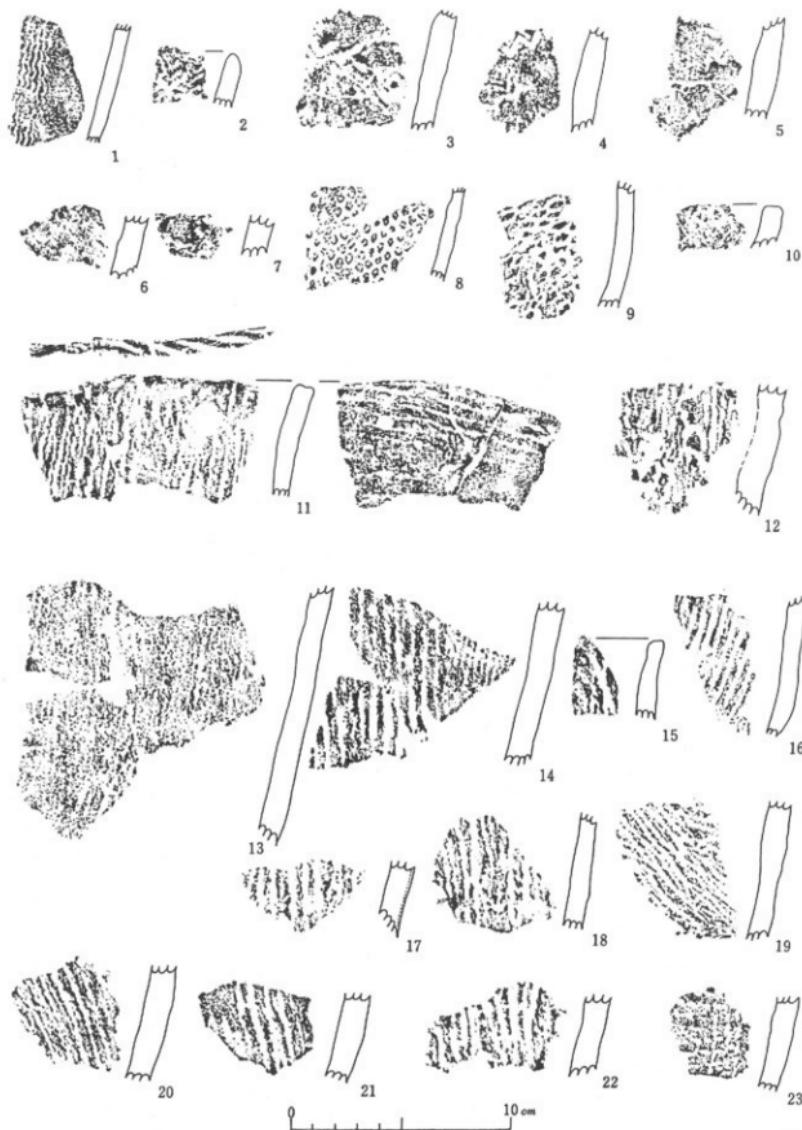
第4群土器（中期の土器）

第1類 勝板3式に比定される土器（第47図1～11、第48図1～7・図版45・46） 口縁部はキャリバー状となるものが多く、また口縁部の突起が特徴的である。第47図3は大きく山形に突起した口縁部を持ち、その波頂部から鎖状の隆帯が垂下している。またこれは口縁下部に見られる横位の隆起帶に接続している。さらに、胴部は細い竹管文が施されている。器厚は9～10.5mm。焼成は極めて良く堅い。色調は明褐色を呈し、胎土中には、多量の砂粒と白色粒が含まれている。8～11は、口縁部から胴部にかけて粘土紐の隆帯を縦位に付けている。

第2類 曽利IV式に比定される土器（第48図8～15・図版46） 浅い隆起帯による、半円あるいは渦巻が描出されており、この区画内外に櫛歯状工具による集合沈線が施される。（13～15）または、竹管状工具による条線が施されている。

第5群土器（土師器）（第48図16～18・図版46） 16は折り返し口縁を有するもので、壺形土器の口縁部破片である。口縁部の直径は推定13～13.5cm。器形は、かなり胴部の張ったずんぐりとしたものである事が分かる。折り返し部および胴部には煤が付着している。口縁部外面は横位・斜位にハケで調整された後ナデが見られる。内面は横位にハケで調整の後にナデが見られる。胴部内面にはヘラミガキが施されているが、剥落が激しい。焼成は良く堅い。色調は淡橙褐色を呈し、胎土中には砂粒と長石が含まれている。17・18は、いずれも环形土器の破片である。17は口縁部の内外にハケによる調整が施されている。18はロクロ成形された底部である。内面にはナデと指頭圧痕が見られる。

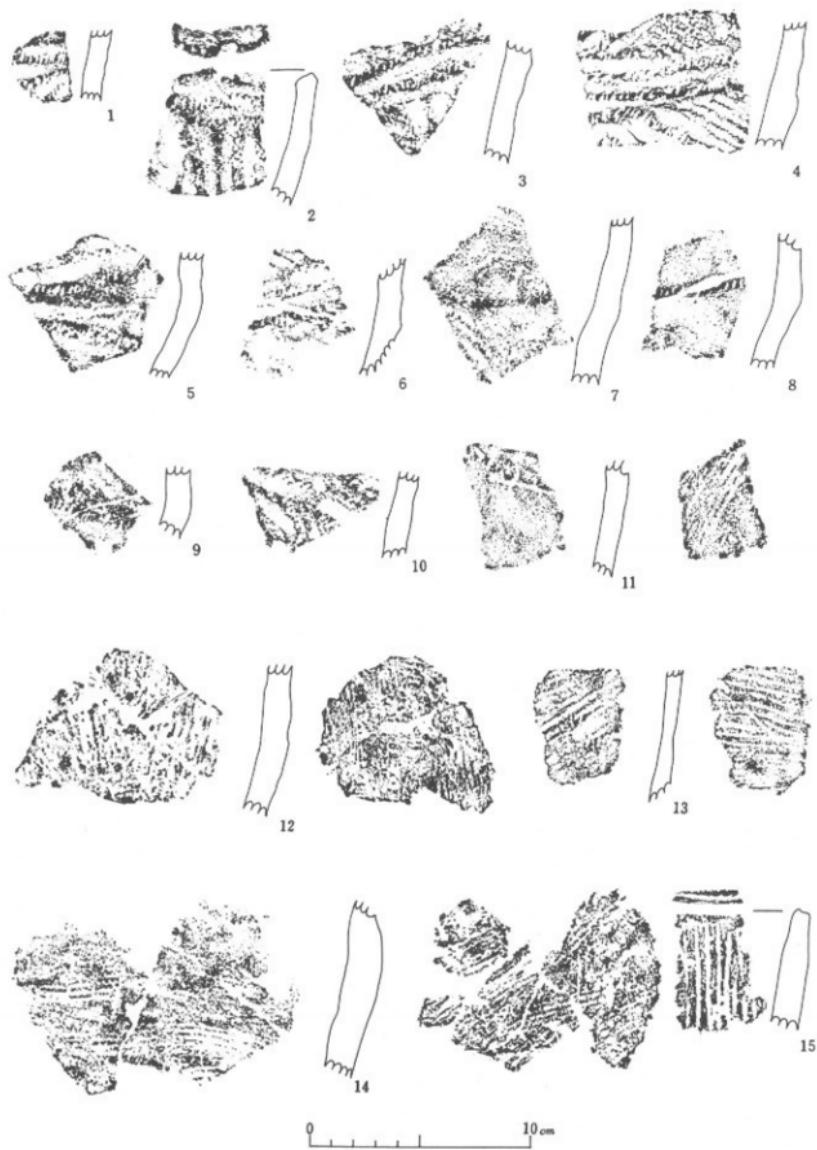




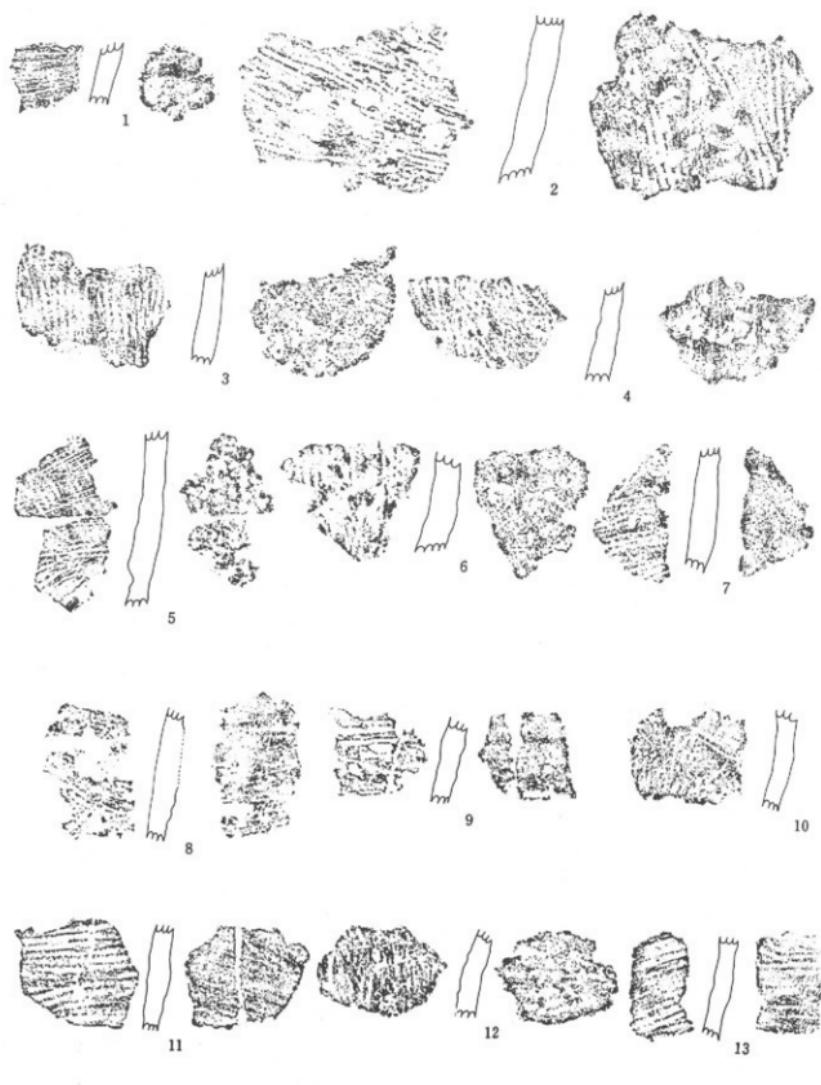
第40図 出土土器拓影（1）



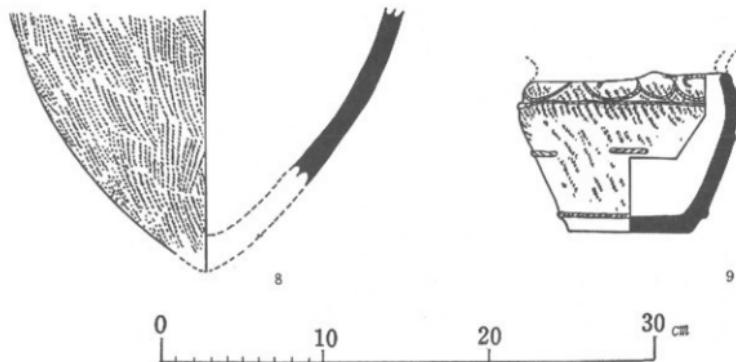
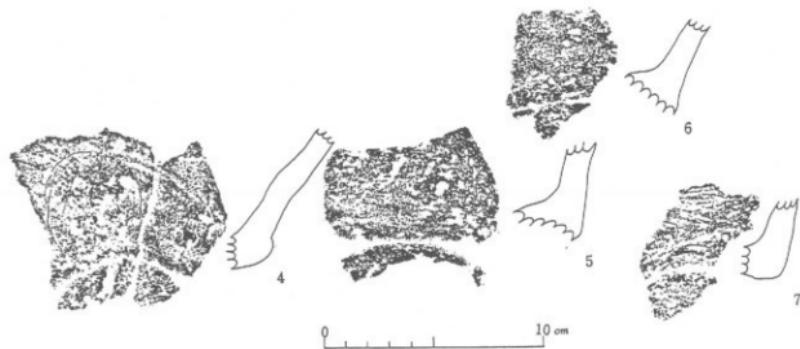
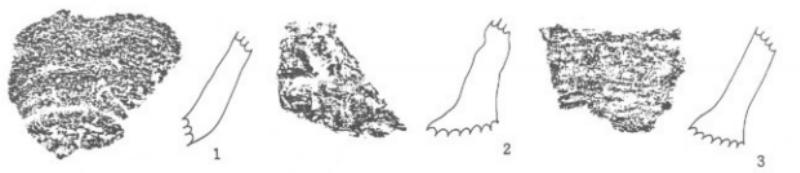
第41図 出土土器拓影(2)



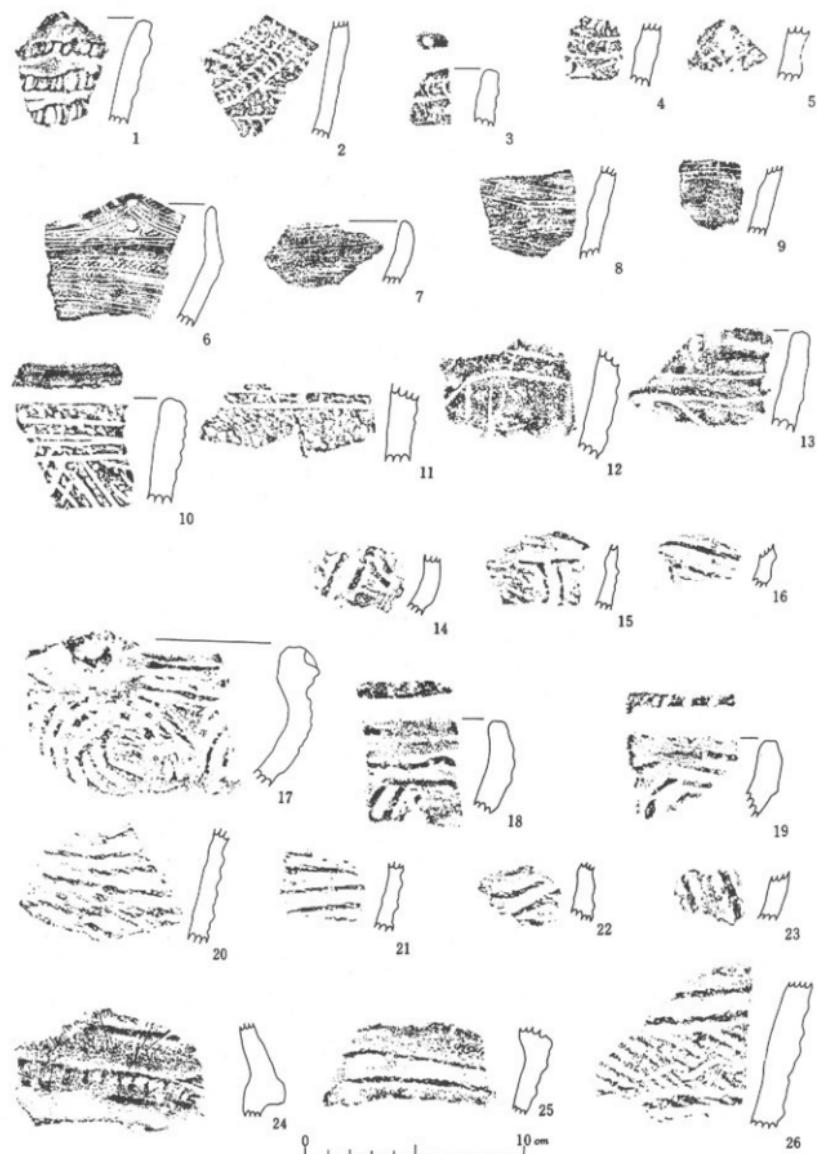
第42図 出土土器拓影 (3)



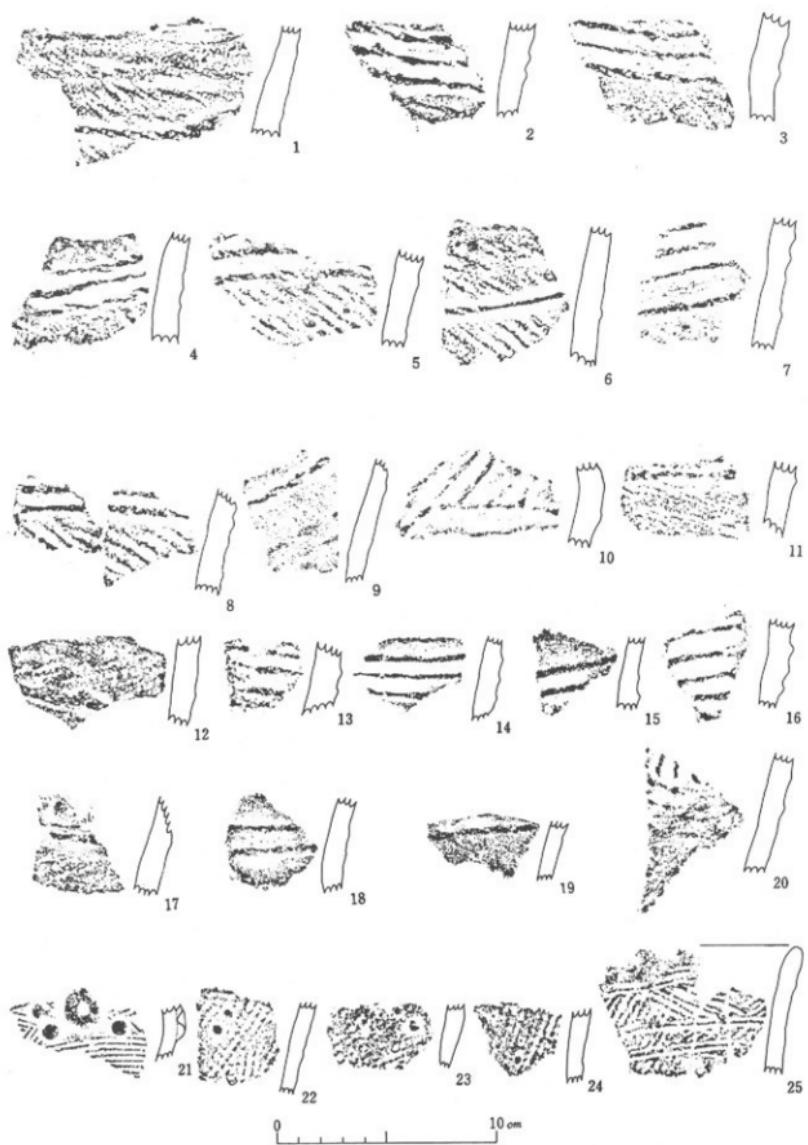
第43図 出土土器拓影 (4)



第44図 出土土器拓影 (5) 及び出土土器実測図



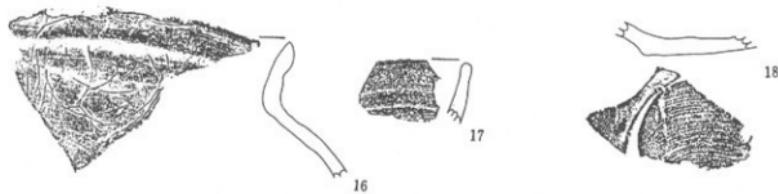
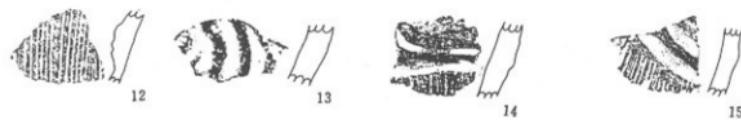
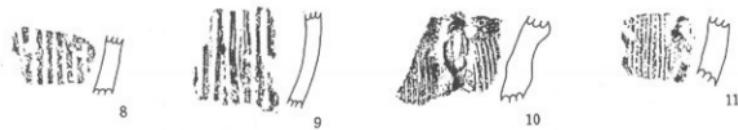
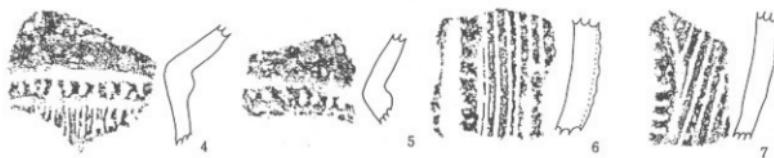
第45図 出土土器拓影(6)



第46図 出土土器拓影 (7)



第47図 出土土器拓影 (8)



第48図 出土土器拓影 (9)

B. 石 器（第49図～第52図・図版47～49）

大平B遺跡から出土した石器は、石槍1点、石鎌7点、ピエスエスキュー1点、未製品1点、礫器7点、打製石斧1点、磨石28点となっている。

石槍（第49図1） K-5グリッドから1点出土している。やや大型のものであり、先端部を $\frac{2}{3}$ ほど欠損している。長さ3.8cm、幅2.5cm、厚さ0.9cm。幅広の木葉型をなすものであろう。比較的粗い調整ながらその剥離は両面におよび、側辺はうまく作り出されている。横断面は菱形に近い。黒曜石製。

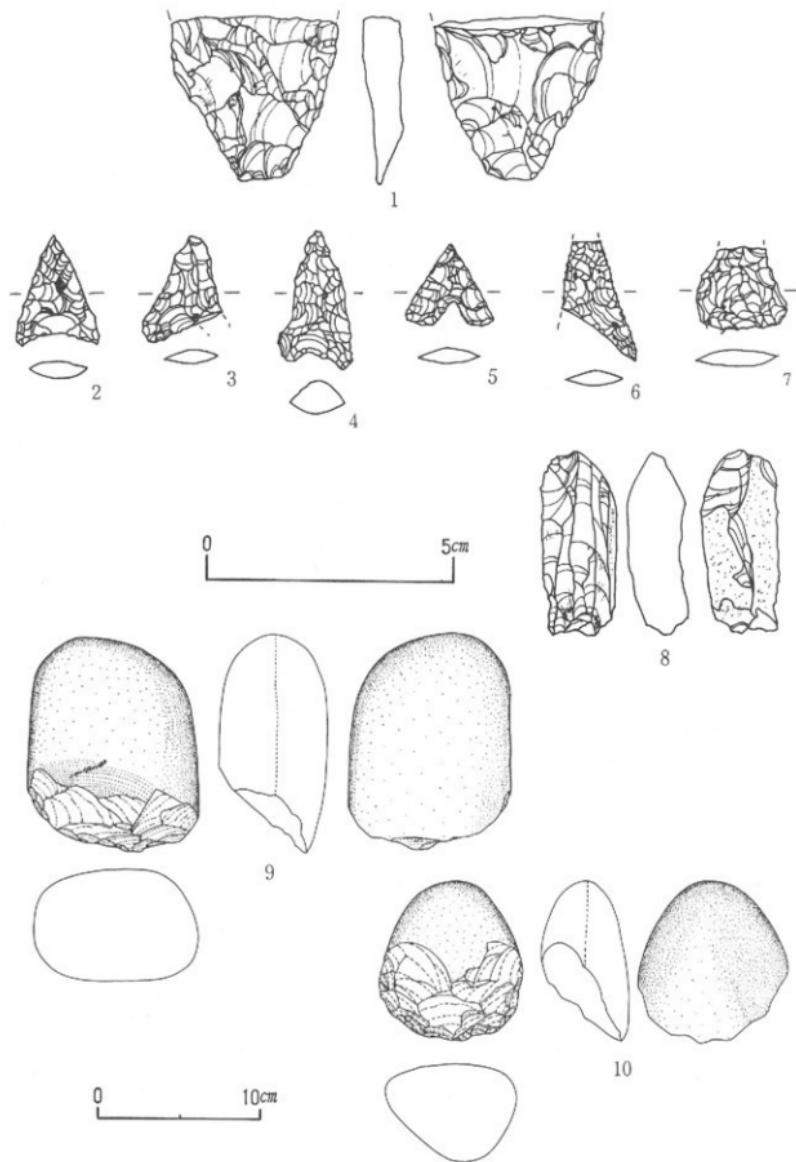
石鎌（第49図2～7） 7点出土しており、6点を図示した。D-5、F-2、I-T、K-5グリッド内検出のもの、および表採されたものである。材質はいずれも黒曜石である。2～6は凹基無茎鎌であり、とりわけ2は表裏共丁寧に調整された完形品である。5は、鍔形鎌と呼ばれるものであり、基部の抉りが深くなっている。また側辺は直線状である。極めてバランス良く調整されている。6は長脚鎌であり、頭部と左脚部を欠損しているが、丁寧に調整されたものである。7は、平基無茎鎌であり頭部を欠損した未製品である。基部は直線状を呈し、側辺はやや弧状をなしている。細かい調整を試みたようであるが、材質が悪いため断念したようである。

ピエスエスキュー（第49図8） 1点出土している。I-T、K-5グリッド内から検出されている。8は、一端および片面は自然面を残すもので、平面形は台形をなし断面は紡錘形を呈する。長さ3.7cm、幅1.6cm、厚さ1.1cm。黒曜石製。

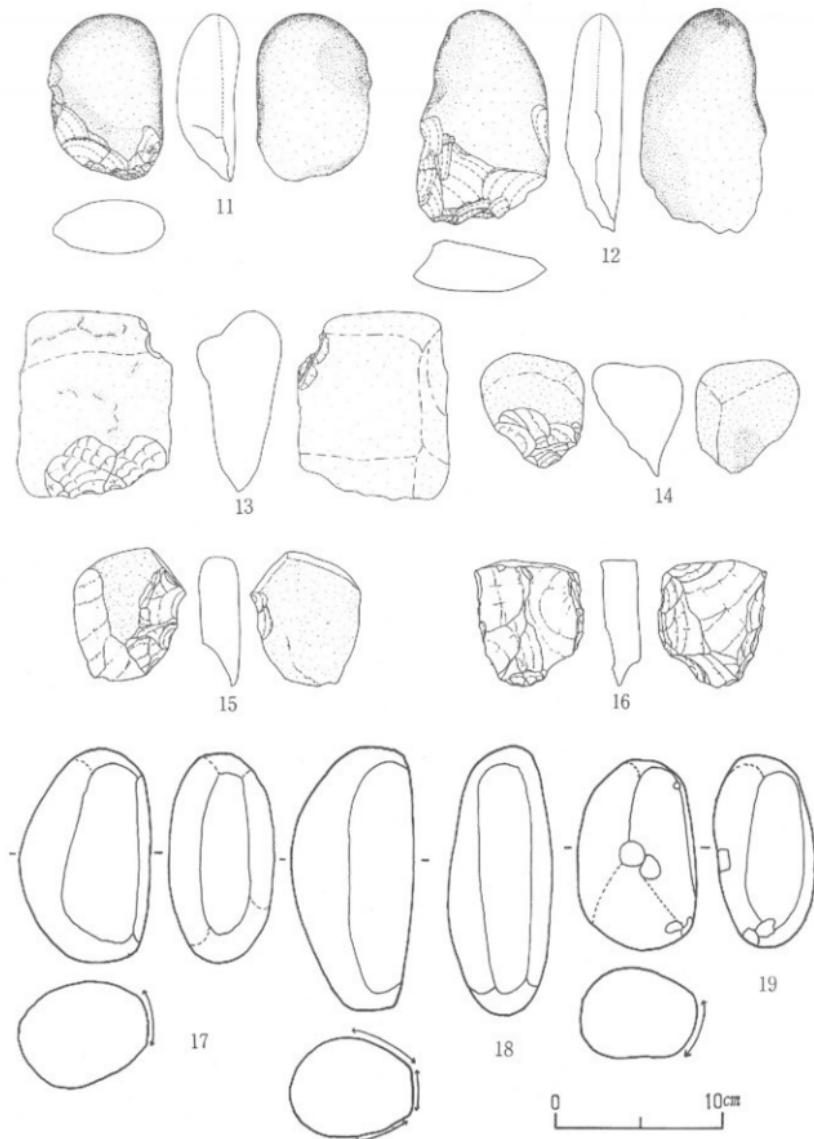
礫器（第49図9・10、第50図11～15） 7点出土している。H-T、I-T、K-4、M-6、O-3・6グリッド内から検出されている。円礫および偏平な礫を用いて、片面あるいは両面を打割し、刃部を作り出している。また裏面は自然面がそのまま残されている場合が多い。このうち9は、不整の円礫の一端に片面から粗い加工を加え、先端部においてやや細かい調整をして刃部としている。裏面は一ヵ所のみ調整の加工がある。断面は台形に近い。6点中最も大きく、長さ13.4cm、幅10cm、厚さ6.5cm、重量1,220gを計る。安山岩製。11はやや細長の円礫の片面に、側辺および先端部に丁寧な加工が加えられ、先端部の裏面には返しの調整が見られ鋭い刃部となっている。長さ9.9cm、幅6.6cm、厚さ3.3cm。安山岩製。14は、断面三角形の分厚い小礫の端部に、片面から簡単な加工をして鋭利な刃部を作り出している。先端部はやや丁寧な調整となっている。長さ7.9cm、幅6.6cm、厚さ5.3cm。安山岩製。15は薄い板状の礫の片面に、両側辺から内側に向けて加工を加え、先端部において鋭利な刃部を作っている。長さ8.7cm、幅6.6cm、厚さ2.4cm。玄武岩製。

打製石斧（第50図16） 1点出土している。A-5グリッド内から検出されたものである。略短冊形であり、片面の両側辺に細かい調整が見られる。また一方の片面には、石材の原面が多く残されている。長さ7.85cm、幅6.5cm、厚さ2.4cm。玄武岩製。

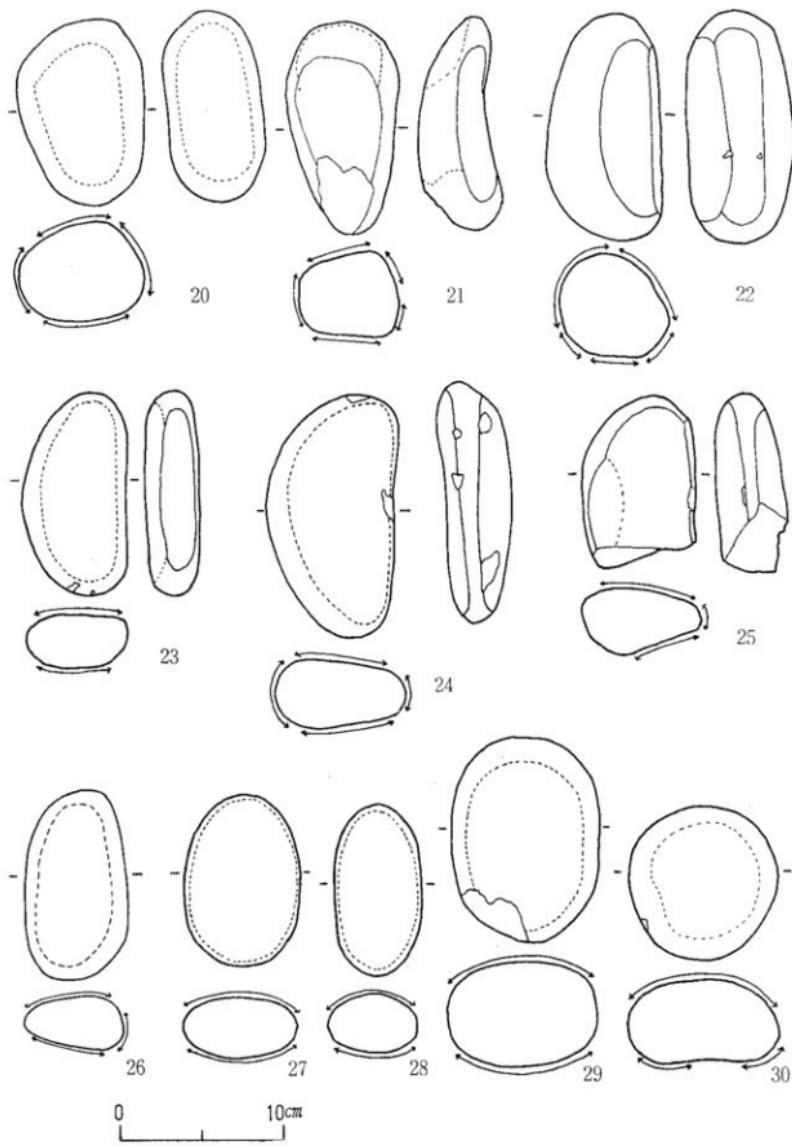
磨石（第50図17～19・第51図20～30・第52図31～44） 28点出土している。その形状からI～III類の3つの型に分類する。第I類a種=いわゆる棒状磨石と呼ばれる磨石。その断面が柱状をなすもの（17～22）を本類とした。第II類a種=横楕形で磨面を右にもつもの（23～25）。第III類a種・c種・d種=円形および長円形・楕円形の磨石で、平坦な磨面を持たないもの（26～44）を本類とした。



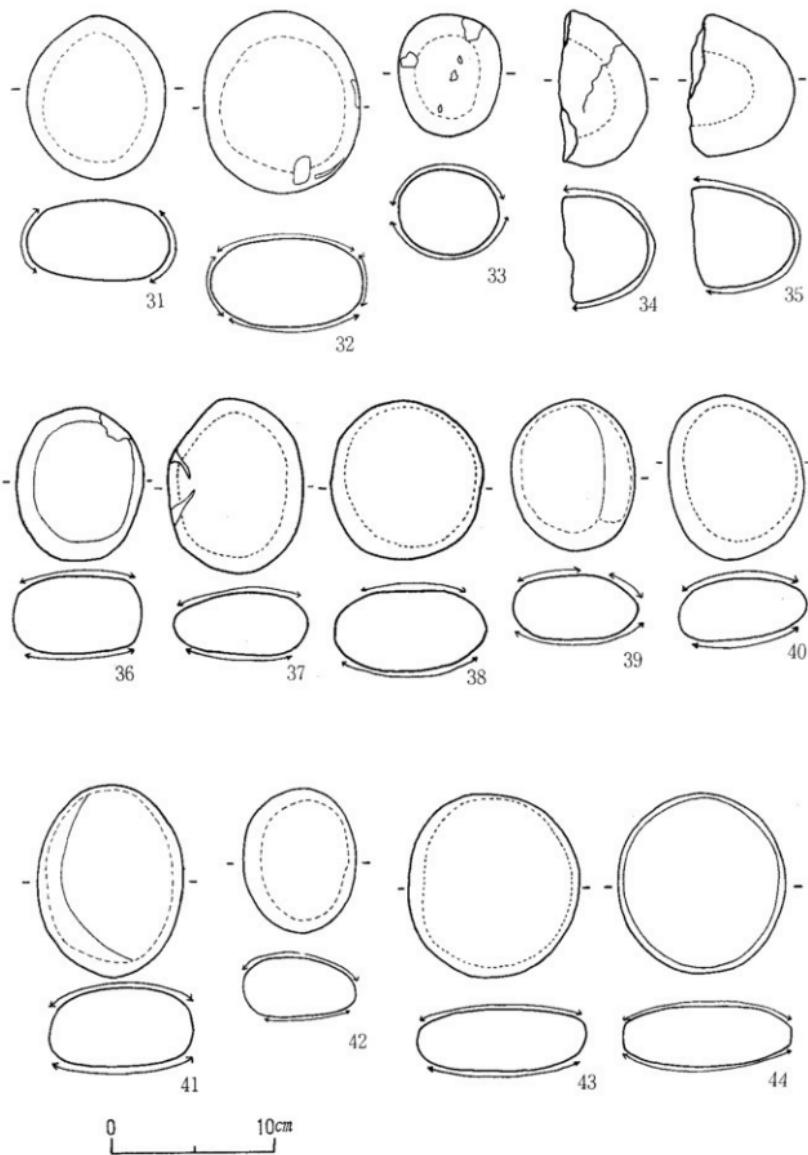
第49図 出土石器実測図（1）



第50図 出土石器実測図 (2)



第51図 出土石器実測図 (3)



第52図 出土石器実測図 (4)

(単位mmおよびg)

器種	出土区	分類	図番号	固形番号	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
石 横	K - 5		49 - 1	47	38.0	25.0	9.0	9.2	黒曜石	頭部欠損
石 磨	K - 5		49 - 2	"	23.5	17.0	4.0	1.2	"	
"	5 T		49 - 3	"	23.0	16.0	3.0	0.8	"	片脚欠損
"	D - 5		49 - 4	"	29.0	16.0	7.0	2.1	"	
"	K - 5		49 - 5	"	17.5	17.5	2.0	0.4	"	
"	F - 2		49 - 6	"	27.0	15.0	3.0	0.8	"	頭部、片脚欠損
"	B 表		49 - 7	"	16.0	18.0	4.0	1.2	"	頭部、片脚欠損
"	I T	圓化せず	"	"	14.0	6.0	2.0	0.2	"	片脚のみ
ピエス・エスキュー	I T		49 - 8	"	37.0	16.0	11.0	7.6	"	
未 製 品	K - 5	圓化せず	"	"	38.0	19.0	5.0	3.4	"	
鍛 器	I - T		49 - 9	47	134.0	100.0	65.0	1220.0	安山岩	
"	H - T		49 - 10	"	97.0	90.5	59.0	513.0	玄武岩	
"	O - 3		50 - 11	"	99.5	67.5	33.5	299.3	安山岩	
"	O - 3		50 - 12	"	125.0	82.0	30.5	403.8	玄武岩	
"	O - 5		50 - 13	"	98.5	110.5	60.0	779.3	安山岩	
"	M - 6		50 - 14	"	79.0	66.0	53.0	266.3	玄武岩	
"	K - 4		50 - 15	"	87.0	66.0	24.0	172.9	"	
打 製 石 斧	A - 5		50 - 16	"	78.5	65.0	24.0	151.5	"	
磨 石	H - T	I - a	50 - 17	48	129.0	77.0	62.0	928.3	安山岩	
"	不 明		50 - 18	"	160.0	74.0	60.5	1005.9	"	
"	C - 5		50 - 19	"	113.0	68.0	55.0	698.3	玄武岩	
"	I J		51 - 20	"	111.0	74.0	57.0	746.9	安山岩	
"	C - 3		51 - 21	"	124.5	67.0	52.0	619.2	玄武岩	
"	M - 6	II - a	51 - 22	"	136.0	66.0	67.0	825.9	安山岩	
"	A - 5		51 - 23	"	119.0	59.0	31.0	370.4	"	
"	C - 3		51 - 24	"	141.0	75.0	41.0	638.5	"	
"	O - 3		51 - 25	"	107.0	74.0	41.0	410.4	"	
"	K - 3	III - a	51 - 26	"	118.5	62.0	30.0	351.5	"	
"	M - 6		51 - 27	"	103.0	69.0	37.0	417.5	"	
"	E T		51 - 28	"	102.0	53.0	35.0	300.9	"	
"	M - 5	III - c	51 - 29	"	122.0	90.0	63.0	1078.4	"	
"	I T		51 - 30	"	92.0	87.0	54.0	617.8	"	
"	A - 3		52 - 31	"	99.0	79.0	50.0	595.4	"	
"	不 明		52 - 32	49	110.9	98.5	37.0	876.7	"	
"	F - 2		52 - 33	"	73.5	60.0	52.0	337.3	"	
"	C - 表		52 - 34	"	89.0	63.5	63.5	346.3	"	
"	K - 4		52 - 35	"	83.5	59.0	60.0	380.2	"	
"	I - 7		52 - 36	"	91.0	76.0	43.0	403.1	"	
"	M - 6		52 - 37	"	105.0	80.0	38.0	493.0	"	
"	M - 6		52 - 38	"	96.0	90.0	44.0	543.2	"	
"	O - 4		52 - 39	"	90.0	74.0	41.0	383.8	"	
"	K		52 - 40	"	97.0	78.0	38.0	419.5	"	
"	O - 4		52 - 41	"	113.0	84.0	46.0	673.3	"	
"	I T		52 - 42	"	88.5	70.0	34.0	334.9	"	
"	不 明		52 - 43	"	107.0	96.0	37.0	601.5	"	
"	K - 2		52 - 44	"	110.9	98.5	37.0	809.1	"	

第5表 大平B遺跡石器計測一覧表

第V章 大平C遺跡発掘調査報告

第1節 第I次発掘調査

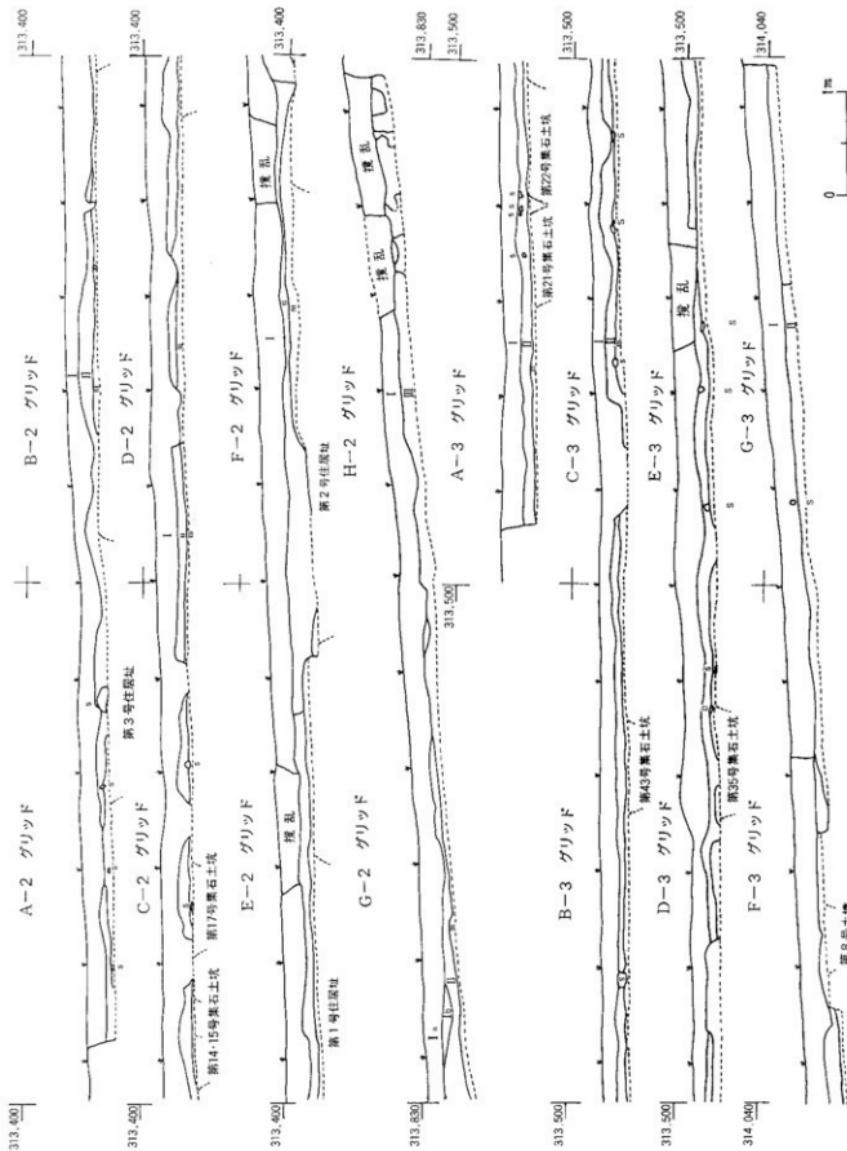
1. 遺跡の層序

第I次調査によって確認された層序は、表土層から黄褐色土層まで第I層から第III層に分ける事ができる。第53図～第55図に示すとおりであるが、当該地は、かつて営業用としての庭木を植えてあったため、場所によっては第54図に見るようにかなり深くまで擾乱されていた。基本層序は、住居址や集石土坑が関わっている場所で、また比較的擾乱が少なく安定している、A～H2、B～G3 グリッドの北壁や、A～B1～6、D1～4 グリッドの東壁にこれを求めた。遺物は、第II層下部から第III層にかけて出土している。

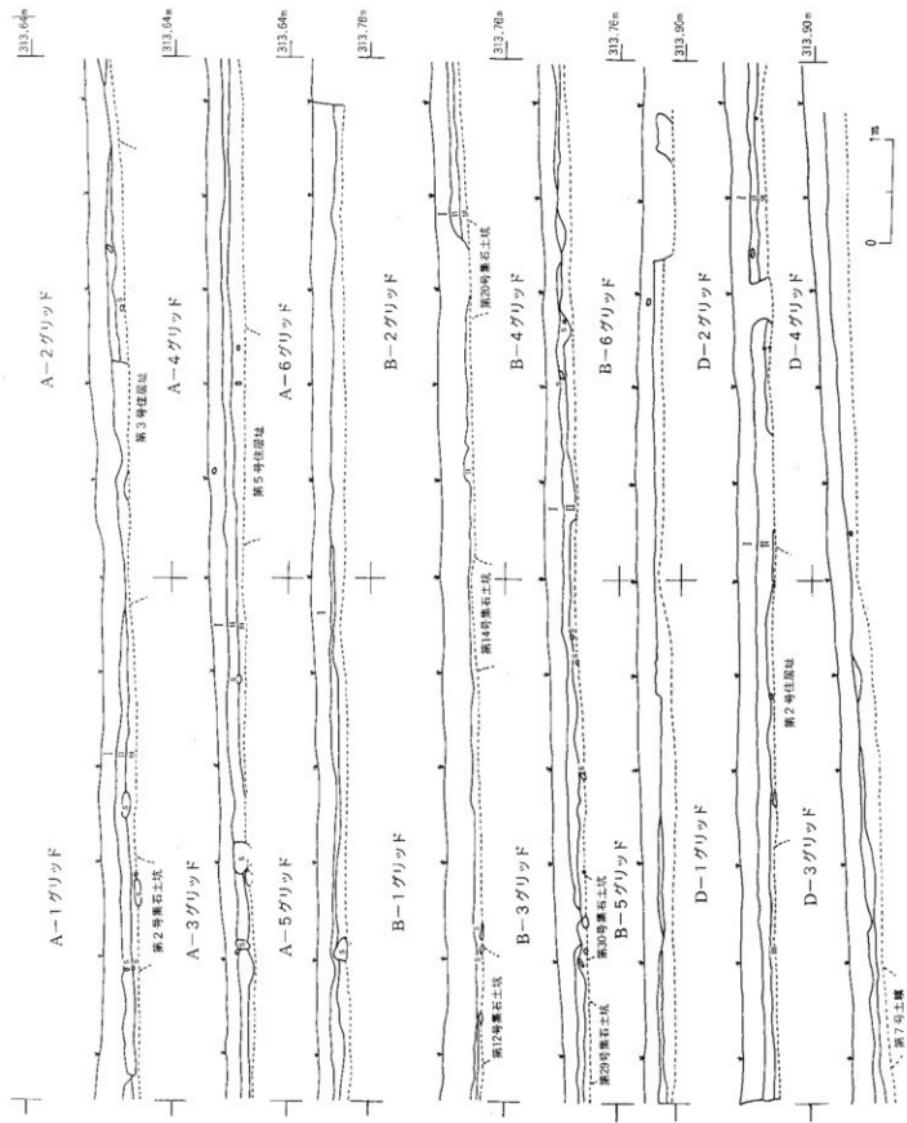
- | | | |
|-------|------|---|
| 第I層 | 黒褐色土 | 現表土であり、庭木の植栽等により第II層の下部まで及んでいる場所もあった。層厚は10～20cm。 |
| 第II層 | 明褐色土 | バーミスを含んでおり、縄文時代中期から前期・早期の遺物が混在している。基本的には、当地方に見られる縄文中期の包含層となる。層厚は5～15cm。 |
| 第III層 | 黄褐色土 | A遺跡の第I次・第II次調査で確認された、第IV層と同じ層である。漸移層であり、若干のスコリアが含まれている。縄文早期の遺物が検出されている。 |



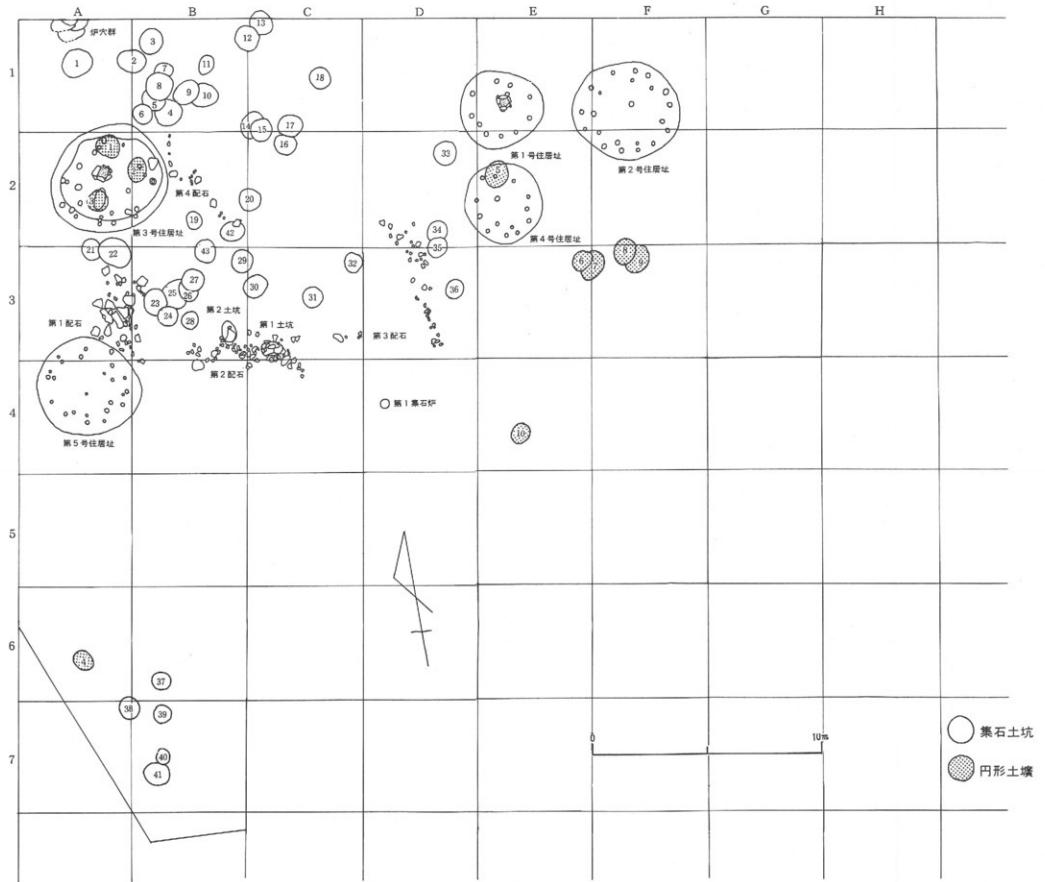
第53図 第I次調査土層層序



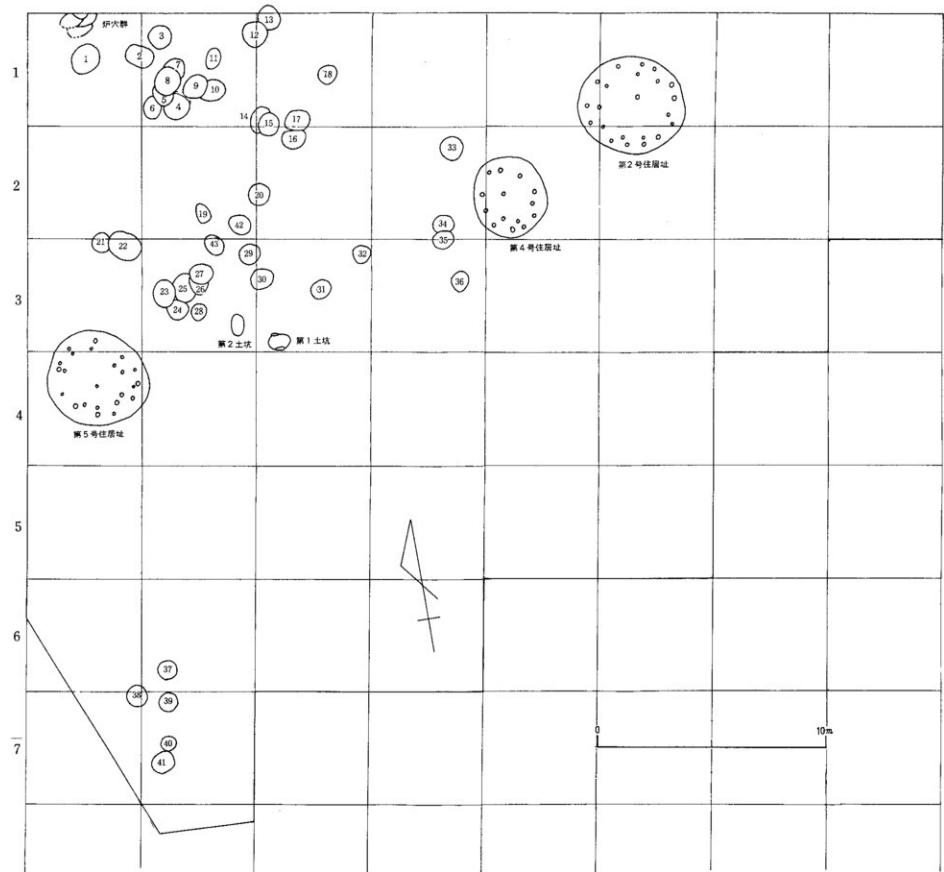
第54図 第1次調査土層断面図（北壁）



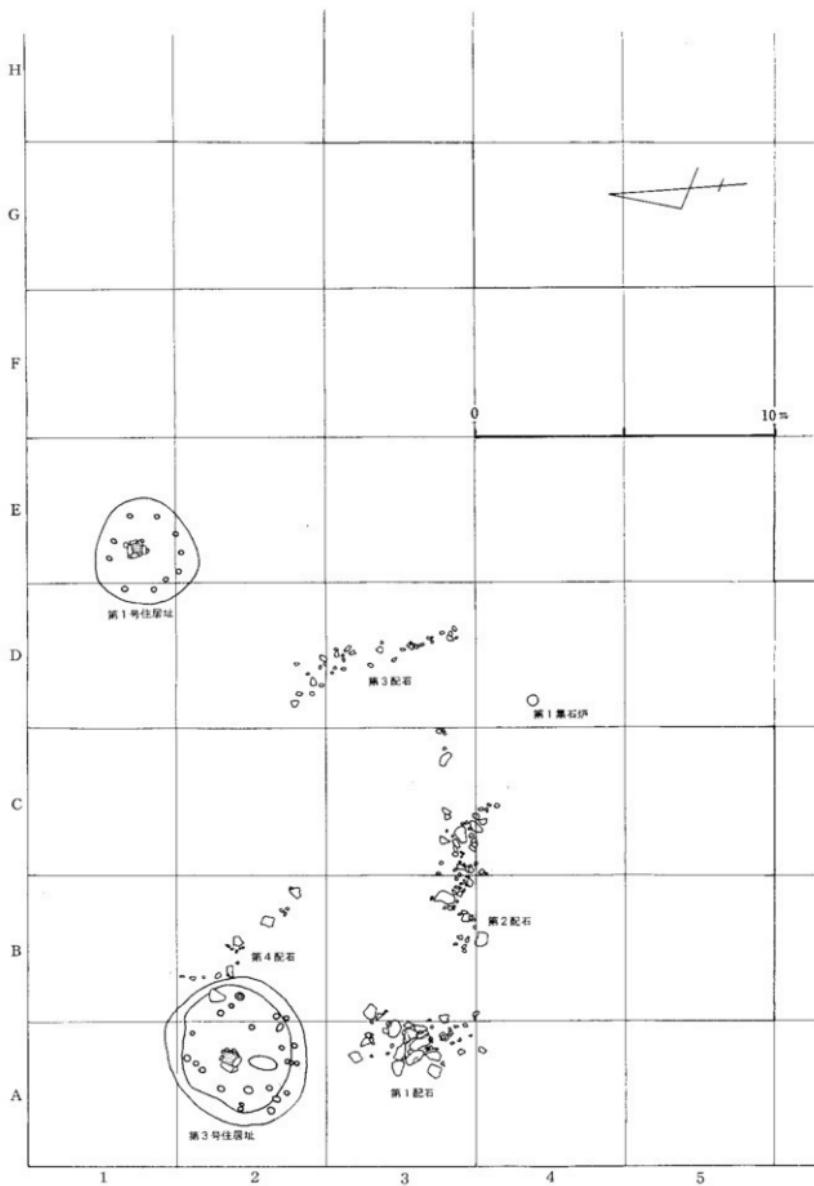
第55図 第1次調査土層断面図（東壁）



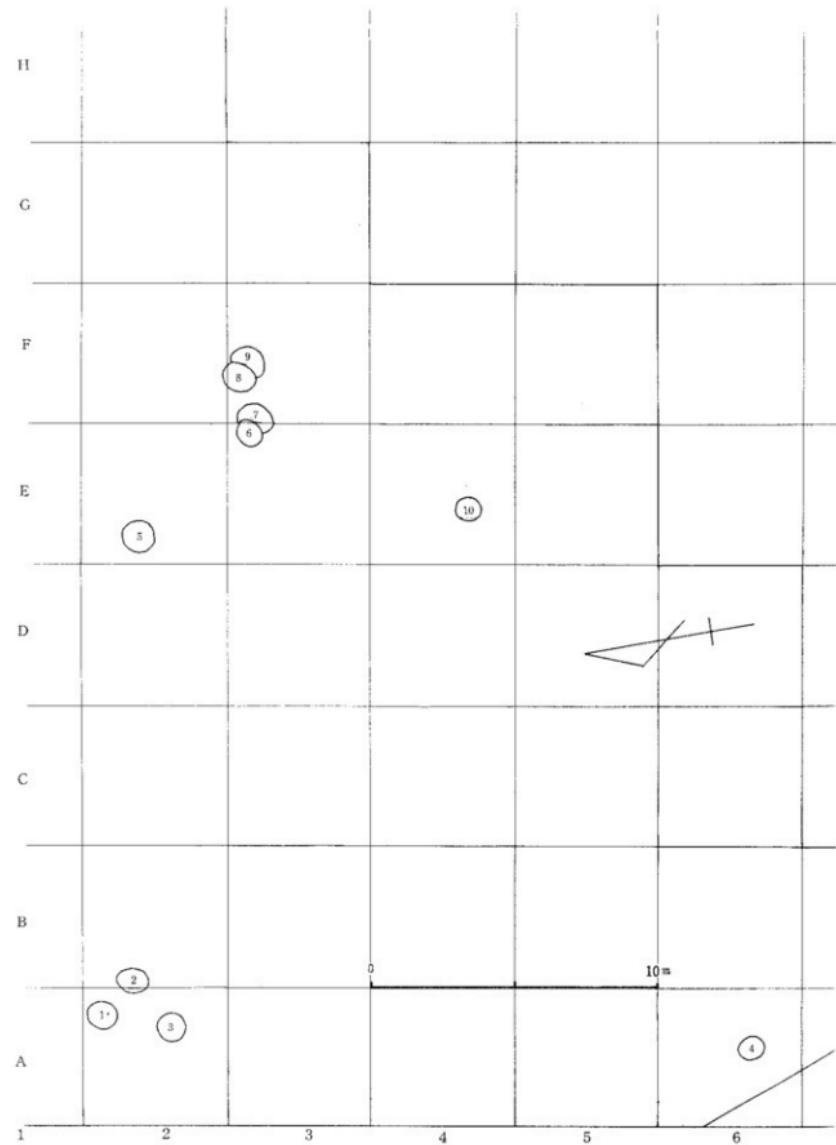
第56図 第1次調査造構間連実測図



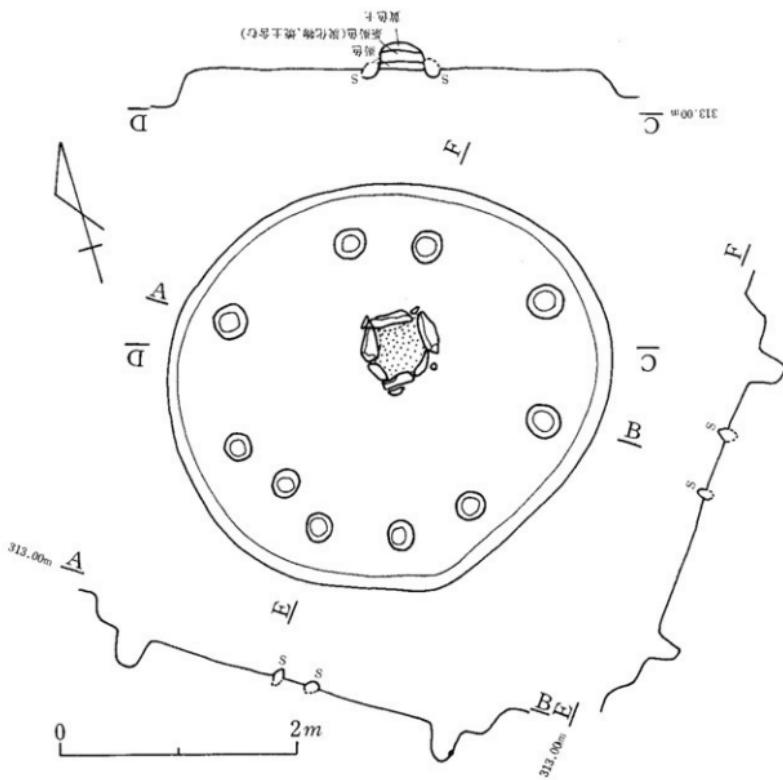
第57図 第1次調査造構関連実測図（縄文時代早期）



第58図 第1次調査遺構関連実測図（縄文時代中期）



第59図 第Ⅰ次調査円形土壌実測図（平安時代）



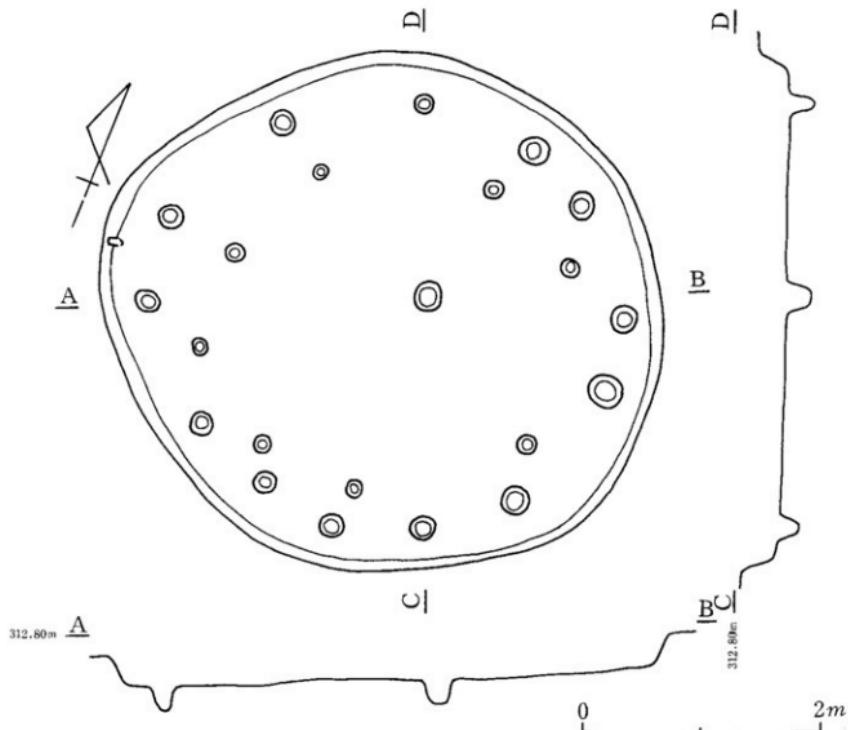
第60図 第1次調査第1号住居址実測図

2. 遺構

A. 住居址

第1号住居址（第60図・図版62）

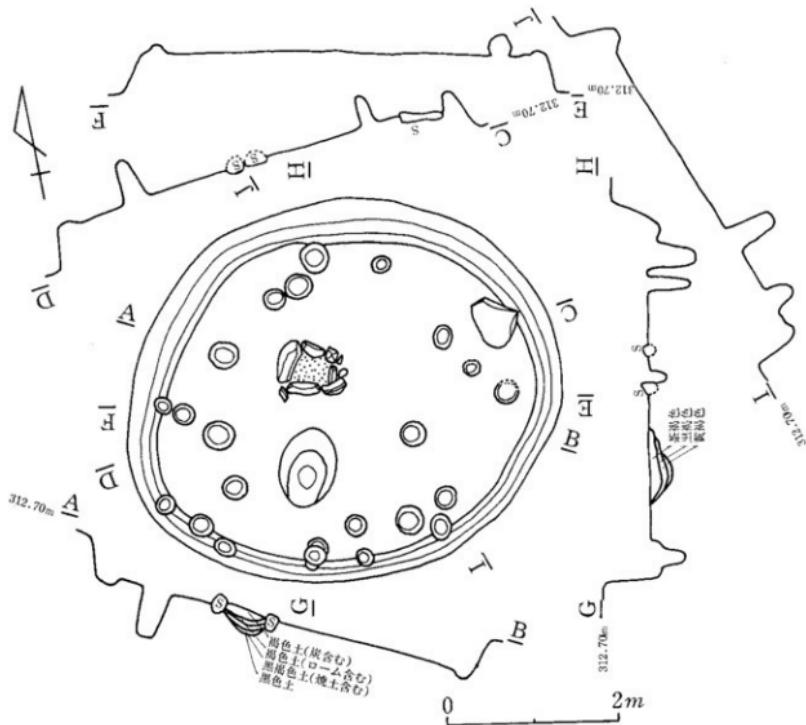
調査区域北側のほぼ中央部、D-E-1・2グリッドから検出された。長径3.72m、短径3.40m、プランは不整円形を呈する。残存する壁高は20~30cm。住居址の中央から北寄りに60×66cmのほぼ六角形のプランを呈する炉址が確認された。また、炉址内には厚さ17cm前後の焼土が残存していた。柱穴は、壁近くに10本確認された。いずれも、壁より12~46cmほど内側に位置しており、その直径は20~22cm、深さは22~30cmであった。床面は、全体によく踏み固められており良好である。遺物は、縄文中期末葉の深鉢形土器（曾利Ⅲ式に比定される土器。第120図2・図版72）と、同時期の土器片および磨石1点が出土した。



第61図 第1次調査第2号住居址実測図

第2号住居址（第61図・図版60）

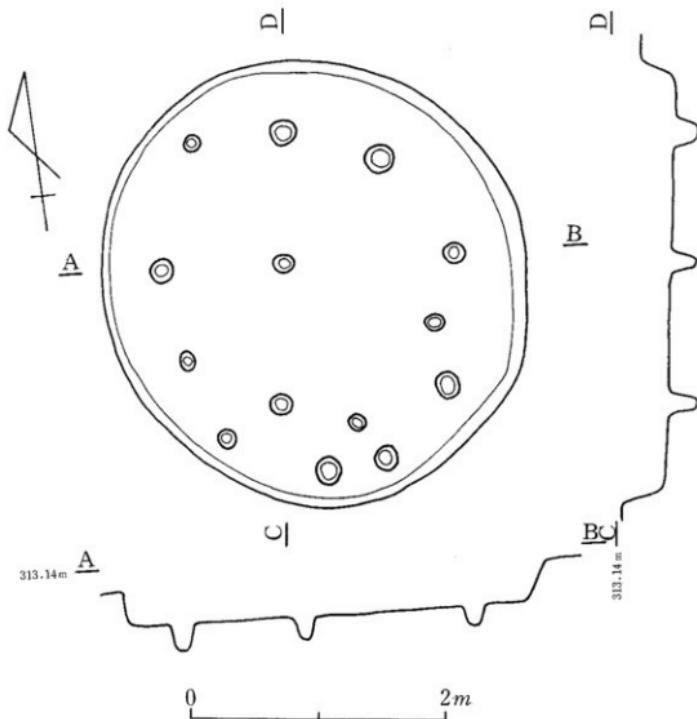
第1号住居址のすぐ東隣より検出された。長径4.86m、短径4.46m、プランは不整円形を呈する。残存する壁高は25~27.5cm。炉址は認められず、柱穴は壁に沿って13本、その内側にやや細い柱穴が8本、さらに中央や東側に1本の計22本確認された。その径は16~26cm、深さは16.5~21cmであった。床面は、一部はよく踏み固めてあるが、全体的にはやや軟弱である。遺物は、縄文早期の撚糸文と縄文を有する土器24点（第95図・第96図）と磨石3点が出土している。このうち撚糸文土器（第95図15~18・20~22、第96図1~11）は、B遺跡のものとほぼ同時期と考えられる。文様は、撚糸が継走するものと斜行するものがあり、無節で条間の粗いものと密なものが認められる。口縁はすべて平縁をなしており、口唇部は外反と直行が見られる。胴部はややゆるやかな張りを呈する。縄文を有する土器（第95図19、第96図12~16）は、いわゆる斜縄文を施してある。19は口唇部は平坦に整形され、口唇部は大きく外反している。また、口唇部から裏面にかけても施文が見られる。



第62図 第1次調査第3号住居址実測図

第3号住居址（第62図・図版63）

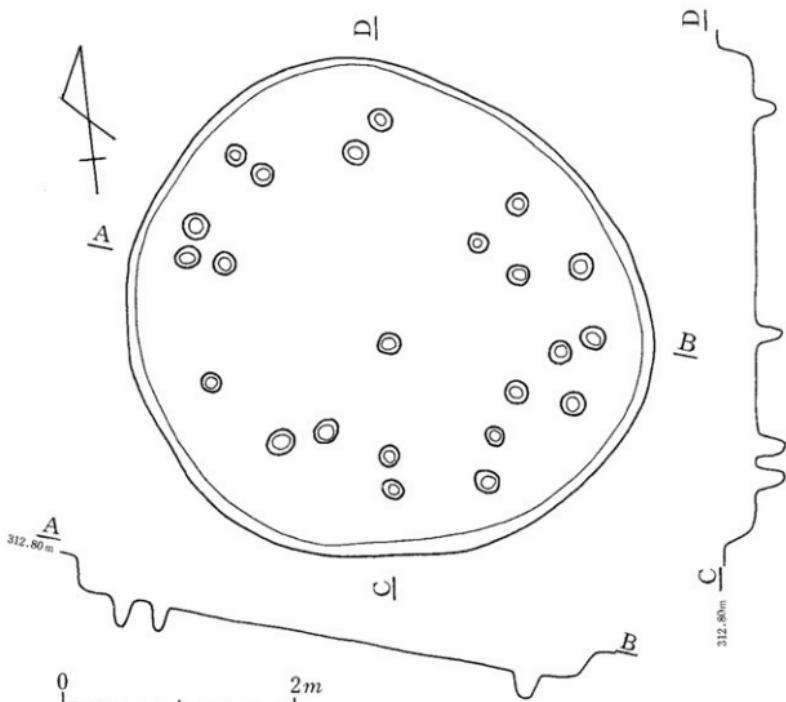
台地の北西側（道路際に位置している）から検出された。長径5.15m、短径4.40m、プランは不整の楕円形を呈する。残存する壁高は36～58cm。住居址の中央からやや西北寄りに、62×84cmのほぼ五角形のプランを呈する炉址が確認された。また、炉址内には12cm前後の焼土が残存していた。さらに、この炉址の南側にも焼土が認められたため掘り下げる、楕円形の炉穴状ピットとなった。住居床面と壁の間には周溝が巡る。柱穴は床面と壁寄り、さらに周溝内から計23本確認された。その径は17～30cm、深さは床面より10～57cmであった。床面はよく踏み固められており、一部に張り床を施してある。なお、床面の北東隅には石皿と磨石、埋甕（第119図2・図版64）が残されていた。この他の遺物としては、縄文中期中葉の深鉢形土器（埋甕と同様、曾利II式に比定される土器。第120図3・6）と同時期の土器片（第96図17～24、第97図1～7、第98図、第99図）および打製石斧、石鎌などが出土している。



第63図 第1次調査第4号住居址実測図

第4号住居址（第63図・図版61）

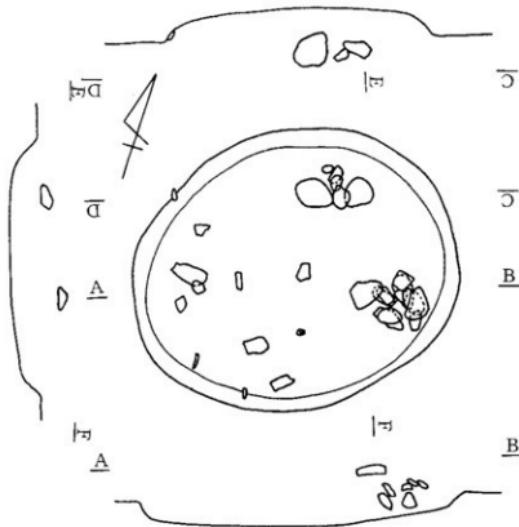
第1号住居址のすぐ南側から検出された。長径3.60m、短径3.35m、プランは不整円形を呈する。残存する壁高は28~35cm。炉址は認められず、柱穴は壁寄りに13本、中央やや西寄りに1本確認された。その径は11~20cm、深さは17~24cmであった。床面はわりあいに良く締まっている。遺物は、縄文早期の撚糸文と繩文を有する土器11点（第100図1~11）と、磨石2点が出土している。このうち、第100図1の土器は口唇部がやや外反するもので、また口唇部は丸く整形されている。この口唇部に撚糸文が横位施文されている。第100図2~4・8のように、異方向に施文してあるものなどが見られる。



第64図 第1次調査第5号住居址実測図

第5号住居址（第64図・図版61）

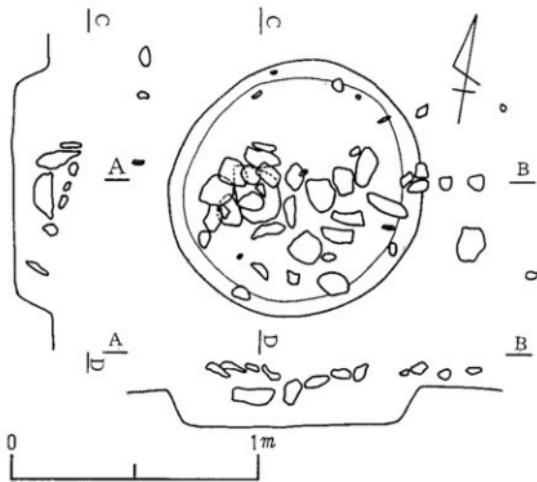
台地の最西端、第3号住居址から約5mの南側に検出された。長径4.56m、短径4.22m、プランは不整円形を呈する。残存する壁高は26~28cm。炉址は認められず、柱穴は壁に沿って12本、その内側にやや細い柱穴が10本、さらに中央やや南側に1本の計23本確認された。その径は11~17.5cm、深さは18~26cmであった。床面は、全体的にやや軟弱であった。遺物は、縄文早期の撚糸文と縄文を有する土器、さらに撚糸文を回転させずに引いて施した土器など28点（第100図12~27、第101図1~13）が出土している。撚糸文・縄文共、第2号・第4号住居址出土の土器と共に施文が見られる。また、住居覆土上層部および搅乱層（小ピット内）からは、山形押型文土器1点（第100図12）、田戸下層式比定土器6点（第101図14~19）が出土している。しかし、第2号・第4号および本住居址から出土している土器は、その状況から見る限り撚糸文・縄文土器と押型文土器、あるいは撚糸文・縄文土器と田戸下層式比定土器との併存は認められない。



第1号集石土坑



第65図 第1次調査第1号・2号集石土坑実測図



第66図 第1次調査第3号集石土坑実測図

B. 集石土坑（第65図～第82図・図版55～58）

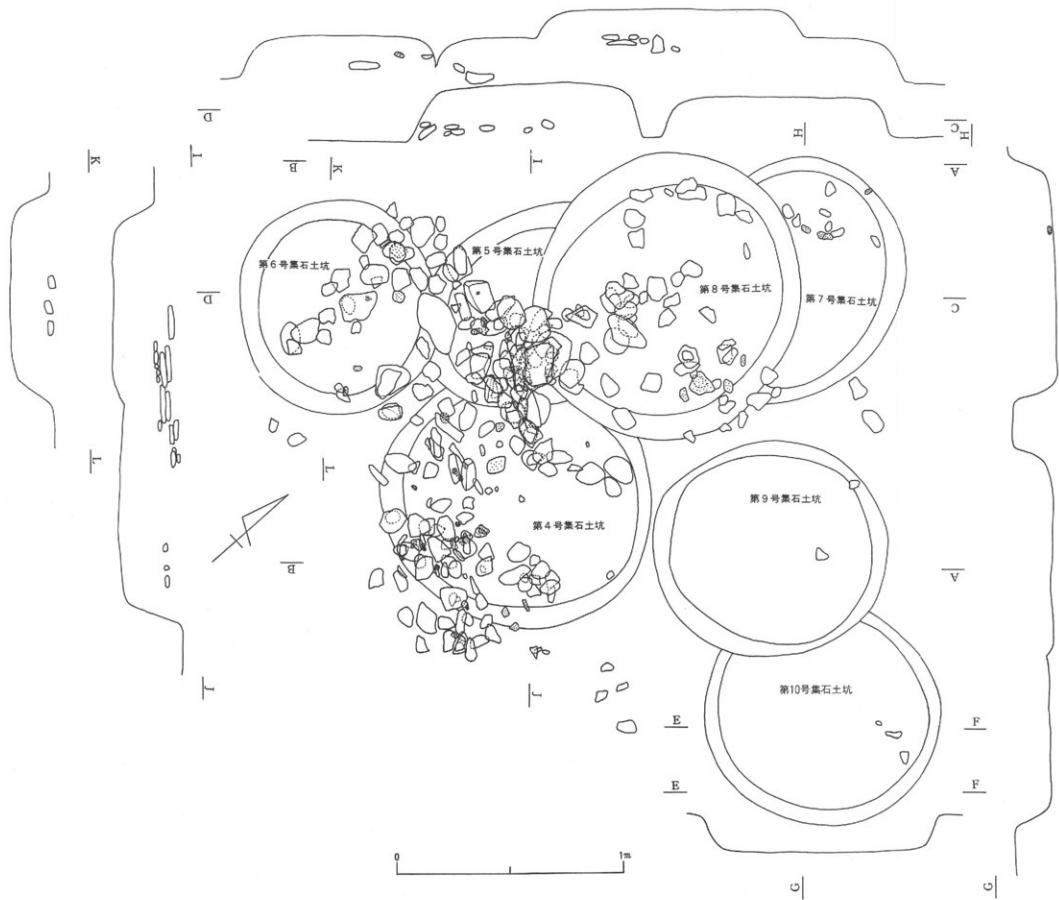
第1次調査における集石土坑は、総数43基におよんだ。これらは、その形状からいくつかに分類する事が出来る。またその分布状態は、調査区北西側の住居址間に位置するもの（このうちの北側をA群、南側をB群として分けた）と、南西側の台地端に位置するものとに大別される。構築時期については、覆土や出土遺物から縄文早期前半と考えられる。

第1号集石土坑（第57図・第65図）

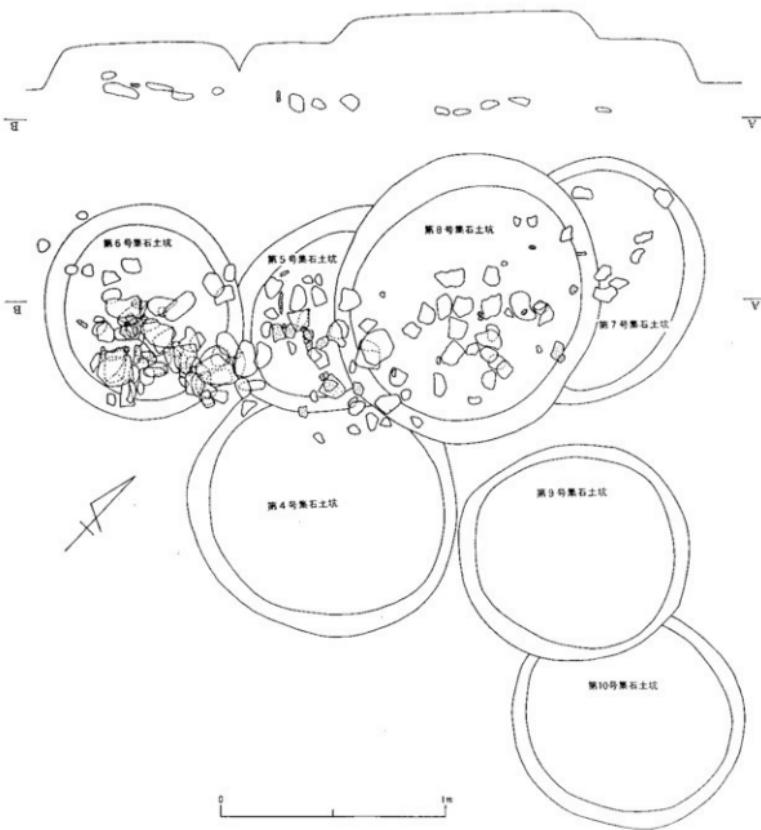
A-1グリッドのほぼ中央部から検出された。調査区の最も西北部に位置し、すぐ北側には炉穴群がある。（図版59）28個の角礫によって構成される。形状は橢円形を呈し、規模は長径1.3m、短径1.15m、最深部での深さは0.12mを測る。主軸の方向は、N-49°-Eを示す。遺物は、撲糸文土器の小破片1点（第102図1）と磨石3点が出土している。断面は浅い皿状で、底面はほぼ平坦となりゆるやかに立ち上がる。

第2号集石土坑（第57図・第65図）

A-1からB-1グリッドにかけて検出された。第1号集石土坑の東隣に位置している。57個の角礫によって構成される。形状は橢円形を呈し、規模は長径1.03m、短径0.99m、最深部での深さは0.15mを測る。主軸の方向はN-3°-Eを示す。遺物は、撲糸文土器9点（第102図2～10）が出土している。南側には50×35mの大きな石を置いている。断面は浅いタライ状を呈し、底面はほぼ平坦となる。



第67図 第1次調査第4号・5号・6号・7号・8号・9号・10号集石土坑実測図(1)



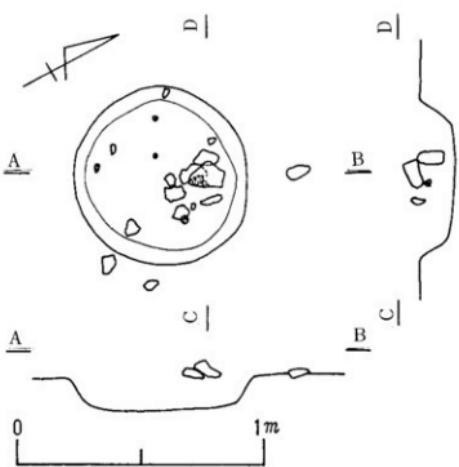
第68図 第1次調査第4号・5号・6号・7号・8号・9号・10号集石土坑実測図（2）

第3号集石土坑（第57図・第66図）

B-1 グリッドの北西部から検出された。第2号集石土坑のすぐ北東側に位置している。37個の角礫によって構成される。形状はほぼ円形を呈し、規模は長径1.04m、短径1.02m、最深部での深さは0.24mを測る。主軸の方向はN-28°-Eを示す。遺物は、撚糸文土器（第102図20・21）など4点が出土している。断面は浅いタライ状を呈し、底面はほぼ平坦となる。

第4号～第10号集石土坑（第57図・第67図・第68図）

いずれも、B-1 グリッドの南西部からそれぞれ切り合い関係を持って検出された。第4号集石土坑は、第5号・第8号集石土坑によって北側部分を切られている。100個の角礫が確認された。形状は円形を呈し、規模は推定直径1.20mと思われる。最深部での深さは0.24mを測る。主軸の方



第69図 第1次調査第11号集石土坑実測図

深部での深さは0.17mを測る。主軸の方向はN-48°-Wを示す。遺物は、第102図13に見るような撲糸文土器など14点が出土している。断面はタライ状を呈し、底面はほぼ平坦となり、西側はやや急にまた東側はゆるやかに立ち上がる。第7号集石土坑は、第8号集石土坑によって約半分ほど切られているが、残存するその形状から楕円形であろうと思われる。第119図1・図版68に示した撲糸文土器が出土している。第8号集石土坑は、第4・5・7号集石土坑をそれぞれ切って構築している。110個の角礫によって構成される。形状は楕円形を呈し、長径1.27m、短径1.16m、最深部での深さは0.23mを測る。主軸の方向はN-24°-Wを測る。第9号と第10号集石土坑は、それぞれ2~3の角礫によって構成される。このうち第9号集石土坑は、第102図27~30に見るような土器4点が出土している。

第11号集石土坑（第57図・第69図）

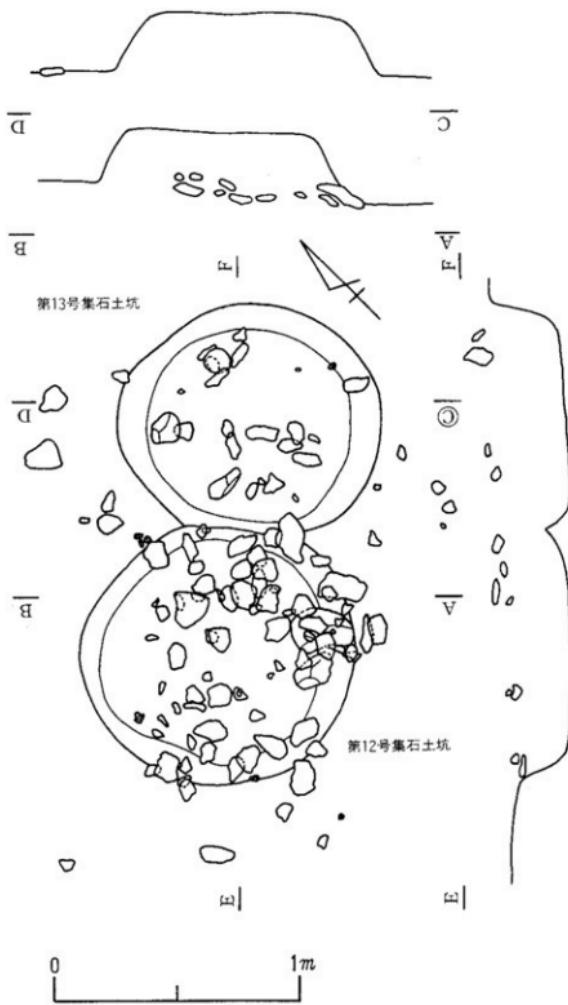
B-1グリッド内中央や東側から単独で検出された。15個の角礫からなる。形状は円形を呈し、規模は長径0.74m、短径0.70m、最深部での深さは0.14mを測る。主軸の方向はN-70°-Wを示す。遺物は、第102図26の撲糸文土器など5点が出土している。26は、口唇上部が丸味を帯びて整形され、また口縁部はやや外反している。Rの撲糸文を、器面に縦位施文しているが、回転というよりむしろひきずっている。

第12号・第13号集石土坑（第57図・第70図）

B-1からC-1グリッドにかけて検出された。第12号集石土坑は第13号集石土坑の南西側を切っている。このうち第12号集石土坑は、75個の角礫によって構成されている。形状はほぼ円形を

向はN-81°-Eを示す。遺物は、撲糸文土器と縄文土器（第102図12・14・18）など17点が出土している。断面はタライ状を呈し、底面はほぼ平坦となり、急激に立ち上がる。第5号集石土坑は、形状はほぼ楕円形を呈するものと思われる。72個の角礫が確認された。規模は、推定長径1.0m、短径0.85mと思われる。主軸の方向はN-9°-Eを示す。遺物は、撲糸文土器（第102図11）など17点が出土している。第6号集石土坑は、第5号集石土坑の一部を切っている。98個の角礫によって構成される。形状は円形を呈し、規模

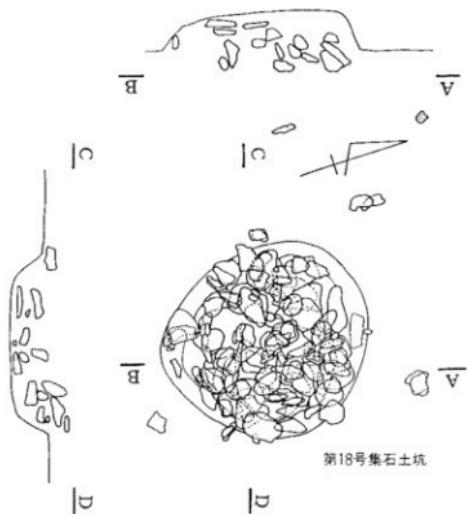
は長径0.94m、短径0.91m、最



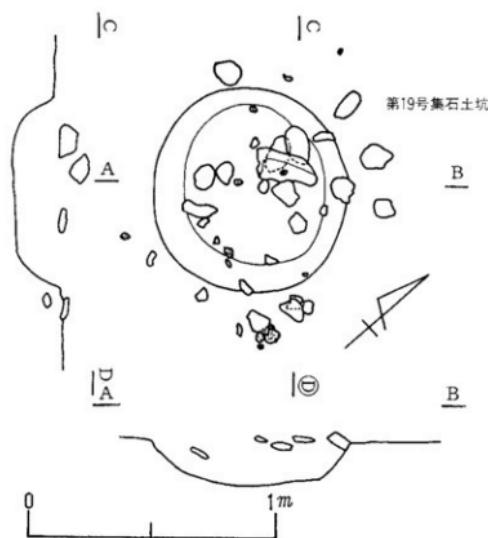
第70図 第Ⅰ次調査第12号・13号集石土坑実測図



第71図 第I次調査第14号・15号・16号・17号集石土坑実測図

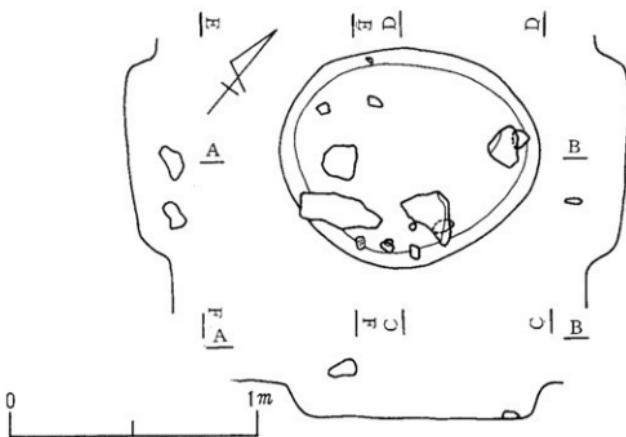


第18号集石土坑



第19号集石土坑

第72図 第1次調査第18号・19号集石土坑実測図



第73図 第Ⅰ次調査第20号集石土坑実測図

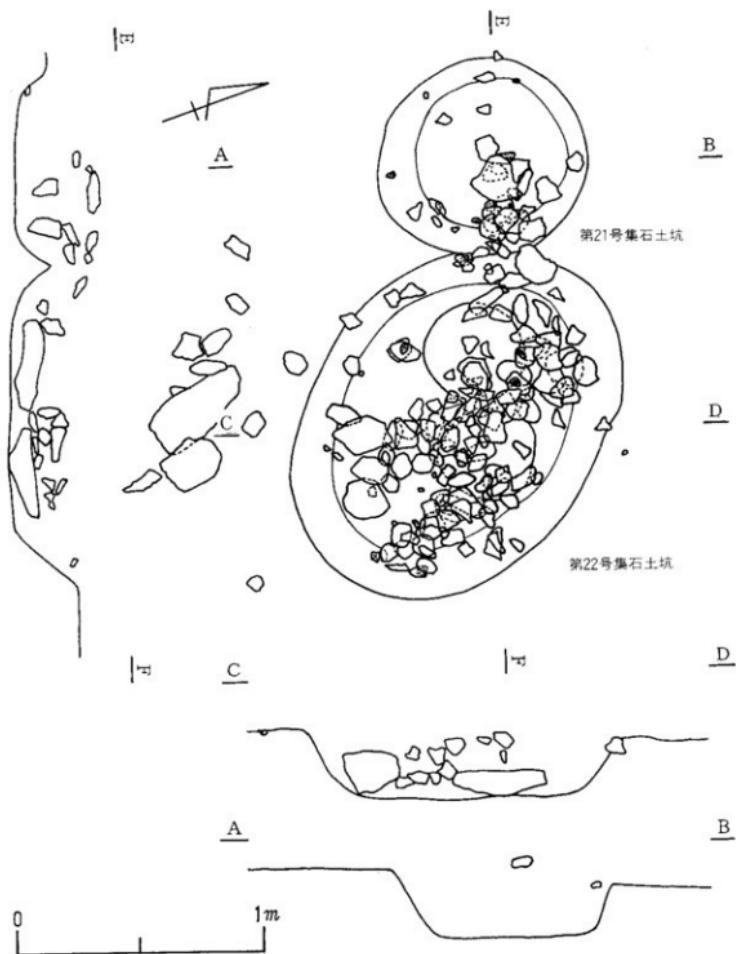
呈し、規模は長径1.10m、短径1.05m、最深部での深さは0.26mを測る。断面はタライ状を呈し、底面はほぼ平坦となり、ゆるやかに立ち上がる。主軸の方向はN-45°-Wを示す。遺物は、第102図31・32の2点が出土している。

第14号～第17号集石土坑（第57図・第71図）

B-Cの1・2グリッドにかけて検出された。第15号集石土坑は第14号集石土坑の西側半分を切って構築している。第14号集石土坑は、形状はほぼ円形を呈するものと推定される。長径1.1mで、最深部での深さは0.26mを測る。断面はタライ状を呈し、底面は平坦となり、立ち上がりは北側でやや緩く、また南側で急となる。主軸の方向はN-55°-Wを示す。遺物は、第102図33～35、第103図1～9に見る撚糸文土器12点が出土している。このうち、33はほぼ直行する口縁部で口唇部は丸く整形されている。口唇上は剥落がひどく不明であるが、裏面には施文が認められる。口縁部は、横位施文と帶状の縦位施文が組合せられている。33・34は、条間はやや開き気味であるがRの撚糸文を縦位施文している。第16号集石土坑と第17号集石土坑は、C-1・2グリッドの中間から検出された。第16号は第17号集石土坑を切って構築している。第17号集石土坑は、形状は不整な円形を呈し、規模は長径1m、短径0.94m、最深部での深さは0.24mを測る。断面はタライ状を呈し、底面はほぼ平坦となり、急な立ち上がりとなる。主軸の方向はN-62°-Wを示す。

第18号集石土坑（第57図・第72図・図版55）

C-1グリッドのほぼ中央に単独で検出された。138個の角礫によって構成される。形状はほぼ円形を呈し、規模は長径0.81m、短径0.80m、最深部での深さは0.16mを測る。断面はやや浅いタライ状を呈し、底面は南に向かって高くなっている。



第74図 第1次調査第21号・22号集石土坑実測図



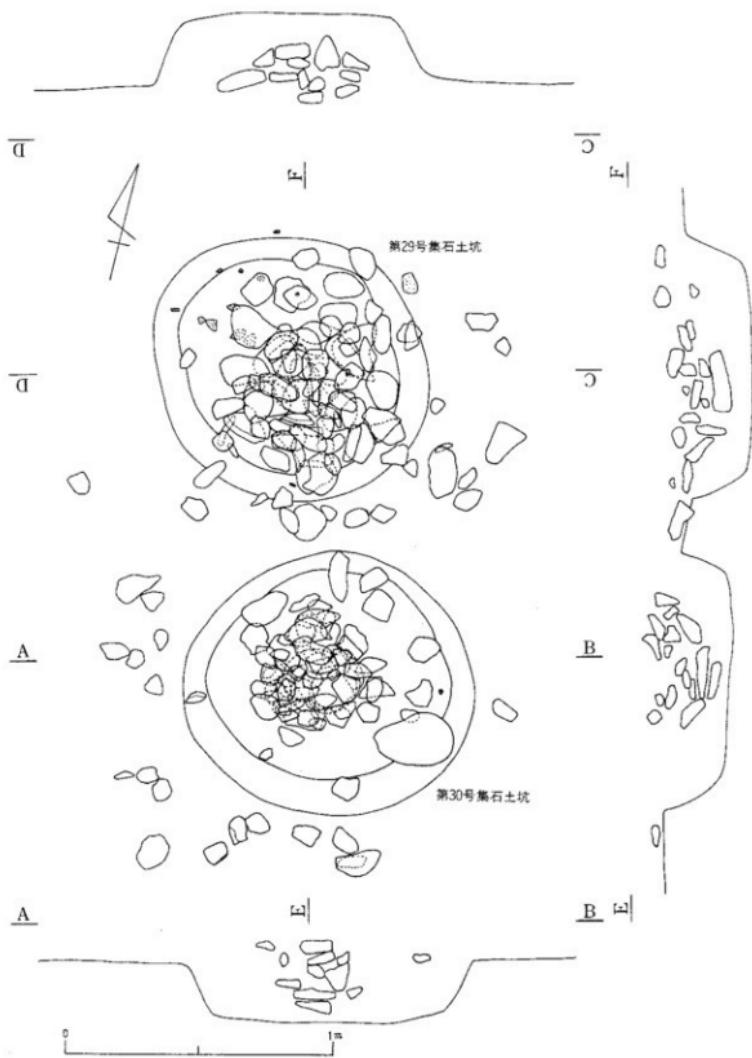
第75図 第1次調査第23号・24号・25号・26号・27号・28号集石土坑実測図

第19号集石土坑（第57図・第72図）

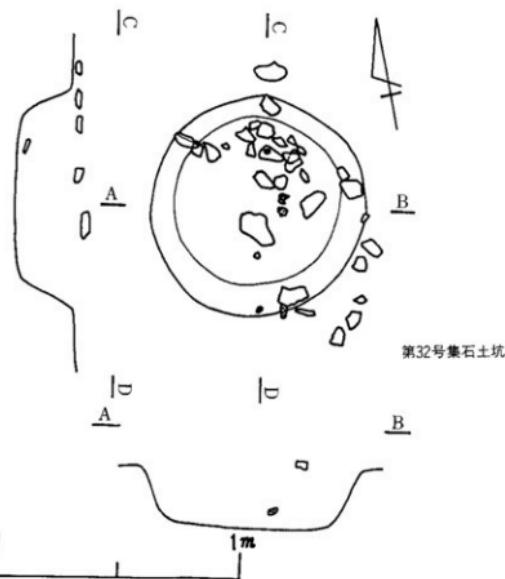
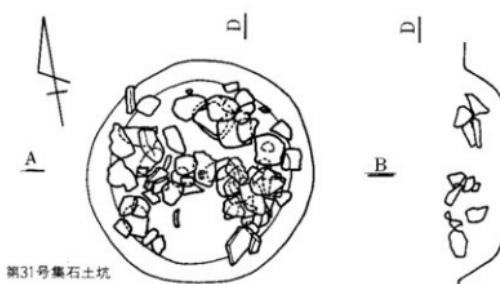
B-2グリッドの南部で検出された。19個の角礫で構成されている。形状はほぼ円形を呈し、規模は長径0.83m、短径0.77m、最深部での深さは0.19mを測る。断面はタライ状を呈するが、底面はやや起伏が見られる。また、立ち上がりは割合に緩やかである。遺物は、撚糸文と縄文を有する土器（第103図13～18）9点が出土している。13は押型文土器？また16は4点が接合出来たものである。Rの撚糸文を弱い回転により縦位に施してある。裏面には煤が付着している。

第20号集石土坑（第57図・第73図）

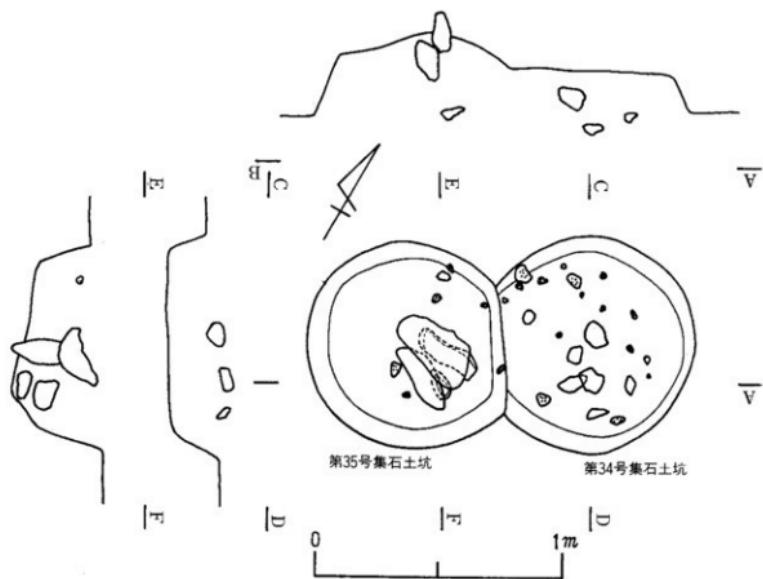
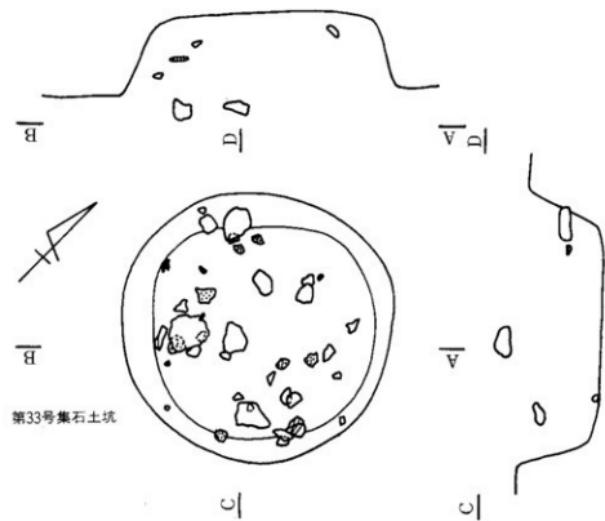
B-Cの2・3グリッドにかけて検出された。13個の角礫によって構成されるが、20～30cmのやや大きい石も含まれている。形状は橢円形を呈し、規模は長径1.02m、短径0.9m、最深部での深さは0.16mを測る。断面は浅いタライ状を呈し、底面は南東に向かって浅くなる。立ち上がりは緩やかである。



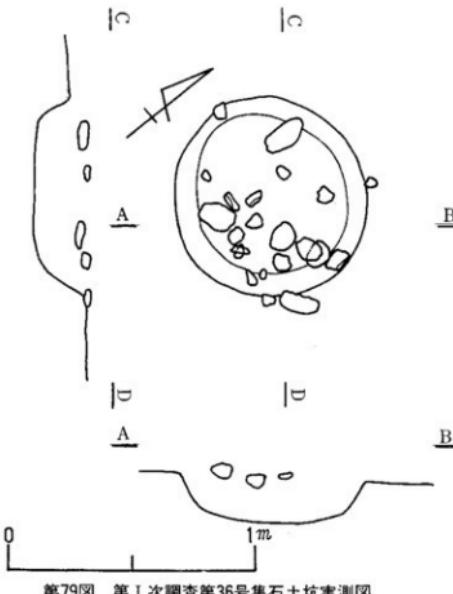
第76図 第1次調査第29号・30号集石土坑実測図



第77図 第1次調査第31号・32号集石土坑実測図



第78図 第1次調査第33号・34号・35号集石土坑実測図



第79図 第I次調査第36号集石土坑実測図

第21・22号集石土坑（第57図
・第74図）

A-2・3グリッドの境付近で検出された。ほぼ東西に並列し、第22号集石土坑が第21号集石土坑の東側の一部を切って構築している。第3号住居址のすぐ南側に位置している。第22号集石土坑は、検出された43基のうち最も多い140個の角礫によって構成されている。また規模も最大で、形状は梢円形を呈し、長径1.53m、短径1.15m、最深部での深さは約30cmを測る。断面は浅いタライ状を呈し、底面は幾分起伏があるもののほぼ平坦となっている。立ち上がりは割合に緩やかである。

また、底面の中央には35~40cm

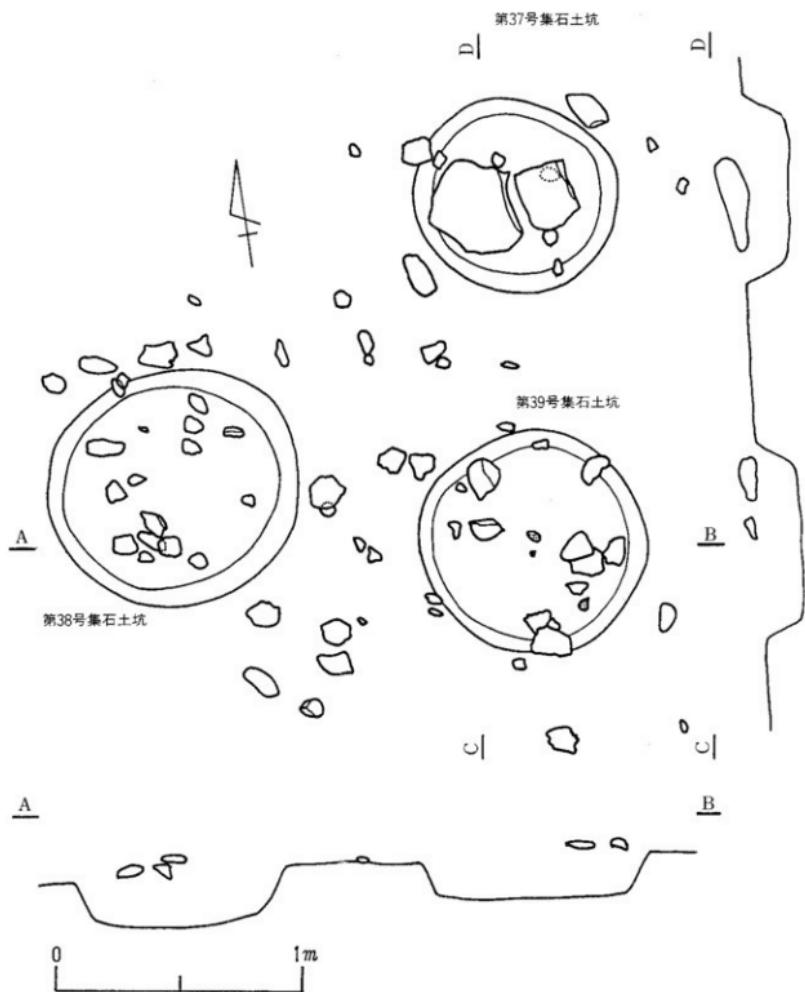
ほどの平らな石が二つ置かれている。遺物は、撚糸文土器（第103図22~27）6点が出土している。22~24のように、口唇部が肥厚するものや薄くなるものなど、それぞれ特徴が見られる。

第23~第28号集石土坑（第57図・第75図）

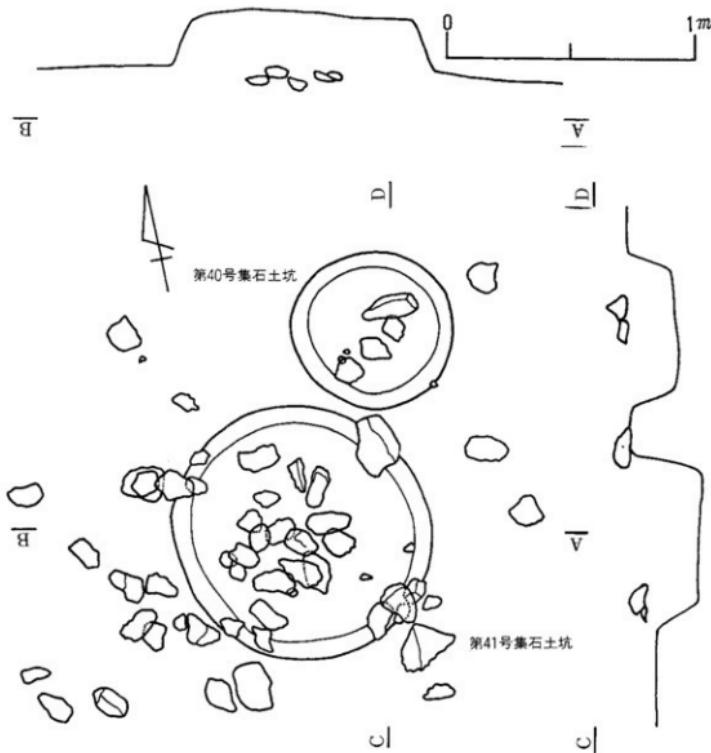
B-3グリッドのほぼ中央に、切り合い関係を持ちながら検出された。とりわけ、第25号集石土坑~第27号集石土坑は、お互いを大きく切って構築している。まず、第23号集石土坑からは第103図28~42に見るような、撚糸文や繩文などを施した土器が15点が出土している。このうち35の文様は、一見すると押型文とも思える。55個の角礫で構成されている。第24号集石土坑からは、第104図1~4に見るような平行する沈線や流水文様の沈線が施された土器が出土している。この種の土器は、第112図1~5に示したように、A-3・5グリッドからある程度器形の分かるまとまったものが出土している。第25号集石土坑からは、第104図5~16のような撚糸文や繩文土器12点が出土している。

第29号・第30号集石土坑（第57図・第76図・図版56）

B-C-3グリッドの境付近で検出された。2つの土坑は、ほぼ同一の規模であり梢円形を呈する。第29号集石土坑は、80個の角礫によって構成されている。長径1.07m、短径1m、最深部での深さは0.24mを測る。断面はタライ状を呈し、底面は僅かに起伏はあるもののほぼ平坦であり、立ち上がりはやや急である。東南部には30×20cmの石が置かれていた。遺物は、第104図19~21の撚糸文土器など12点が出土している。主軸はN-67°-Wを示す。



第80図 第Ⅰ次調査第37号・38号・39号集石土坑実測図



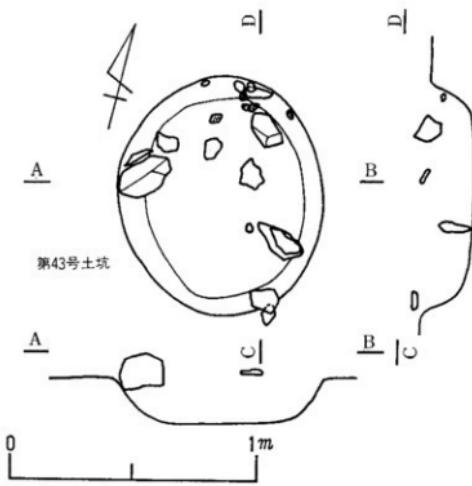
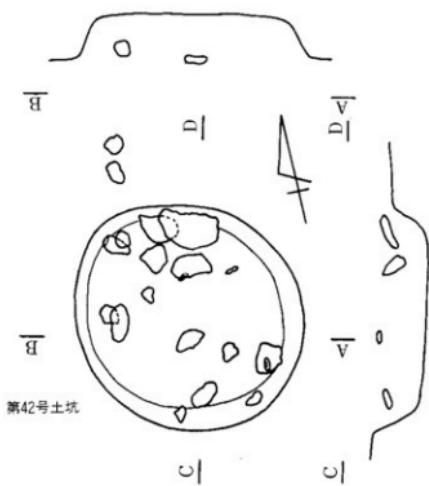
第81図 第1次調査第40号・41号集石土坑実測図

第31号集石土坑（第57図・第77図）

C-3グリッドの中央やや東側から検出された。67個の角礫によって構成される。形状は円形を呈し、長径0.93m、短径0.92m、最深部での深さは0.18mを測る。断面は浅いタライ状を呈し、底面はほぼ平坦となり、立ち上がりは西南側がやや急で北東側は緩やかとなる。主軸はN-12°-Eを示す。検出された全土坑中、最も整った形をしている。遺物は、第104図22・23に見るような土器（撲糸文）と磨石1点が出土している。

第32号集石土坑（第57図・第77図）

C-3グリッドの、第31号集石土坑の北東側に隣接して検出された。33個の角礫によって構成されている。形状は円形を呈し、長径0.9m、短径0.86m、最深部での深さは0.24mを測る。断面はタライ状を呈し、底面はほぼ平坦であるが、北西側がやや浅くなっている。立ち上がりはやや急である。主軸はN-10°-Eを示す。断面はタライ状を呈し、底面は平坦となり、立ち上がりは急である。遺物は、第104図24の撲糸文土器など5点が出土している。



第82図 第1次調査第42号・43号集石土坑実測図

第33号集石土坑（第57図・第78図）

D-2グリッドの北東部から検出された。29個の角礫によって構成される。形状は円形を呈し、長径1.11m、短径1.1m、最深部での深さは0.32mを測る。断面はタライ状を呈し、底面はほぼ平坦であるが、西南側がやや浅くなっている。立ち上がりは割合に急である。主軸はN-42°-Wを示す。遺物は、第104図25・26に見る撲糸文土器など12点が出土している。このうち、25はRの撲糸文を縦位に密接施文している。

第34号～第35号集石土坑（第57図・第78図）

D-2・3グリッドの境付近から検出された。第35号集石土坑は第34号集石土坑の西南部を切って構築している。このうち第35号集石土坑は、中央部に30～36cmほどの石が図のように、一つは土坑底面にはば直立し、この上にまた石が乗っている。形状は円形を呈し、長径0.86m、短径0.79m、最深部での深さは0.34mを測る。断面は椀状を呈し、底面は南東側が深くなっている。立ち上がりはかなり急となっている。主軸の方向は、N-37°-Wを示す。

第36号集石土坑（第57図・第79図）

D-3グリッドの東北部から検出された。第34号・第35号集石土坑の南側に位置している。形状は円形を呈し、規模は長径0.81m、短径0.72m、最深部での深さは0.2mを測る。断面は浅いタライ状を呈し、底面はほぼ平坦となり、立ち上がりは割合に緩やかである。主軸の方向は、N-57°-Wを示す。

第37～第41号集石土坑（第57図・第80図・第81図）

A・B-6・7グリッドにかけて検出された。これまでのものと全く離れた（12～15mほど南南東）場所に位置している。まず第35号集石土坑内には、その規模（長径0.84m、短径0.77m）に比して大きな石（30～40cm）が二つ置かれていた。遺物は、第104図27～29と第105図1～3に見るような土器など8点が出土している。断面はタライ状を呈し、底面は若干の起伏はあるもののほぼ平坦であり、立ち上がりは割合に急である。主軸の方向は、N-10°-Wを示す。また、第41号集石土坑は全土坑中最も規模が小さい（長径0.65m、短径0.6m）ものであった。遺物は出土しなかった。

第42・43号集石土坑（第57図・第82図）

B-2・3グリッドにかけて検出された。いずれも梢円形を呈し、規模はほぼ同じ位である。第42号集石土坑からは、第105図6～10に見るように5点の土器が出土している。6は口縁部破片であり、口唇部は直行し平らに整形されている。この口唇上と口縁部には、ネガティブな押型文が施されている。断面は浅いタライ状を呈し、底面は平坦となり、立ち上がりはやや急である。

土坑No	形態	規模 cm	長軸 方向	検出グリッド	複合関係	除石数	出土遺物	備考
1	楕円	130×115×12	N-49°-E	A-1	単独で存在	28	石3 土器1	
2	椭円	103×99×15	N-3°-E	A-B-1	"	57	土器-7	焼土あり
3	ほぼ円	104×102×15	N-28°-E	B-1	"	37	土器-4	"
4	円	(103)×120×24	N-81°-E	B-1	5号土坑に北側を切られている	100	土器-17	
5	楕円	99×(41)×19	N-9°-E	B-1	4号土坑に南、5号に東を切られている	100	土器-17	
6	円	94×91×17	N-48°-W	B-1	5号土坑に東側を少し切られている	98	土器-14	
7	椭円	108×57×20	N-0°-N	B-1	4号土坑に西半分を切られている	13	土器-4	
8	椭円	127×116×47	N-24°-W	B-1		110	土器-12	
9	円形	97×101×17	N-71°-W	B-1		2	土器-4	焼土あり
10	円形	(90)×102×18	N-48°-W	B-1	9号土坑により北西部分を切られている	3	土器-0	"
11	円形	74×70×14	N-70°-W	B-1	単独で存在	15	土器-5	
12	円形	110×105×28	N-45°-W	B-C-1		75	土器-2	
13	円形	105×(94)×24	N-48°-W	C-1	12号土坑により西側壁部分が切られている	24	土器-1	
14	円形	110×(38)×26	N-55°-W	B-C-1+?	15号土坑により東側が大切に切られている	11	土器-12	
15	円形	97×93×28	N-6°-E	C-1+2		25	土器-3	
16	円形	90×89×28	N-38°-W	C-2		16	土器-0	
17	不整円形	100×94×24	N-62°-W	C-1+2		33	土器-3	
18	不整円形	81×80×16	N-5°-E	C-1	単独で存在	138	土器-1	
19	円形	83×77×19	N-52°-W	B-2	"	19	土器-6	
20	不整円形	102×90×16	N-52°-E	B-C-1	"	13	土器-1	
21	円形	84×81×26	N-3°-E	A-B-2+3		32	土器-6	
22	椭円形	153×(115)×30	N-26°-W	A-B-2+3		140	石5 土器6	
23	椭円形	127×(99)×?	N-8°-W	B-3		55	土器-2	焼土あり
24	円形	87×90×?	N-59°-E	B-3		18	土器-0	
25	椭円形	115×(78)×?	N-14°-W	B-3		21	土器-12	焼土、炭化物あり
26	円形?	97×(97)×?	N-24°-E	B-3	北側を27号土坑に切られ西側を25号土坑に切られている	45	土器-0	
27	不整円形	97×(90)×?	N-33°-E	B-3		58	土器-5	焼土あり
28	円形	78×75×?	N-16°-W	B-3	単独で存在	17	土器-0	炭化物全体にあり
29	不整円形	107×100×27	N-67°-W	B-C-3	"	80	土器-12	焼土あり
30	不整円形	109×100×24	N-98°-E	B-C-3	"	72	土器-1	
31	円形	93×92×18	N-12°-E	C-3	"	67	石5 土器2	
32	円形	90×86×24	N-10°-E	C-3	"	33	土器-5	
33	円形	111×110×32	N-42°-W	D-2	"	29	土器-12	
34	円形	90×(78)×18	N-31°-W	D-2	35号土坑に西側を切られている	10	土器-13	
35	円形	86×79×34	N-37°-W	D-2+3	34号土坑と複合だが切られていない	5	土器-6	
36	円形	81×72×20	N-57°-W	D-3	単独で存在	22		
37	円形	84×77×28	N-10°-W	B-6	"	8		
38	円形	101×96×21	N-87°-W	A-B-6+1	"	17		
39	円形	91×90×16	N-0°-N	B-7	"	14	土器-3	
40	円形	80×65×19	N-13°-E	B-7	"	7		
41	円形	103×103×24	N-18°-W	B-7	"	30		
42	不整円形	94×92×18	N-28°-W	B-2	"	18	土器-2	
43	椭円形	98×83×18	N-18°-W	B-2+3	"	15	土器-5	

() は推定 第6表 第Ⅰ次集石土坑一覧表

C. 配石土坑（第83図・図版54）

第56図・58図・86図・図版52、B-3グリッドの南東側と、C-3グリッドの南西側からそれぞれ1基づつ検出されている。第58図～第86図・図版52の第2配石遺構を精査していると、これまでとは違った、楕円形のやや黒い落ち込みの部分が認められたので追求した所、その下部から石を配した土坑が見つかったのである。構築時期については、覆土や出土遺物から縄文早期前半と考えられる。

第1配石土坑 長軸を東西にして5～25cmほどの石12個によって構成されている。形状は楕円形を呈する。図で見るよう、南北の堀込み部には石を立てて構築している。長径0.88m、短径0.55m、最深部での深さ0.15mを測る。断面はやや椀状に近く、底面は起伏があり東側が高くなっている。この高くなった場所に、一辺が15cm前後の角ばった石が置かれていた。立ち上がりはわりあいに緩やかである。遺物は、第105図16～19の土器3点が出土している。16・17は田戸下層に比定されるものである。

第2配石土坑 長軸を南北にして5～15cmほどの石11個によって構成されている。形状は楕円形を呈する。長径0.93m、短径0.75m、最深部での深さ0.18mを測る。断面はクライ状を呈し、底面は南に向かって浅くなっている。遺物は、第105図20の撚糸文土器1点が出土している。これら2つの配石土坑は、その形状や遺物から中期の配石遺構とは切離して考えたい。

D. 配石遺構（第84図～第88図・図版52・53）

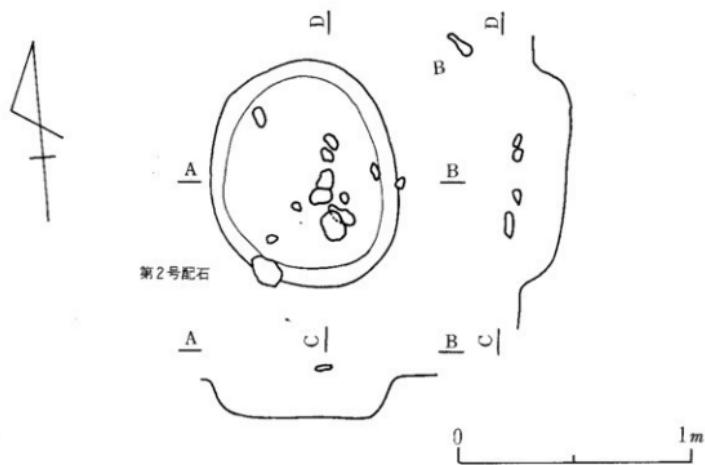
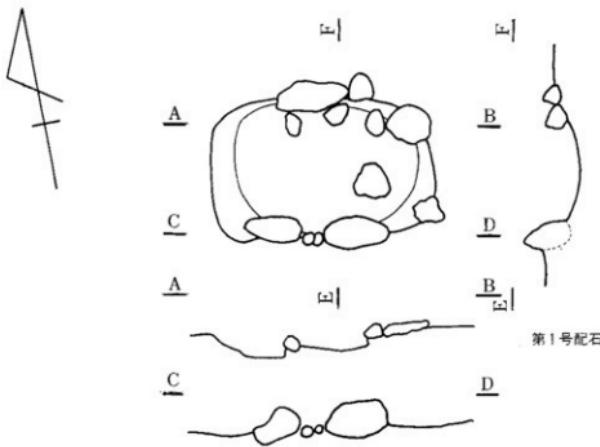
配石遺構は、A～Dの2～4グリッド内から4基検出されている。いずれも第II層下部に構築されたものであり、いわゆる立体配石と称せられるもの1基と、帯状配石3基であった。これらの配石は、かつて耕作の際には大変な妨げとなつたようで、かなりの石が取り除かれていた。従つて、しばしば農機具を破損する事があったと言われる。構築時期は、縄文中期後半と考えられる。

第1配石遺構 A-2グリッド内からB-2グリッドにかけて検出された。第3号住居址と第5号住居址の間に位置している。南北4.6m、東西2.4mの規模であり、長さ40～80cmほどの石10数個を馬蹄形に配し、これを中心に南北に15～45cmの石を並べている。このうち、東側の数個の石については立ててあり、構築時における何等かの意識が伺えるものである。またこの立石の近くからは、曾利Ⅲ式に比定される深鉢型土器（第119図・図版72）が出土している。なお、配石の内側および下部からは土坑は確認されなかった。

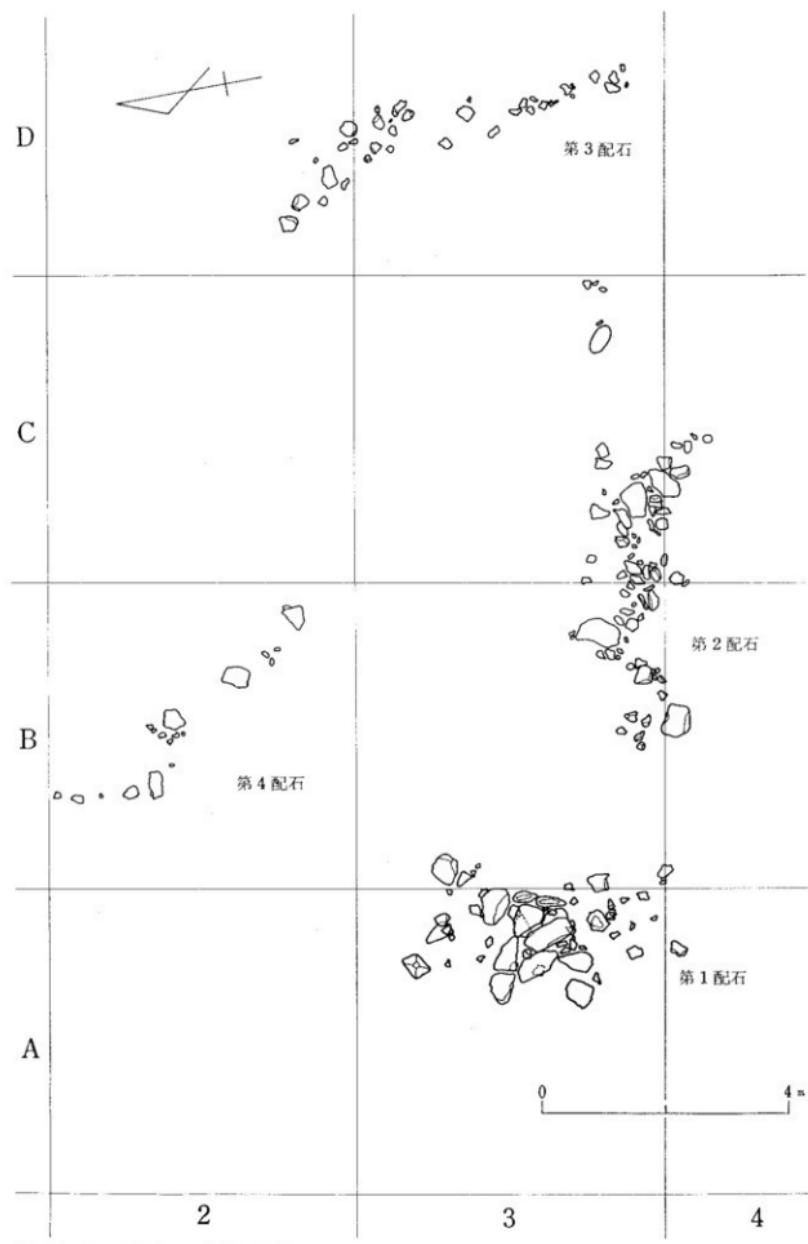
第2配石遺構 B・Cの2・3グリッドにまたがって検出されている。東西5.2m、南北2mほどの帯状配石である。全体的にみれば、その平面はやや弧状をなしていると言えようか。45～75cmの石数個が含まれるが、他は10～30cm程度の石を並べている。この配石の中には磨石が含まれている。

第3配石遺構 B-1・2グリッド内から検出されている。南北5.8m、幅1mの規模であり、その主軸はやや西に振っている。

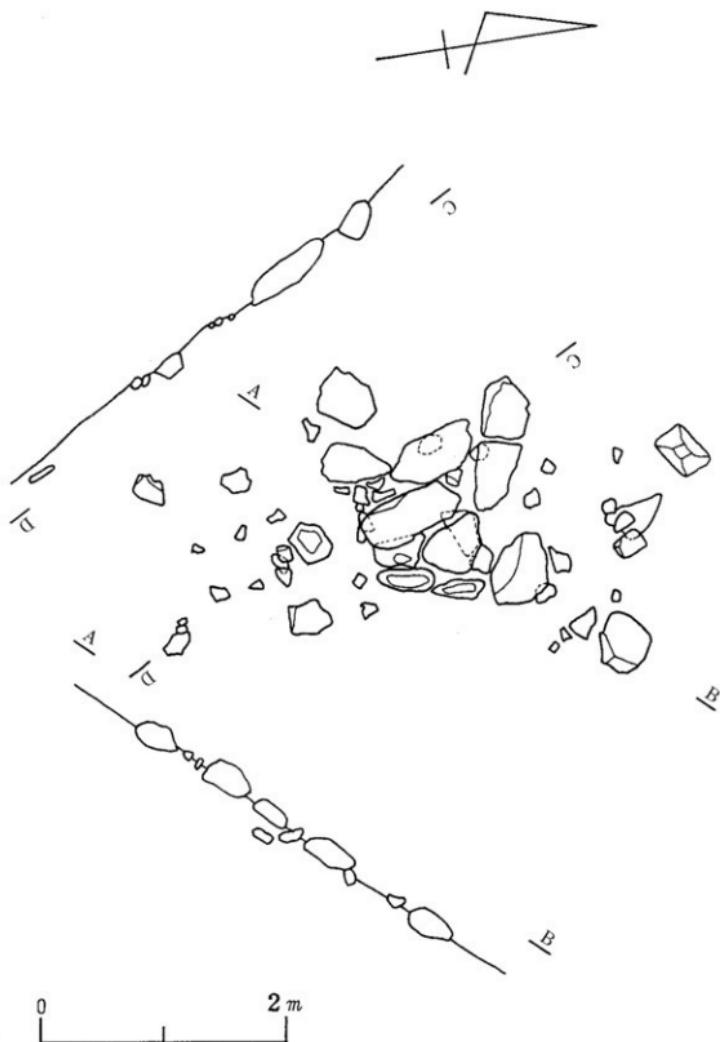
第4配石遺構 B-1グリッド内から検出されている。第3配石と同様に、主軸はやや西に向かっている。10～40cmの石を並べてあり帯状をなす。



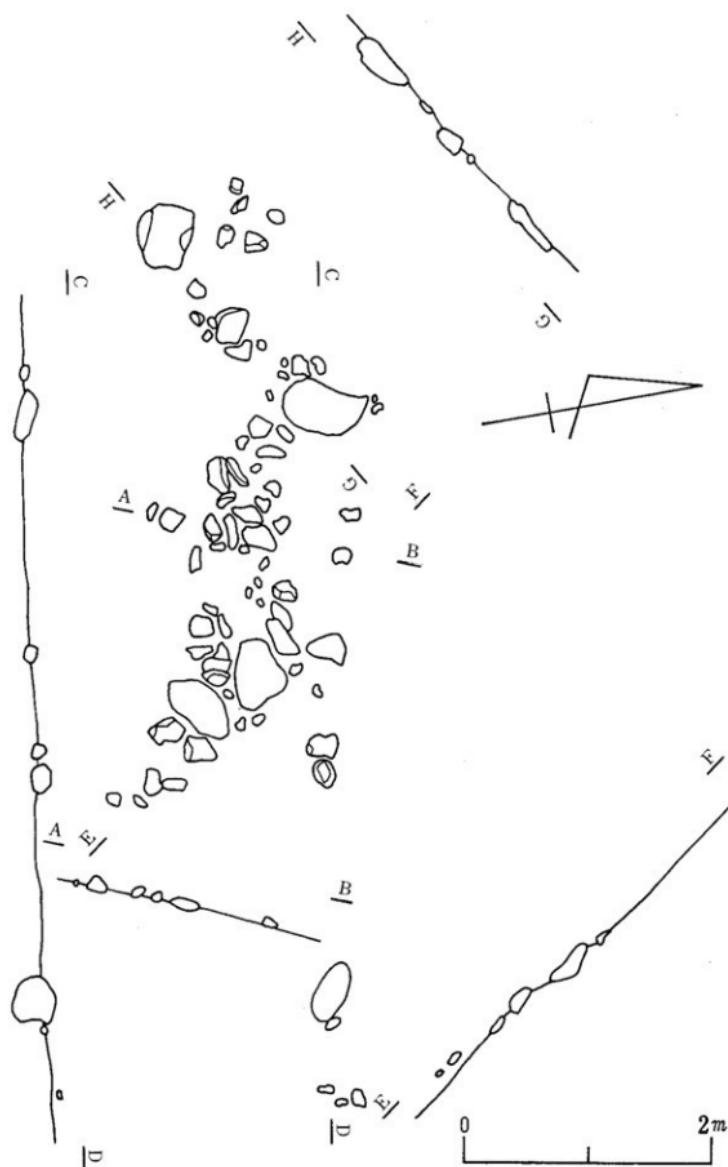
第83図 第1次調査第1号・2号配石土坑実測図



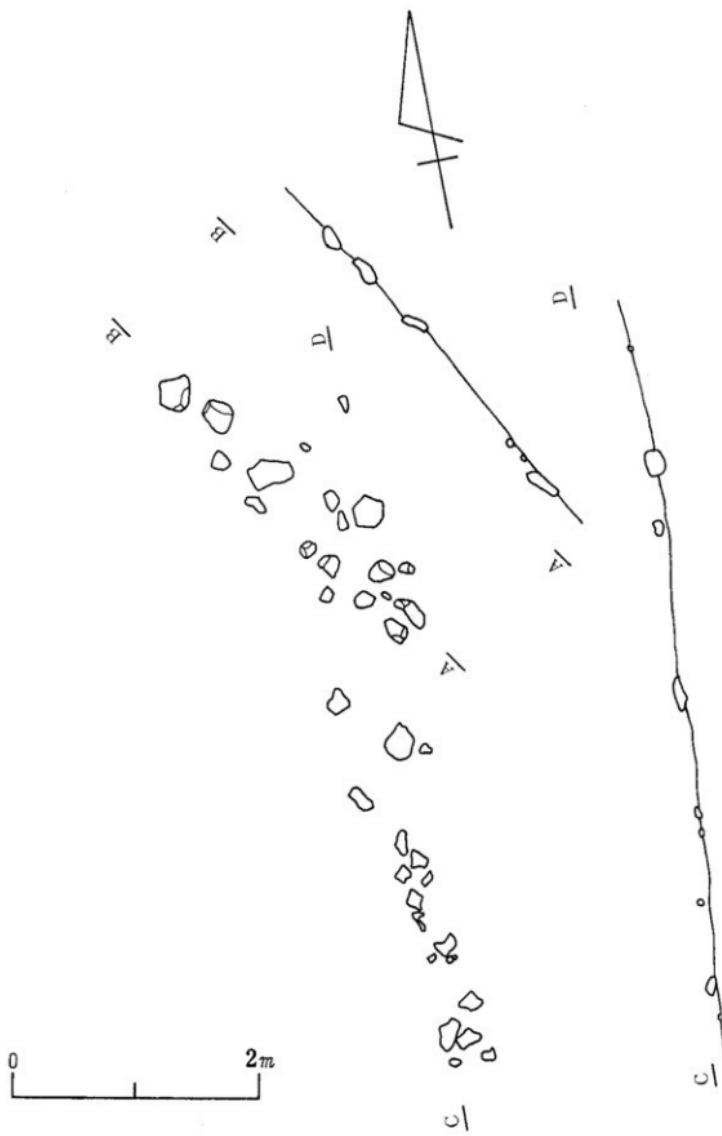
第84図 第1次調査配石構造関連図



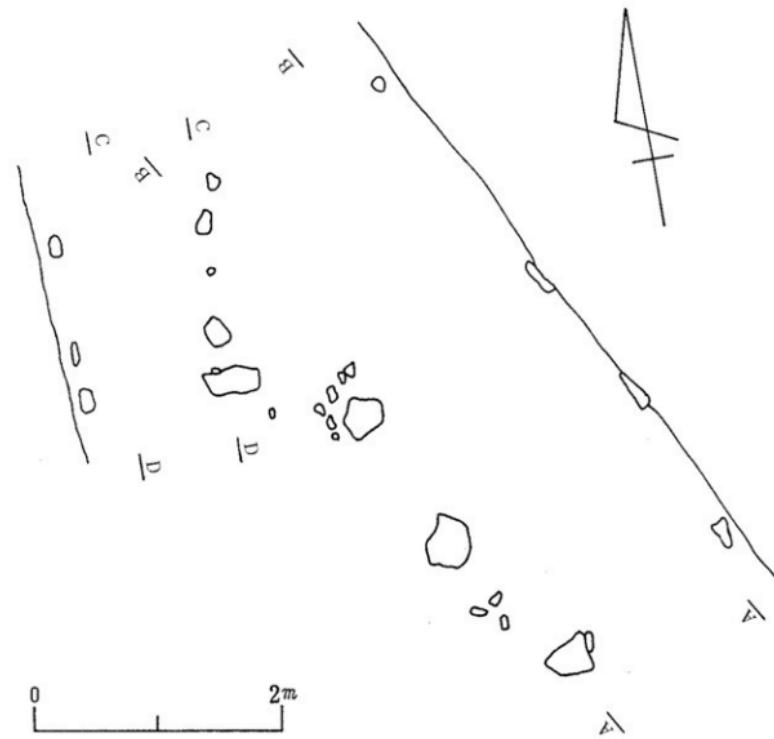
第85図 第1次調査第1配石実測図



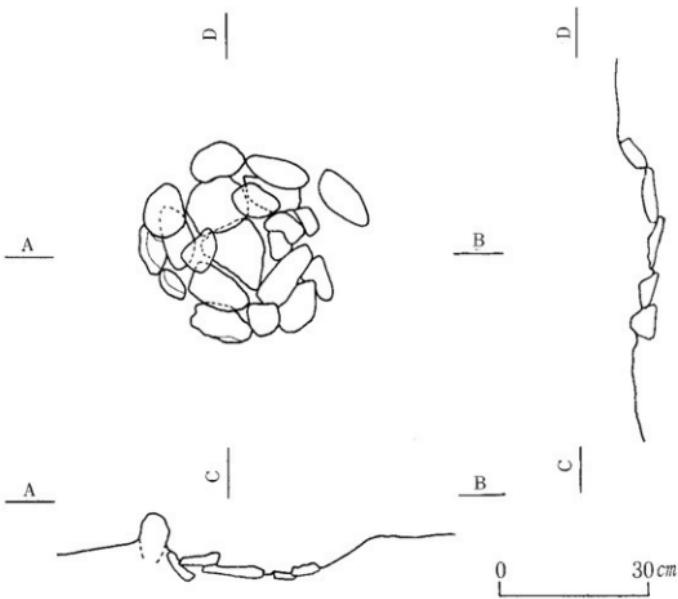
第86図 第1次調査第2配石実測図



第87図 第Ⅰ次調査第3配石実測図



第88図 第1次調査第4配石実測図



第89図 第Ⅰ次調査集石炉実測図

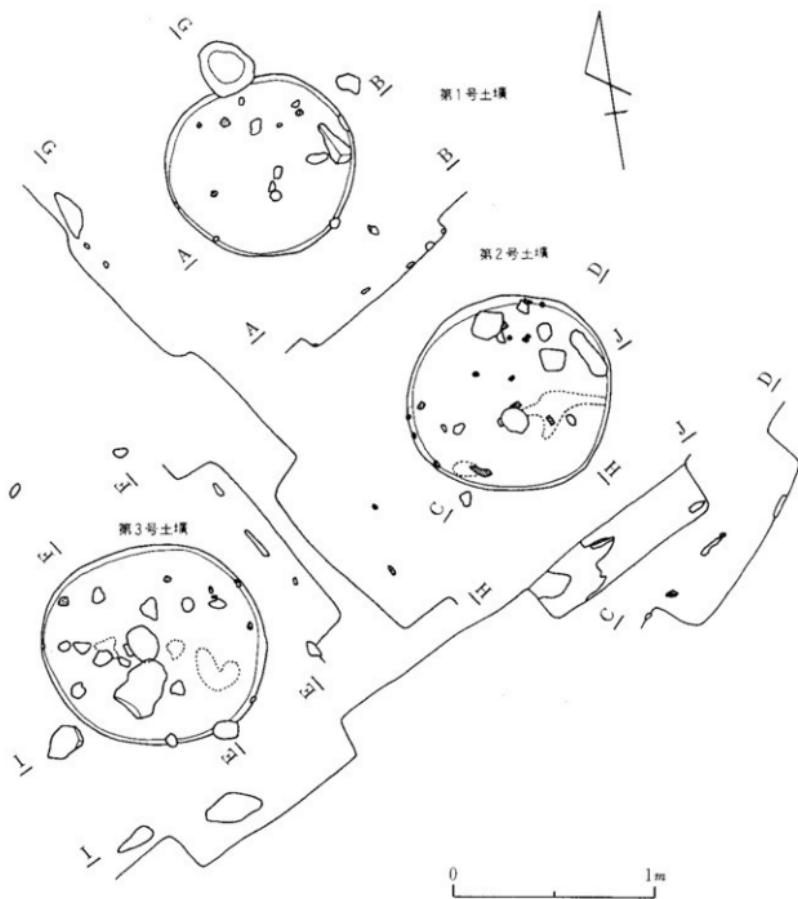
E. 集石炉 (第89図・図版59)

D-4グリッド内の西側から1基検出されている。他の遺構とはかけ離れた場所に位置している。地形的には南側の一段高い部分に当たる。構築時期はやや不明ではあるが、縄文中期と考えられる。

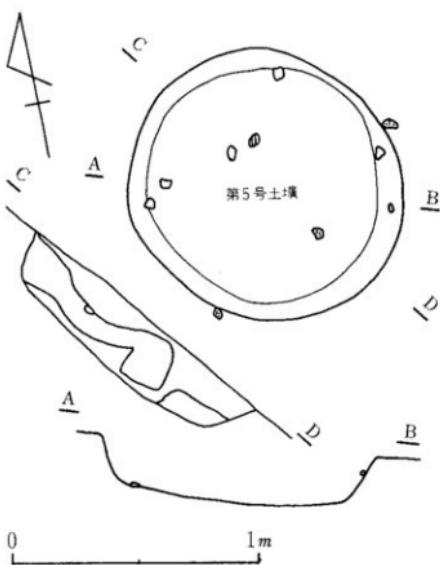
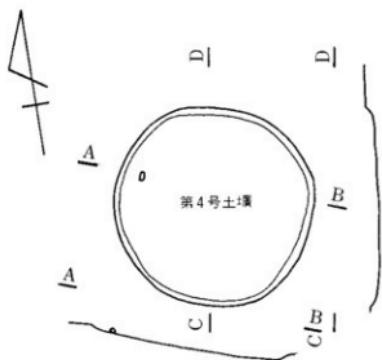
径30~40cmほどの円形を呈する。断面は浅い皿状を呈し、底面はほぼ平らに近い。比較的浅い堀込みの中に5~10cmほどの板状の礫を同心円状に並べたもので、その礫はいずれも火熱を受け焼けた痕跡があった。

F. 円形土壙 (第90~93図)

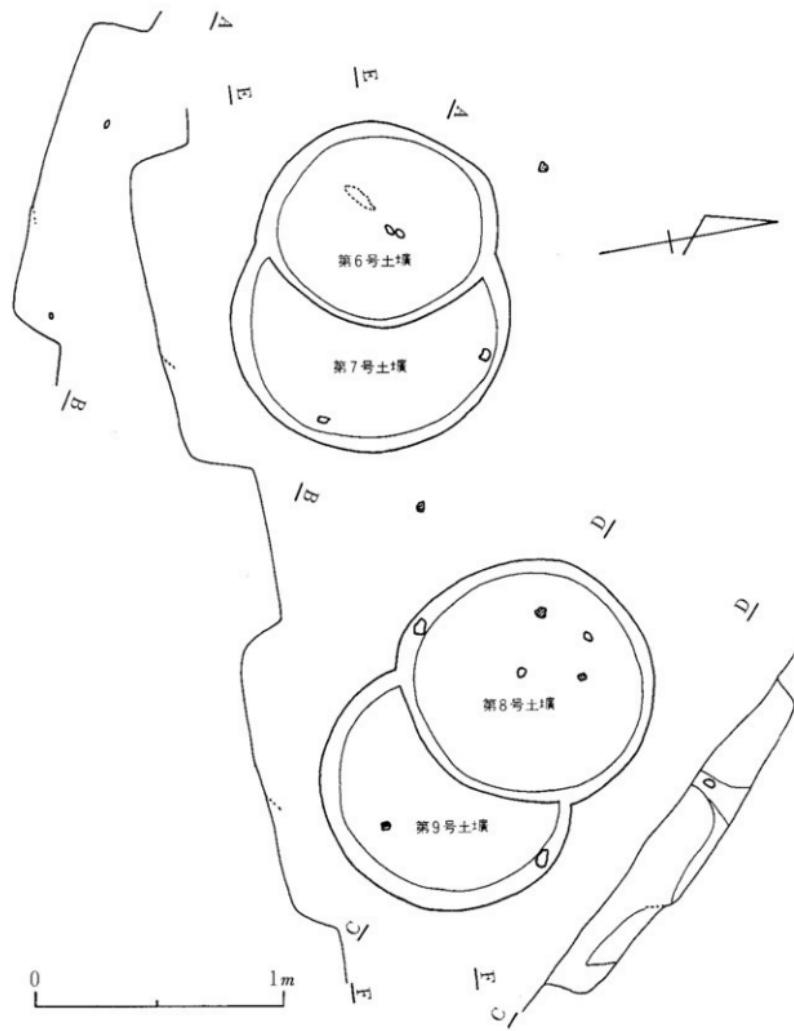
円形土壙は、A・B-1グリッドに3基、E・F-2グリッドに4基、比較的まとまって検出されており、他の3基は単発で検出された。このうち、第6号~第9号円形土壙は、それぞれ切り合って構築されている。覆土は黒灰色を呈しており、B遺跡のものに共通している。形状はほぼ円形を呈し、直径は1m前後のものが多い。断面はタライ状を呈し、底面は平坦となり、その堀込みはかなり垂直に近い。覆土中に大小の礫が見られるが、遺物は検出されなかった。



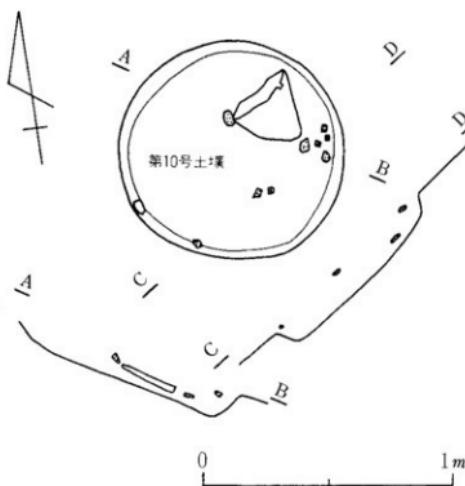
第90図 第1次調査第1号・2号・3号円形土壌実測図



第91図 第1次調査第4号・5号円形土壤実測図



第92図 第1次調査第6号・7号・8号・9号円形土壤実測図



第93図 第10号円形土壤実測図

3. 遺物

A. 土器 (第94図～第120図)

第1次調査で出土した土器は、全て縄文式土器に限られる。大別すると早期と中期の土器で、前者は圧倒的に撚糸文系の土器が多く、後者は曾利式および加曾利E式に比定される土器が見られる。また、僅かながら後期と晩期の土器も見られる。このうち、早期前半の土器を第1群土器、早期後半の土器を第2群土器、中期の土器を第3群土器、後期の土器を第4群土器、晩期の土器を第5群土器として分類して述べる。

第1群土器 (早期前半の土器)

第1類 押型文土器 (第106図1～20) 山形文と格子目文とに分けられる。1～8・10、11は山形文であるが、A遺跡・B遺跡出土のものに比べてその山が大きい。1・2はやや外反する口縁で、平らに整形された口唇上に施文されている。表面は継位にまた裏面は横位に施文されている。1は、一つの山の長さ18mm、山の高さ6.5mmほどである。表面には補修孔が両方から穿たれている。内面には指頭圧痕が見られる。焼成は極めて良く堅い。色調は灰褐色から黒褐色を呈し、胎土中には細砂と繊維が含まれている。器厚は8.5mm。12はかなり外反する口縁で、口唇上は平らに整形されている。やや大きい長方形が斜めに連続して施文されるものである。また口唇上にも施文されている。内面には指頭圧痕がある。焼成は良く堅い。色調は暗灰褐色を呈し、胎土中には白色粒・砂粒と繊維が含まれている。器厚は口唇部で6.5mm、胴部で9.5mm。14は、同じく格子目の押型文

であるが、格子目のそれぞれの形状は菱形に近いものである。丸く整形された口唇上に施文され、口縁部に縦位密接施文されている。さらに裏面には横位施文されている。内面には調整の際の指頭圧痕が見られる。焼成は良く堅い。色調は赤褐色を呈し、胎土中には細砂と淡黄色粒が含まれている。

第2類 摺糸文を有する土器（第106図21～29、第107図～第109図） 原体である摺紐が太いものと細いものがあり、またコイル状に巻いたその間隔は、極めて密なものと粗いものとがあってバラエティーに富んでいる。口縁部は、平坦もしくは丸く整形したものが多いが、やや角頭状のものもある。16は、やや外反する口縁部であり口唇を丸く整形してある。細いRの摺糸文を横位に施文し、そこから、縦位に交叉させて施文している。器面は丁寧に調整されている。器厚は10mm。22は、表面にRの粗い摺糸文を縦位に施し、裏面にはこれを斜めに施してある。焼成はわりあいに良い。色調は暗赤褐色を呈し、胎土中には橙色粒が含まれている。器厚は口唇部で6mm、下部で9.5mm。第106図29は、口唇部の内側を薄く整形し大きく外反させている。口縁部にやや斜めに縦位施文している。口縁の内側にも施文らしきものが見られるがはっきりしない。焼成はあまり良くなない。色調は暗褐色を呈し、胎土中には粗い砂粒と淡黄色粒、それに纖維が含まれている。器厚は口唇部で5mm、下部で10.5mm。

第3類 繩文を有する土器（第110図1～21） 繩文原体が比較的細いものと太いものとがある。またその原体の摺りには強弱の差が見られる。口唇部は丸く整形されたものや平坦なもの、さらに尖頭状のものもある。口縁は直行するもの、大きく外反するものがある。1・2は口唇部を肥厚させ、胴部は薄く仕上げている。1の器厚は口唇部で10mm、下部で7mm。7は口縁部がかなり外反し尖頭状をなしている。20は底部破片で、乳頭状を呈する尖底をなすものである。Rの繩文が全面に見られるが、完全に末端部にまでは施文されていない。一度底部の形を作った後、再び内面の底に粘土を重ね合わせている。しかし、内面の調整は粗雑である。

第4類 摺糸原体によると思われる条痕を有する土器（第111図1～5） 摺紐をコイル状に巻きつけたもので条痕を施したと思われる土器で、いわゆるひきずった施文をしてある。器面に対して斜め方向、あるいは縦方向に施されている。1は、口唇部は円頭状に整形され下部は薄くなっている。（口唇部で8.5mm、下部で6mm）口唇部はやや外反している。口唇上に施文、口縁部は斜位に施文している。焼成は悪く脆い。色調は暗褐色を呈し、胎土中には細砂と細かい淡黄色粒、それに纖維が含まれている。

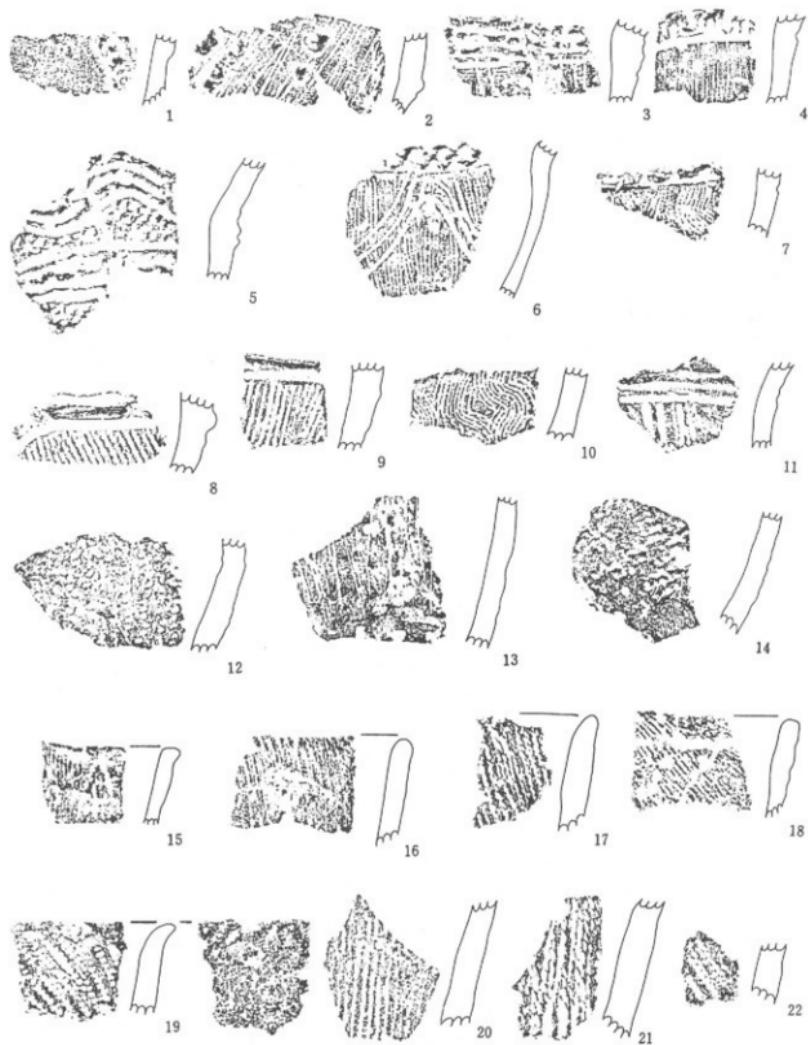
第5類 田戸下層式に比定される土器（第111図6～16） 太い沈線文と竹管状工具による爪形の刺突文や、貝殻腹縁文が施される土器で、田戸下層式に比定されるものであろう。沈線文は比較的深くまたシャープに施されている。13は胴部破片であるが、かなり大きな器形をなすものである。焼成は極めて良く堅い。色調は明褐色を呈し、胎土中には砂粒と淡黄色粒および雲母が含まれている。器厚は13mm前後。

第2群土器（早期後半の土器）

第1類 条痕文を有する土器（第111図17～27） 条痕文を有するもので、主として貝殻による条痕文が口縁に対して横位あるいは縦位に施されている。17は口縁部に縦位施文してあるが、密接



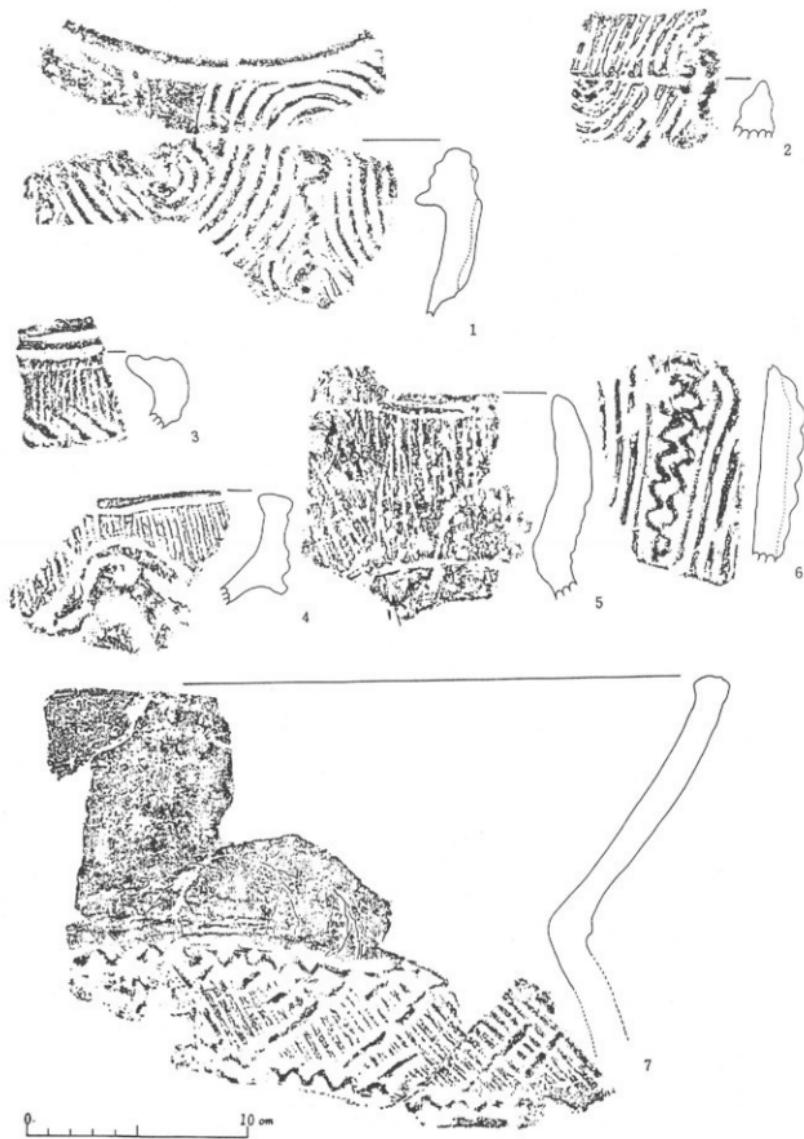
第94図 第Ⅰ次調査出土土器拓影（1）



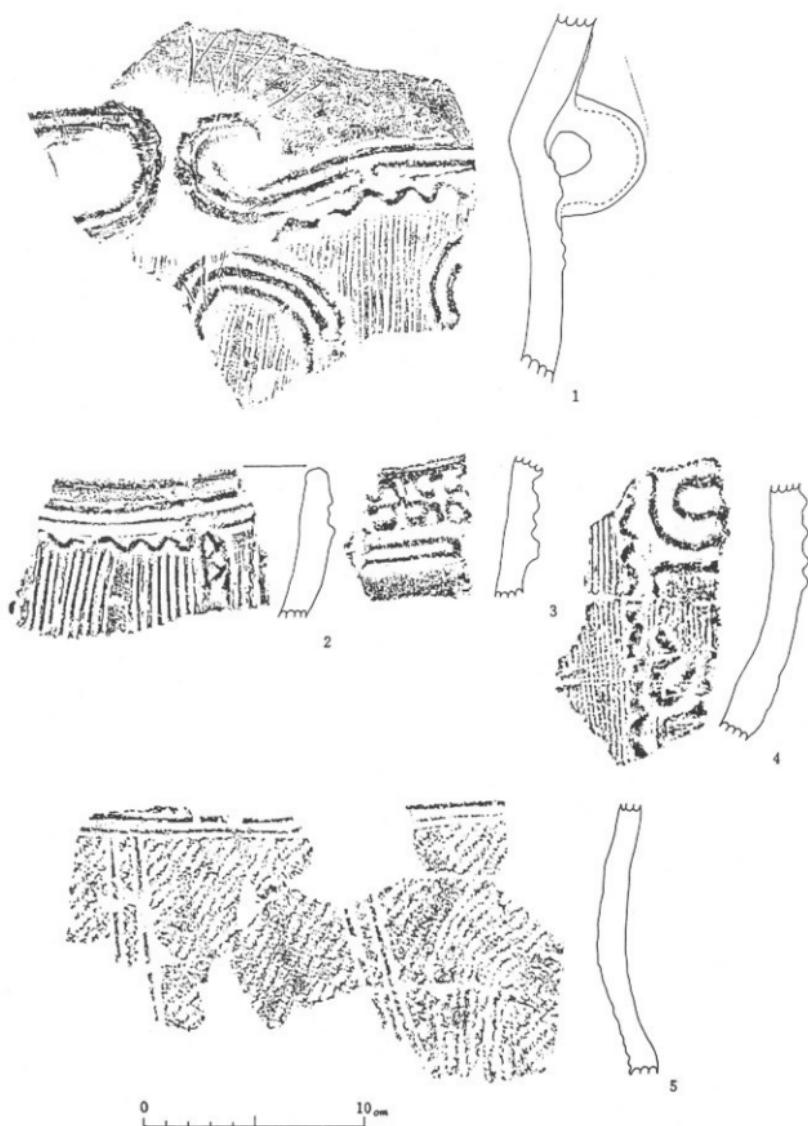
第95図 第Ⅰ次調査出土土器拓影 (2)



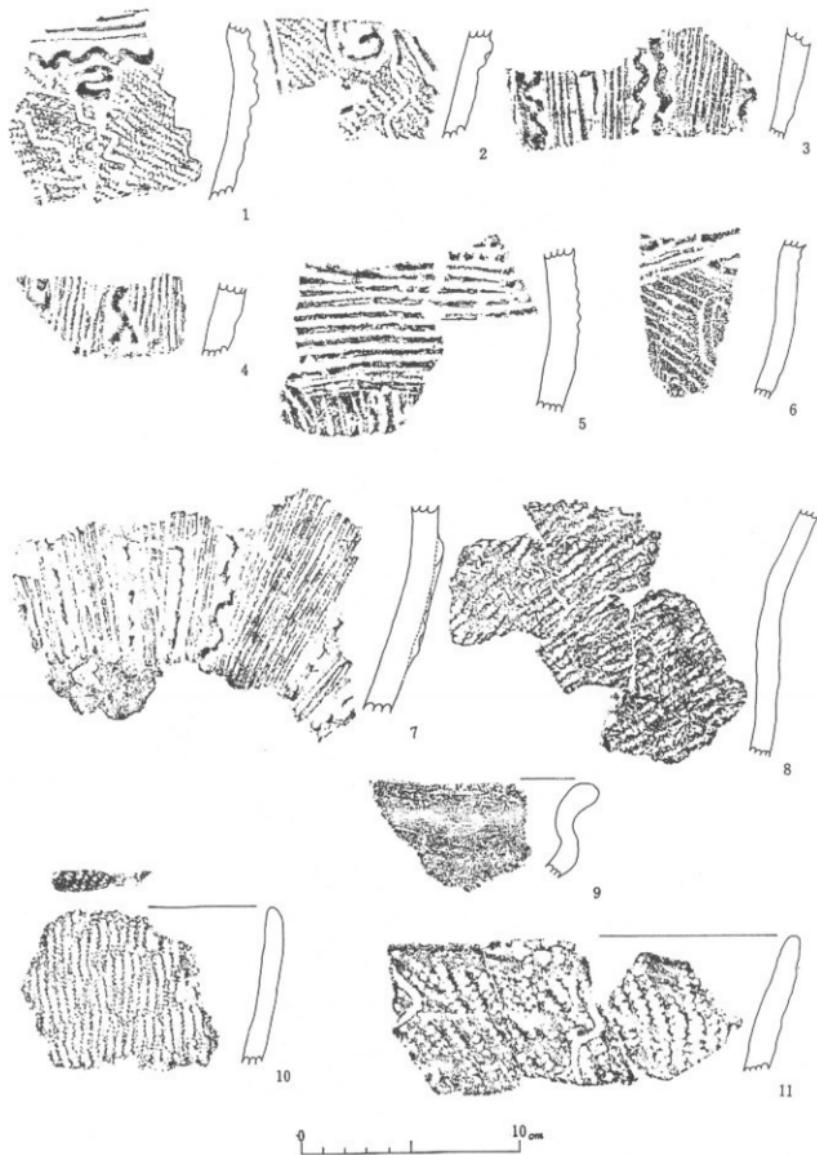
第96図 第Ⅰ次調査出土土器拓影（3）



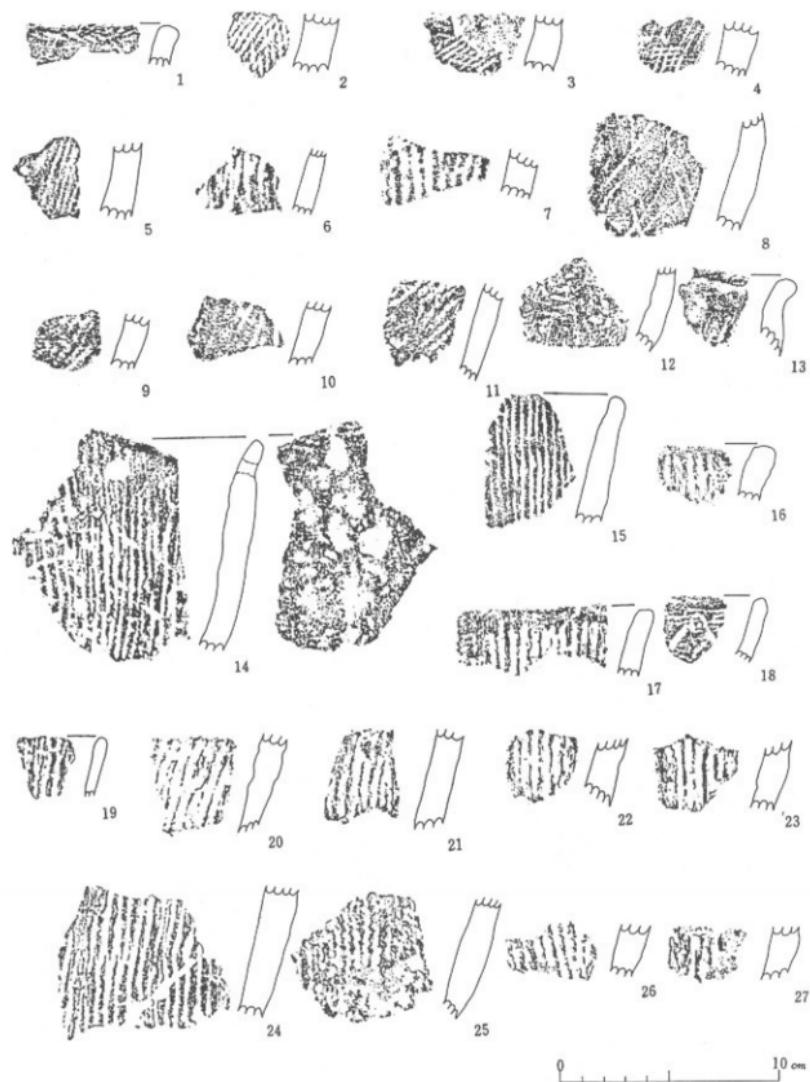
第97図 第Ⅰ次調査出土土器拓影（4）



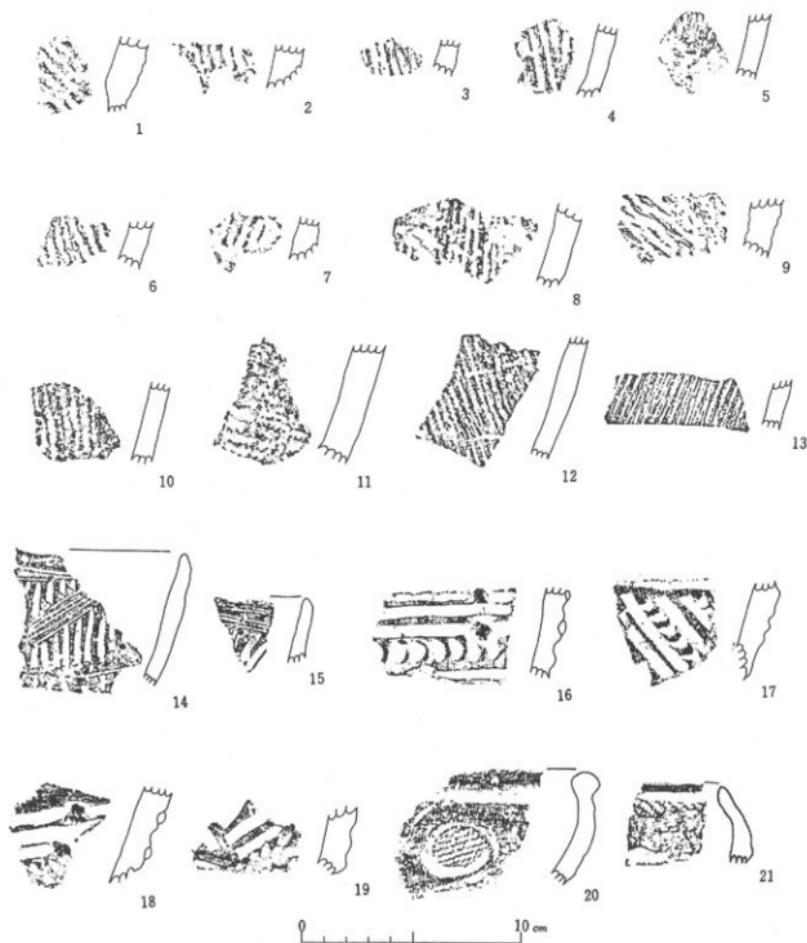
第98図 第1次調査出土土器拓影（5）



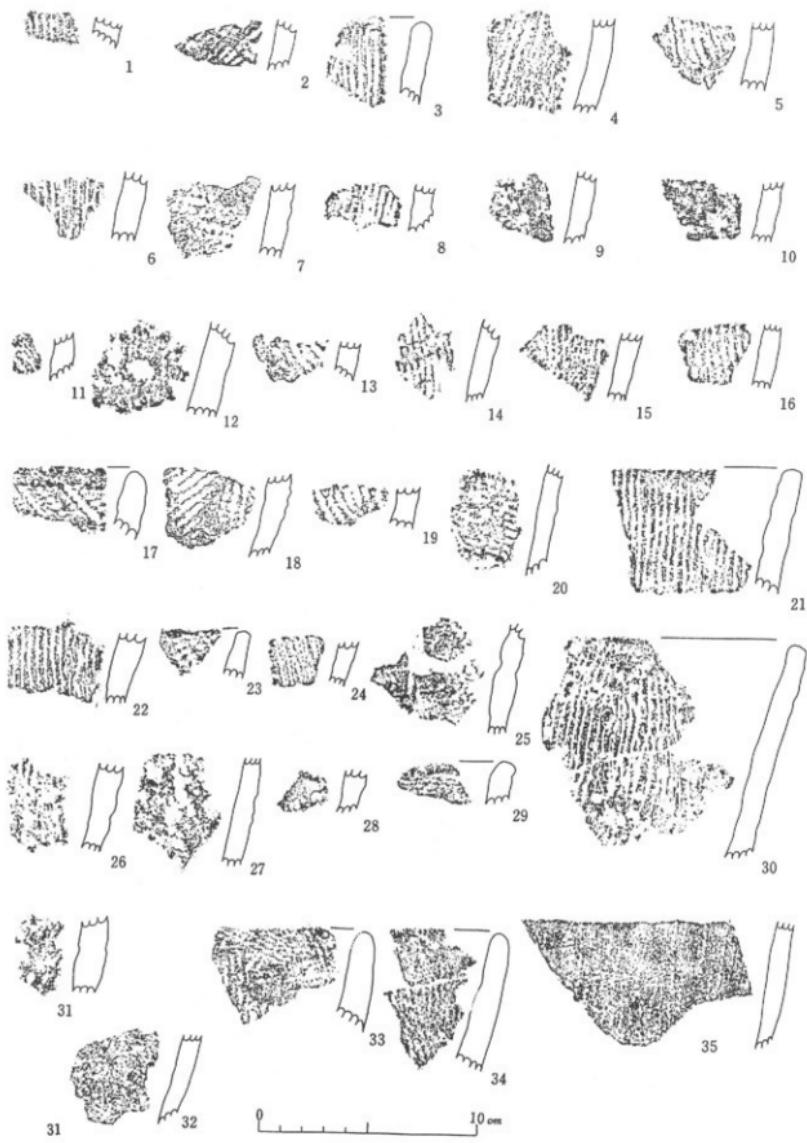
第99図 第I次調査出土土器拓影 (6)



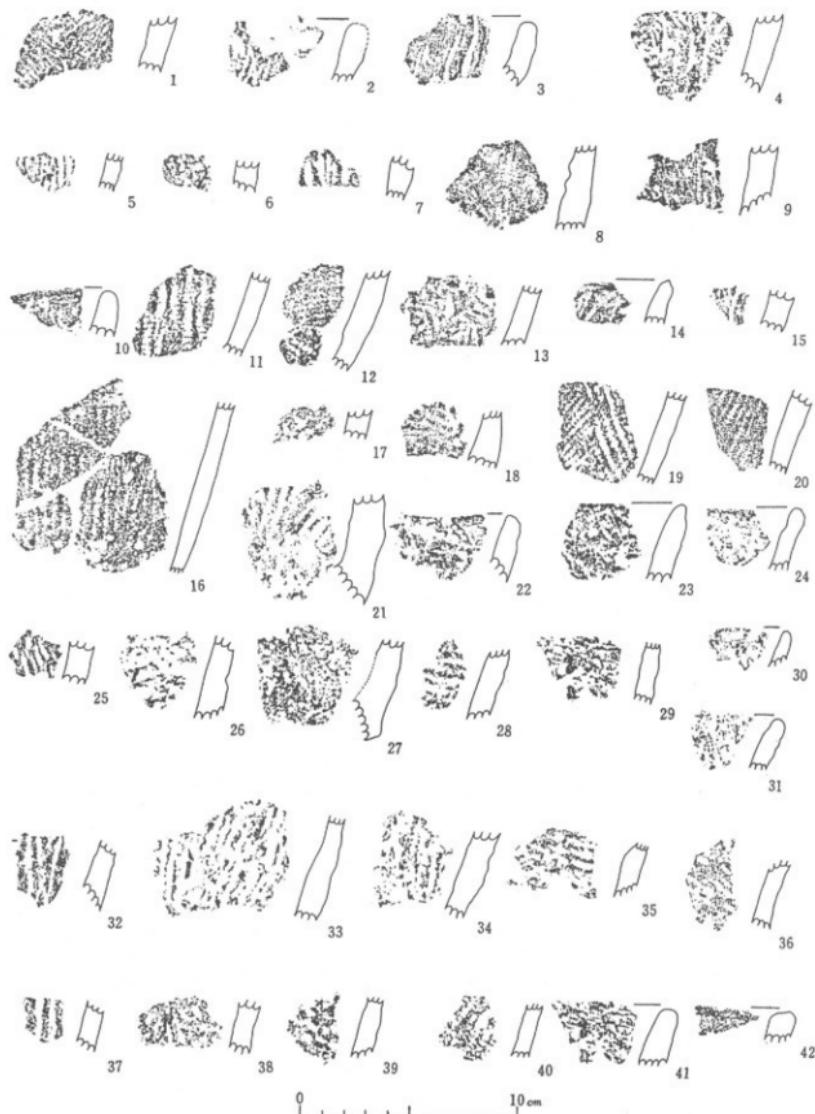
第100図 第1次調査出土土器拓影（7）



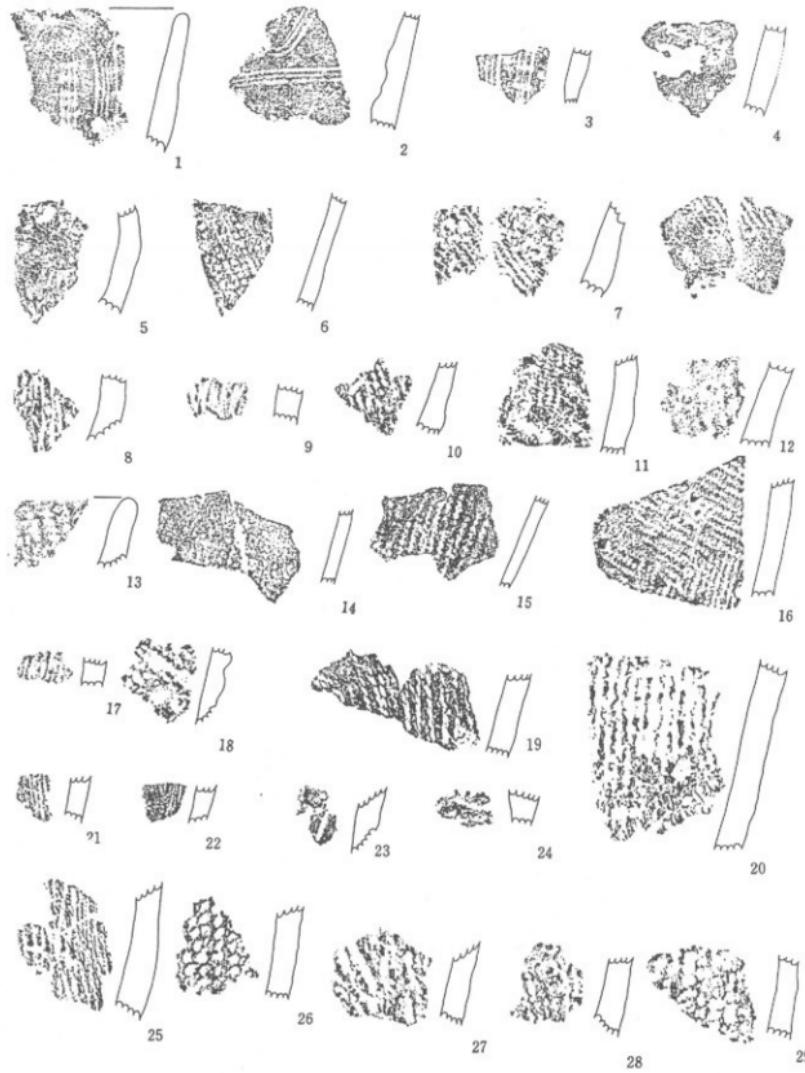
第101図 第1次調査出土土器拓影（8）



第102図 第1次調査出土土器拓影 (9)



第103図 第1次調査出土土器拓影 (10)

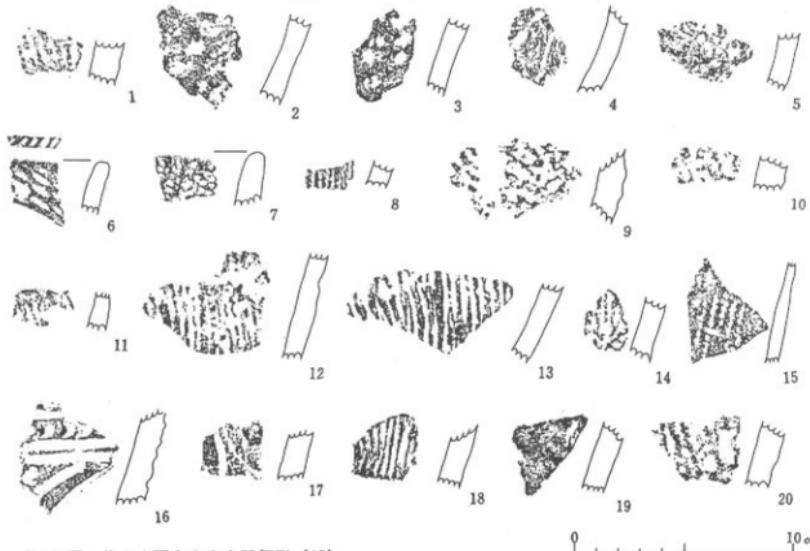


第104図 第I次調査出土土器拓影 (11)

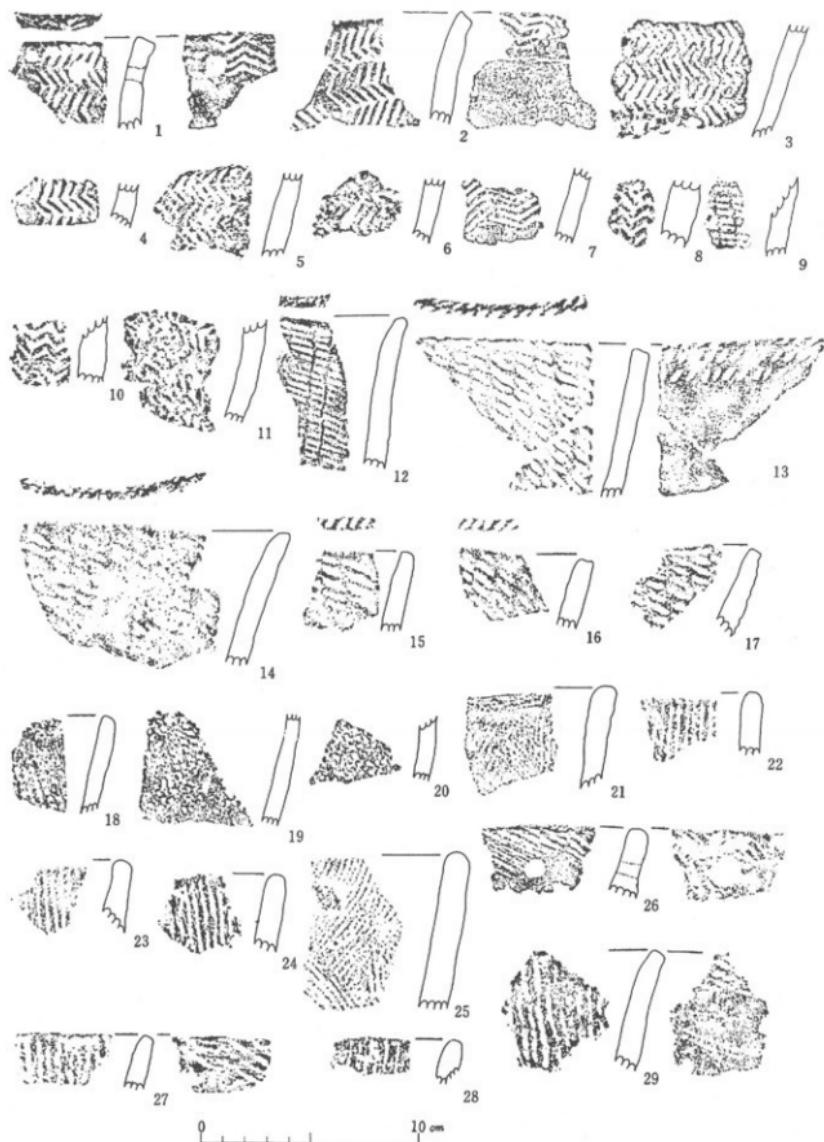
ではなく9~10mmの無文帯がある。しかし、これは一度全面施文した後にこの範囲を擦り消したようにも見える。口唇部は丸く整形され、口縁はほぼ直行している。焼成はわりあいに良い。色調は灰褐色を呈し、胎土中には石英粒と白色粒、それに纖維が含まれている。器厚は9.5mm。19は、口唇上と表裏両面に横位施文されている。

第2類 平行沈線文を有する土器（第112図1~5） 口縁部が波状をなしており、いわゆる流水文様の浅く細い沈線が施文されている。3本の沈線によって構成されるが、先端部が三叉状の工具によって描出された極めて簡単な文様となっている。ただ、施文の途中で押し引きが行われている。1~5は同一個体で、文様は口縁部から胴部上位にかけて施され、下部は無文である。焼成はわりあいに良い。色調は黒褐色・褐色・赤褐色を呈し、胎土中には石英粒・砂粒・雲母を多量に含んでいる。器厚は8.5~9.5mm。

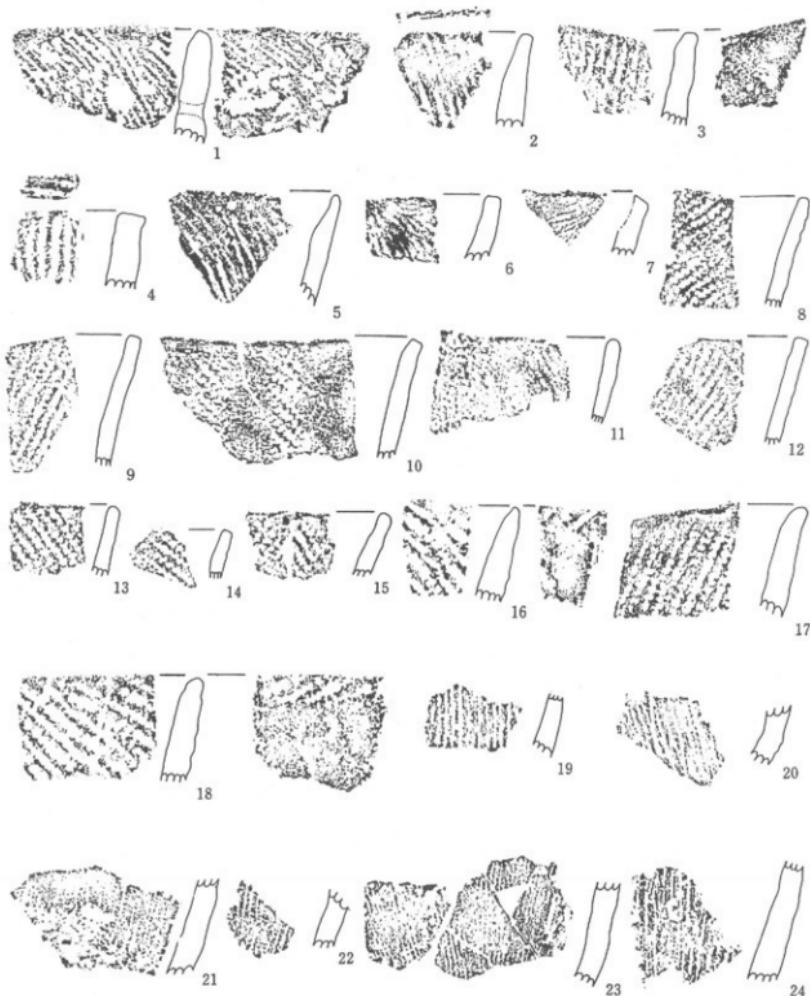
第3類 無文土器（第112図6~17） 口唇は尖り内削げ状を呈する。口縁部は外反するものと内彎するものとがある。底部は丸底および平底に近い丸底である。6は、器内外にヘラなどによる調整痕が見られる。また調整時に偶然付いたのであろうか、ヘラの先端による押し引き痕が付いている。さらに指頭圧痕も見られる。焼成はわりあいに良い。色調は灰褐色を呈し、胎土中には砂粒が多く含まれている。器厚は口唇部で8.5mm、下部で10mm。14は底部破片である。平底に近い丸底になっており、これを作る際の指頭圧痕が全体的に極めてリアルに残されている。内面は丁寧に調整され、奇麗に仕上げられている。焼成は極めて良く堅い。色調は灰褐色を呈し、胎土中には粗い砂粒と赤色粒が含まれている。器厚は10.5mm。



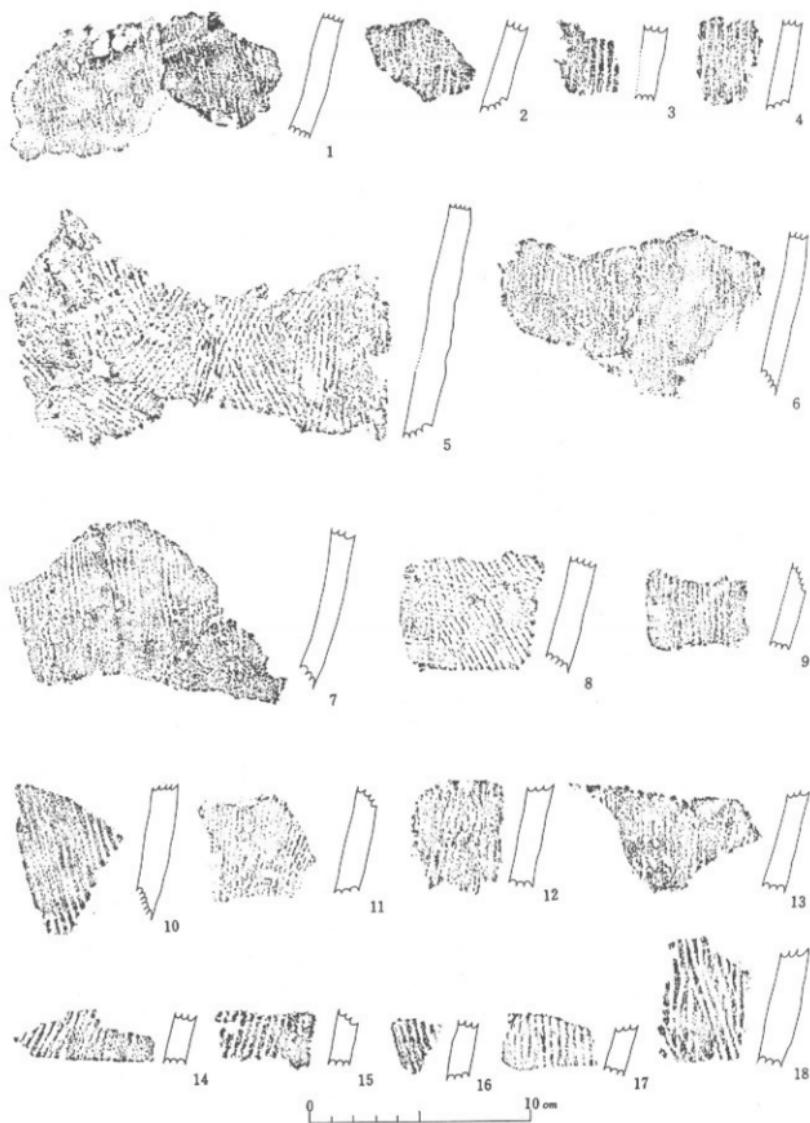
第105図 第1次調査出土土器拓影 (12)



第106図 第I次調査出土土器拓影 (13)



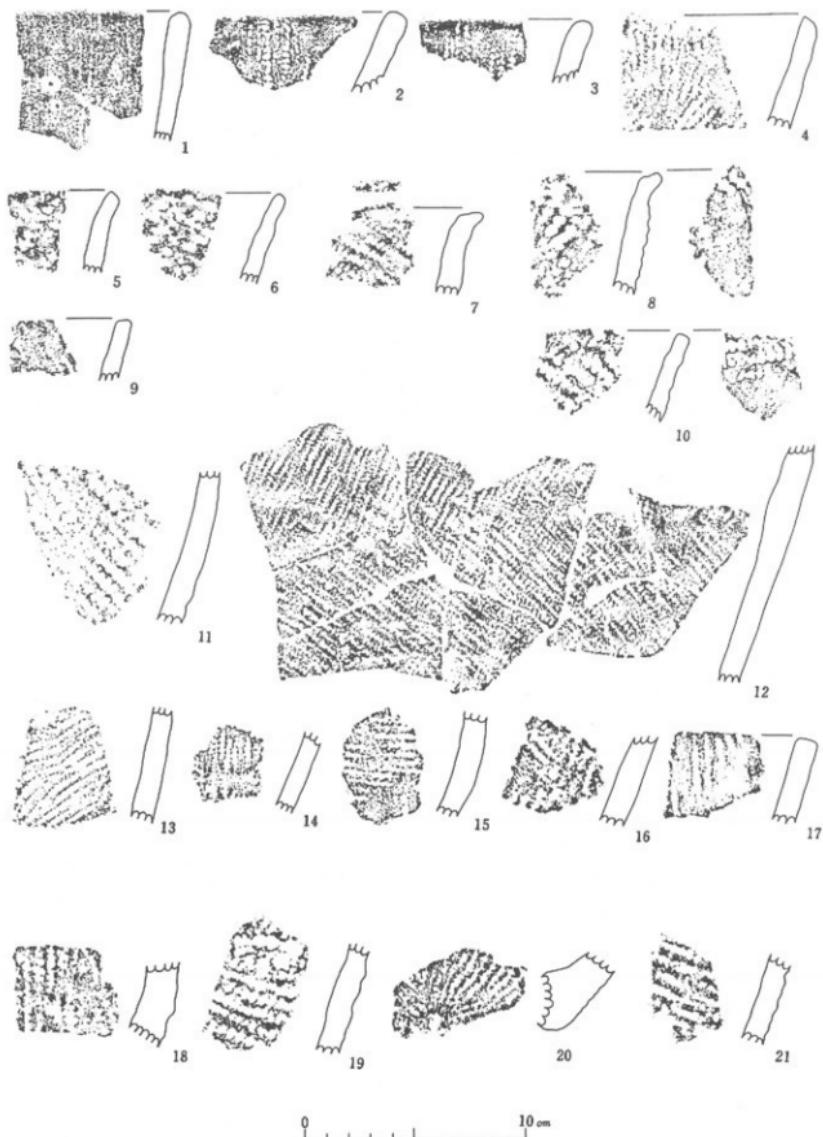
第107図 第1次調査出土土器拓影 (14)



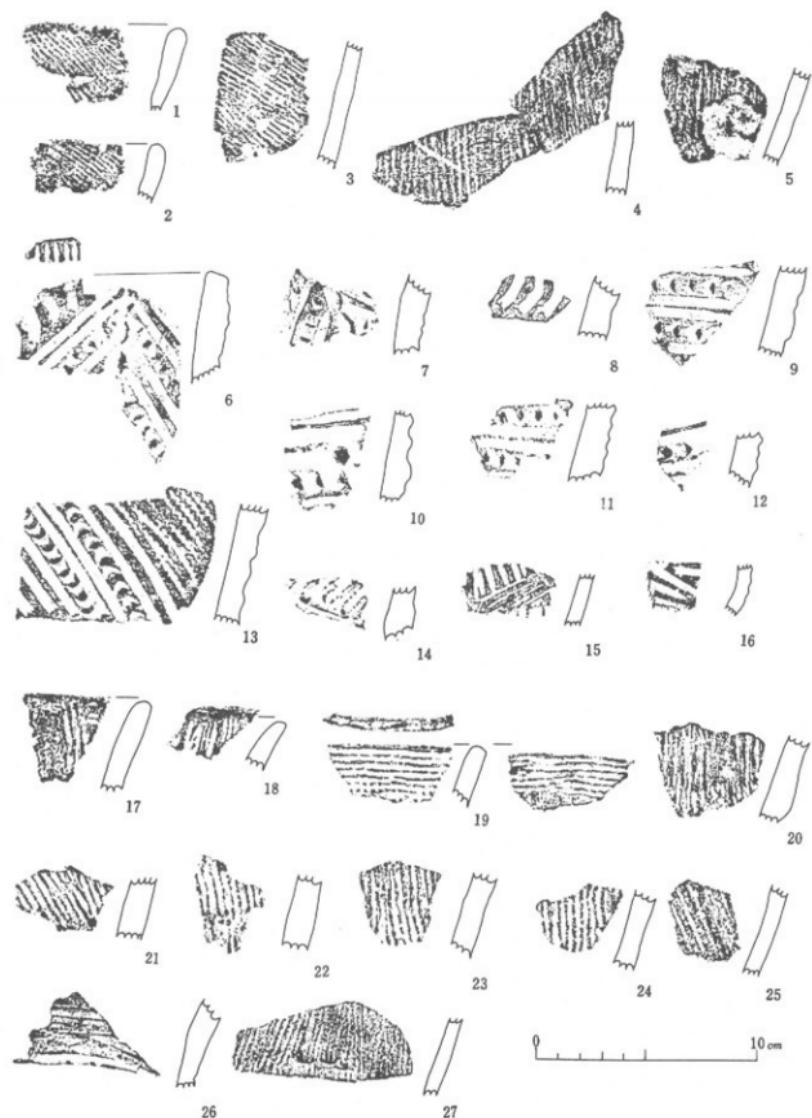
第108図 第1次調査出土土器拓影 (15)



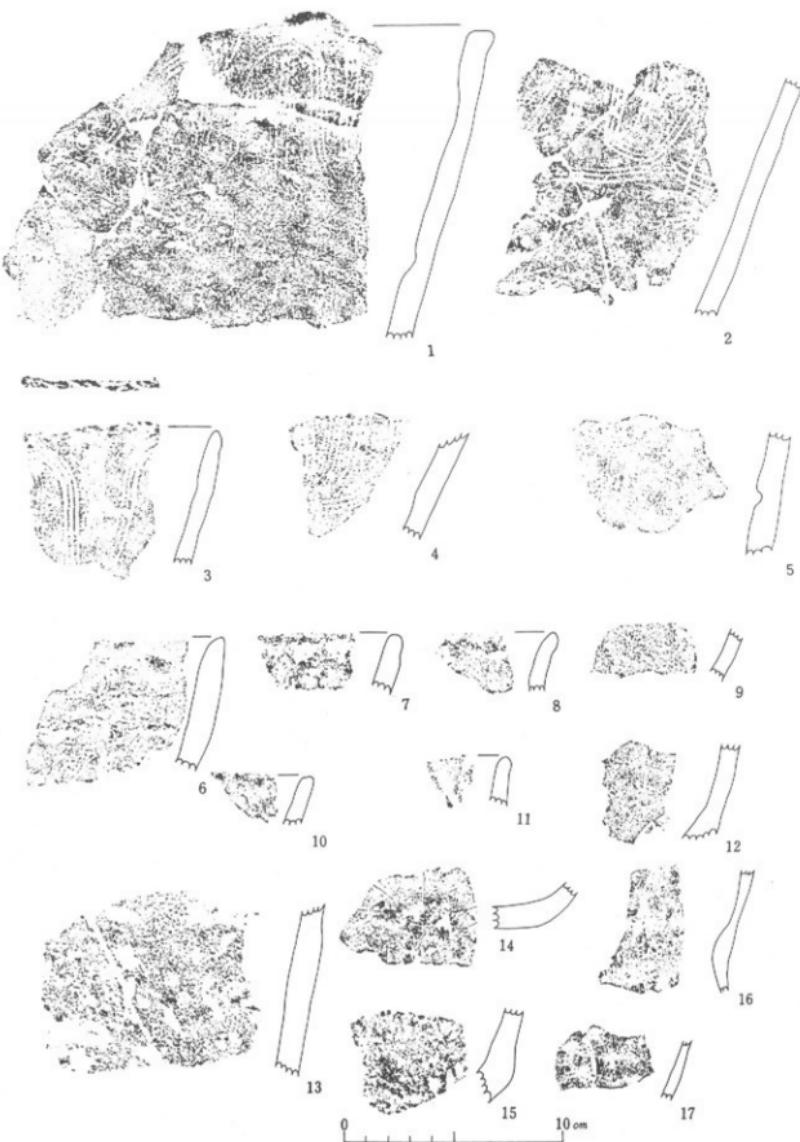
第109図 第1次調査出土土器拓影 (16)



第110図 第1次調査出土土器拓影 (17)



第111図 第1次調査出土土器拓影 (18)



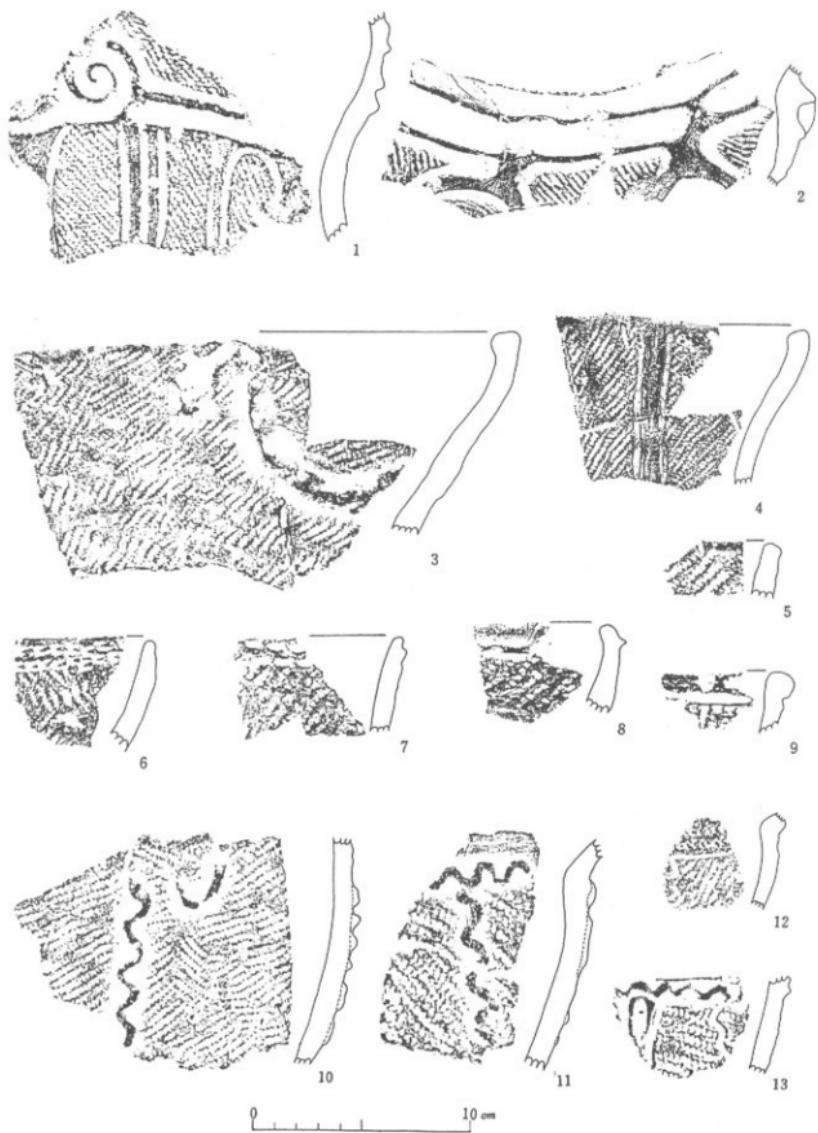
第112図 第1次調査出土土器拓影 (19)



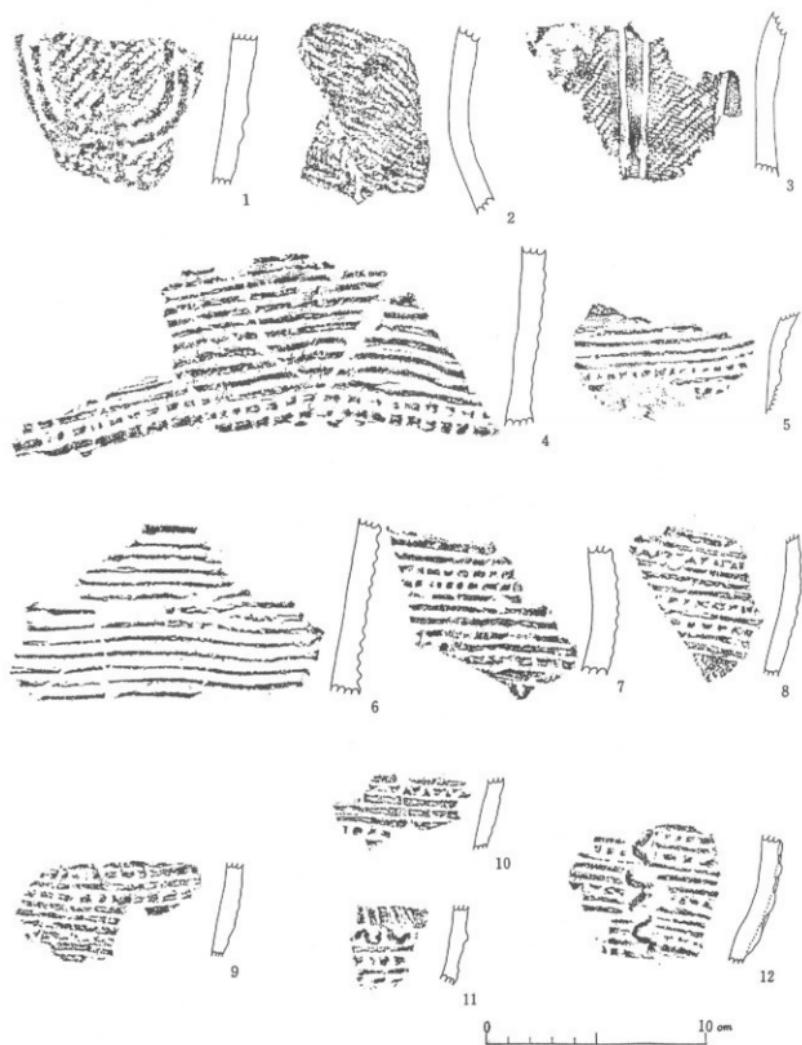
第113図 第1次調査出土土器拓影 (20)



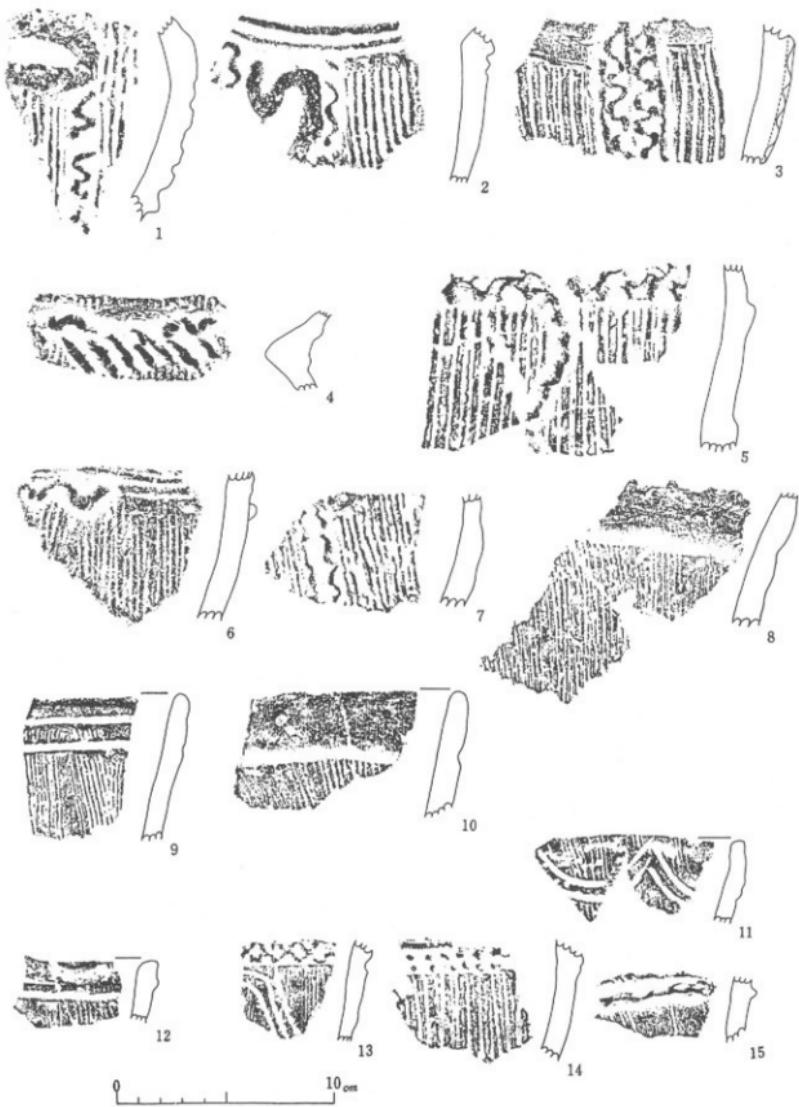
第114図 第Ⅰ次調査出土土器拓影 (21)



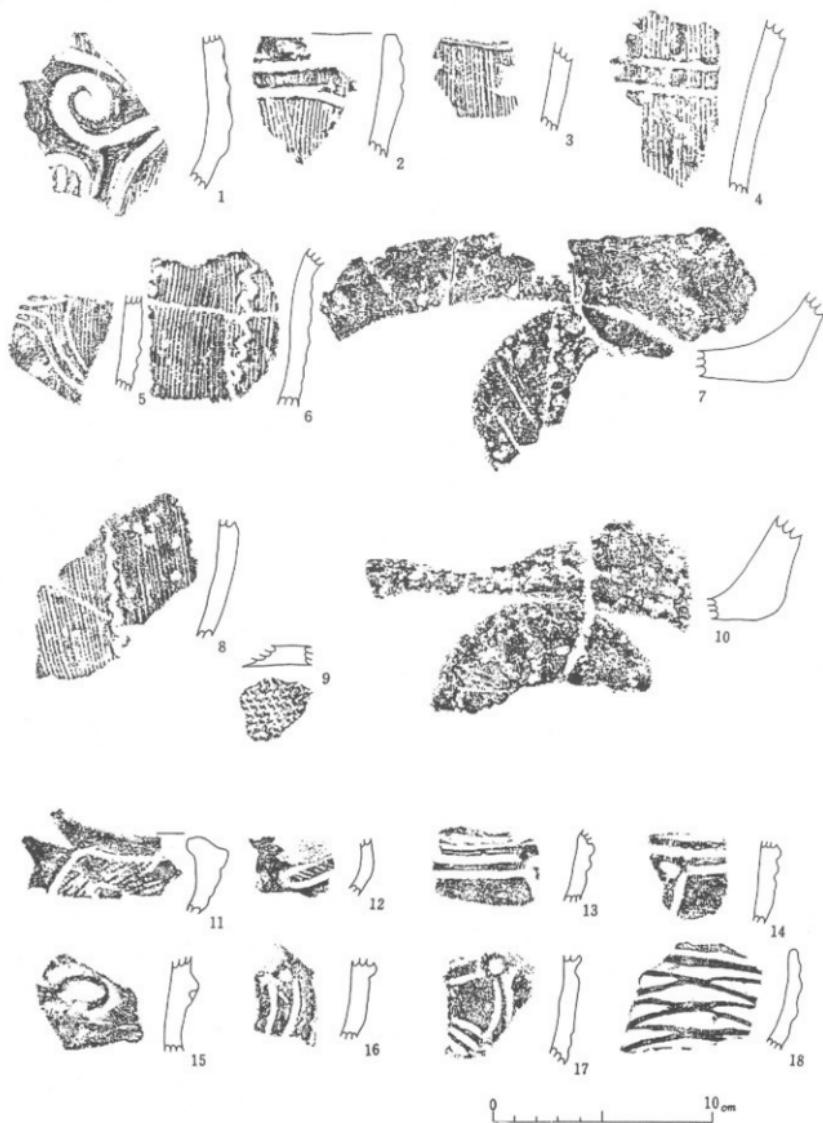
第115図 第1次調査出土土器拓影 (22)



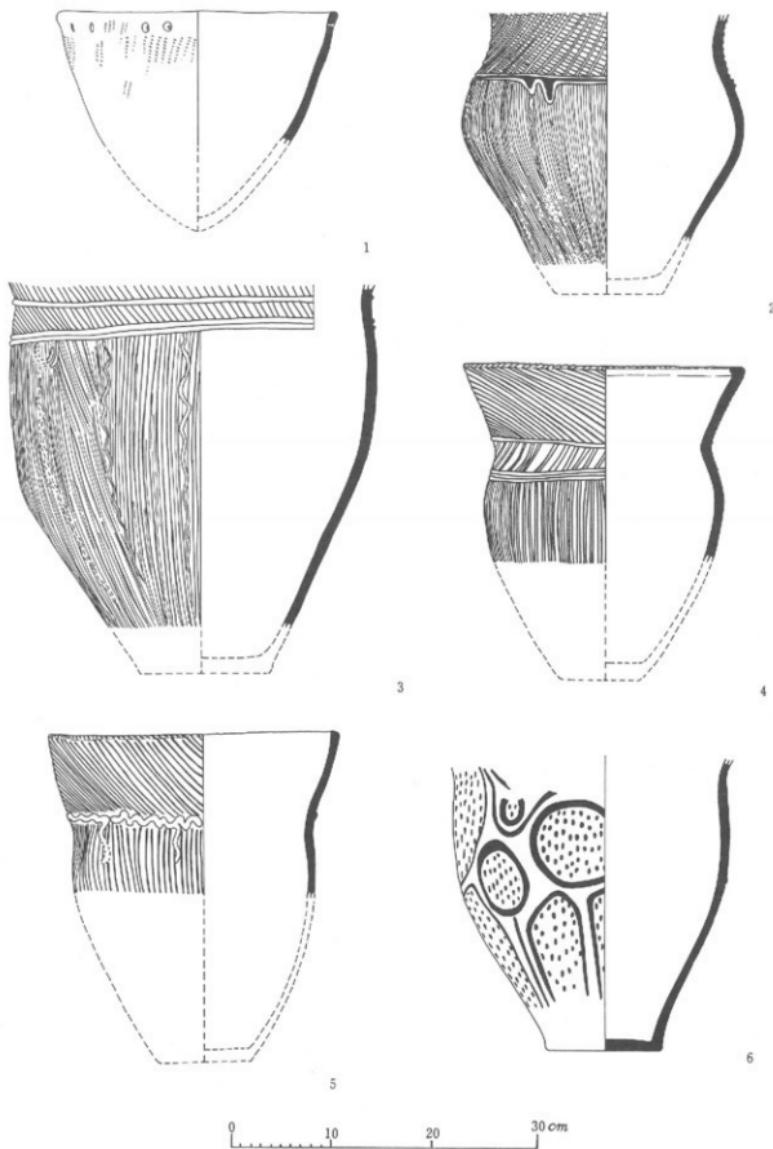
第116図 第I次調査出土土器拓影（23）



第117図 第Ⅰ次調査出土土器拓影 (24)



第118図 第Ⅰ次調査出土土器拓影（25）



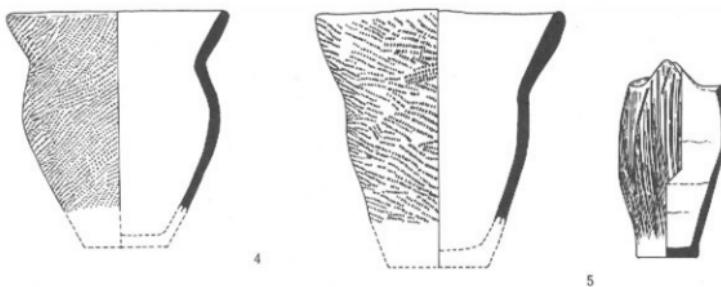
第119図 第1次調査出土土器実測図（1）



1

2

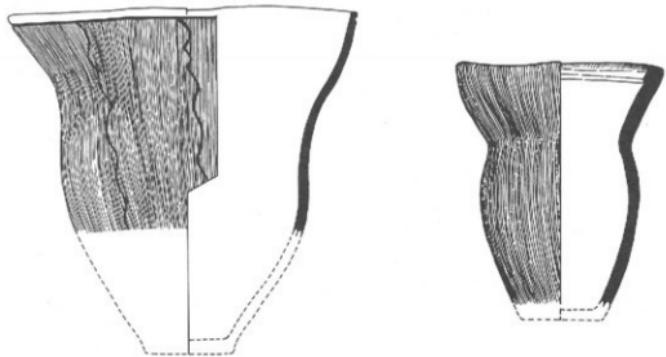
3



4

5

6



7

8



第120図 第1次調査出土土器実測図（2）

第3群土器（中期の土器）

第1類 曽利Ⅱ式に比定される土器（第113図1～7・9・10、第115図3・10・11・13、第117図1～7、第119図2～5、第120図1） 口縁部は、斜行する条痕文や波状の条線文が見られ、この上に、粘土紐による斜行する隆起線文が施されているものがある。頸部には波状または直線状の隆起線文が巡らされているものもある。胴部は縦方向の条線文を地文として、縦に波状の隆起線文が施されている。焼成は良好である。色調は灰褐色・褐色を呈し、胎土中には砂粒が含まれている。

（第113図1～7・9・10、第117図1～7、第119図2～5、第120図1）また、第115図3・10・11・13は、縄文を地文とし、粘土紐の張り付け文を有するもので、3のように、口縁部に大きな波状の隆起線文が見られる。また、頸部にも横位に波状の隆起線文があるもの（11・13）も見られる。焼成は比較的良好である。色調は褐色・赤褐色を呈し、胎土中には石英粒・砂粒が含まれている。

第2類 竹管文を有する土器（第116図4～12） 竹管状工具によって、横位の沈線文が器面のほぼ全体に施されると思われるもので、この沈線の一部に1～2条の押し引きによる連続爪形文が施されている。10・11のように、竹管状工具で沈線文に上下交互に刺突して波状をなすもの、12のように、縦方向に粘土紐を波状に垂下させたものがある。焼成は良く堅い。色調は褐色・赤褐色を呈し、胎土中には石英粒・砂粒が含まれている。曾利Ⅱ式に比定されるものであろうか。

第3類 曽利Ⅲ式に比定される土器（第114図1～11・第117図8～15、第119図6、第120図2）

口縁部に装飾帯を有するもので、そこに隆起する満巻文が見られる。また隆起帯によって区画された中に条線を充填している。胴部も条線を地文とし、波状の沈線文や縦方向の沈線文が施されている。第120図2は4つの把手を持つ。高さ約23cm。焼成は全体的にあまり良くない。色調は灰褐色・褐色・橙褐色を呈し、胎土中には砂粒が含まれている。第119図2は、隆起帯文を胴部に有するもので、これによって区画された中に刺突文が施されている。現存の高さ約29.5cm。この他に隆起帯の区画の中に縄文や条線文を施したものもある。

第4類 条線文を地文とし、沈線文や刺突文を有する土器（第117図8～14・第118図2～6・8、第120図3・7） 第117図8～10・12は、口縁に平行する浅い沈線1～2条が施され、この沈線間と胴部には縦位に条線文が施されている。12は、口縁部に半円の連続区画（弧線区画）を描出してある。14は、胴部へ竹管状工具によって横位に連続して押し引いた爪形文状の文様が施されている。焼成は良く堅い。色調は明褐色を呈し、胎土中には多量の砂粒と白色粒・淡黄色粒・雲母それに5mmほどの白色の石が含まれている。曾利Ⅲ～Ⅳ式に比定される土器であろう。

第5類 条線文のみを有する土器（第113図8、第120図6・8） 縦方向に条線文のみが施されている。第120図6は、2つの波状突起が付いている。焼成は良く堅い。色調は黒褐色・赤褐色・橙褐色を呈し、胎土中には淡黄色粒・橙色粒が多く含まれている。高さ約20cm。8は、全器面に条線文に施されている。焼成はわりあい良い。色調は褐色・橙褐色を呈し、胎土中には石英粒・砂粒が含まれている。高さ約26cm。曾利Ⅲ～Ⅳ式に比定されるであろうか。

第6類 縄文のみを有する土器（第115図5、第120図4・5） 斜行する縄文のみが施された土器で、第120図4・5とも全器面に施文されている。6の高さ約20.5cm。

第7類 加曾利E式に比定される土器（第117図12～14、第115図1～4、第116図2・3）

繩文を地文とし、口縁部に渦巻文、さらに沈線文や刺突文を有するものである。口縁部に平行する沈線や、縦方向に垂下する平行沈線文および波状沈線文が施されているもの、口縁に平行して竹管状工具による押し引きの連続爪形文と刺突文が施されるもの、さらに交互に刺突して波状を呈するものなどがある。第115図1は、キャリバー状の口縁部に渦巻文があり、これに接続して横位の幅広い沈線文が施され、さらに胴部には、縦位に直線的または弧状に沈線文が見られる。焼成は良く堅い。色調は赤褐色を呈し、胎土中には多量の粗い砂粒・石英粒・雲母などが含まれている。

第4群土器（後・晚期の土器）

第1類 後期の土器（第118図11～17） 直線と曲線の組合せからなる沈線文を有する土器である。それぞれのコーナーあるいは交叉部に円形の刺突文が見られる。11には沈線文の区画の中に繩文が施されている。焼成は良く堅い。色調は灰褐色を呈し、胎土中には粗い砂粒・橙色粒が含まれている。

第2類 晚期の土器（第118図18） 大洞A式に比定される土器である。（水I式併行）器面は良く磨かれ精製されている。いわゆる浮線網状文を有する。焼成は極めて良く堅い。色調は黒灰色を呈し、胎土中には砂粒と若干の石英粒・雲母が含まれている。

B. 石器（第121図～第140図・図版74～78）

第1次調査で出土した石器は、石槍1点、局部磨製石斧3点、磨製石斧1点、石鎌40点（未製品を含む）、加工痕のある剝片4点、ビエスエスキュー1点、石核1点、礫器7点、打製石斧12点、磨石175点、石皿6点となっている。

石槍（第121図1） B-1 グリッドから1点出土している。両端を欠損したもので、いわゆる植刃と呼ばれるものであろう。比較的入念な加工が両面に施されている。長さ5.8cm。黒色ち密安山岩。

局部磨製石斧（第121図2・3・4） 2は完形品である。縦長の平らな石に粗い加工を施しており、裏面はかなり原面を残している。先端部の両面を磨き、刃部を形成する。鑿形状の石器である。長さ8.35cm。緑色ち密安山岩製。3は長円形の薄い礫の一端に打撃を加えて刃部とし、その片面を磨いてある。長さ12.1cm。安山岩製。

磨製石斧（第121図5） 表採品である。頭部を欠損し、片面はやや偏平であるが両刃を持つ磨製石斧である。

石鎌（第121図6～37） 未製品を含めて40点出土している。32点を図示した。このうち12本は第3号住居址から検出されている。材質は黒曜石が多く、ついで安山岩系のものとチャートがある。6は、尖頭器状を呈するが、下部を欠損しているようであり不明な部分がある。ほとんどが凹基無茎鎌であり、その形態はさまざまである。このうち23は、鎌形鎌と呼ばれるもので、基部の抉入が一段と深くまた拡大されている。

加工痕のある剝片（第122図38） 4点出土している。このうちの1点が38である。黒曜石製。

ビエスエスキュー 第3号住居址から1点出土している。図示しなかった。黒曜石製。

石核（第122図39） 第3号住居址から1点出土している。8・85×9・5×4・9cmの核であり、いわゆる複設打面石核であろうか。幅広な縦長のあるいは横長の剥片が取り出されている。柱状を呈するもので、ほとんど原面を残さない。材質としては極めて良好なものである。黒曜石。

礫器（第122図40～46） 7点出土している。第1号住居址、A-5、C-3、B-3グリッド内から検出されている。円礫および偏平な礫を用いており、片面あるいは両面を打割して刃部を作り出している。また裏面は、自然面がそのまま残されているものが多い。このうち40と41は、片面から数回の簡単な打割によって鋭い刃部を作っている。40は長さ8.85cm、幅9.5cm、厚さ4.9cm、重量45.94gを計る。玄武岩製。42はややすんぐりした撥形の形状をなすものである。自然面も多く残るが、手際良く両面から丁寧な打割が加えられ仕上げてある。長さ9.5cm、幅9.7cm、厚さ4.25cm、重量537.3gを計る。玄武岩製。43は、最大のもので長さ16.9cmを計る。片面に打製を加えて粗い刃部を作っている。また反対側には敲打痕が見られ、敲石としての用途が考えられる。安山岩製。

打製石斧（第123図47～58） 12点出土している。このうち4点が第3号住居址から検出されている。47は撥形を呈し、その他は短冊形およびこれに近い形状となっている。52～54、56～58は、片面をほとんど原面のまま残してある。

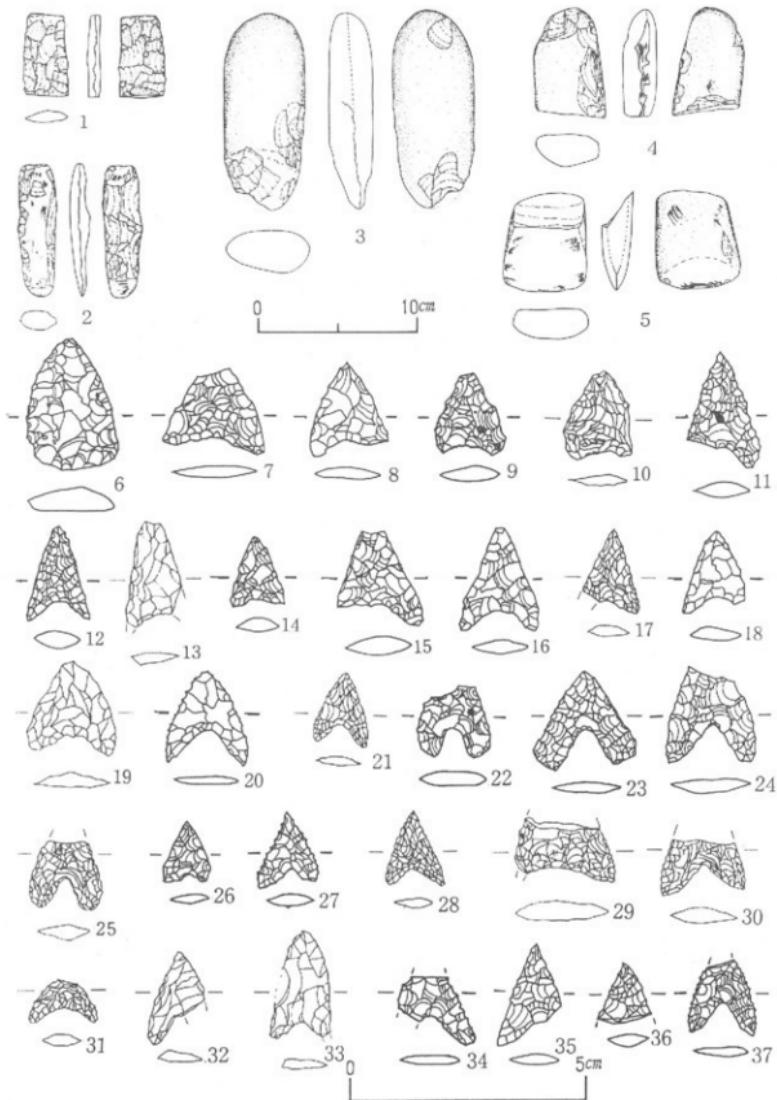
磨石（第124図59～第139図226） 175点出土している。このうち168点を図示した。磨石は、いわゆる特殊磨石と呼ばれるものが圧倒的に多い。その形状から3つの型に分類して説明する。

第I類 a種=多面の磨面を持ち断面が柱状を呈するもの（第124図59～第126図76）を本類とした。b種=多面の断面を持ち断面が三角形を呈するもの（第126図77～82）c種=a・b種の仲間であるがその欠損したもの、やや不明なもの（第127図83～第128図110）を本類とした。これら第I類の形状のものは、本遺跡の遺物中その特徴をなすものである。

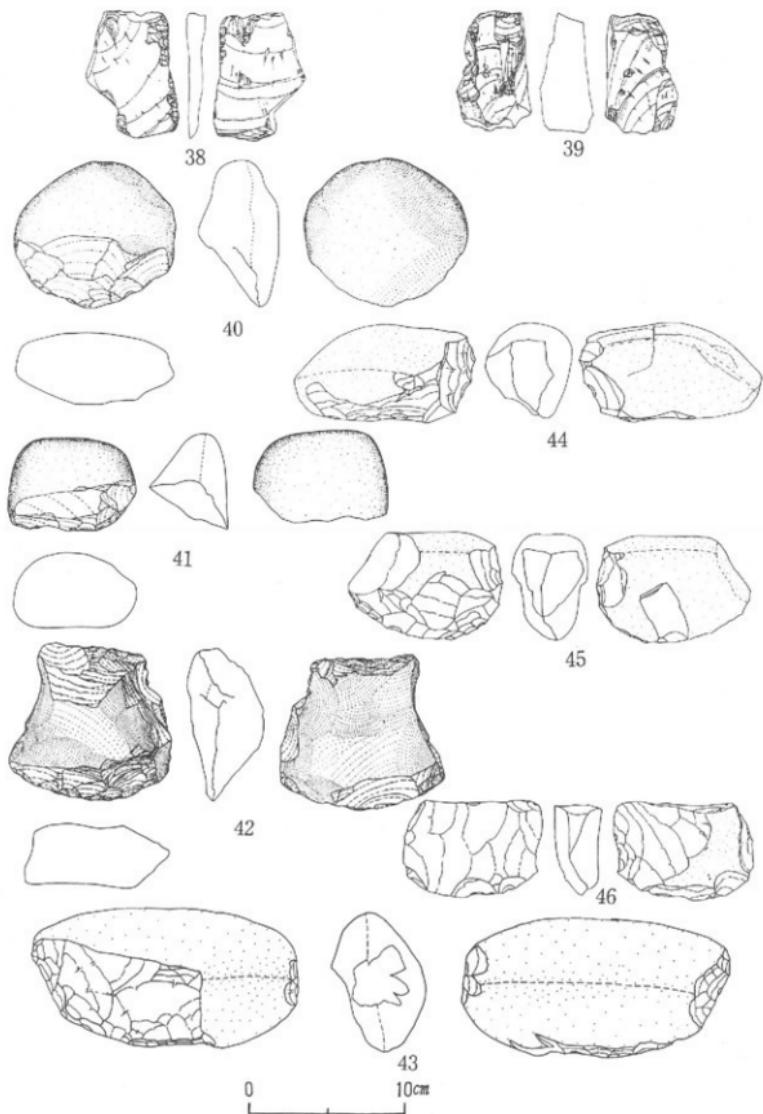
第II類 a種=横橢形で右に磨面を持つもの（第129図111～第131図137）を本類とした。b種=横橢形で左に磨面を持つもの（第132図138～第137図183）を本類とした。c種=形状はやや変形で左右いずれかの磨面を持つもの（第137図184～190）を本類とした。

第III類 a種=長円形を呈するもの（第137図191～195）を本類とした。b種=やや長円形を呈するもの（第138図196～203）を本類とした。c種=円形を呈するもの（第138図204～210）を本類とした。d種=楕円形を呈するもの（第139図215～222）を本類とした。e種=箱形のもの（第139図211～214）を本類とした。g種=その他欠損したもの（第139図223～226）を本類とした。

石皿（第140図227～232） 6点出土している。227は、第3配石遺構に使用されていた。



第121図 第I次調査出土石器実測図(1)



第122図 第1次調査出土石器実測図（2）



47



48



49



50



51



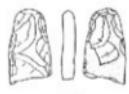
52



53



54



55



56

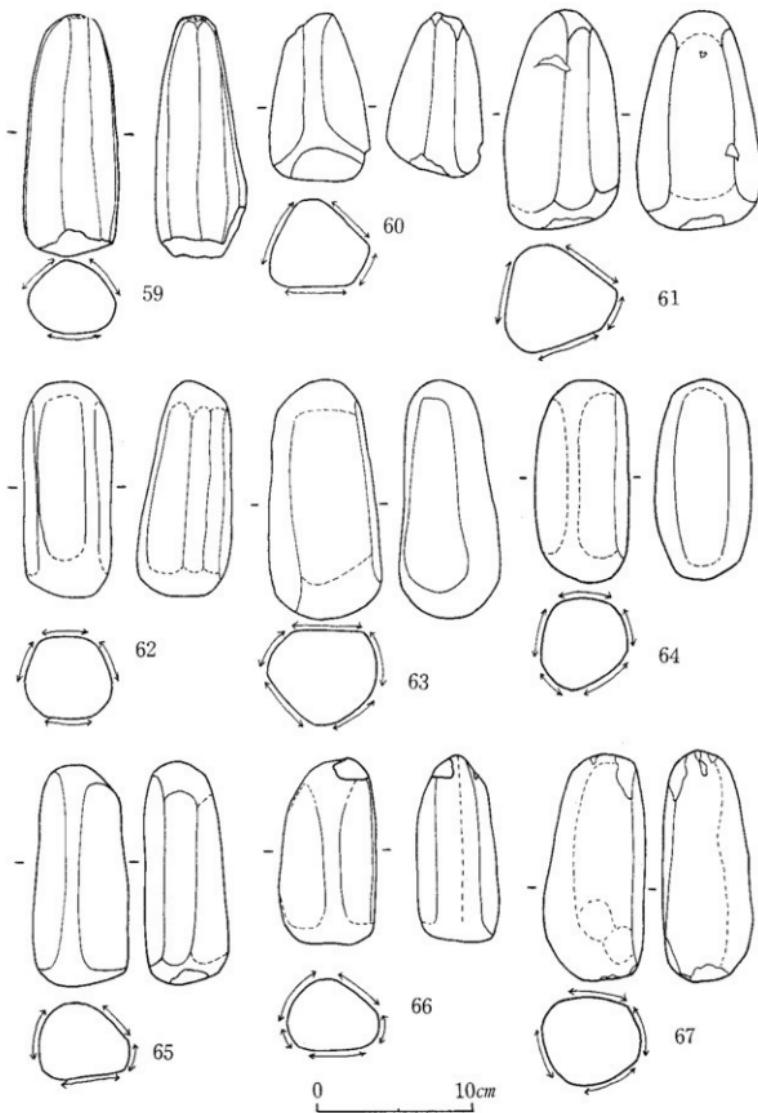


57

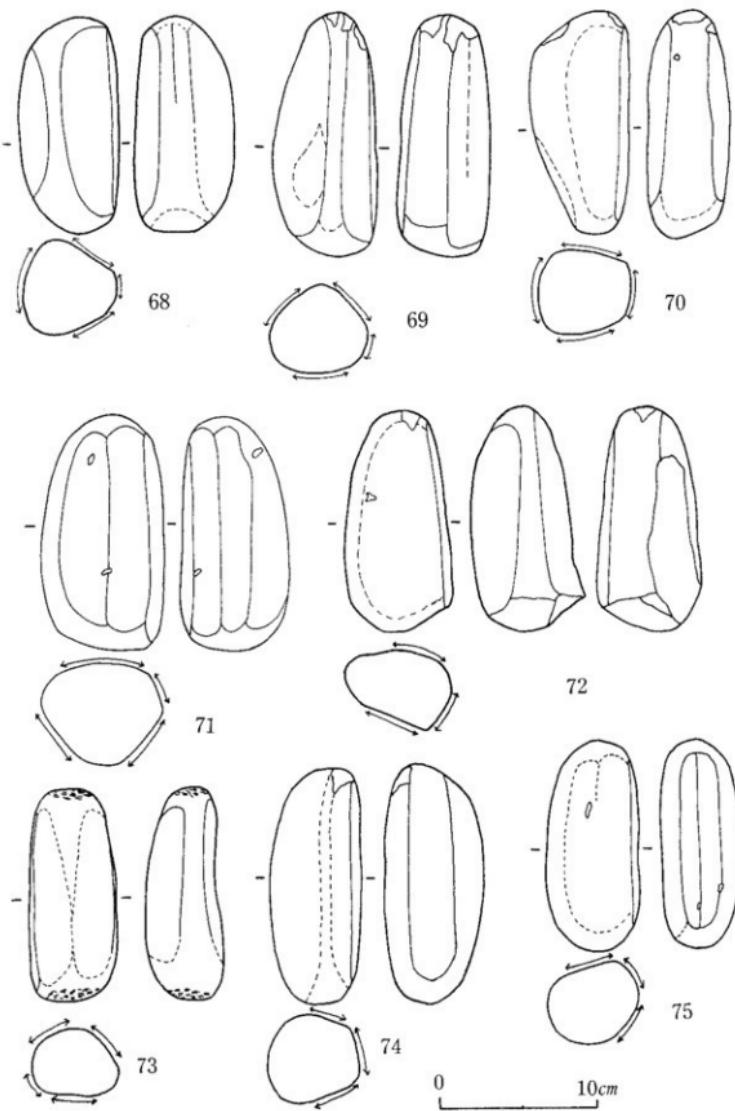


58

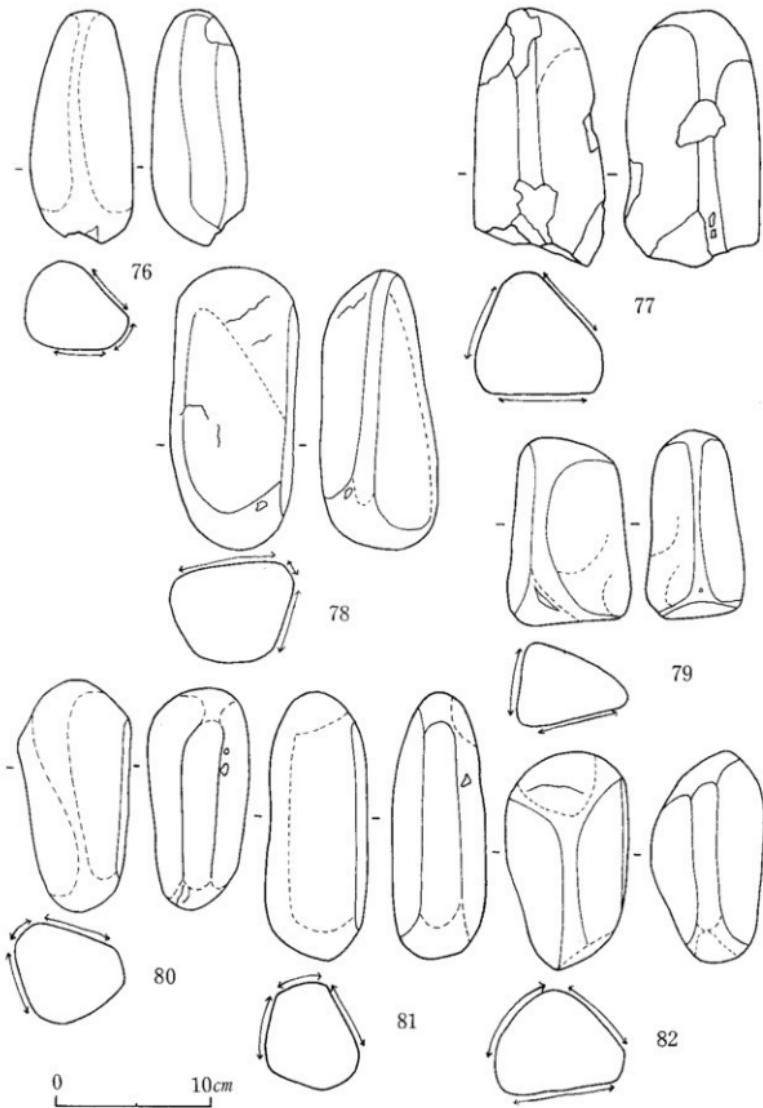
第123図 第Ⅰ次調査出土石器実測図（3）



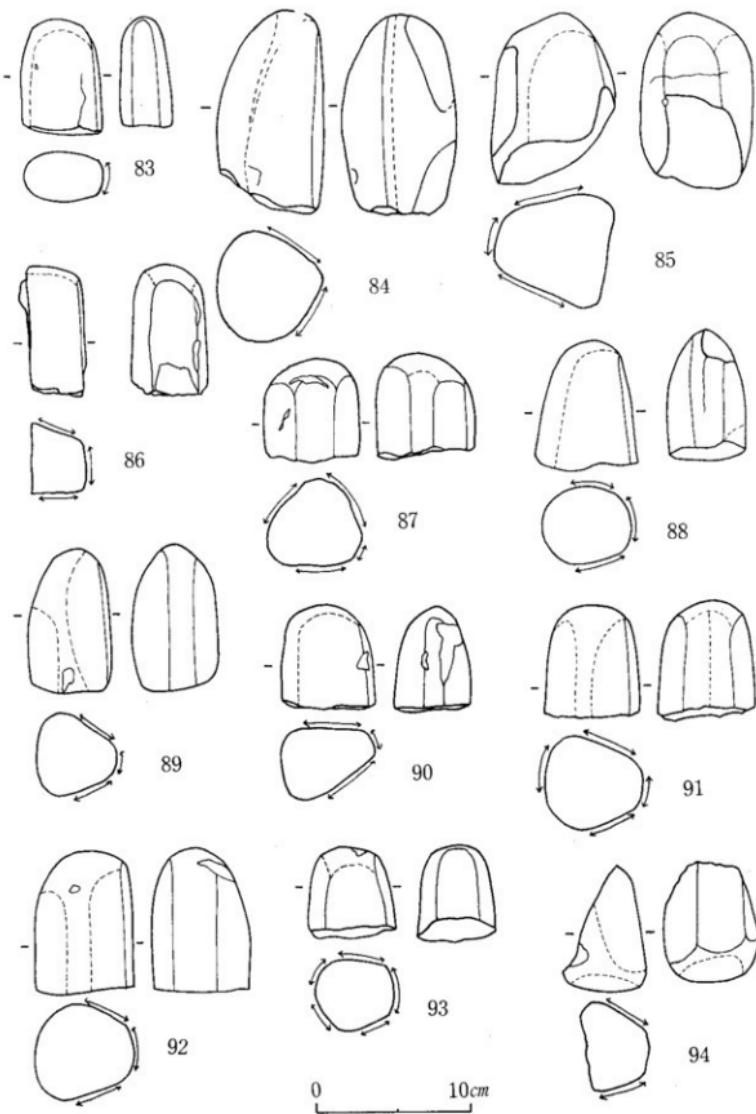
第124図 第Ⅰ次調査出土石器実測図（4）



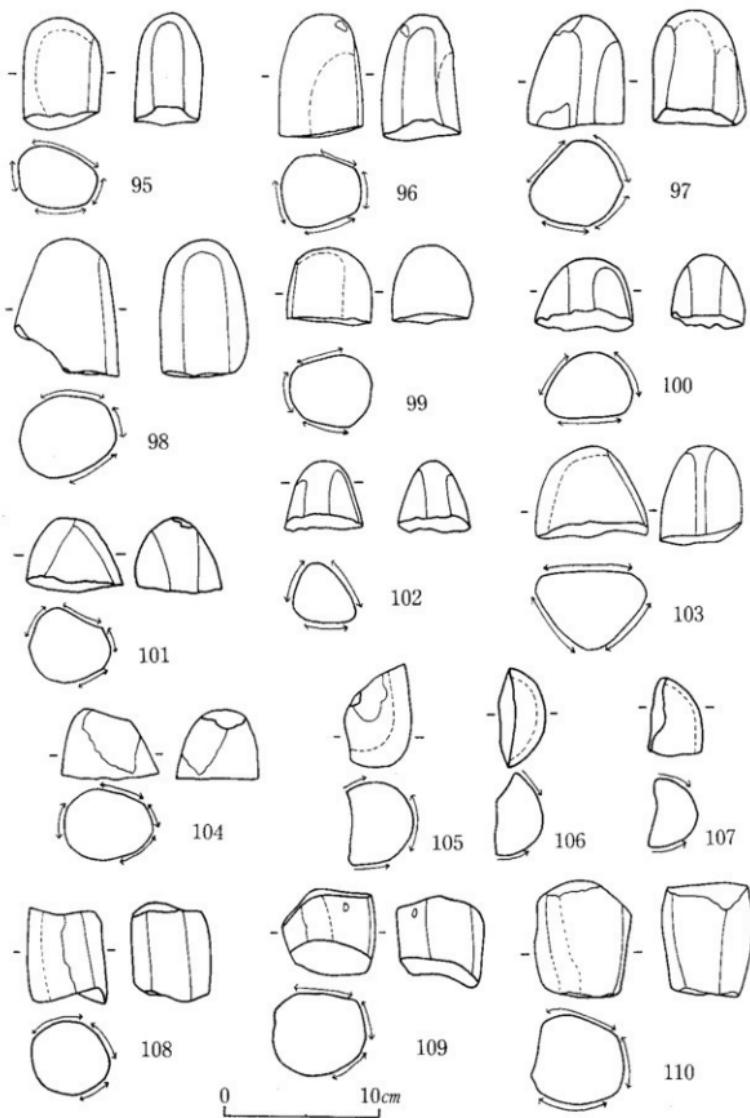
第125図 第Ⅰ次調査出土石器実測図（5）



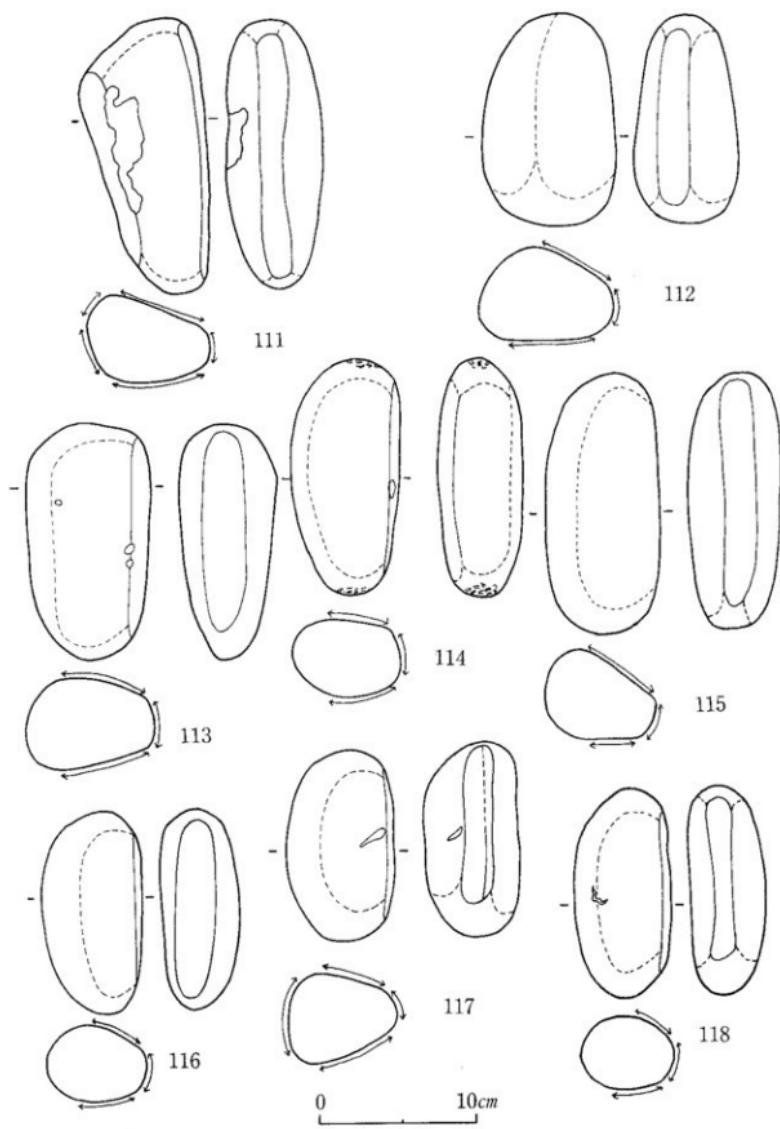
第126図 第Ⅰ次調査出土石器実測図(6)



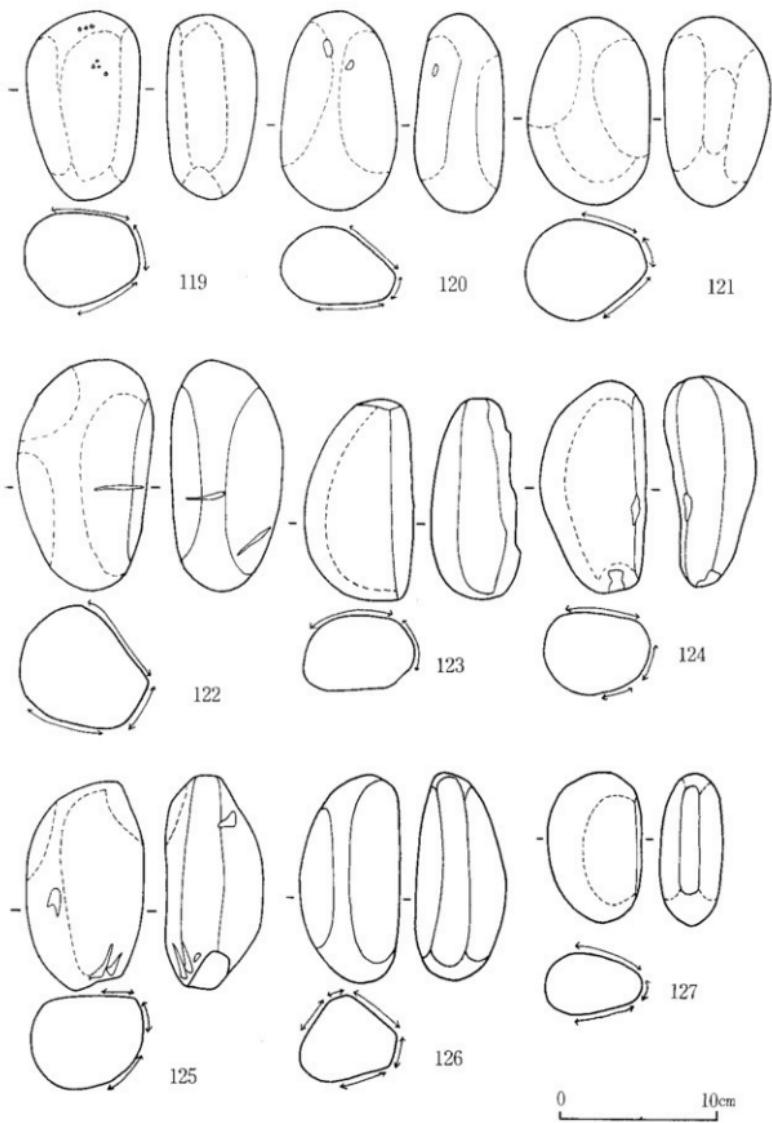
第127図 第1次調査出土石器実測図（7）



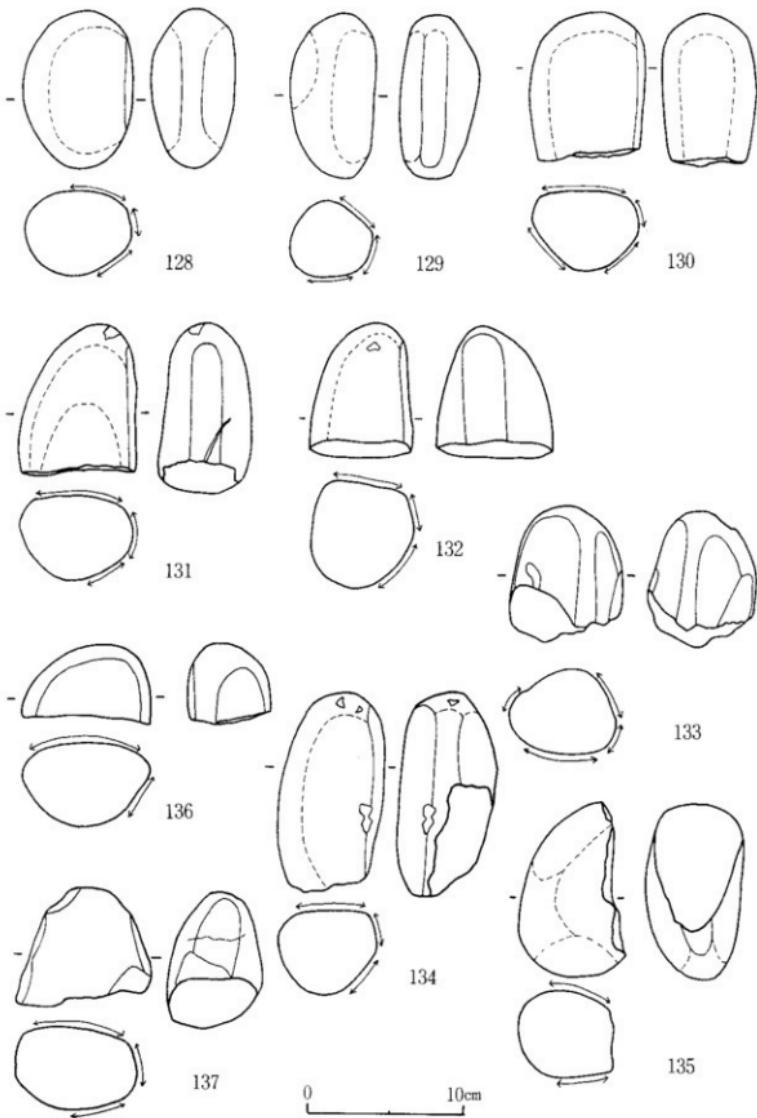
第128図 第Ⅰ次調査出土石器実測図(8)



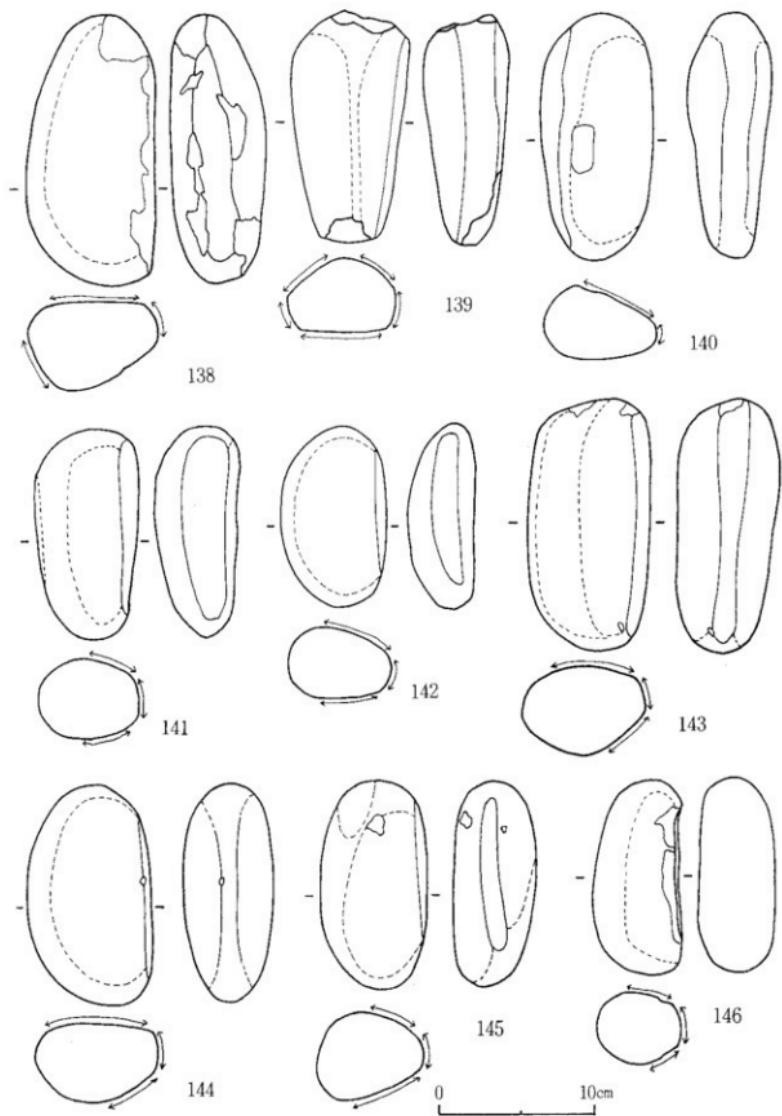
第129図 第1次調査出土石器実測図 (9)



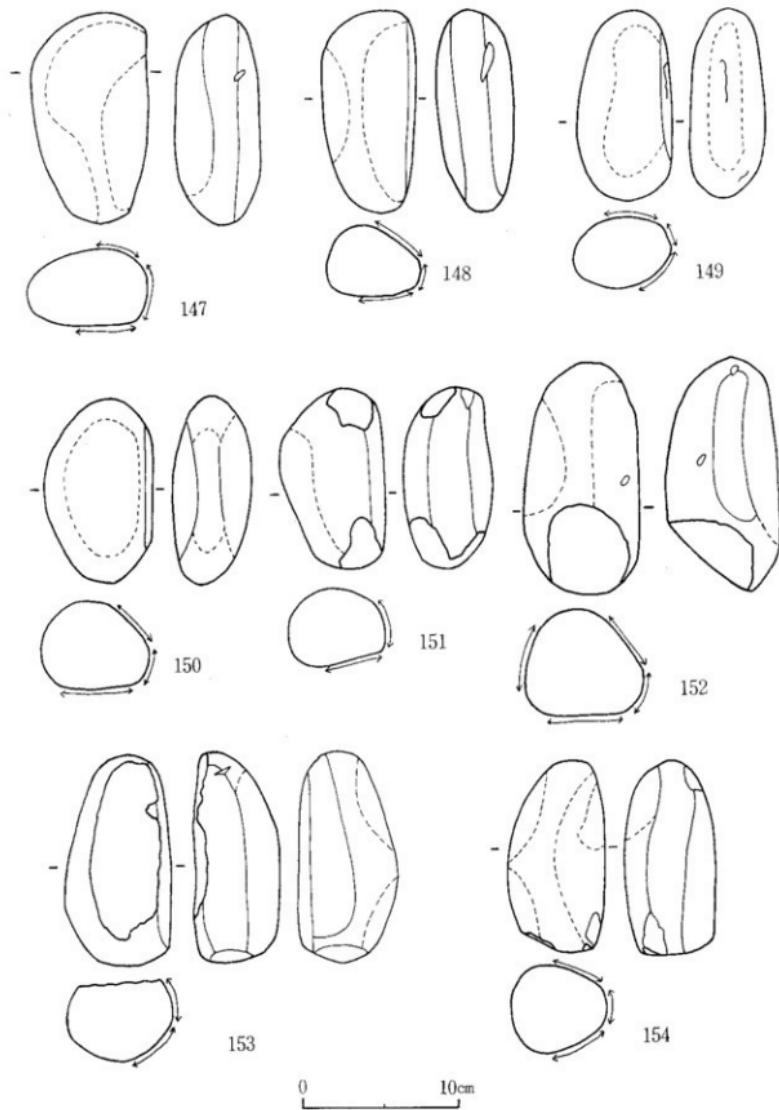
第130図 第1次調査出土石器実測図 (10)



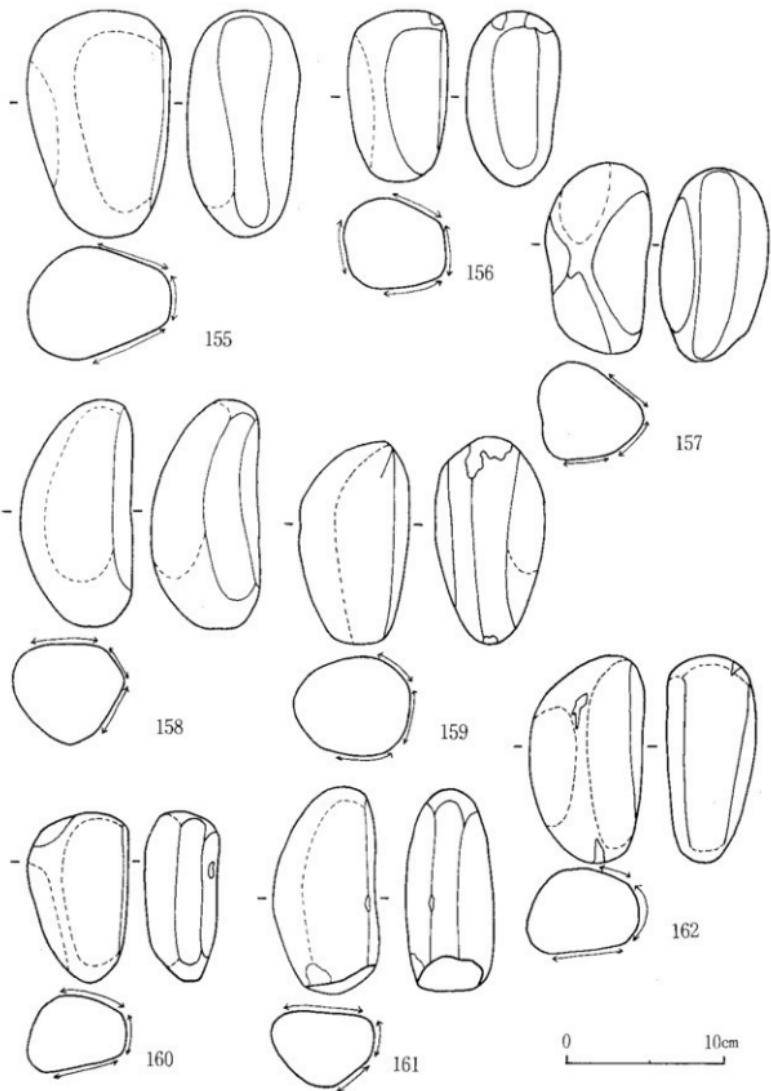
第131図 第Ⅰ次調査出土石器実測図 (11)



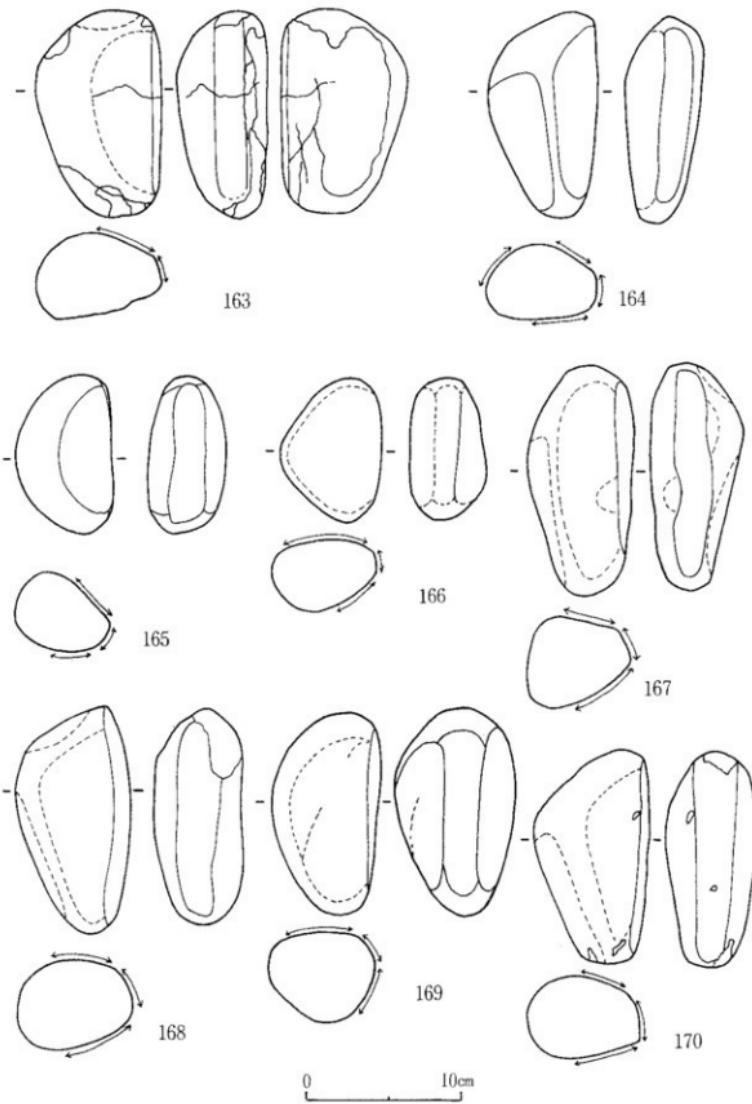
第132図 第1次調査出土石器実測図 (12)



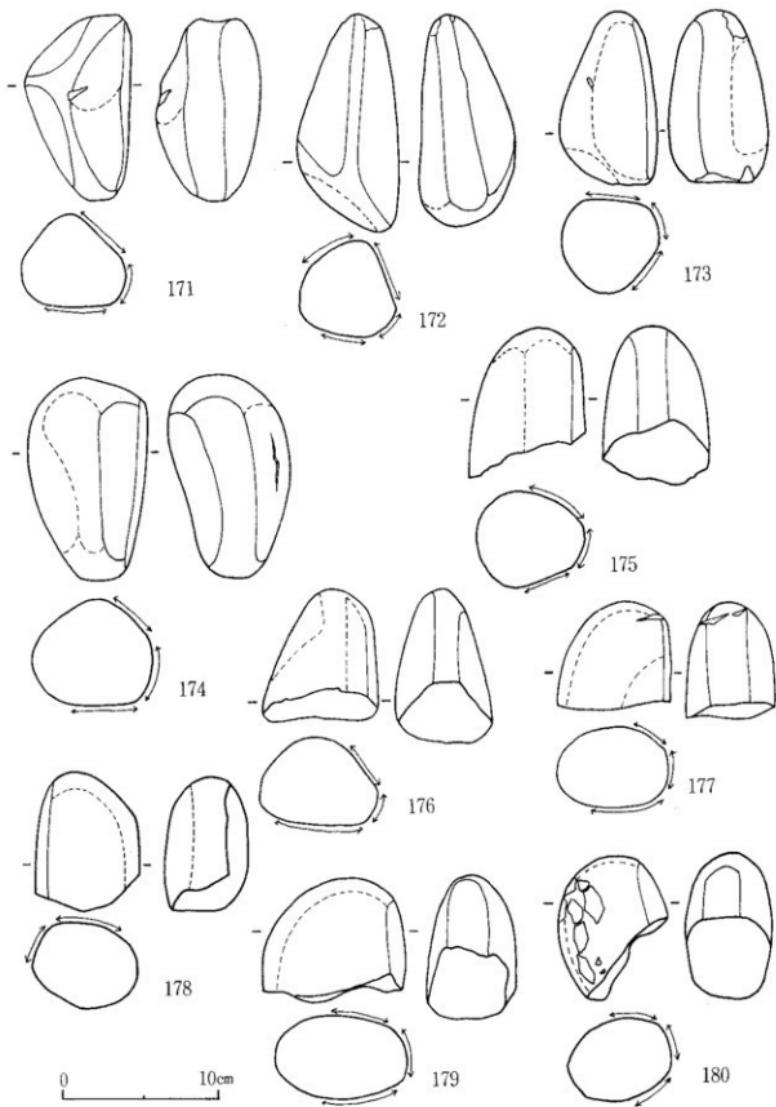
第133図 第I次調査出土石器実測図 (13)



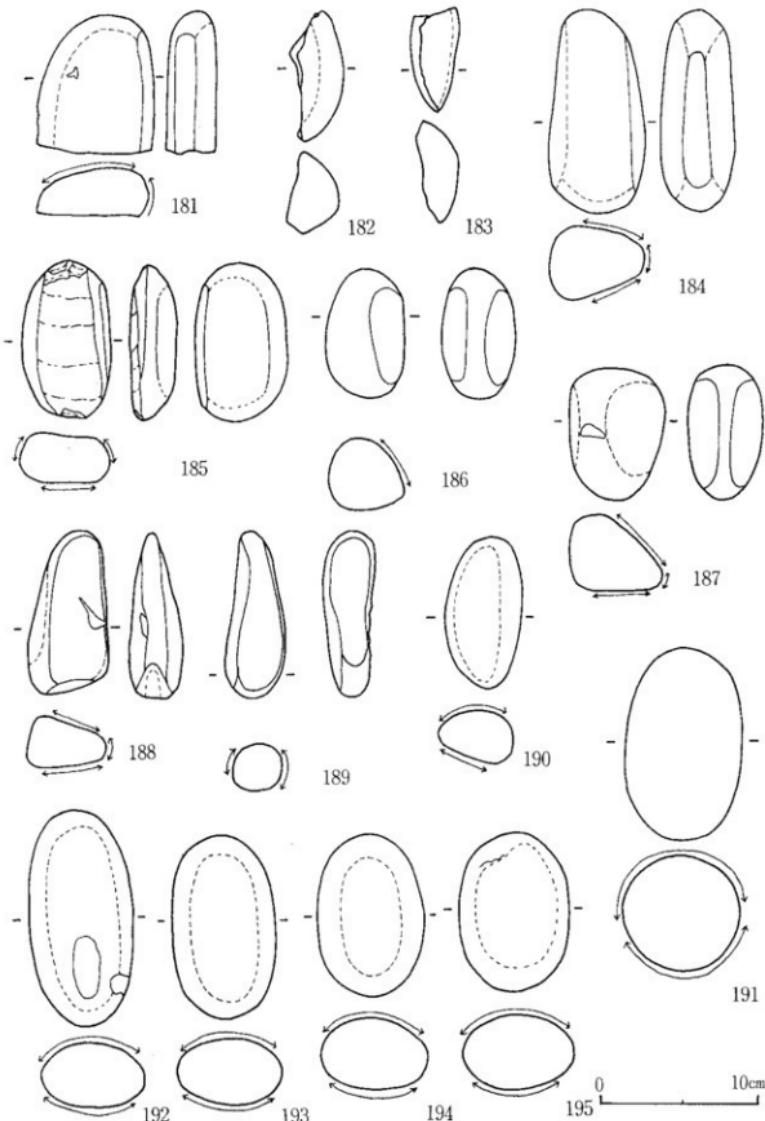
第134図 第Ⅰ次調査出土石器実測図 (14)



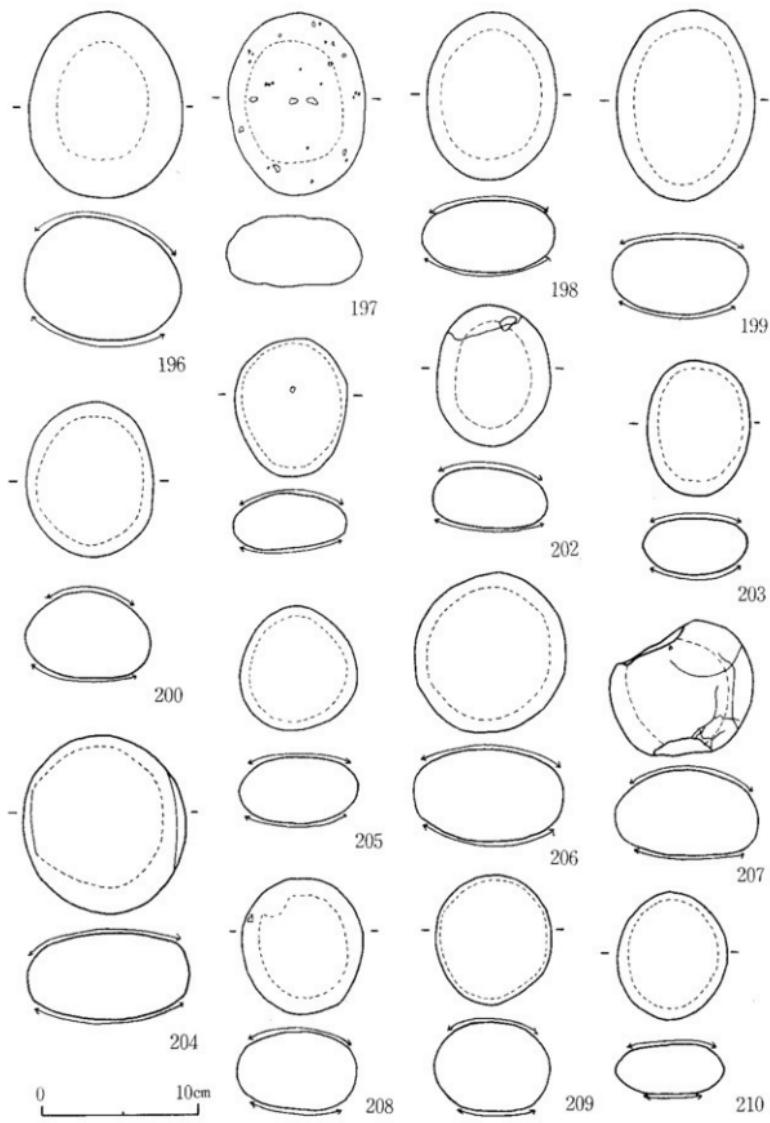
第135図 第Ⅰ次調査出土石器実測図 (15)



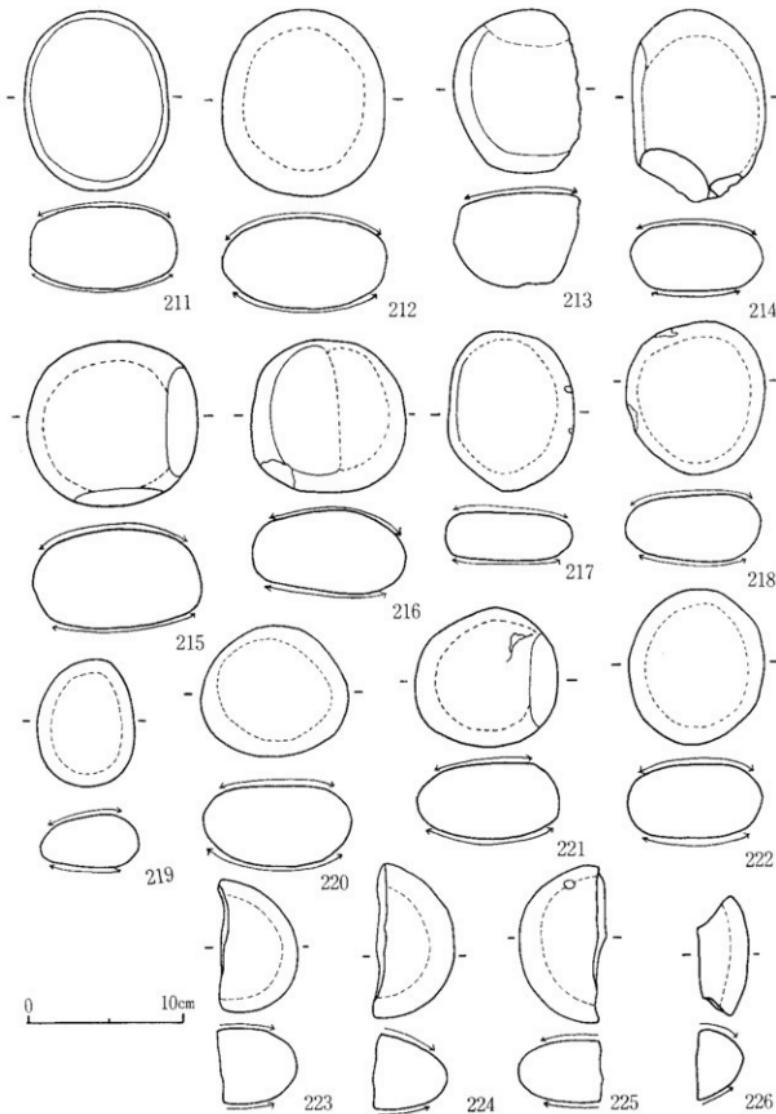
第136図 第1次調査出土石器実測図 (16)



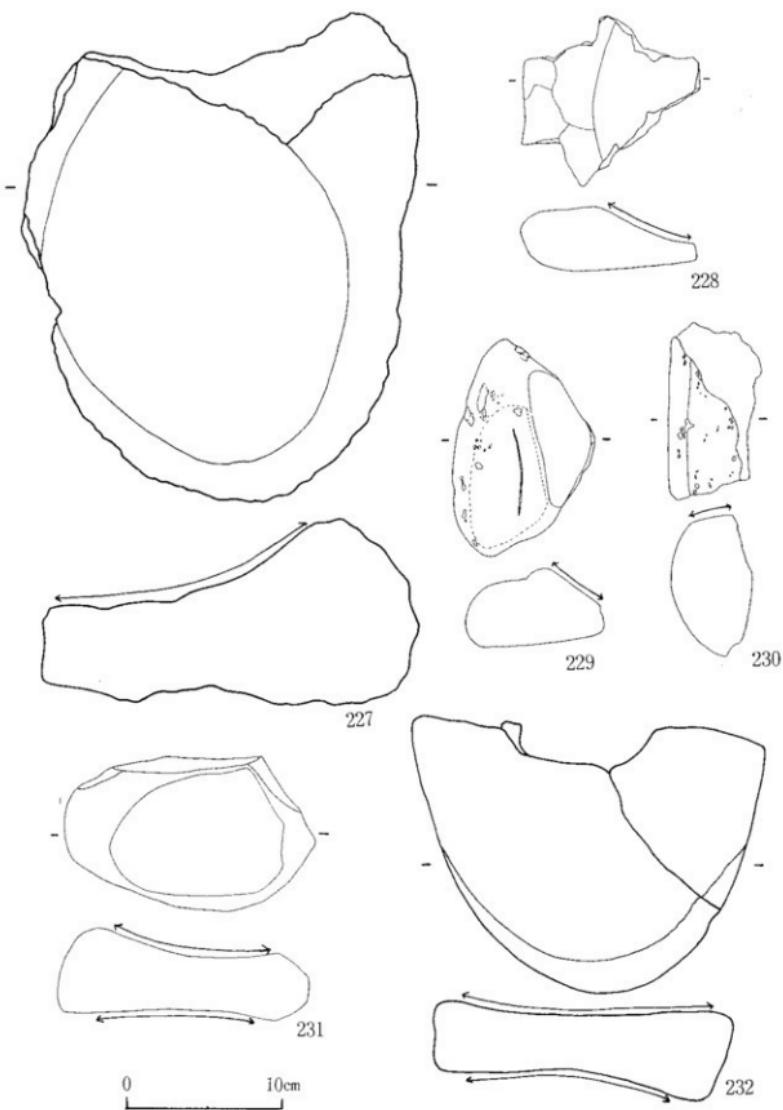
第137図 第I次調査出土石器実測図 (17)



第138図 第I次調査出土石器実測図 (18)



第139図 第1次調査出土石器実測図 (19)



第140図 第1次調査出土石器実測図 (20)

(単位mmおよびg)

器種	出土区	分類	図番号	図版番号	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
石 棒	B - 1		121 - 1	74	58.0	31.0	9.0		黒曜石	
局部磨製石斧	第3号住居址		121 - 2	"	83.5	23.0	13.2	35.7	黒曜石	
"	C - 2		121 - 3	"	121.0	50.0	28.0	226.0	安山岩	
"	A - 1		121 - 4	"	67.0	39.0	21.0	81.6	黒曜石	
磨製石斧	表様		121 - 5	"	61.5	49.0	19.0	84.3	ち密安山岩	
石 砕	第3号住居址		121 - 6	"	28.5	20.0	5.5	2.9	黒曜石	
F - 1			121 - 7	"	17.5	21.0	3.0	0.9	"	頭部欠損
C - 2			121 - 8	"	20.0	16.5	3.0	0.7	黒曜石	
D - 2			121 - 9	"	17.0	15.0	3.5	0.7	黒曜石	
第3号住居址			121 - 10	"	19.0	15.0	3.0	0.8	"	
D - 2			121 - 11	"	25.5	16.0	4.0	0.9	"	片脚欠損
G - 1			121 - 12	"	20.0	14.0	3.8	0.6	"	
第3号住居址			121 - 13	"	23.0	11.5	3.0	0.7	黒曜石	頭部・両脚欠損
C - 6			121 - 14	"	14.5	12.0	3.0	0.4	黒曜石	
G - 1			121 - 15	"	18.0	18.5	4.5	1.2	"	頭部片脚欠損
F - 1			121 - 16	"	22.0	16.0	3.0	0.8	"	
第3号住居址			121 - 17	"	18.0	13.0	2.5	0.3	"	片脚欠損
H			121 - 18	"	16.0	14.0	3.0	0.6	黒曜石	
第3号住居址			121 - 19	"	20.0	19.0	3.0	1.0	"	
D - 1			121 - 20	"	20.0	17.0	2.0	0.6	"	
第3号住居址			121 - 21	"	16.0	12.0	2.0	0.3	黒曜石	
C - 6			121 - 22	"	16.0	16.0	3.1	0.7	"	頭部欠損
E - 3			121 - 23	"	21.0	22.0	3.0	0.8	"	
E - 2			121 - 24	"	21.0	19.0	3.5	1.0	"	頭部欠損
第3号住居址			121 - 25	"	14.5	15.0	3.5	0.6	"	
D - 1			121 - 26	"	13.0	10.0	2.5	0.3	"	
E - 1			121 - 27	"	15.0	13.0	3.0	0.4	"	
第3号住居址			121 - 28	"	15.5	12.5	2.0	0.3	"	
"			121 - 29	"	12.0	21.5	4.0	1.2	"	頭部片脚欠損
第1号住居址			121 - 30	"	12.0	18.0	3.0	0.5	"	頭部欠損
第3号住居址			121 - 31	"	9.0	15.0	2.0	0.4	"	
"			121 - 32	"	21.0	10.0	2.0	0.6	黒曜石	片脚欠損
"			121 - 33	"	22.5	12.5	2.0	0.5	"	胸部片脚欠損
B - 3			121 - 34	"	23.0	11.0	3.0	0.5	黒曜石	頭部片脚欠損
C - 4			121 - 35	"	15.0	19.0	3.0	0.4	"	片脚欠損
C - 2			121 - 36	"	13.0	12.0	3.0	0.3	"	両脚欠損
D - 6			121 - 37	"	16.0	14.5	3.0	0.4	"	頭部欠損
A - 1		頭化せず			15.0	12.5	3.0	0.6	"	
A - 1		"			17.0	13.0	3.0	0.6	"	
A - 2		"			18.0	11.0	3.0	0.4	"	
A - 1		"			20.0	15.0	3.0	0.5	"	
B - 2		"			20.0	14.0	2.1	0.4	"	
第11号集石土坑					10.0	16.0	2.8	0.4	"	
石 砕 未 製 品	第3号住居址				15.0	18.5	3.0	0.7	"	
"	C - 3	"			18.0	17.0	6.0	1.0	珪岩(チャート・灰色)	
加工痕のある剥片	C - 3	"			23.0	18.5	4.0	1.9	黒曜石	
"	不明	"			23.0	21.0	6.0	2.5	黒曜石	

第7表 大平C遺跡第I次調査石器計測一覧表(1)

(単位mmおよびg)

器種	出土区	分類	図番号	図版番号	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
加工痕のある剥片	B - 1	固化せず			24.0	18.0	11.0	4.1	黒曜石	
ピーエスエスキュー	第3号住居址		"		24.0	19.5	7.0	3.1	"	
加工痕のある剥片	F - 2		122-38		84.0	59.0	11.0	51.7	"	
石核	第3号住居址		122-39		76.0	51.0	39.0	126.4	"	
礫器	第1号住居址		122-40	75	88.5	95.0	49.0	459.4	玄武岩	
	C - 3		122-41	"	50.0	79.0	48.0	255.7	"	
	B - 3		122-42	"	95.0	97.0	42.5	537.3	"	
	B - 3		122-43		169.0	90.0	65.5	439.8	安山岩	
	A - 5		122-44		116.0	85.0	55.0	513.0	玄武岩	
不明			122-45		72.0	98.5	50.0	439.8	"	
"			122-46		63.0	92.5	30.0	220.2	安山岩	
打製石斧	G - 2		123-47	75	100.0	61.5	21.5	131.1	玄武岩	
	第3号住居址		123-48	"	100.0	46.0	17.0	79.6	"	
	"		123-49	"	107.5	39.0	21.0	107.0	安山岩	
	C - 3		123-50	"	117.0	49.5	21.5	141.7	"	
不明			123-51	"	95.0	45.5	16.5	85.1	"	
A - 1			123-52	"	97.5	40.0	16.0	73.8	"	
A - 1 (層)			123-53	"	75.0	42.1	19.0	77.7	玄武岩	
第3号住居址			123-54	"	78.0	38.5	9.0	30.7	"	
不明			123-55	"	49.0	28.0	9.0	18.1	"	
第3号住居址			123-56	"	75.0	42.5	20.0	57.8	安山岩	
F - 3			123-57	"	59.0	41.0	12.0	42.6	玄武岩	
C - 2 (層)			123-58	"	60.0	47.0	16.5	75.1	"	
磨石	B - 3	I - a	124-59		159.0	61.0	61.0	777.0	安山岩	
不明	"	124-60	75	105.0	61.0	57.0	478.4	"		
第29号集石土坑	"	124-61	"	138.0	77.0	70.0	1002.7	"		
Eグリッド	"	124-62		139.0	57.0	57.0	768.8	"		
D - 4	"	124-63		149.0	69.5	63.0	966.5	"		
B - 4	"	124-64		124.0	54.0	55.0	673.1	"		
D - 1	"	124-65		138.0	63.0	55.0	725.2	"		
第2号住居址	"	124-66		120.0	62.0	49.0	585.8	"		
C - 1	"	124-67		143.0	60.0	56.0	816.9	"		
第3号住居址	"	125-68		135.0	62.0	57.0	785.8	"		
第11号集石土坑	"	125-69		153.0	59.0	57.0	803.3	"		
不明	"	125-70		145.0	72.0	66.0	1029.9	"		
C - 1	"	125-71		141.0	66.0	54.0	750.9	"		
第3号住居址	"	125-72		139.8	67.0	47.1	682.6	"		
E - 6	"	125-73		138.0	56.4	48.0	549.7	玄武岩		
不明	"	125-74	75	145.0	58.0	59.0	776.0	安山岩		
D - 1	"	125-75		130.0	58.3	47.0	612.7	"		
不明	"	126-76		142.0	63.0	59.0	866.7	"		
不明	I - b	126-77		163.5	86.0	81.0	1490.0	"		
B - 6	"	126-78		174.0	76.0	70.0	1425.0	"		
C - 3	"	126-79		117.0	76.8	57.0	752.2	"		
B - 4	"	126-80		141.5	73.0	62.0	847.9	"		
B - 3	"	126-81	76	166.0	71.0	56.0	1098.4	"		
第2号住居址	"	126-82		135.5	79.5	70.0	929.5	"		

第8表 大平C遺跡第I次調査石器計測一覧表(2)

(単位mmおよびg)

器種	出土区	分類	図番号	図版番号	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
磨石	C - 4	I - c	127-83		70.0	50.0	33.0	181.8	玄武岩	
	A - 3	"	127-84		127.0	71.0	66.0	796.9	安山岩	
	A - 4	"	127-85		112.5	87.5	71.5	782.0	玄武岩	
	C - 4	"	127-86		79.0	63.0	49.0	343.4	安山岩	
	表土	"	127-87		87.0	42.0	49.5	265.7	"	
	C T	"	127-88	76	66.0	59.0	56.5	346.8	"	
	B - 3	"	127-89		90.5	53.0	51.5	380.9	"	
	A - 3	"	127-90		64.0	59.5	47.0	249.7	"	
	B - 1	"	127-91		70.5	60.0	60.5	412.6	"	
	B - 1	"	127-92		87.5	64.5	57.0	526.3	"	
	B - 1	"	127-93		59.0	55.0	48.0	240.6	"	
	C - 2	"	127-94		75.5	57.5	48.5	227.3	"	
	B - 3	I - c	128-95		71.0	51.0	41.0	229.2	"	
	B - 1	"	128-96		78.0	51.0	48.0	301.0	"	
	B - 3	"	128-97		72.0	58.0	50.0	286.2	"	
	C - 1	"	128-98	76	89.0	64.0	52.5	389.5	"	
	D - 3	"	128-99		47.0	52.0	48.5	181.7	"	
	F - 1	"	128-100		49.0	63.0	46.0	167.9	"	
	C - 3	"	128-101		46.0	61.0	52.0	158.7	"	
	H - 6	"	128-102		45.0	50.0	43.5	102.1	"	
	A - 1	"	128-103		58.0	70.0	49.0	268.6	"	
	A - 2	"	128-104		43.0	57.0	48.5	160.7	"	
	B - 2	"	128-105		64.0	42.0	61.0	207.1	"	
第4号住居址	"	128-106			63.0	31.5	54.0	116.7	"	
A - 3	"	128-107			48.0	33.0	48.0	95.4	"	
F - 3	"	128-108			65.0	54.0	47.0	227.8	玄武岩	
Cグリッド	"	128-109			48.0	62.1	51.0	239.7	安山岩	
B - 1	"	128-110			73.0	57.0	57.1	390.0	玄武岩	
C - 2	II - a	129-111			173.5	79.1	54.0	1075.8	安山岩	
A - 1	"	129-112			133.0	82.2	63.5	1022.3	"	
B - 3	"	129-113			148.0	82.1	59.5	1067.8	"	
不明	"	129-114			152.0	70.0	51.0	874.3	"	
第2号住居址	"	129-115			182.0	73.5	52.0	1017.9	"	
第19号集石土坑	"	129-116			127.0	63.0	48.5	617.5	"	
C - 1	"	129-117			122.0	69.0	56.0	664.4	"	
B - 3	"	129-118			132.0	61.0	48.0	605.6	"	
第1号集石土坑	"	130-119			120.0	74.0	56.5	748.2	"	
A - 2	"	130-120			125.0	72.0	52.5	675.2	"	
不明	"	130-121			117.0	74.0	63.5	799.7	"	
B - 1	"	130-122			147.0	85.0	67.0	1168.5	"	
B - 7	"	130-123			127.0	70.0	55.0	673.7	"	
不明	"	130-124	76		131.0	66.0	51.5	655.7	"	
A - 3	"	130-125			133.5	70.0	69.2	833.7	"	
C - 3	"	130-126			132.0	62.0	54.0	654.7	"	
第8号集石土坑	"	130-127			97.5	62.0	40.0	358.0	"	
A - 1	"	131-128			100.0	67.0	52.0	513.5	"	
A - 1	"	131-129			103.0	50.0	51.0	383.4	玄武岩	

第9表 大平C遺跡第1次調査石器計測一覧表(3)

(単位mmおよびg)

器種	出土区	分類	図番号	図版番号	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
磨石	D - 3	II - a	131-130	76	92.5	73.0	56.0	601.0	安山岩	
	C - 3	"	131-131	76	102.0	73.0	57.0	606.8	玄武岩	
第29号集石土坑	"	131-132			84.0	70.0	62.0	507.2	安山岩	
D - 1	"	131-133			91.5	72.5	62.0	482.5	"	
B - 3	"	131-134			127.0	67.0	57.2	598.2	"	
B - 2	"	131-135			113.0	70.0	60.0	592.7	"	
不明	"	131-136			52.0	82.0	54.0	321.6	"	
第22号集石土坑	"	131-137	76		79.0	82.0	54.8	376.6	"	
第29号集石土坑	II - b	132-138			172.5	82.0	61.0	1250.0	"	
A - 3	"	132-139			143.0	71.0	50.5	755.2	"	
C - 4	"	132-140			158.0	73.0	51.0	871.4	"	
B - 4	"	132-141	76		132.0	62.0	65.0	672.3	"	
D - 3	"	132-142			115.5	66.0	41.6	489.1	"	
第19号集石土坑	"	132-143			157.5	76.5	58.2	1129.4	"	
不明	"	132-144	76		140.0	77.5	54.0	893.2	"	
A - 2	"	132-145			130.0	67.6	59.0	697.3	"	
第3号住居址	"	132-146			123.5	56.1	44.0	487.0	"	
第2号住居址	"	133-147			134.0	74.5	54.0	799.8	"	
不明	"	133-148	76		127.0	58.5	46.0	518.8	"	
第22号集石土坑	"	133-149			119.0	61.0	46.0	490.7	玄武岩	
B - 2	"	133-150			118.0	73.0	52.0	597.9	安山岩	
C - 4	"	133-151			114.0	64.5	52.0	554.0	"	
A - 3	"	133-152			144.0	75.0	72.0	1043.3	"	
A - 1	"	133-153			133.0	63.5	53.5	653.0	玄武岩	
B - 4	"	133-154			120.0	61.1	56.0	636.3	"	
第1号集石土坑	"	134-155			142.0	89.7	68.0	1240.0	安山岩	
不明	"	134-156			111.0	64.0	61.0	633.4	"	
第22号集石土坑	"	134-157			122.5	63.0	68.0	663.4	"	
B - 3	"	134-158			144.0	69.0	64.5	920.2	"	
B - 2	"	134-159			128.0	70.0	65.0	852.2	"	
A - 3	"	134-160			110.0	63.0	48.0	438.5	"	
A - 3	"	134-161			129.0	64.0	50.0	606.9	"	
不明	"	134-162			130.5	69.5	60.0	721.0	"	
C - 1	"	135-163			130.0	77.5	54.0	781.6	"	
A - 1	"	135-164	76		131.5	70.0	50.0	563.1	"	
E - 7	"	135-165			103.0	64.5	49.0	468.3	"	
A - 1	"	135-166			90.0	66.0	50.0	380.7	"	
第1号住居址	"	135-167			144.0	63.0	58.0	705.6	"	
B - 3	"	135-168			141.0	71.0	59.0	802.4	"	
B - 2	"	135-169	76		126.0	61.0	58.0	665.2	"	
第22号集石土坑	"	135-170	76		135.0	72.0	54.0	696.2	"	
B - 2	"	136-171	76		117.0	68.0	65.0	627.6	閃綠岩	
不明	"	136-172	76		135.0	61.0	58.5	617.7	安山岩	
E - 1	"	136-173			109.0	60.0	61.0	573.7	"	
不明	"	136-174	77		126.0	75.0	71.5	889.8	"	
B - 3	"	136-175			101.0	70.0	65.5	527.3	"	
B - 2	"	136-176	77		90.5	74.0	56.0	450.9	玄武岩	

第10表 大平C遺跡第I次調査石器計測一覧表(4)

(単位mmおよびg)

器種	出土区	分類	図面番号	図版番号	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
磨石	配下No.1	II - b	136-177	77	64.5	69.0	54.0	370.5	安山岩	
	D - 2	"	136-178		87.0	66.0	53.0	426.0	"	
第22号集石土坑	"	138-179		73.0	86.5	56.0	522.7	"		
B - 3	"	138-180	77	87.0	70.0	52.0	383.6	"		
第11号集石土坑	"	137-181		88.0	72.0	29.0	329.7	"		
D - 3	"	137-182		81.0	32.5	55.0	134.9	"		
A - 2	"	137-183		72.1	30.0	76.0	156.5	"		
D - 3	II - c	137-184		126.0	61.0	46.0	492.6	"		
不明	"	137-185		99.0	56.0	30.0	298.5	"		
H - 7	"	137-186		85.0	53.0	47.0	292.7	"		
第3号住居址	"	137-187		88.5	66.0	48.0	347.5	"		
A - 3	"	137-188		107.0	36.0	33.0	170.7	"		
B - 4	"	137-189		106.0	51.0	35.0	236.7	"		
不明	"	137-190		96.0	48.0	31.5	216.7	"		
A - 3	III - a	137-191	77	120.0	72.5	72.0	136.0	"		
第31号集石土坑	"	137-192	77	136.5	63.0	48.0	618.3	"		
A - 2	"	137-193		115.5	65.5	41.0	478.2	"		
不明	"	137-194		101.0	67.0	46.0	479.2	"		
B - 4	"	137-195		100.0	68.5	48.5	486.4	"		
C - 3	III - b	138-196		118.0	96.0	75.0	1220.0	"		
不明	"	138-197	77	119.0	89.0	47.0	632.2	玄武岩		
C - 3	"	138-198	77	104.0	81.0	47.0	599.8	安山岩		
C - 3	"	138-199		101.0	83.0	46.5	624.2	"		
不明	"	138-200		98.0	79.5	57.0	673.1	"		
第19号集石土坑	"	138-201		95.0	80.0	38.0	444.2	"		
B - 5	"	138-202		89.0	70.0	38.0	346.7	玄武岩		
C - 2	"	138-203	77	85.0	64.0	35.0	282.1	安山岩		
B - 4	III - c	138-204		114.0	101.0	54.0	976.1	"		
不明	"	138-205		99.0	93.0	60.0	813.2	玄武岩		
E - 5	"	138-206	77	102.0	80.5	45.0	516.0	"		
B - 3	"	138-207		90.0	90.0	55.0	543.3	安山岩		
不明	"	138-208	77	84.0	75.5	49.0	450.3	"		
D - 1	"	138-209		80.2	70.0	57.5	433.7	"		
A - 6	"	138-210	77	77.5	68.0	30.0	245.6	"		
C - 9	III - a	138-211	77	110.0	93.0	53.0	790.4	玄武岩		
第3号住居址	"	139-212	77	118.0	111.5	60.0	1083.5	安山岩		
E - 2	"	139-213		104.0	82.0	59.0	562.0	玄武岩		
第14号集石土坑	"	139-214		123.5	84.0	46.0	781.8	安山岩		
A - 2	III - e	139-215	77	99.5	103.0	66.0	1050.4	"		
O - 2	"	139-216		97.0	98.0	53.0	773.6	"		
F - 6	"	139-217		96.0	85.0	43.0	550.7	"		
B - 4	"	139-218		99.0	78.0	31.0	387.2	"		
B - 2	"	139-219		80.0	60.0	33.0	256.8	"		
不明	III - f	139-220		85.0	94.0	55.0	598.0	玄武岩		
第3号住居址	"	139-221		85.0	89.0	47.0	558.0	安山岩		
D - 3	"	139-222		73.0	80.0	43.0	390.3	"		
第4号住居址	"	139-223		85.0	53.0	46.0	275.7	"		

第11表 大平C遺跡第I次調査石器計測一覧表(5)

(単位mmおよびg)

器種	出土区	分類	図版番号	図版番号	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
磨石	D - 2	Ⅲ - f	139-224		96.5	51.0	50.5	303.3	安山岩	
	第29号集石土坑	"	139-225		97.0	52.0	40.0	314.9	"	
	B - 2	"	139-226		76.0	31.0	46.0	122.6	"	
	第1号集石土坑	圓化せず			136.0	58.0	51.0	544.5	ち密安山岩	
	C - 6	"			120.0	81.0	60.0	933.7	安山岩	
	D - 8	"			113.0	60.5	34.0	314.4	"	
	B - 4	"			120.0	58.0	26.0	201.1	"	
	第21号集石土坑	"			57.0	69.0	54.5	231.7	"	
	H - 9	"			65.0	62.0	62.0	327.9	"	
	B - 3	"			68.0	70.0	47.0	317.0	"	
石皿	Ⅲ 第3配石遺構	140-227	78	250.0	310.0	124.0		7500.0	玄武岩	
	不明	140-228		113.0	113.0	43.0		477.7	安山岩	
	"	140-229		143.0	88.0	63.0		571.9	流紋岩(鷺石)	
	B - 4	140-230		114.0	56.0	111.0		613.8	玄武岩	
	不明	140-231		160.0	111.5	57.0		823.8	流紋岩(鷺石)	
	第29号集石土坑	140-232	78	220.0	170.0	93.0		1560.0	" ("")	

第12表 大平C遺跡第I次調査石器計測一覧表(6)

第2節 第II次発掘調査

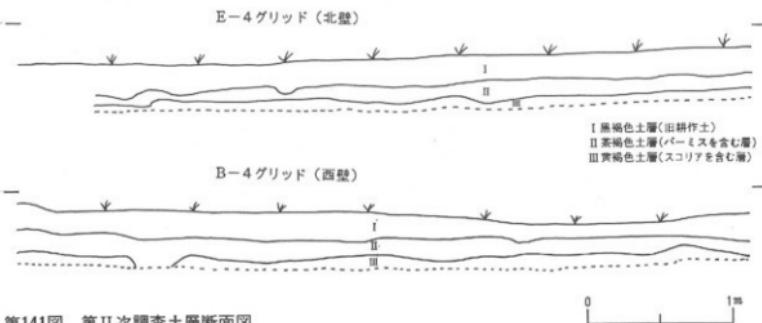
1. 遺跡の層序

調査によって確認された層序は、表土から遺構確認面のソフトローム斬移層まで第I層～第III層に分ける事ができる。基本層序は、B-4およびE-4グリッドにこれを求めた。

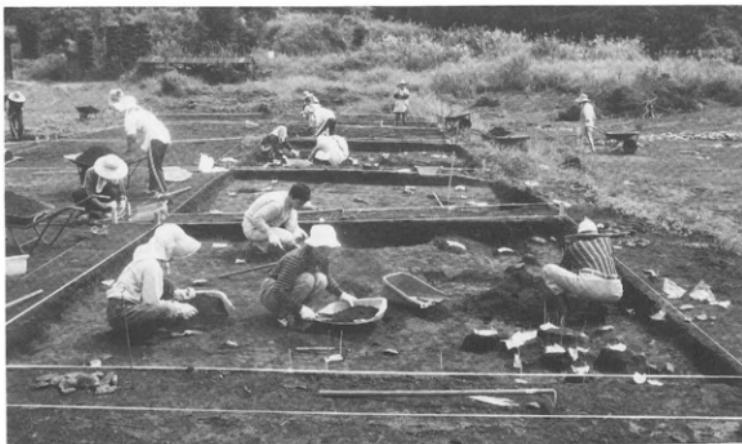
第I層 黒褐色土層。旧耕作土であり、調査区全体より検出されている。層厚は10～20cmである。

第II層 茶褐色土層。バーミスを含んでおり縄文中期の包含層である。層厚は10～15cmである。

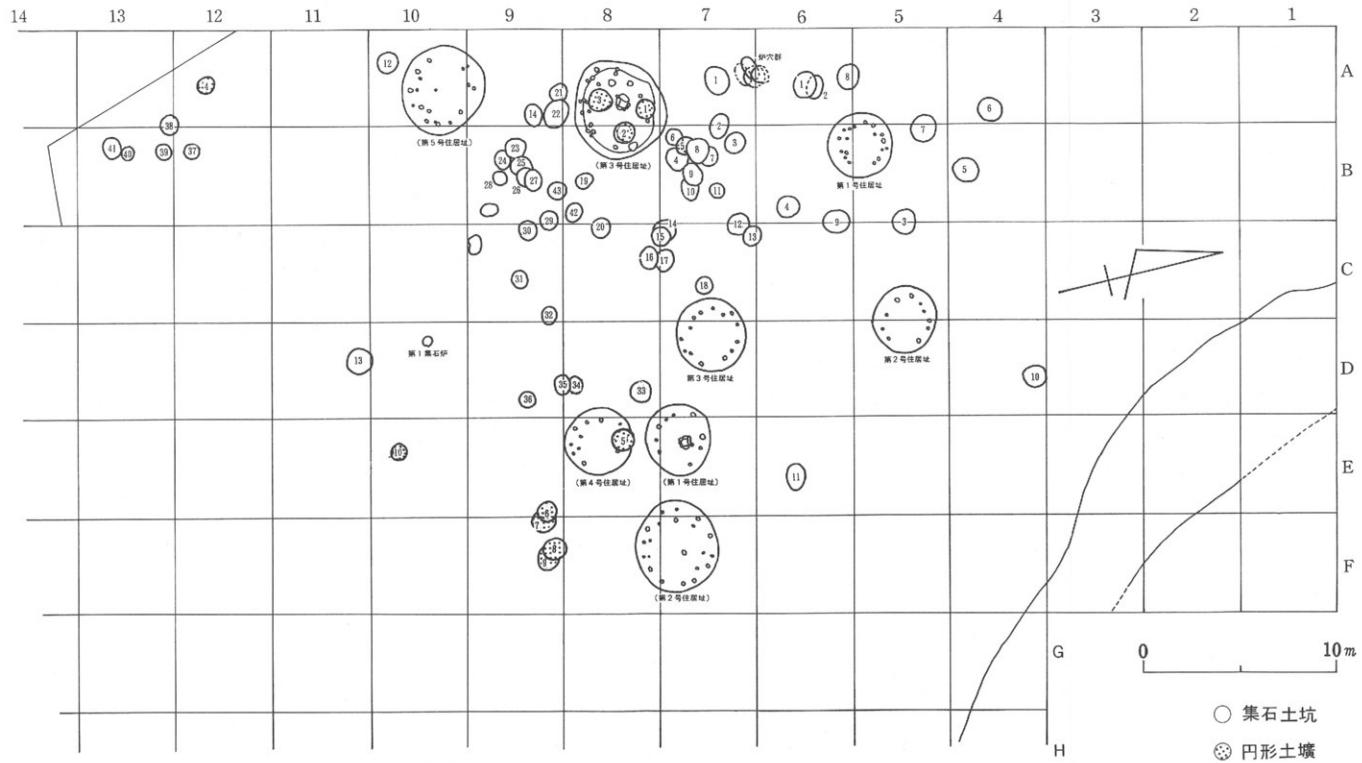
第III層 黄褐色土層。ソフトローム斬移層である。若干のスコリアを含んでいる。縄文早期の土器が検出されている。本層は、大平A遺跡の第IV層に対比される。



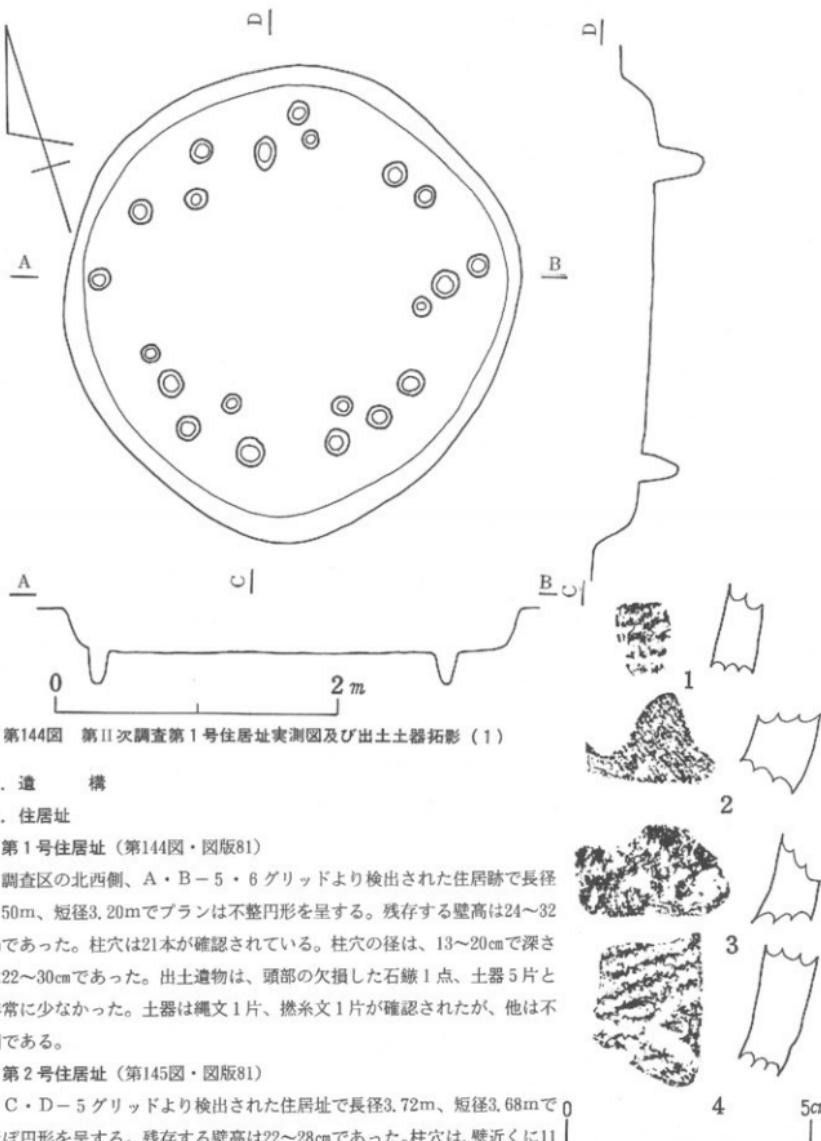
第141図 第II次調査土層断面図



第142図 第II次発掘調査風景



第143図 第II次調査遺構関連実測図



第144図 第II次調査第1号住居址実測図及び出土土器拓影(1)

2. 遺構

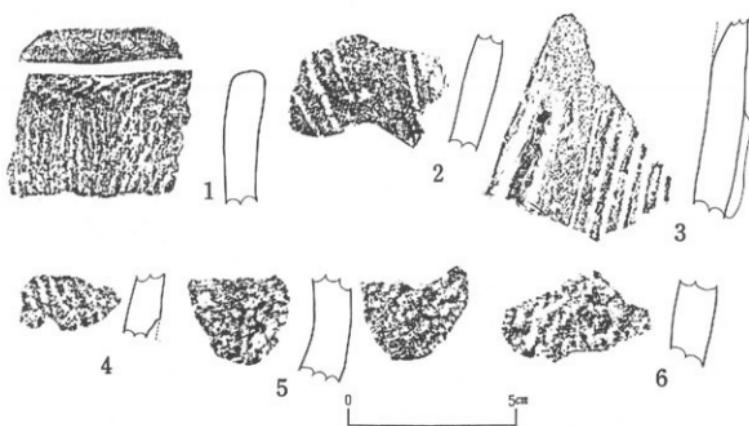
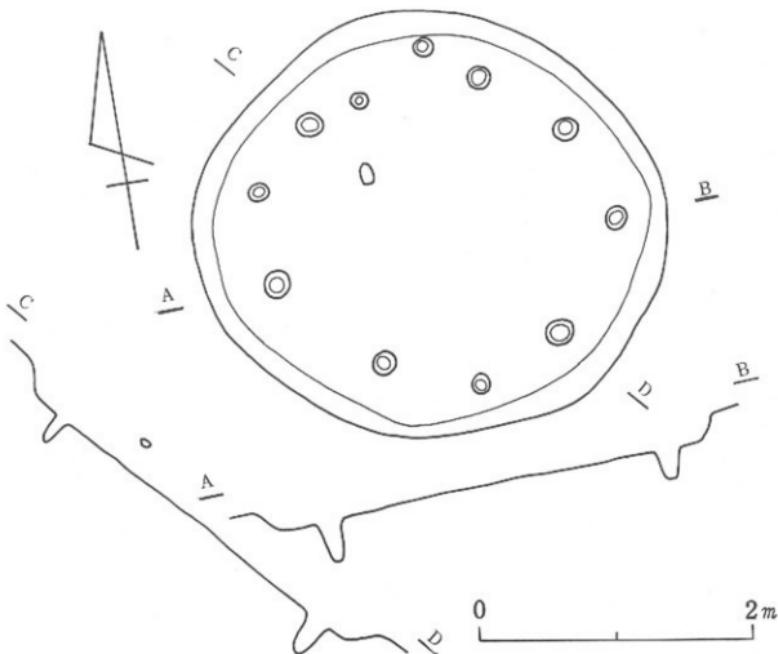
A. 住居址

第1号住居址 (第144図・図版81)

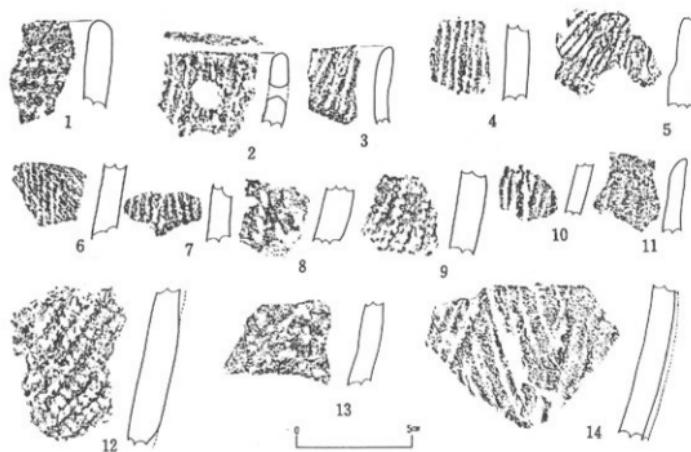
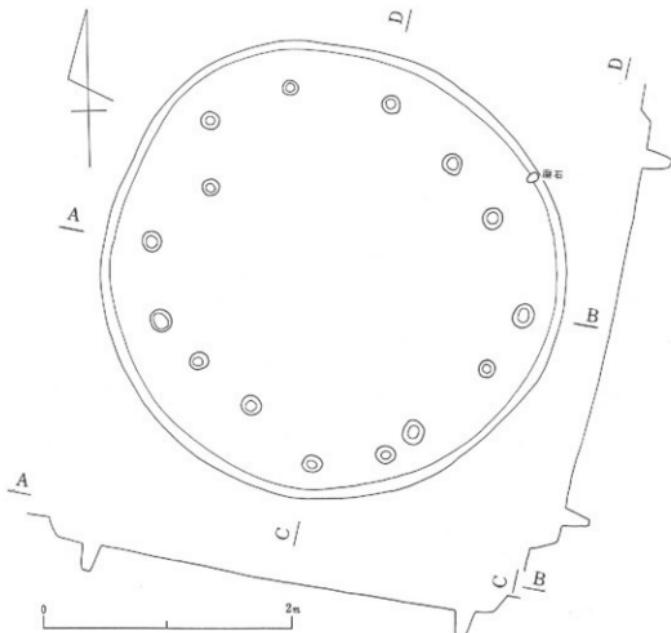
調査区の北西側、A・B-5・6グリッドより検出された住居跡で長径3.50m、短径3.20mでプランは不整円形を呈する。残存する壁高は24~32cmであった。柱穴は21本が確認されている。柱穴の径は、13~20cmで深さは22~30cmであった。出土遺物は、頭部の欠損した石鏃1点、土器5片と非常に少なかった。土器は縄文1片、撲糸文1片が確認されたが、他は不明である。

第2号住居址 (第145図・図版81)

C・D-5グリッドより検出された住居址で長径3.72m、短径3.68mでほぼ円形を呈する。残存する壁高は22~28cmであった。柱穴は、壁近くに11



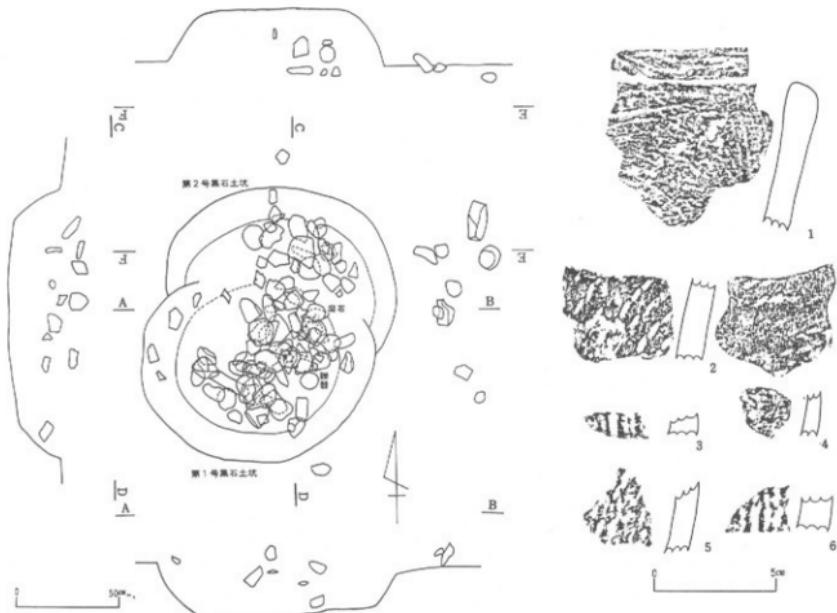
第145図 第II次調査第2号住居址実測図及び出土土器拓影（2）



第146図 第II次調査第3号住居址実測図及び出土土器拓影（3）

本が検出されている。柱穴の径は、16~20cmで深さは20~35cmであった。出土遺物は、磨石が1点と土器片が6点である。1は稲荷台式期の土器と思われる口縁部の破片である。口唇部がわずかに肥厚し、その前部に胴部と方向の異なる斜位の撚糸施文がみられる。胴部は圧痕の度合の弱い撚糸文が縦位に、あるいはそれと交差するように斜位に施文される。2、4も撚糸施文がみられる。3は縄文時代中期の土器、5、6は時期不明の土器である。3は、口唇部の器厚は薄くわずかに外反する。

第3号住居址（第146図・図版82・83） 第2号住居址のほぼ真南、調査区C・D-7グリッドより検出された住居址で長径3.60m、短径3.34mでプランは不整円形を呈する。残存する壁高は22~44cmであった。柱穴は壁近くに15本が確認されている。柱穴の径は、26~44cmで深さは40~44cmであった。出土遺物は、東北東の壁面に磨石が1点と石鐵の完形品1点と部分欠損したもの13点、計14点の石鐵が出土している。土器は縄文時代早期前半の、撚糸文土器が10片、縄文施文された土器が2片、縄文時代中期のものが1片出土している。1は条間の粗い横走する撚糸が施文される口唇部破片で、口唇部は円頭状をなし、断面は直行する。2は縦方向に条間の粗い撚糸文が施文され、口唇部は肥厚せず、断面形は直行する。3は口縁部が軽く外反する薄手の土器で、口縁端部より縦位に撚糸文が施文される。4~8、10は撚糸施文の胴部破片である。9、12は粒子の粗大な繩文が施文されるものである。14は縄文時代中期のものである。



第147図 第II次調査第1号・2号集石土坑実測図及び出土土器拓影（4）

B. 集石土坑（第147～159図）

大平C遺跡第II次調査では、14基の集石土坑が検出された。位置は調査区域の西側に集中しており、第I次調査における検出状況に類似している。これらの土坑は、第III層上面でプランが確認されたものが多い。覆土中には大小の礫が多數混在しており、その中より磨石、礫器、土器等の遺物が検出された。土器は第2号、3号住居跡と同様早期前半の撚糸文、繩文施文の土器が出土している。土坑の形態、規模、主軸方向、検出グリッド等の概要は第2表に示してあるのでここでは、土坑の状態、出土遺物について記述したい。

第1号・2号集石土坑（第147図・図版83）

大小の礫が覆土上面より土坑底面にかけて混在している。底面は比較的平坦である。出土遺物は磨石、礫器及び6片の撚糸文土器が出土した。1は口縁部が直立し、口唇部は角頭状をなす。口唇端部には細かい撚糸文が横位に、胴部には縱位に施文されるが不明瞭である。

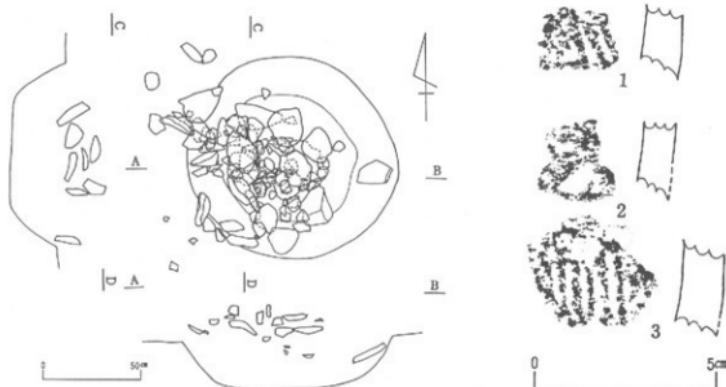
又、口唇部上面にも同一原体が施文される。色調は茶褐色を呈し胎土中に細砂、黒雲母が混入する。2は条間の粗い斜行する撚糸文が施される胴部破片である。裏面には同一原体が、横位に施文されている。色調は黒褐色を呈し胎土中に細砂が多量に含まれる。他の4片も撚糸文が施文された土器である。規模は、第1号集石土坑が $1.15 \times (0.95) \times 0.26\text{m}$ で、第2号集石土坑が $1.10 \times (0.90) \times 0.28\text{m}$ である。

第3号集石土坑（第148図）

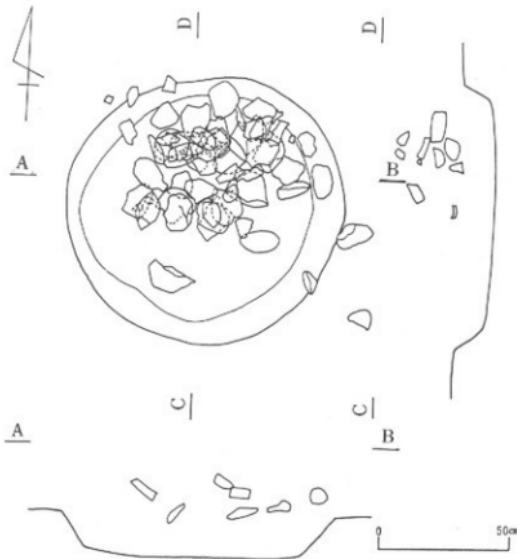
多量の礫が覆土上面に集中して混在している。東側の立ち上りの緩やかな面に偏平な礫が1個置かれている。出土遺物は、撚糸文土器が3片である。規模は $1.07 \times 1.03 \times 0.25\text{m}$ である。

第4号集石土坑（第149図）

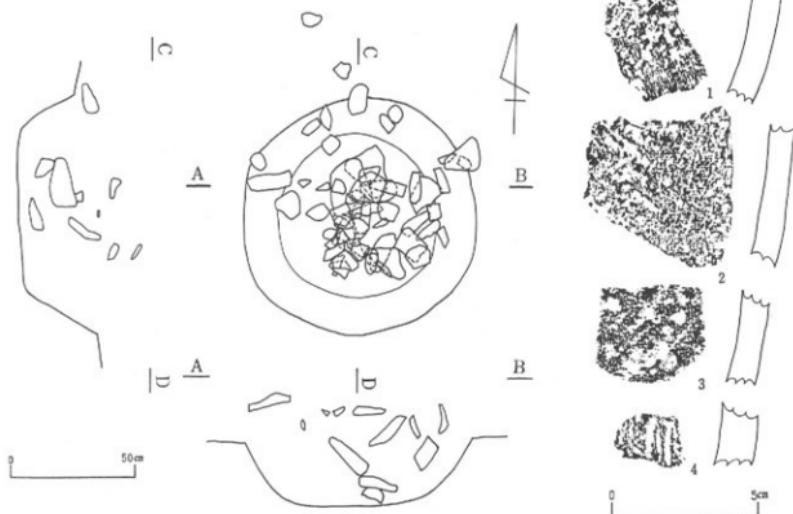
底面の平坦な浅い土坑である。礫は北側の覆土上面に集中している。遺物は検出されなかった。規模は、 $1.06 \times 1.04 \times 0.17\text{m}$ である。



第148図 第II次調査第3号集石土坑実測図及び出土土器拓影（5）



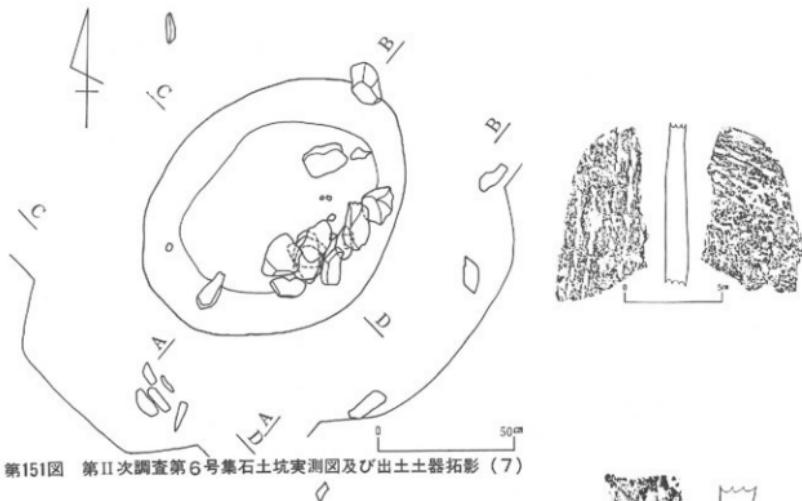
第149図 第II次調査第4号集石土坑実測図



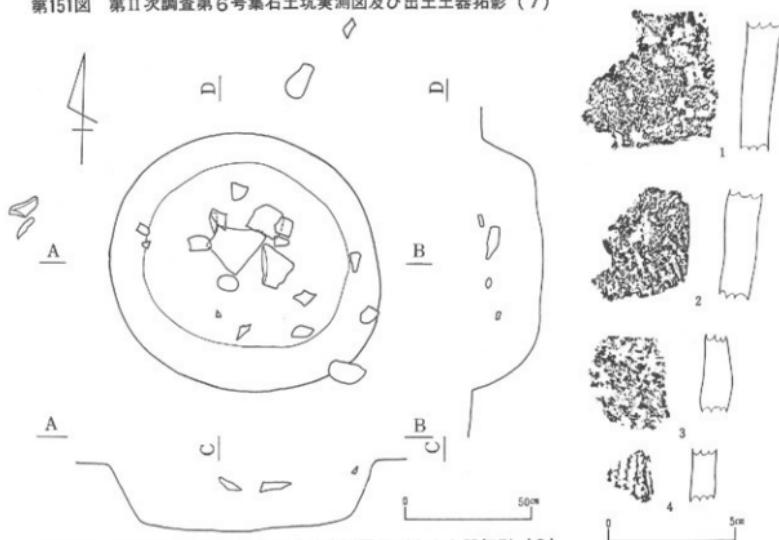
第150図 第II次調査第5号集石土坑実測図及び出土器拓影（6）

第5号集石土坑（第150図）

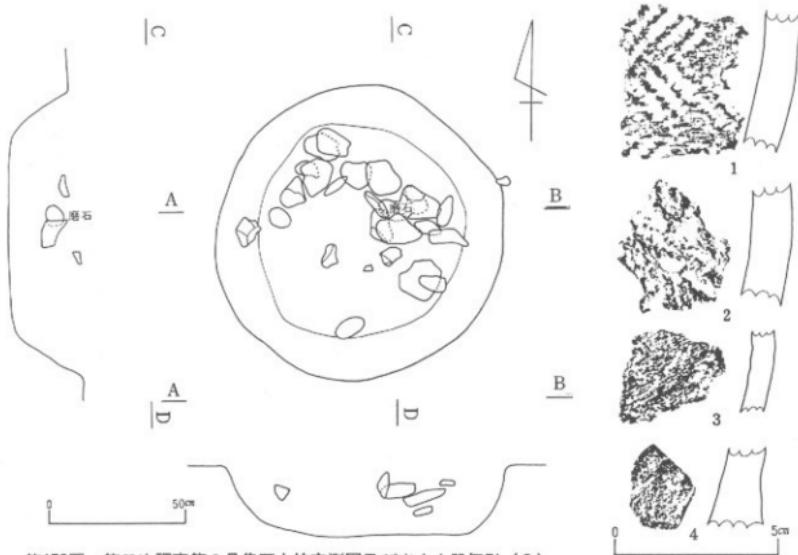
大小の礫が覆土の上面から底面に至るまで混在している。出土遺物は、磨石1点と4片の土器である。2は帯状の撲糸施された土器の胸部破片と思われる。色調は黒褐色を呈し胎土中に細砂、雲母が混入する。他は文様不明である。規模は、 $0.98 \times 0.93 \times 0.26$ mである。



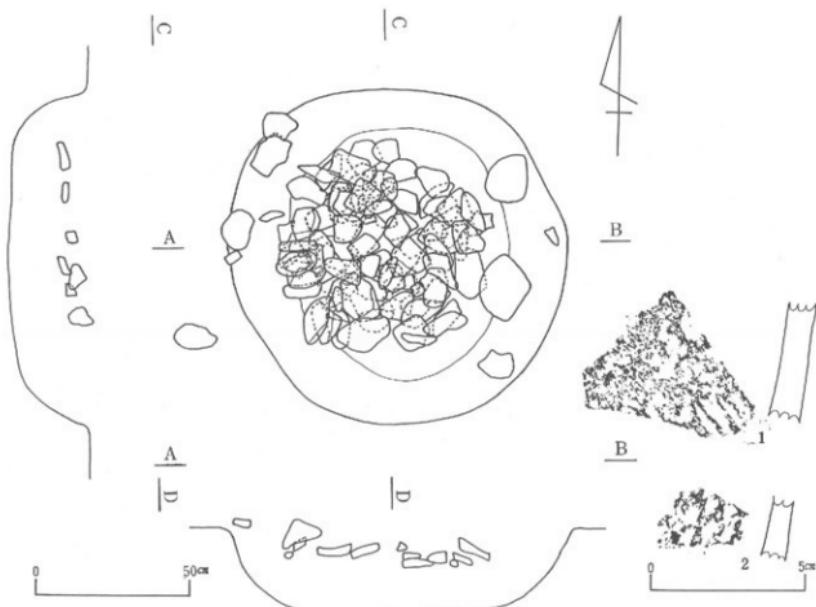
第151図 第II次調査第6号集石土坑実測図及び出土土器拓影（7）



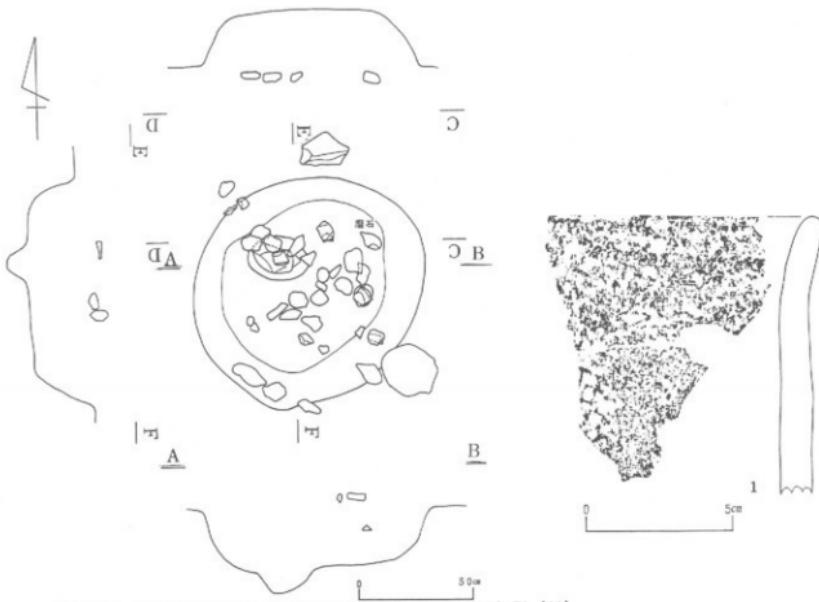
第152図 第II次調査第7号集石土坑実測図及び出土土器拓影（8）



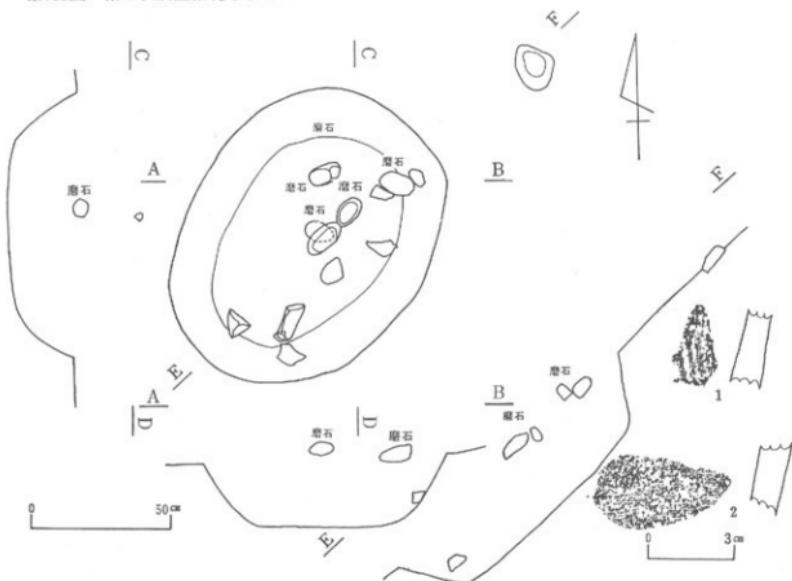
第153図 第II次調査第8号集石土坑実測図及び出土土器拓影(9)



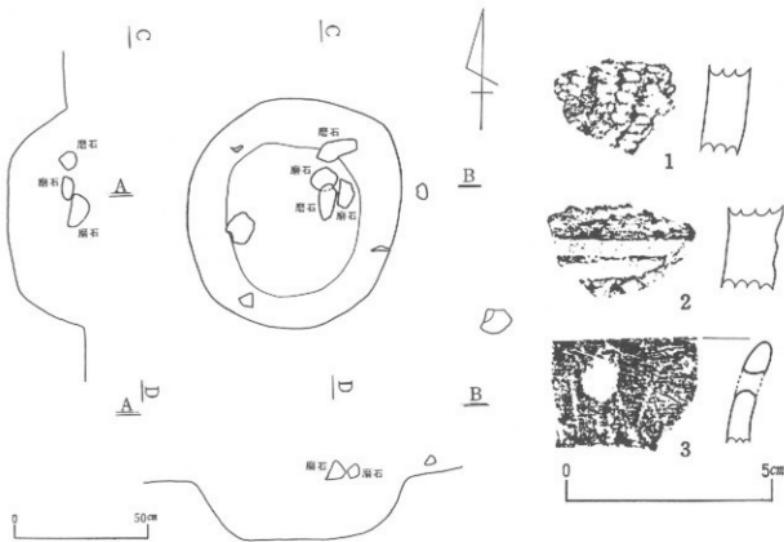
第154図 第II次調査第9号集石土坑実測図及び出土土器拓影(10)



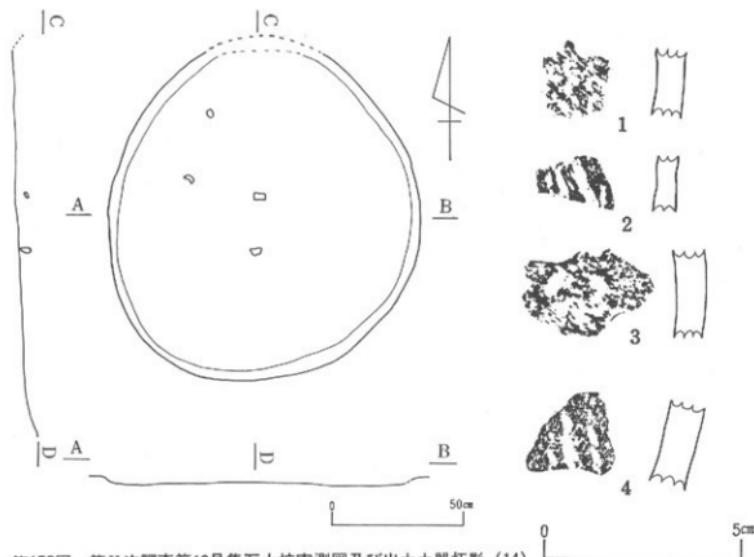
第155図 第II次調査第10号集石土坑実測図及び出土土器拓影（11）



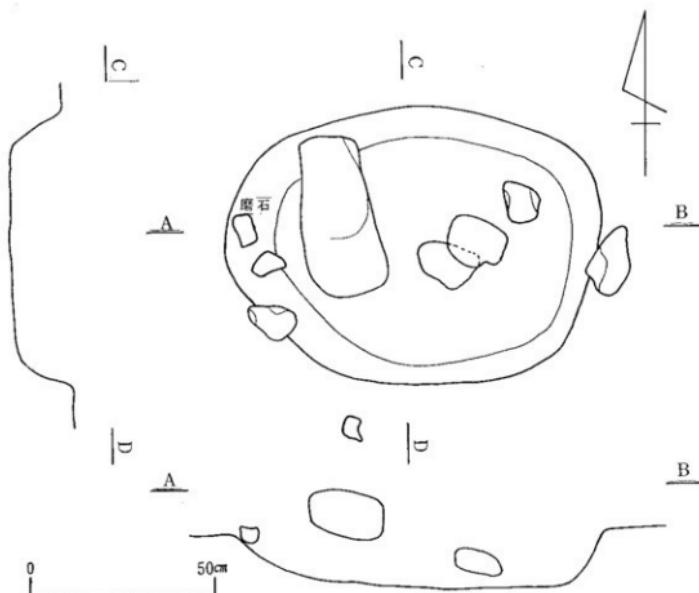
第156図 第II次調査第11号集石土坑実測図及び出土土器拓影（12）



第157図 第II次調査第12号集石土坑実測図及び出土土器拓影 (13)



第158図 第II次調査第13号集石土坑実測図及び出土土器拓影 (14)



第159図 第II次調査第14号集石土坑実測図

土坑No	形態	規模 cm	長軸方向	検出ゾーン	複合関係	除石数	出土遺物	備考
1	楕円	115×(95)×26	N-73°-E	A-6	2号土坑の南側半分を切っている	88	磨石1 磨石1	
2	円形	110×(90)×28	N-83°-W	A-6	1号土坑により北側を切られている		土器6片 (燃系文土器3片)	
3	"	107×103×25	N-60°-W	B-C-5	単独で存在	63	土器散片 (燃系文土器含む)	
4	"	106×104×17	N-0°-N	B-6	"	54		
5	"	98×93×26	N-0°-N	B-4	"	53	磨石1 土器4片 (燃系文土器含む)	
6	楕円	110×86×23	N-38°-E	A-4	"	21	土器1片 (表層の燃系文土器)	
7	円形	112×102×28	N-50°-W	A+B-5	"	18	土器散片	
8	"	110×105×27	N-13°-E	A-5-6	"	21	磨石1 土器4片 (燃系文土器1片) 燃系文土器1片	
9	"	113×104×27	N-58°-W	B+C-6	"	69	磨石1 土器2片 (燃系文土器1片)	
10	"	108×95×38	N-43°-E	E-10	"	38	磨石1 土器1片 (燃系文土器1片) にピッタリが存在	
11	楕円	110×86×25	N-42°-E	E-6	"	7	磨石5片 土器2片 (燃系文土器1片)	
12	"	89×78×25	N-48°-E	A-10	"	4	磨石4片 土器散片	
13	"	(128)×117×3	N-27°-E	D-11	"	0	土器散片 (燃系文土器含む)	
14	長円形	103×75×16	N-90°-W	A-9	"	9		

() は推定

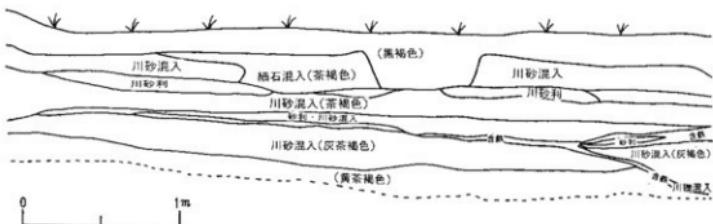
第13表 第II次集石土坑一覧表

C. 河川跡（第160・161図）

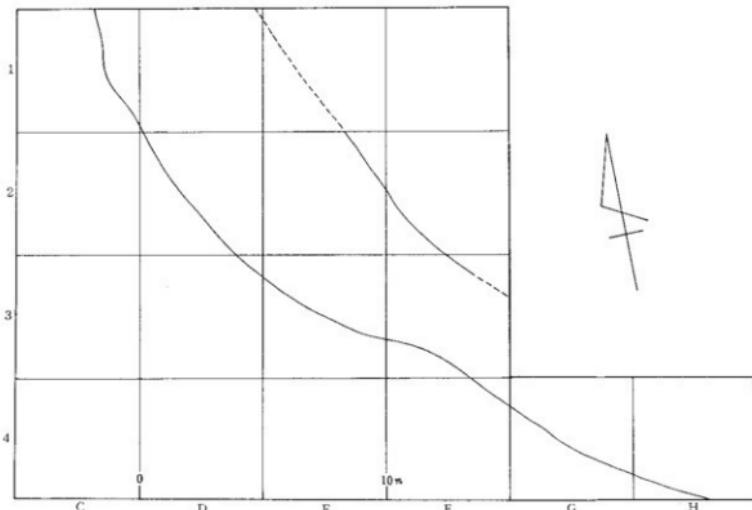
調査区の北東部（C・1-D・2グリッド）を削土していると、第II層において砂礫層が現れた。この砂礫層はそれほど厚いものではないが、過去において数回にわたり洪水等により堆積したものと推定された。さらに第VII層（下層の礫床）を削土するによんで、明らかに小河川跡と思われる砂礫層が検出された。南東から北西に向かって幅3～6m、長さ20mを確認した。礫層中より縄文時代早期の磨石1個が検出された。本河川跡もおそらく該期のものであろうと思われる。

本遺跡の東側にある谷頭南側には小河川（ほとんど水が枯れている）があり、洪水の際には大きな流路となり、遺跡の東南裾を浸食しながら南西に向かって流れ出し年川に至っている。確認された河川跡も、こうした過去の洪水の軌跡であろう。

— E-2グリッド西壁



第160図 第II次調査E-2グリッド西壁断面図



第161図 第II次調査河川跡実測図

3. 造　　物

A. 土　器（第162図～第170図・図版87～96）

第II次調査で出土した土器は、縄文式土器がその主体を占めている。大別すると早期と中期の土器であり、前者は縄文・燃糸文系の土器が圧倒的に多い。この他、押型文土器、田戸下層式比定土器、沈線文土器、無文土器などとなっている。後者は勝坂式、曾利II式に比定される土器である。この他、平安時代のものと思われる土師器や須恵器が若干出土している。

第1群土器（早期前半の土器）

第1類 斜縄文土器（第162図1～18）

1は、口縁が外反する深鉢型土器の大形破片である。口唇部にしきの縄文原体を斜位に施しており、口唇直下にやはりしきの縄文原体を丁方向に回転させ斜位の帶状（垂直に表現）に施文されている。しきの原体の長さは約16mmである。この文様は、そのまま胴部下半にまで及んでいる。底部は、丸底に近い尖底である。焼成はわりあいに良いが、胴部は風化し脆くなっている。色調は暗赤褐色を呈する。胎土中には淡黄白色粒・砂粒が含まれる。口縁および裏面には煮こぼれによる見られる炭化物が付着している。器厚は、口唇で10mm、胴部で7mmである。2は同一個体である。6は、口縁が外反する薄手の土器である。しきの縄文原体を丁方向に回転している。焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。胎土中には雲母・砂粒が含まれている。器厚は口唇で3.5mm、下部で6mmである。10は、口縁の表裏両面に施文されている。いずれも、しきの縄文原体を表面では△方向に、また裏面では丁方向に回転させている。焼成は良好、色調は黄褐色を呈する。胎土中には石英粒・砂粒が含まれている。器厚は口唇で6mm、下部で8mmである。13は、口唇および口縁にしきの太い縄文原体を施してある。口縁の施文は原体を△方向に回転させている。焼成はわりあい良い。色調は暗赤褐色を呈する。胎土中には橙色粒・淡黄白色が含まれている。器厚は口唇で8.5mm、下部で8mmである。17は、しきの縄文原体を△方向に回転させている。しきの原体の長さは約17mmである。焼成は良好、色調は暗灰褐色を呈する。胎土中には雲母・細砂が含まれている。器厚は10.5mmである。

第2類 押型文土器（第163図、164図1～7・図版88・89）

第164図1～3は同一個体である。いわゆるネガティブな楕円文が、口唇上と口縁から胴部にかけて施文されている。この種の土器は、すでに第I次調査において出土しているが、その概報の中ではこの土器を燃糸文の仲間であると判断し分類している。ここでは、それを訂正しておきたい。器面に対して縦に全面施文されており、岡本東三氏の分類によるC文様のうちC1に酷似している。類例としては、岐阜県九合洞窟に好例がある。（口縁の外反度は九合のほうが強い）焼成はわりあい良いが風化が激しく脆くなっている。色調は黒褐色を呈し、胎土中には白色粒が多く含まれる。器厚は口唇で8.5mm、胴部で11mmである。第163図25は、口唇上の施文ではなく、口唇直下より縦位に施文されている。口縁は直行している。岡本氏のC4にやや近い手法と思われる。焼成は良く、色調はやはり黒褐色を呈する。胎土中には淡黄白色粒が含まれている。器厚は口唇で6mm、下部で10mmである。第163図1・2は山形文を口唇直下に横位に施文してある。口唇上に施文はないものの、愛知県北替地遺跡のものに類似している。焼成は良く、色調は明褐色を呈する。胎土中に

は多量の淡黄白色粒・雲母が含まれている。裏面には指痕が見られる。器厚は口唇で7mm、下部で10.5mmである。9は楕円文の尖底部である。楕円粒の長さは6~7mmである。焼成は良く堅い。色調は暗褐色を呈する。胎土中には多量の白色粒と雲母が含まれている。10~18は、細かな格子目文を施しており、施文の後これを磨り消す手法を取っている。また、裏面は調整の際の擦痕が見られる。また、口唇は籠状工具によって外側にカットし成形しているのが特徴的である。焼成は良く堅い。色調は暗赤褐色を呈する。胎土中には淡黄色粒を含んでいる。器厚は口唇・下部共約7.5mmである。

第3類 摺糸文土器（第164図8~24、第165図、第166図1~25・図版89~91）

第164図8は、摺糸文ないしは1の自繩自巻を口唇直下よりT方向に回転させている。また、裏面にも施文されている。焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。胎土中には淡黄白色粒・石英粒が含まれている。器厚は口唇で7mm、下部で8.5mmである。14は、口唇直下よりRの摺糸文が縦位に施されている。焼成は良く堅い。色調は暗黄褐色を呈する。胎土中には石英粒・白色粒が含まれている。器厚は約10mmである。18は大きく外反する口縁であり、口唇直下よりLの摺糸文を縦位に施している。また、裏面には横位に施されている。焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。胎土中には雲母・白色粒が含まれている。器厚は口唇で6mm、下部で9mmである。第42図5は、Lの摺糸文をT方向に回転させ、斜位の帶状に施文されている。これは、その表現が1類の1に酷似しており興味深い所である。両者とも口唇は成形され角頭状をなしている。なお、本土器の口縁には補修孔が穿たれている。焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。胎土中には雲母・淡黄白色粒がふくまれている。器厚は口唇で7mm、下部で9.5mmである。口縁は直行し先端に至ってかなり薄くなっている。6は、口縁が円頭状を呈し直行している。口唇直下よりLの摺糸文が縦位に施されている。焼成は極めて良好、色調は暗褐色を呈する。胎土中には雲母・細砂が含まれている。器厚は口唇で10.5mm、下部で7mmである。第43図2は、Rの太い原体の摺糸文が縦位に施されている。焼成は悪く脆い、色調は赤褐色を呈する。胎土中には白色粒が含まれている。器厚は約10mmである。24・25は尖底部破片である。

第4類 条痕文土器（第167図6~11、16、17・図版92）

いわゆる条痕文を有するもので、口縁に対して横位あるいは縦位・斜位に施文が行われている。おそらく貝殻によって施文されたものであろう。6は、口唇上と口縁の表裏両面に施文されている。焼成は良好、色調は黒褐色を呈する。胎土中には石英粒・砂粒が含まれている。器厚は口唇で7.5mm、下部で9mmである。16・17はやはり表裏両面に条痕を交叉させ施文している。

第5類 絡条体圧痕文土器（第167図18、19・図版92）

18・19は同一個体である。rの条の絡条体を軸に時計回りと逆の方向Lに巻いており、これを横位あるいは波状に施している。条の太さ2mm、軸の長さ5mmである。焼成は良く堅い。色調は茶褐色を呈する。胎土中には細砂が含まれている。器厚は約9mmである。

第6類 田戸下層式比定土器（第167図20、21・図版92）

20は波状口縁であり、口唇上に継ぎの沈線を施し、波状の頂点では横に深く付けられている。斜めに切ったような口縁が外側に向いており、田戸下層式の特徴を備えている。器面の文様は太い沈線文と半截竹管状工具による爪形の刺突文である。焼成は極めて良く堅い。色調は暗黄褐色を呈する。胎土中には多量の砂粒と雲母が含まれている。器厚は約12mmである。

第7類 沈線文土器（第167図12～15、22～30・図版92）

12は、竹管状工具によって施文されているもので、口唇直下より横位に16mmと22mmの長さを単位として、最上段では16mmのものだけを、2段目以下は交互に横位施文している。焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。胎土中には雲母・白色粒が含まれている。器厚は8mmである。15は、外反する口縁の口唇直下より、細い沈線が横ないし斜めに施されている。焼成は良好、色調は暗赤褐色を呈する。胎土中には白色粒が含まれている。器厚は約9mmである。

第8類 無文土器（第168図・図版93）

無文ではあるが、胎土中などから早期のものであることはまちがいないと考えている。1は外反する口縁であり、裏面には煤の付着が見られる。焼成は良く、胎土中には粗い砂粒が含まれている。器厚は口唇で8.5mm、胸部で11.5mmである。

第2群土器 中期の土器（第169、170図・図版94・95）

第1類 勝板式比定土器（第169図1～9・図版94）

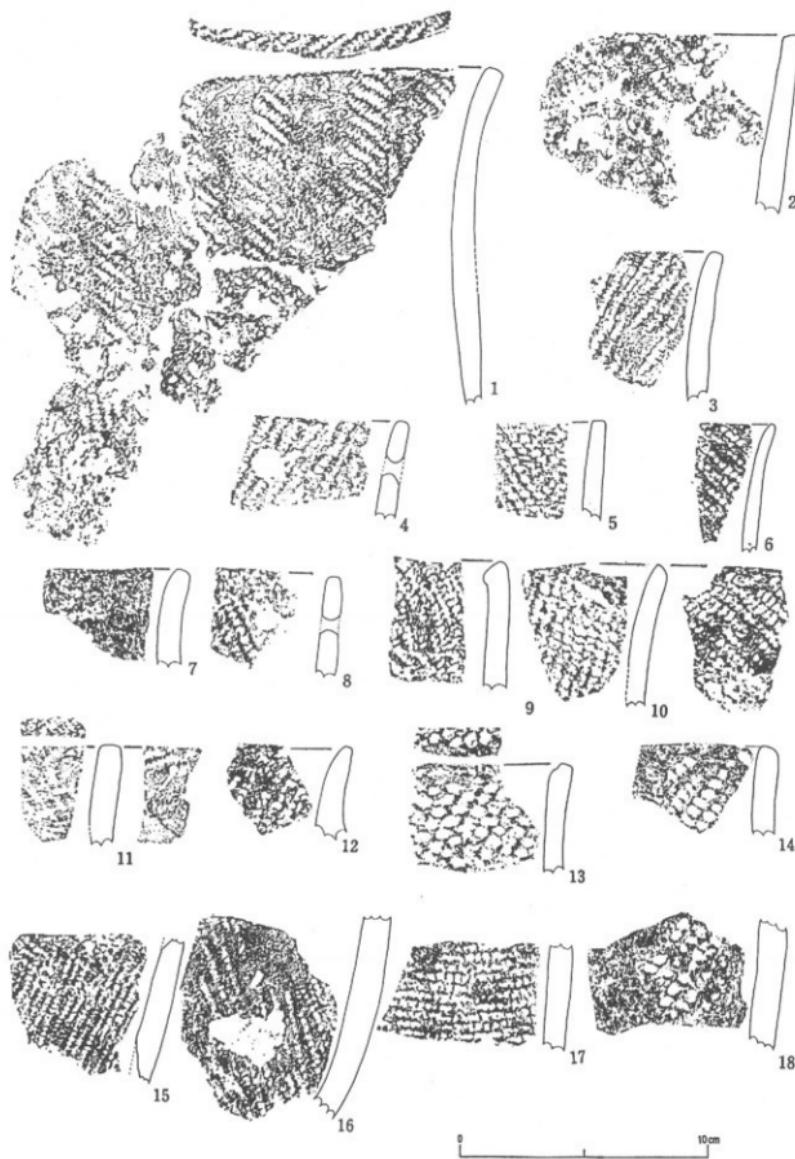
1は波状突起を有し、口縁には隆帯が付けられている。この隆帯上には刻みが見られる。また、弧状に区画された隆帯の中には、細い丸棒状工具による押し引きが連続して施されている。

第2類 曾利Ⅱ式土器（第169図10～12、170図・図版94・95）

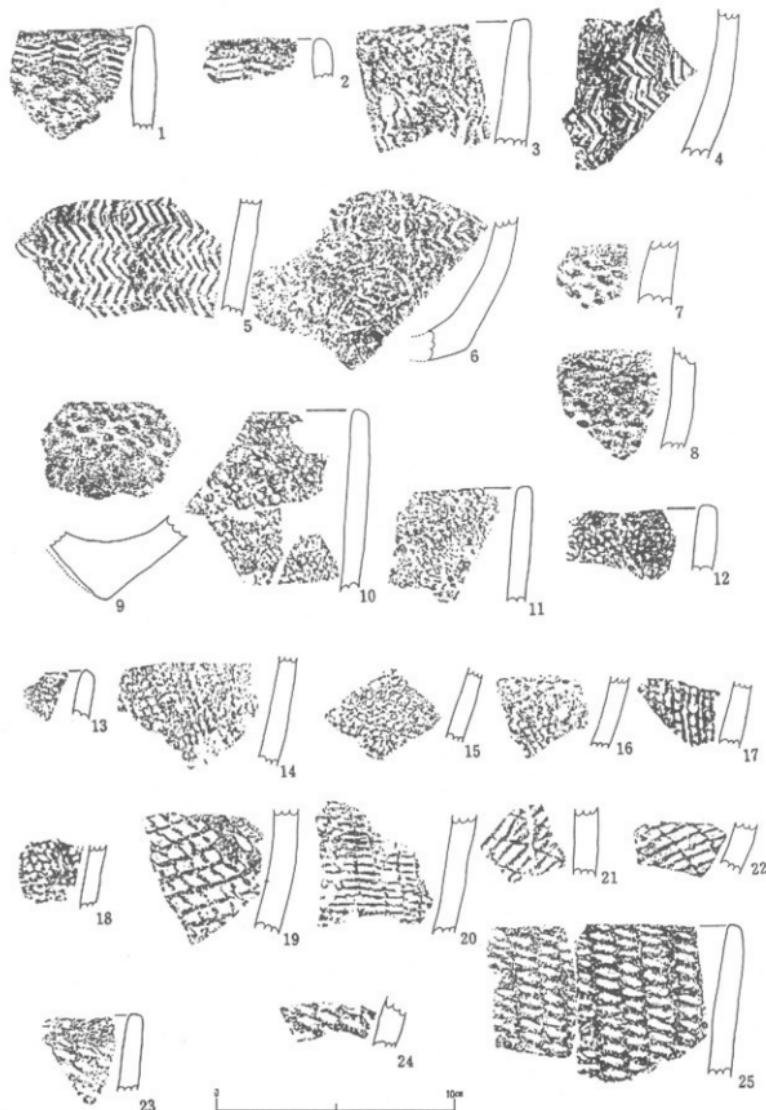
第169図10～12は、口唇上および口縁から頸部にかけて太い条線が斜位に全面に施されている。また、第170図1～15は、胸部文様帶として横位隆帯と波状隆帯や、粘土紐による蛇行懸垂文が見られる。

第3群土器 土師器・須恵器（第170図26～29・図版95）

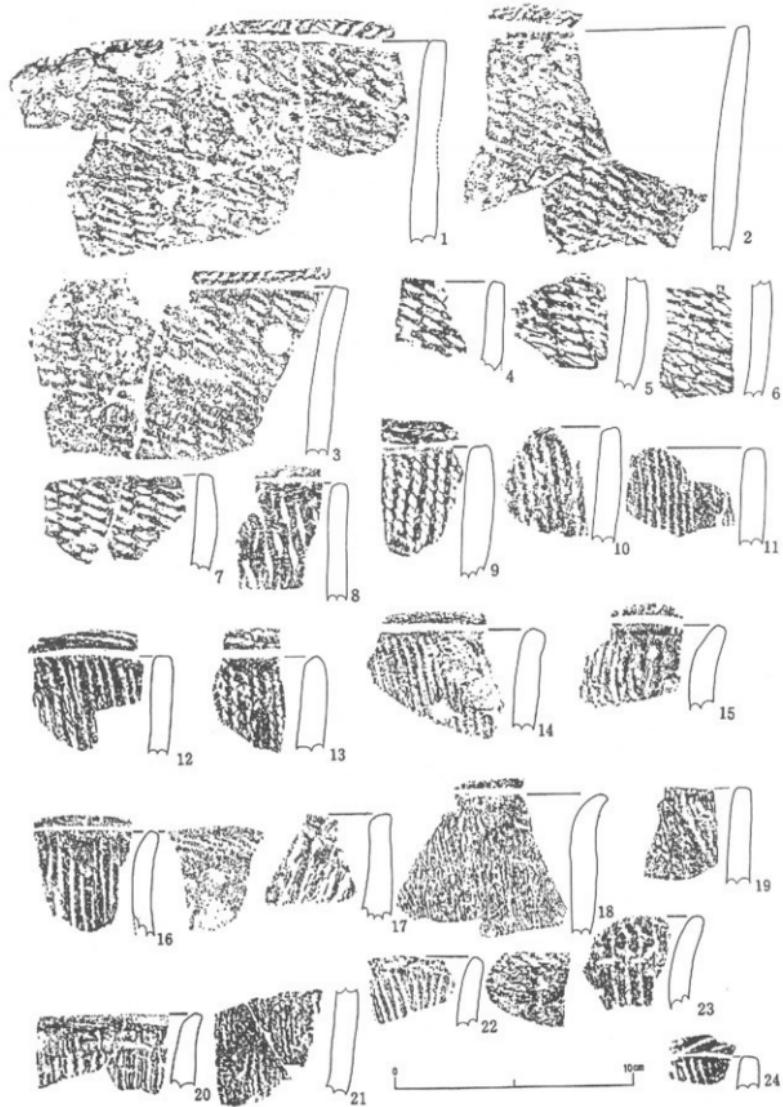
26はおそらく、平安時代の所産と思われる壺であろう。器面内外に調整時のナデ・擦痕が見られる。27～29はやはり同時期の須恵器である。いずれも蓋の破片である。



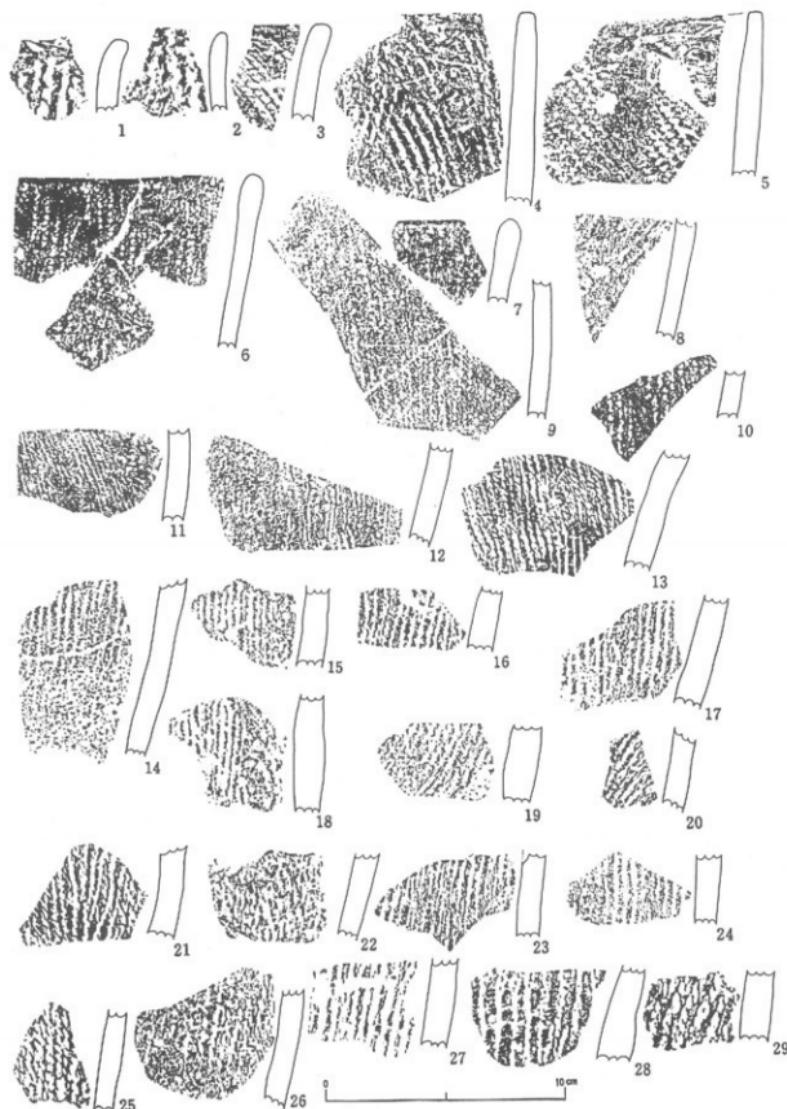
第162図 第II次調査出土土器拓影 (15)



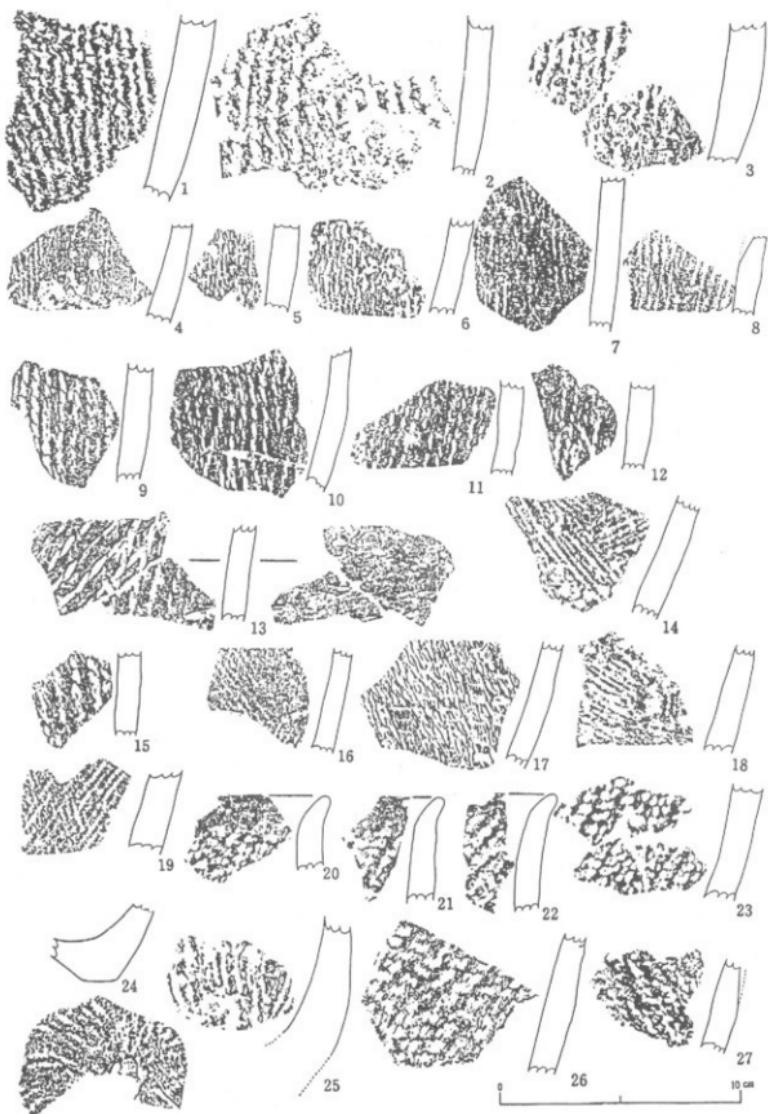
第163図 第II次調査出土土器拓影 (16)



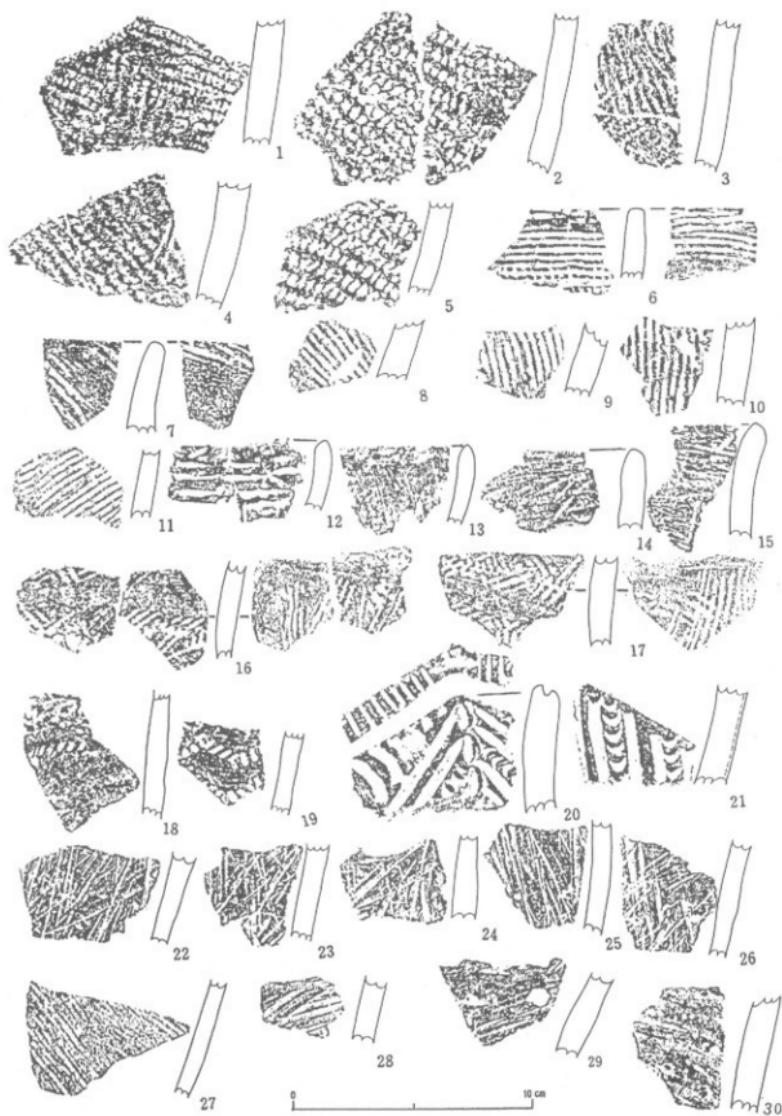
第164図 第II次調査出土土器拓影 (17)



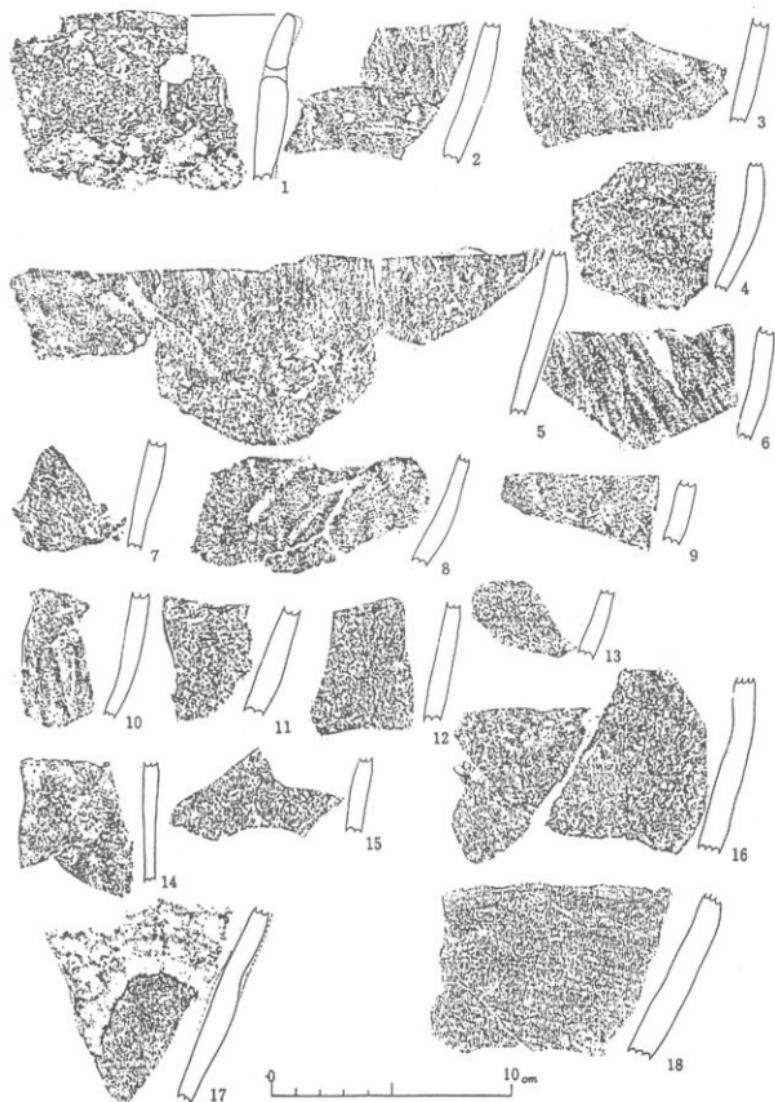
第165図 第II次調査出土土器拓影 (18)



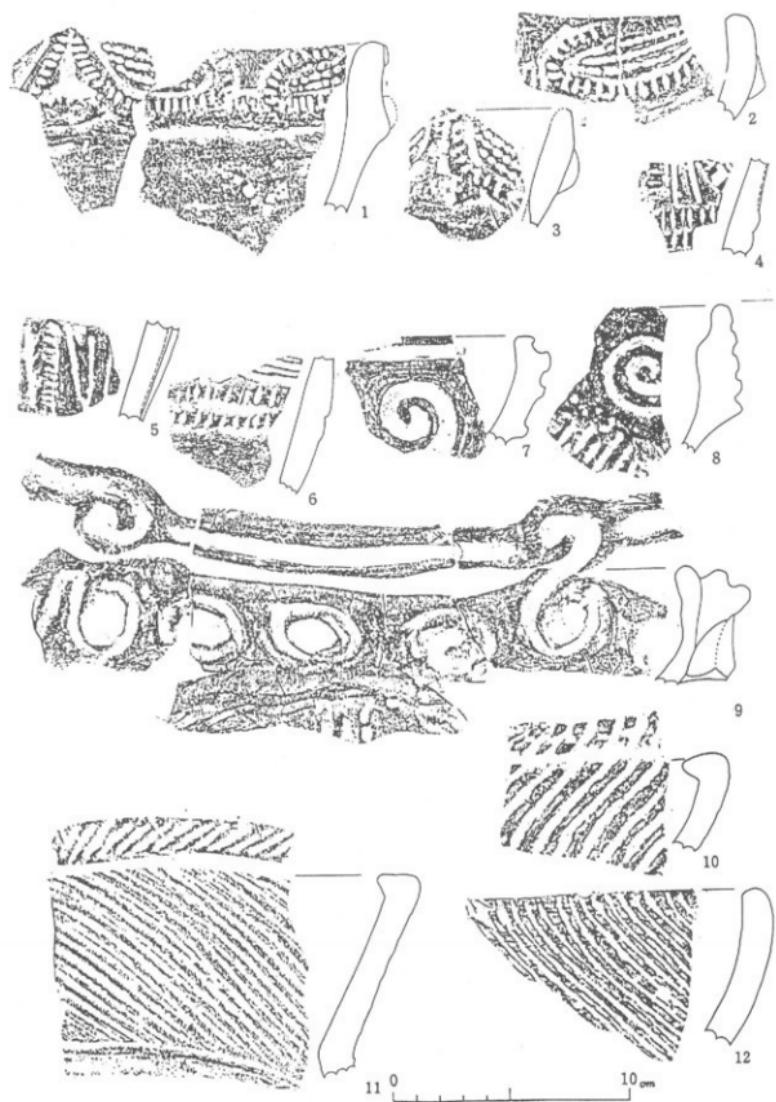
第166図 第II次調査出土土器拓影 (19)



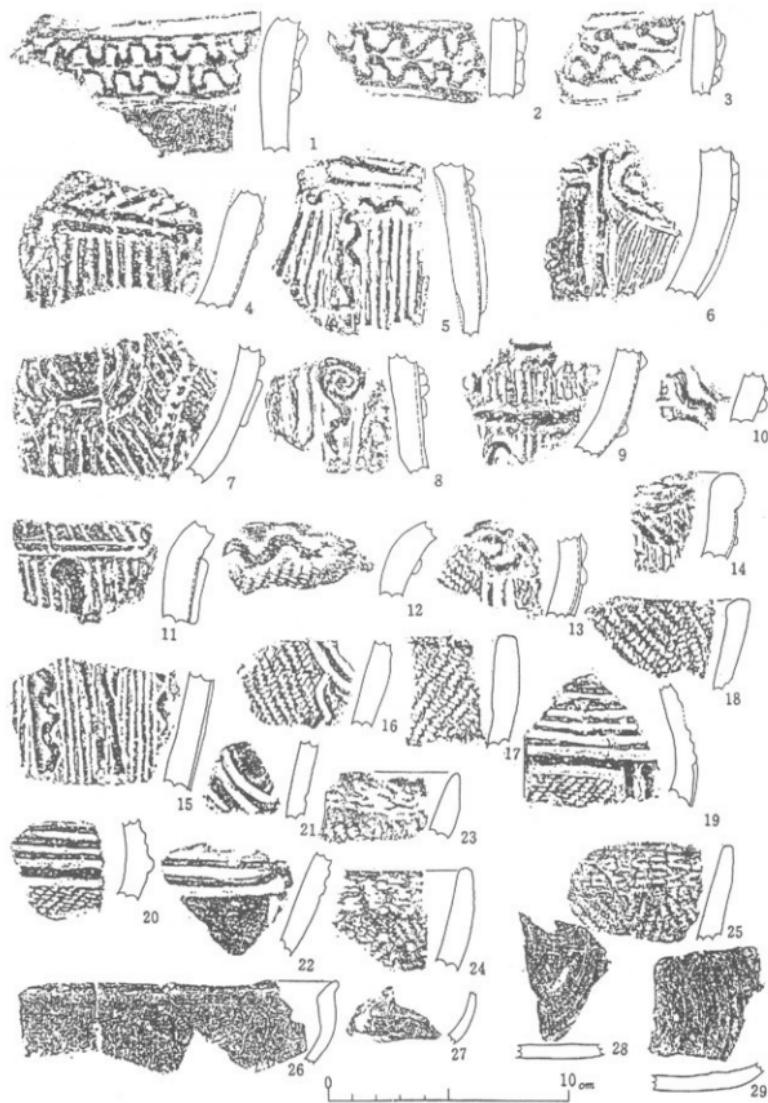
第167図 第II次調査出土土器拓影 (20)



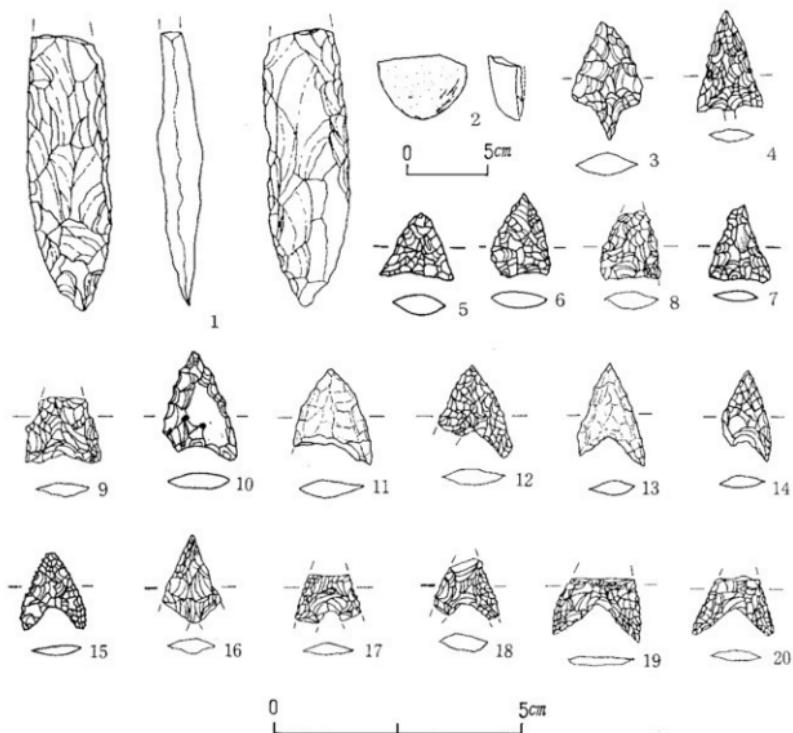
第168図 第II次調査出土土器拓影 (21)



第169図 第II次調査出土土器拓影 (22)



第170図 第II次調査出土土器拓影 (23)



第171図 第II次調査出土石器実測図（1）

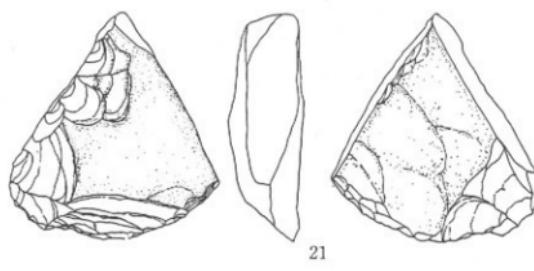
B. 石 器（第171図～第180図・図版97～99）

本遺跡から出土した石器は、石槍1点、石鎌21点、礫器10点、局部磨製石斧1点、打製石斧6点、石匙1点、磨石98点である。この他黒曜石の剝片多数が出土しており、この中には石器未製品と見られるものも含まれている。

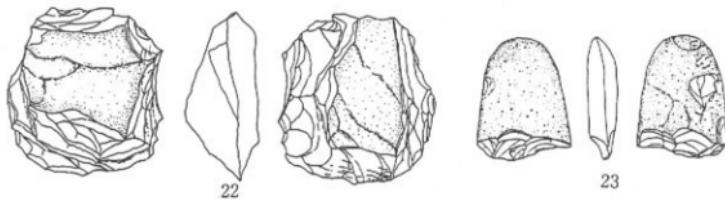
石槍（第171図1） 1点出土、上部が半分欠損しており現存する長さ5.7cm、最大巾15.5cmである。材質は黒色ち密安山岩製で胸部にふくらみのない直線的な石槍である。

局部磨製石斧（第171図2） 1点出土している。刃部を残して、基部の大部分が欠損している。現存する刃部が円刃で、両面とも先端部が磨かれている。

石鎌（第171図3～20） 21点出土、その内2～13、16、17の14点は第3号住居址、15は第1号住居跡から検出されたものである。21点の内完形品は少なく、そのほとんどが石鎌の各部を欠損している。形態は凹基無茎鎌がその主体をしめるが、17のように基部のえぐりがほとんど無く三角鎌に近い形のものもある。22は中茎が欠損している平基有茎鎌である。

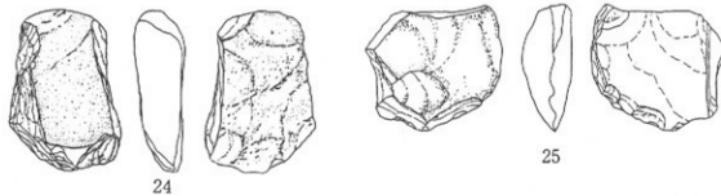


21



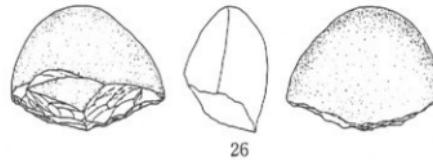
22

23

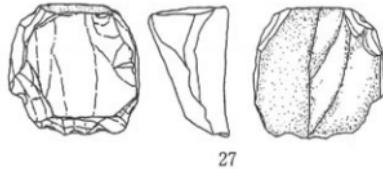


24

25



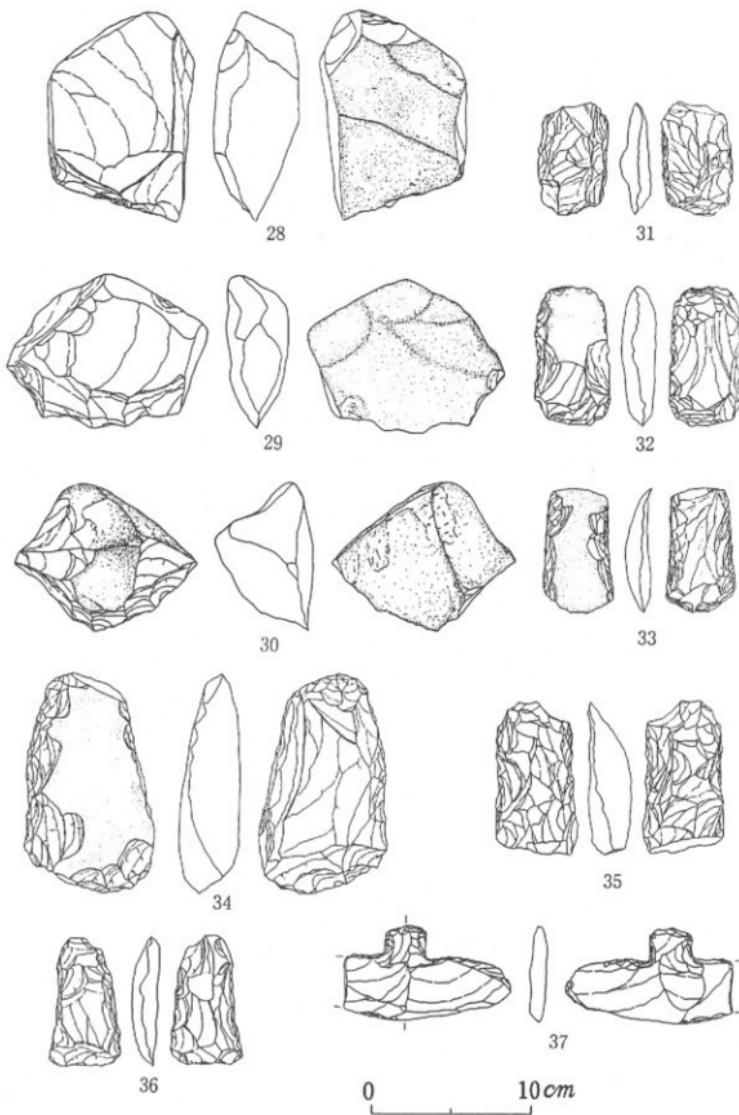
26



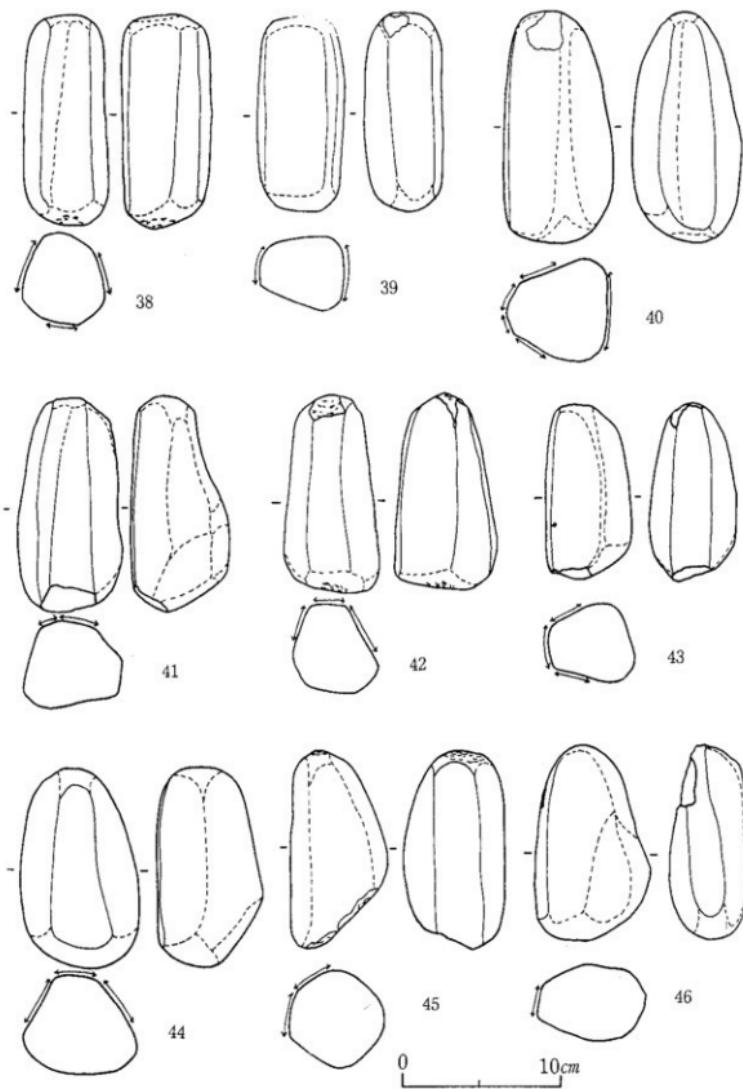
27

 0 10 cm

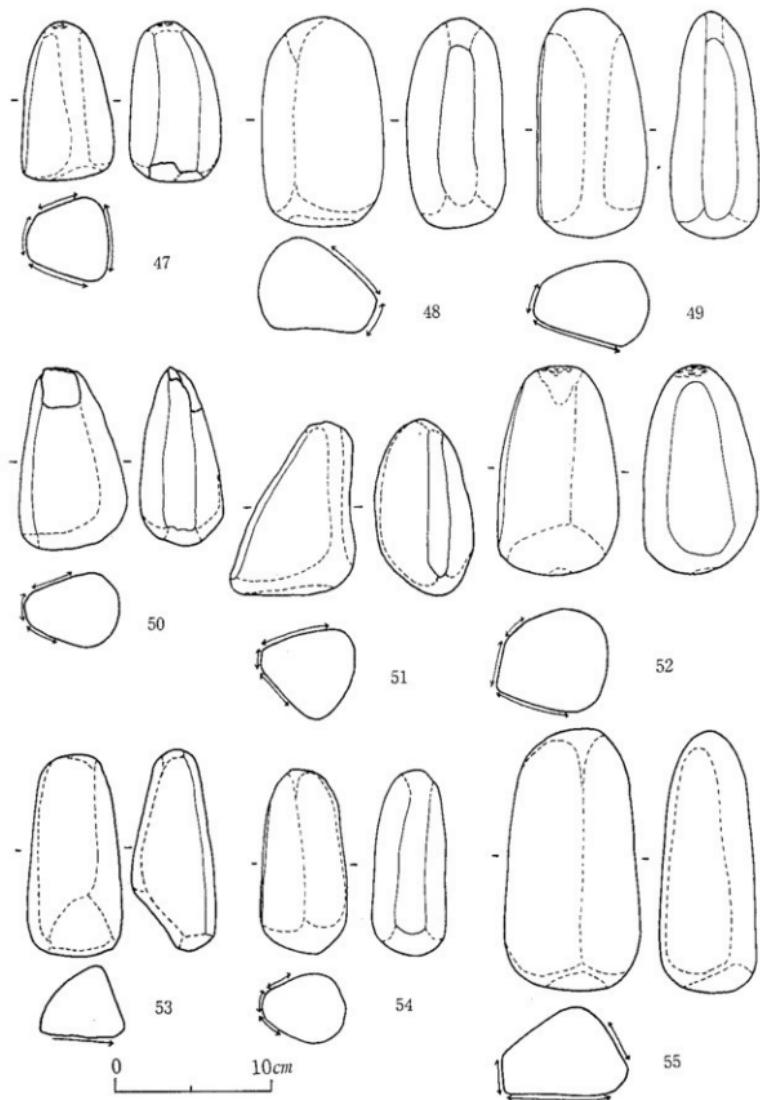
第172図 第II次調査出土石器実測図（2）



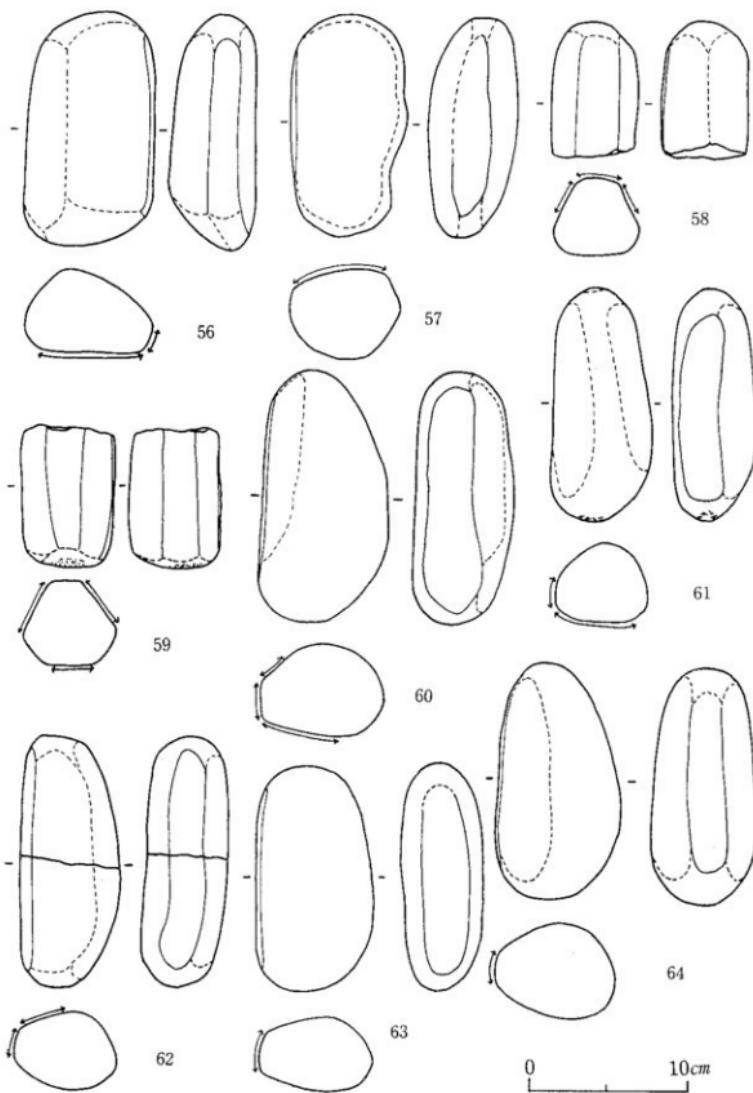
第173図 第II次調査出土石器実測図（3）



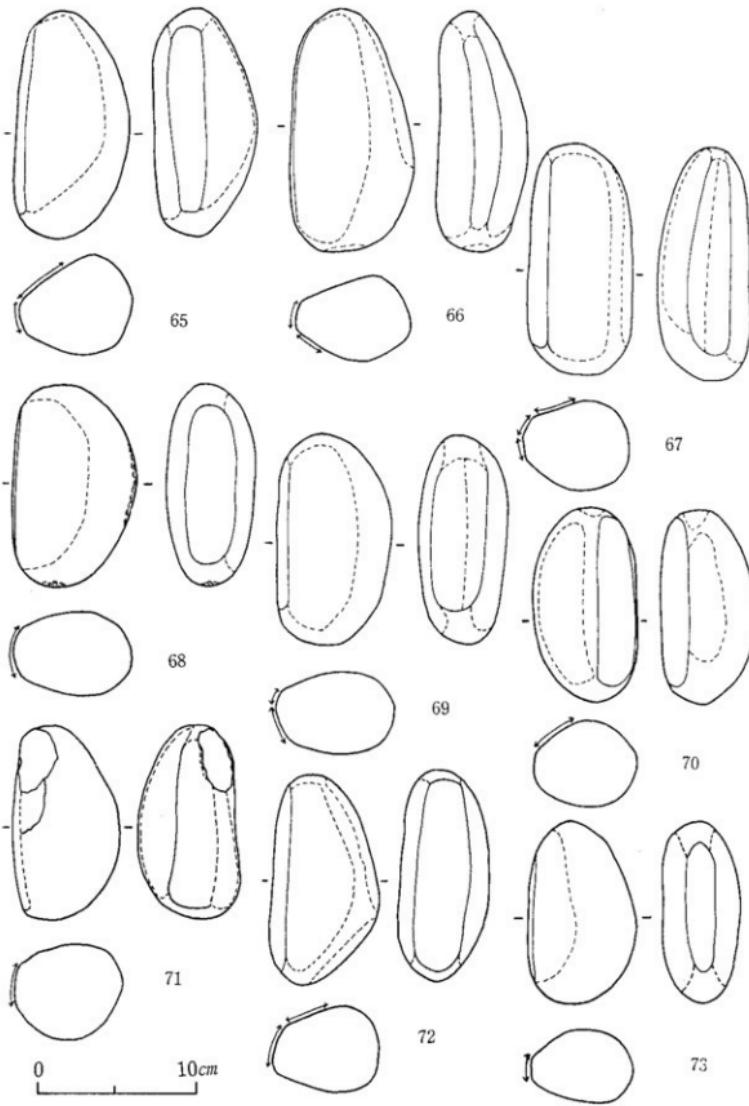
第174図 第II次調査出土石器実測図（4）



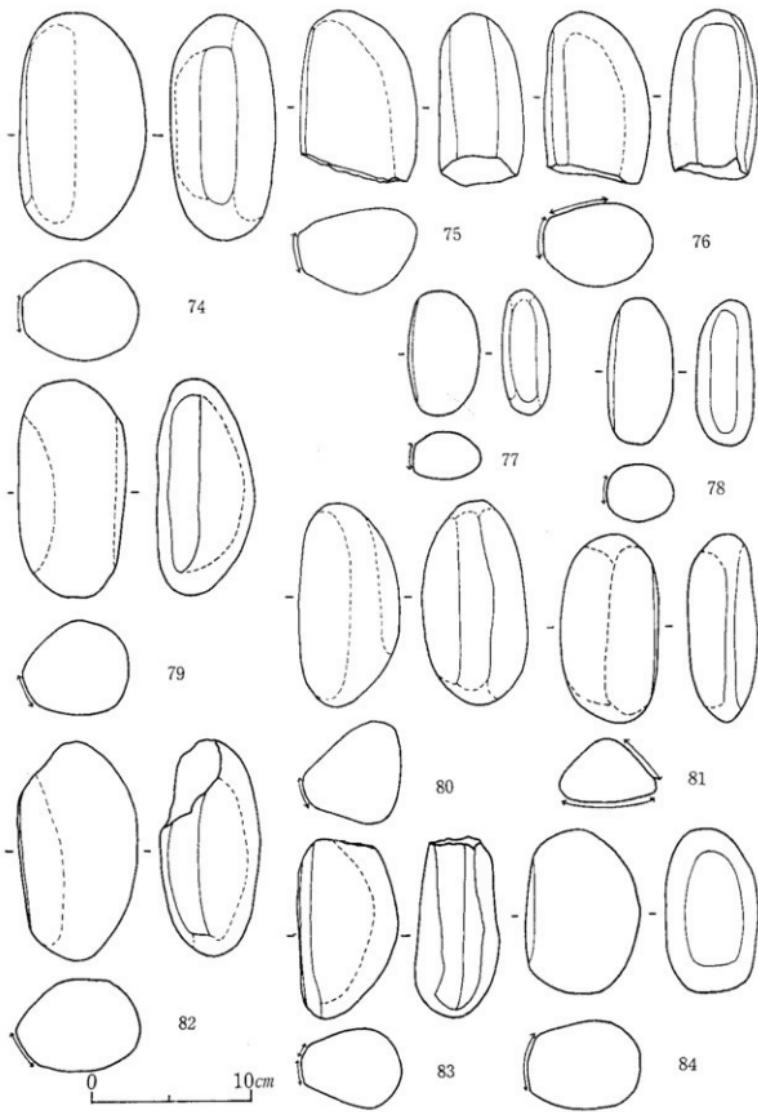
第175図 第II次調査出土石器実測図(5)



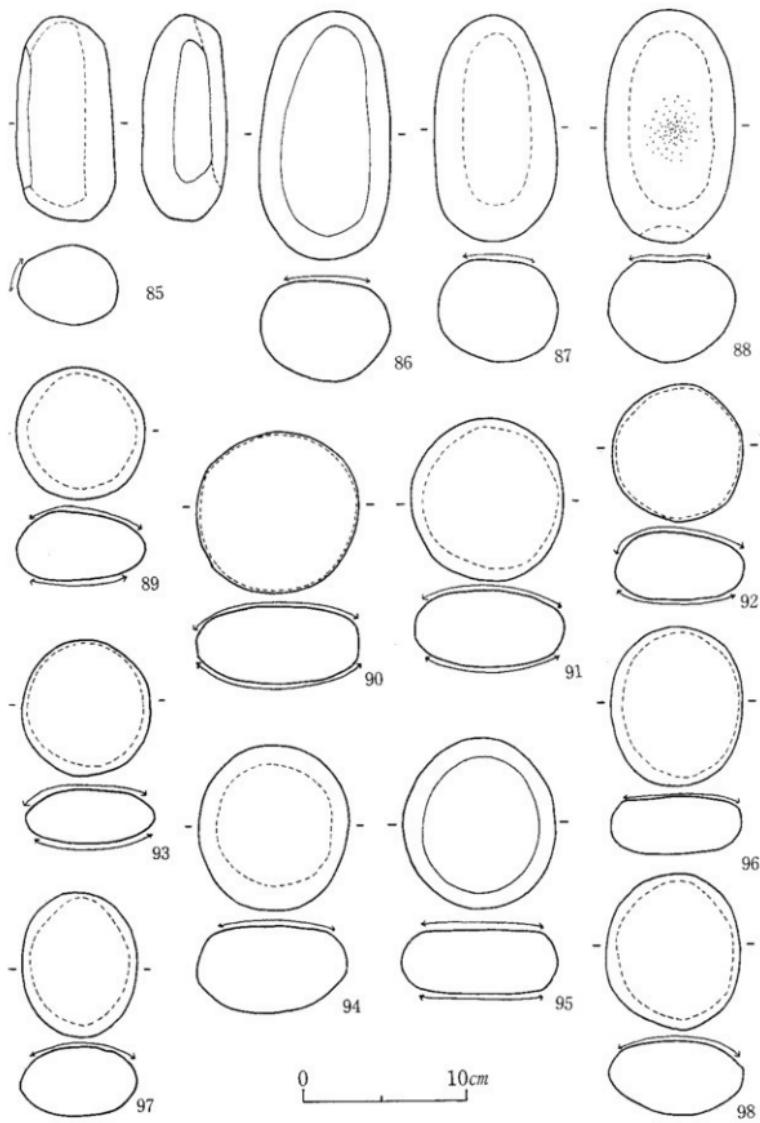
第176図 第II次調査出土石器実測図（6）



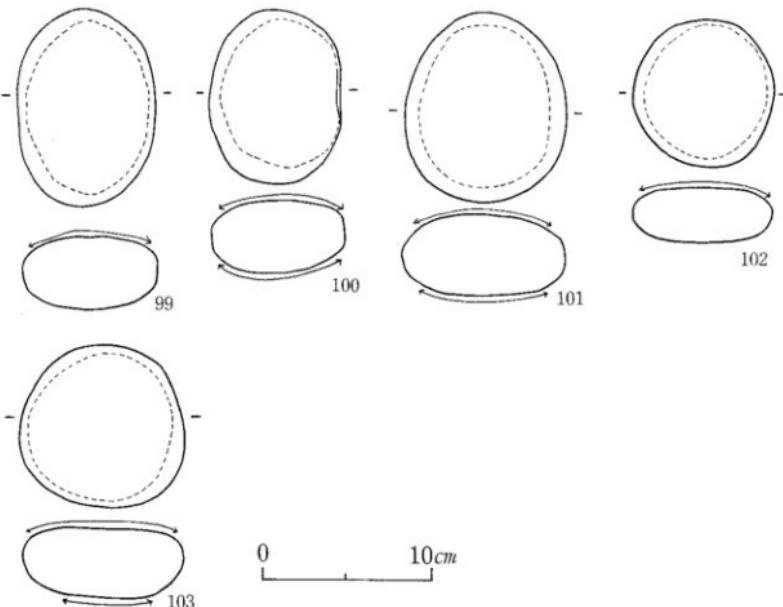
第177図 第II次調査出土石器実測図（7）



第178図 第II次調査出土石器実測図(8)



第179図 第II次調査出土石器実測図（9）



第180図 第II次調査出土石器実測図（10）

礫器（第172図21～27・第173図28～30） 10点出土している。23は出土礫器の中では比較的大形で、平面形は三角形を呈する。刃部は片面調整で片刃である。24は四角形の礫の三辺に階段状の調整剝離を加えその一辺を片刃の刃部としている。表面には礫面を残している。25は偏平な楕円形の礫を半截し、その端部を両面より調整を加え刃部としている。26は長方形の礫の二辺を刃部としており、表面に大きく礫面を残している。27、29、31、32は比較的小形の礫器で刃部は礫の一辺を片面加工し作られており、刃部は片刃となる。28は長方形の礫の二辺を片面より調整加工し片刃としている。28は円礫の一辺を階段状に剥離し刃としている。30は厚身のある台形状の礫を使用し、その一辺を刃部としている。

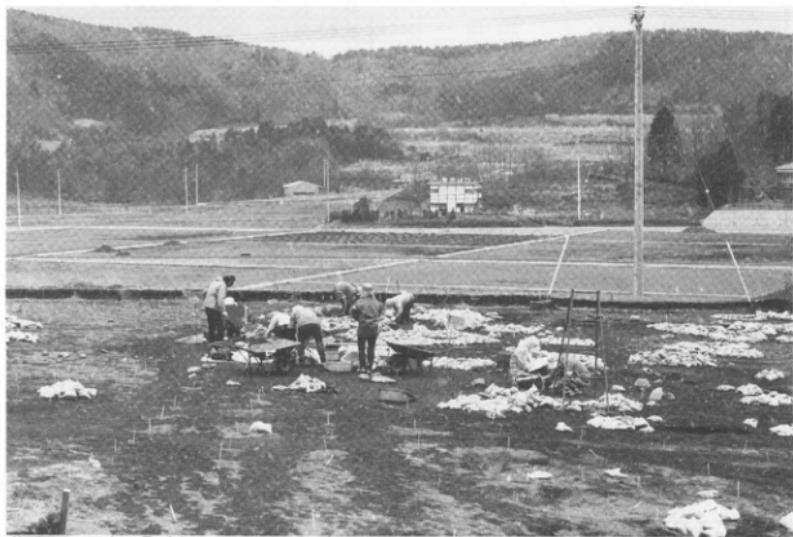
打製石斧（第173図31～36） 6点出土している。35～37は表面に礫面を、裏面に主要剝離面を残している。36は表面に円味を帯びて彎曲する小形の石斧であり刃部は先刃となる。37は大形で厚味のある基部を持つ石斧で、刃部は角度のある先刃の偏刃となる。34、38は両面共に加工された短冊形の石斧である。39は撥形の小形石斧で表面は円味を帯び内彎する。刃部は片刃となる。

石匙（第173図37） つまみのある横型の石匙である。刃部は調整した後研磨されている。

磨石（第174図～第180図） 90点出土している。このうち66点を図示した。磨石は第Ⅰ次調査と同様に、特殊磨石と呼ばれるものが多い。その形状から、3つの型に分類して説明する。

第Ⅰ類 a種＝多面の磨面を持ち断面が柱状を呈するもの（第174図38～46、第175図47～54）を本類とした。b種＝多面の磨面を持ち断面が三角形を呈するもの（第175図55、第176図56・57）を本類とした。c種＝a・b種の仲間であるがその欠損したもの、やや不明なもの（第176図58・59）を本類とした。

第Ⅱ類 a種＝横楕形で右に磨面を持つもの（第176図60～64）を本類とした。b種＝横楕形で左に磨面を持つもの（第177図65～73、第178図74～83）を本類とした。c種＝形状はやや変形で左右いずれかの磨面を持つもの（第178図84、第179図85）を本類とした。第Ⅲ類 a種＝長円形を呈するもの（第179図86～88）を本類とした。c種＝円形を呈するもの（第179図89～94）を本類とした。d種＝橢円形を呈するもの（第179図91～101）を本類とした。e種＝箱形のもの（第179図95・96）を本類とした。f種＝おむすび形を呈するもの（第180図102・103）を本類とした。



第181図 調査風景（降りしきる雪の中で）

(単位mmおよびg)

器種	出土区	分類	図番号	同版番号	最大長	最大幅	最大厚	重量	石村	備考
石 棍	G・Hベルト		171-1	97	57.0	15.0	8.0	7.9	黒ち密山岩	上部欠損
局部磨製石斧	B-2		171-2	"	37.0	49.0	18.0	38.0	緑色安山岩	基部欠損
石 織	C-4		171-3	"	20.4	14.0	5.0	1.0	黒曜石	
"	A-3		171-4	"	20.0	13.0	3.0	0.5	"	舌部欠損
"	F-5		171-5	"	14.5	16.0	4.5	0.7	"	
"	A-4		171-6	"	18.0	12.5	4.0	0.7	"	
"	C-2		171-7	"	14.0	12.5	4.0	0.7	"	
"	A・B 6ベルト		171-8	"	15.5	12.0	3.0	0.5	"	
"	G-2		171-9	"	14.0	15.5	3.0	0.6	"	頭部欠損
"	A-9		171-10	"	23.0	16.0	4.0	1.1	"	片脚先端部欠損
"	不 明		171-11	"	20.0	16.0	3.0	0.8	黒ち密山岩	
"	A-6・7		171-12	"	19.5	16.0	3.0	0.5	黒曜石	片脚欠損
"	C-8		171-13	"	21.5	14.0	3.0	0.5	黒ち密山岩	
"	不 明		171-14	"	18.0	10.0	2.0	0.3	黒曜石	片脚欠損
"	B-5		171-15	"	15.5	13.5	2.0	0.3	"	
"	G-4		171-16	"	18.0	12.0	3.0	0.4	"	両脚欠損
"	G-3		171-17	"	10.0	14.0	2.5	0.2	"	頭部・両脚欠損
"	E-1		171-18	"	12.0	13.0	3.0	0.4	"	"
"	G-4		171-19	"	12.0	18.0	2.5	0.5	"	頭部欠損
"	E-3		171-20	"	12.0	16.0	2.0	0.3	"	"
"	不 明	國化せず			20.0	14.0	3.5	0.9	黒ち密山岩	"
"	不 明	"			19.0	15.0	3.0	0.6	黒曜石	両脚欠損
鍥 器	A-4		172-21	87	145.0	131.0	48.0	1100.0	玄武岩	
"	A-6		172-22	"	108.0	98.0	44.0	540.0	"	
"	B-6		172-24 ^(注1)	"	77.5	58.0	18.0	115.0	石英安山岩	
"	A-9		172-24	"	103.0	68.0	30.0	295.0	玄武岩	
"	B-8		172-25	"	76.0	58.0	16.0	256.0	"	
"	C-3・4ベルト		172-26	98	80.0	95.0	49.0	475.0	ち密安山岩	
"	C-4		172-27	"	80.0	80.0	47.0	405.0	玄武岩	
"	D-6・7ベルト		173-28	"	130.1	85.0	52.0	894.0	"	
"	E-4		173-29	"	95.0	124.0	36.0	518.0	安山岩	
"	表 採		173-30	"	87.0	109.0	56.0	515.0	玄武岩	
打 製 石 斧	B-0(36号住居)		173-31	"	67.0	42.0	16.0	49.0	"	
"	A-4		173-32	"	88.0	46.0	31.0	122.0	ち密安山岩	
"	A-6		173-33	"	77.0	42.0	15.0	66.0	玄武岩	
"	B-4		173-34	"	136.0	77.0	36.0	505.0	凝灰質砂岩	(注2)
"	B-5・6ベルト		173-35	"	90.0	50.0	25.0	170.0	玄武岩	
"	D-6		173-36	"	80.0	44.0	44.0	56.0	"	(注3)
石 斧 ^(注4)	表 採		173-37	"	57.0	99.0	9.0	56.0	緑色珪岩(チャート)	
磨 石	D-5	I-a	174-38		136.0	53.0	56.0	710.0	安山岩	
"	E-6	"	174-39		124.0	48.0	53.0	585.0	"	
"	B-8	"	174-40		147.0	67.0	68.0	966.0	"	
"	B-8	"	174-41		138.0	64.0	60.0	765.0	"	
"	C-8	"	174-42		125.0	61.0	64.0	675.0	"	
"	C-4	"	174-43		111.0	54.0	53.0	471.0	"	
"	B-6(第3号住居)	"	174-44		127.0	74.0	65.0	845.0	"	
"	不 明	"	174-45		125.0	64.0	63.0	685.0	"	

第14表 大平C遺跡第II次調査石器計測一覧表(1)

(単位mmおよびg)

器種	出土区	分類	汎番号	固番号	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
磨石	C - 6	I - n	174 - 46		124.0	52.0	65.0	485.0	安山岩	
"	A - 6	"	175 - 47		101.0	57.0	56.0	464.0	"	
"	C - 8	"	175 - 48		136.0	78.0	64.0	1050.0	"	
"	B - 8	"	175 - 49		145.0	56.0	68.0	830.0	"	
"	B - 8	"	175 - 50		114.8	51.0	65.0	490.0	"	
"	C - 6	"	175 - 51		121.0	54.0	67.0	574.0	"	
"	不明	"	175 - 52		133.0	72.0	74.0	1080.0	"	
"	不明	"	175 - 53		129.0	60.0	52.0	530.0	"	
"	C - 6	"	175 - 54		117.0	46.0	52.0	435.0	"	
"	E - 4	I - b	175 - 55		168.0	85.0	61.0	1200.0	"	
"	H - 7	"	176 - 56		151.0	84.0	55.0	1150.0	"	
"	F - 5	"	176 - 57		143.0	72.0	56.0	828.0	"	
"	A - 9	I - c	176 - 58	(86.0)	53.0	51.0	400.0	"		
"	B - 6	"	175 - 59	(87.0)	58.0	54.0	470.0	"		
"	F - 6	園化せず		90.0	65.0	51.0	495.2	"		
"	D - 5	"		72.0	58.0	45.0	320.0	"		
"	B 5・6ベルト	"	"	87.0	50.0	4.00	365.3	"		
"	不明	"	"	83.0	54.0	49.0	294.6	"		
"	B Cベルト	"	"	62.0	71.0	64.0	512.3	"		
"	B - 5	"	"	78.0	63.0	48.0	307.4	"		
"	B - 8	"	"	56.0	57.0	41.0	173.7	"		
"	表採	"	"	44.0	51.0	39.0	117.3	"		
"	B - 3	II - n	176 - 60		160.0	61.0	78.0	1100.0	"	
"	第3号集石土坑	"	176 - 61		146.0	54.0	58.0	715.0	"	
"	D - 3	"	176 - 62		159.0	51.0	64.0	794.0	"	
"	F - 5	"	176 - 63	99	144.0	51.0	73.0	825.0	"	
"	C - 6	"	176 - 64	"	151.0	65.0	78.0	1100.0	"	
"	D - 6	"	177 - 65		142.0	63.0	70.0	840.0	"	
"	不明	"	177 - 66		154.0	52.0	76.0	890.0	"	
"	不明	"	177 - 67		147.0	56.0	66.0	905.0	"	
"	不明	"	177 - 68	99	128.0	55.0	75.0	855.0	"	
"	F - 5	"	177 - 69	"	131.0	55.0	70.0	772.0	"	
"	C - 7	"	177 - 70		124.0	58.0	62.0	655.0	"	
"	C - 6	"	177 - 71	99	125.0	62.0	67.0	766.0	"	
"	C - 8	"	177 - 72		134.0	69.0	70.0	755.0	"	
"	不明	"	177 - 73	99	115.0	47.0	65.0	520.0	"	
"	第11号集石土坑	"	178 - 74		143.0	62.0	76.0	1000.0	"	
"	C - 6	"	178 - 75		105.0	51.0	71.0	586.0	"	
"	B - 6	"	178 - 76		107.0	50.0	63.0	560.0	"	
"	C - 6	"	178 - 77		79.0	30.0	43.0	160.0	"	
"	E - 4	"	178 - 78		92.0	37.0	42.0	235.0	"	
"	不明	"	園化せず		118.0	78.0	65.0	882.7	"	
"	A - 8	"	"	89.0	75.0	47.0	501.8	"		
"	表採	"	"	65.0	63.0	43.0	249.5	"		
"	A - 9	II - b	178 - 79		136.0	59.0	68.0	805.0	"	
"	B - 8	"	178 - 80		127.0	64.0	62.0	750.0	"	
"	D - 5	"	178 - 81		120.0	63.0	41.0	447.0	"	

第15表 大平C遺跡第II次調査石器計測一覧表(2)

(単位: および)

器種	出土区	分類	図版番号	型版番号	最大長	最大幅	重量	石材	備考
磨石	A-6	II-b	178-82		135.0	57.0	72.0	741.0	安山岩
"	B-9	"	178-83		112.0	49.0	60.0	489.0	"
"	F-5	"	178-84	99	103.0	53.0	71.0	635.0	"
"	B・Cベルト	"	179-85		127.0	50.0	60.0	630.0	"
"	A・3・4ベルト	"	國化せず		75.0	63.0	52.0	348.9	"
"	B-6	"	"		48.0	61.0	47.0	207.1	"
"	F-1	"	"		75.0	43.0	32.0	159.9	"
"	第3号集石土坑	II-c	178-86		154.0	80.0	58.0	1500.0	"
"	C-6	"	178-87		141.0	75.0	67.0	1300.0	"
"	B-5	III-a	178-88		146.0	78.0	67.0	1400.0	"
"	A-9	III-c	178-89	99	84.0	79.0	40.0	416.0	"
"	C-6	"	178-90	"	102.0	100.0	48.0	741.0	"
"	B-8	"	178-91	"	102.0	94.0	48.0	680.0	"
"	表採	"	178-92		79.0	81.0	41.0	400.0	"
"	"	"	178-93		86.0	77.0	33.0	341.0	"
"	F-4	"	178-94	99	104.0	95.0	53.0	819.0	"
"	F-5	"	國化せず		85.0	78.0	74.0	728.9	"
"	C-8	"	"		87.0	78.0	48.0	437.5	"
"	C-4	"	"		77.0	48.0	59.0	179.4	"
"	B-4	"	"		80.0	47.0	51.0	232.3	"
"	G-7	"	"		71.5	38.0	44.0	136.3	"
"	A-6	"	"		63.0	20.0	48.0	69.8	"
"	D-3	"	"		70.0	34.0	30.0	60.7	"
"	B-5	"	"		60.0	29.0	22.0	50.1	"
"	A-4	III-d	179-95	99	94.0	107.0	45.0	605.0	"
"	G-5	"	179-96		100.0	78.0	36.0	386.0	"
"	不明	III-e	179-97		92.0	71.0	44.0	416.0	"
"	A-3	"	179-98		97.0	82.0	46.0	554.0	"
"	B・南ベルト	"	180-99		118.0	83.0	43.0	690.0	"
"	A-4	"	180-100		105.0	80.0	45.0	584.0	"
"	G-6	"	180-101		112.0	94.0	50.0	821.0	"
"	不明	"	國化せず		85.0	75.0	47.0	376.0	"
"	"	"	"		89.0	51.0	41.0	227.5	"
"	D-6	III-f	180-102		100.0	97.0	44.0	650.0	"
"	表採	III-f	180-103	99	87.0	83.0	33.0	381.0	"

第16表 大平C遺跡第II次調査石器計測一覧表(3)

第VI章 特論

大仁町長者原大平A（II）遺跡出土黒曜石石片の原石産地推定

静岡県立教育研修所 高橋 豊

1. はじめに

物の流通は人の交流とともに、近隣地域と政治・経済・文化の上でも深く関わる。このことは先土器時代についても同じである。しかし、歴史時代のように把握できず、残された断片的な遺物を通してのみ情報が得られる。石器の材料となった原石の産地は、地質学的に特定の地域に限られる。したがって、原石産地－石器加工地－消費地の流れを知ることができれば、上記の情報の一端が得られることになる。このような、産地分析は石器のみならず考古遺物全般について、さまざまな手法を用いて盛んに行われるようになってきているのは、当然の趨勢である。

筆者は静岡県田方郡大仁町の長者原大平A（II）遺跡から出土した黒曜石の原産地を、エネルギー分散型マイクロアナライザー（EDX）分析による化学組成の比較をすることにより明らかにしようと考え、近隣の黒曜石産地として知られる信州各地・浅間山付近・箱根付近・伊豆半島各地・伊豆七島各地の黒曜石とともに大仁町長者原大平A（II）遺跡から出土した黒曜石石片を分析し、一応の結果を得たので報告する。

分析は非破壊で行った。また、黒曜石産地の推定は、主要元素組成を中心に行った。

エネルギー分散型マイクロアナライザー（EDX）分析による主要元素の質量分析及びV A I S（Volcanic Ash Identification System）を使ったID-value（類似度）による産地推定を行った。

2. 研究の過程

伊豆半島等の遺跡から出土する石器の原産地を推定しようとして、筆者は原産地の可能性をもつ信州各地・浅間山付近・箱根付近・伊豆半島各地・伊豆七島各地の黒曜石の岩石学的特徴を記載した。そこでは透明度・色調・斑晶・微小鉱物・屈折率とともに晶子形態・晶子の集合が描く組織の類型が調べられた。そして晶子形態が、原産地によってかなり特徴的な差異を示すことを明らかにした。

さらに筆者は先の研究をふまえて伊豆半島から出土する石器の多くは伊豆七島神津島系であろうと推定し、神津島産黒曜石について上記の顕微鏡観察を加え、EDX分析による主要構成元素の組成を報告した。

本報告では、上記の報告で扱った黒曜石原石と静岡県田方郡大仁町の長者原大平A（II）遺跡から出土した黒曜石石片をEDX分析し、主要構成元素の組成からみた原石産地の推定を行った。

3. 供試資料

黒曜石原石として分析した試料の産地・岩石学的記載は、高橋¹⁾に示されている。そこに示さ

れたもの以外に、浅間山周辺に産する黒曜石、栃木の高原山の黒曜石片の分析結果が付け加わっている。原石産地の大まかな位置を図1に示す。

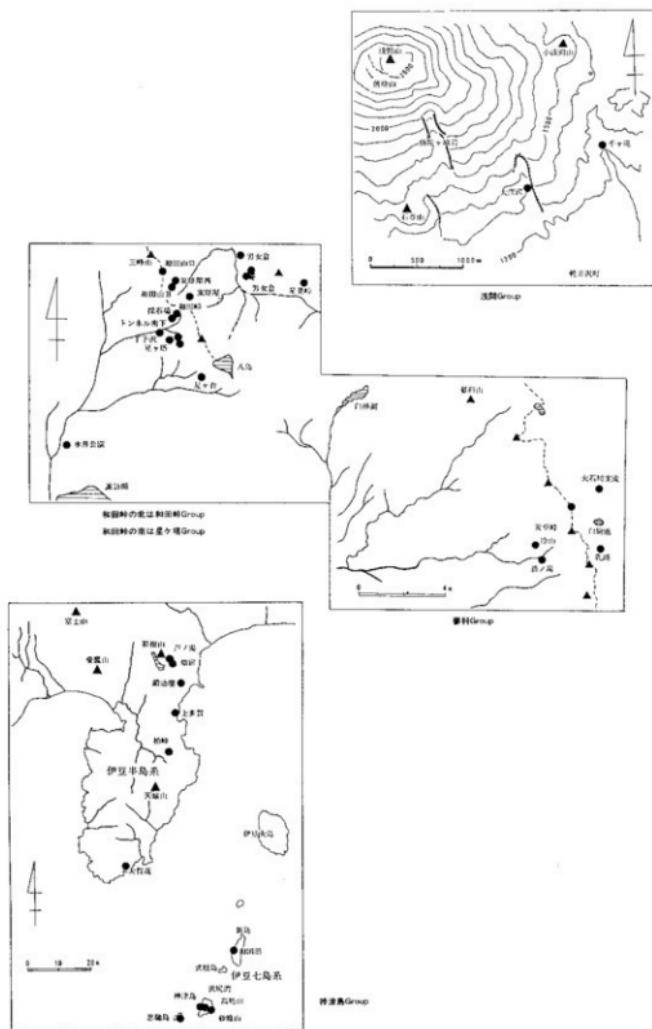


図1 黒曜石原石の採集位置略図

4. 分析試料の抽出

遺跡出土の黒曜石片として、大仁町の長者原大平A(II)遺跡の縄文早期、前期の層準から出土した數十片の中から12片の黒曜石を選び試料とし、分析した。

測定した黒曜石片試料は「愛鷹ローム層」の上部ローム層の休場層(C^{14} 年代 $14,300 \pm 700$ y.B.P.)直上の層準から出土すると思われる。

出土層準を図2に■で示す。

愛鷹火山南麓に見られる褐色の粘土化の進んだ火山灰層は「愛鷹ローム層」と呼ばれる。

発掘地点の愛鷹ローム層の層序は図2に示すとおりで、大きく上部・中部・下部に分けられる。愛鷹ローム層の供給源は最上部の現世腐植質火山灰層は主として新富士火山、上部ローム層上半分は不詳、上部ローム層下半分と中部ローム層は古富士火山起源と考えられている。

大仁町の地域も基本的にはこの「愛鷹ローム層」に覆われる。

5. 分析の方法

遺跡出土黒曜石片のEDX分析にあたっては、全て非破壊の状態で分析試料を作製し、分析は試料表面の一定面積を電子ビームで走査し、測定した。他の測定条件は、下記の原石産地から採取した原石黒曜石片の場合と同じなので、このEDX分析方法について述べる。

試料の調整は原石産地から採取した黒曜石の小片を、肉眼でかろうじて認められる程度に碎き、実体顕微鏡下で、純粹なガラスのみを電子顕微鏡用の試料台に載せる。この固定には両面テープの小片を用いるが、分析に際しては真空中に置かれ、さらに電子線の照射を浴びて加熱されるので、できるだけガス発生の少ないものを選ばなくてはならない。電子顕微鏡下では、汚染のない新しい碎面をもち、できるだけ凹凸のくすくない面を同じ向きにそろえて配列する。普通一個の試料台に同じ試料から得られたものを10個以上配列する。この方法でEDX分析する際に生ずる、様々な難点を避け、できるだけ平均化した測定結果を得ようとするためである。

測定済みの試料を保存する必要があれば、両面テープを1cm×1cm程度に切ってガラスに貼り、さらに両面テープで試料台にとめておくと、測定後に外して保存することができる。試料台ごと保存できる余裕があれば、この必要はない。カーボン製試料台が使用できれば、バック・スキャタリングX線が減り申し分無いが、今回は使用できなかった。

測定の条件—EDX分析はHITACHI-X650走査電子顕微鏡にKeveye-7000Qエネルギー分散型スペクトロメーターを組み合わせたシステムで、コンピュータで定量計算される。分析の条件は次の通りである。

加圧電圧 20KV

フィラメント電流 75μA

照射電流 200μA

分析倍率 1000倍でスポット分析

測定カウント 500KI／全チャンネル

この分析の条件は、分析元素の種類と定量計算の標準試料とともに固定されている。これらの分

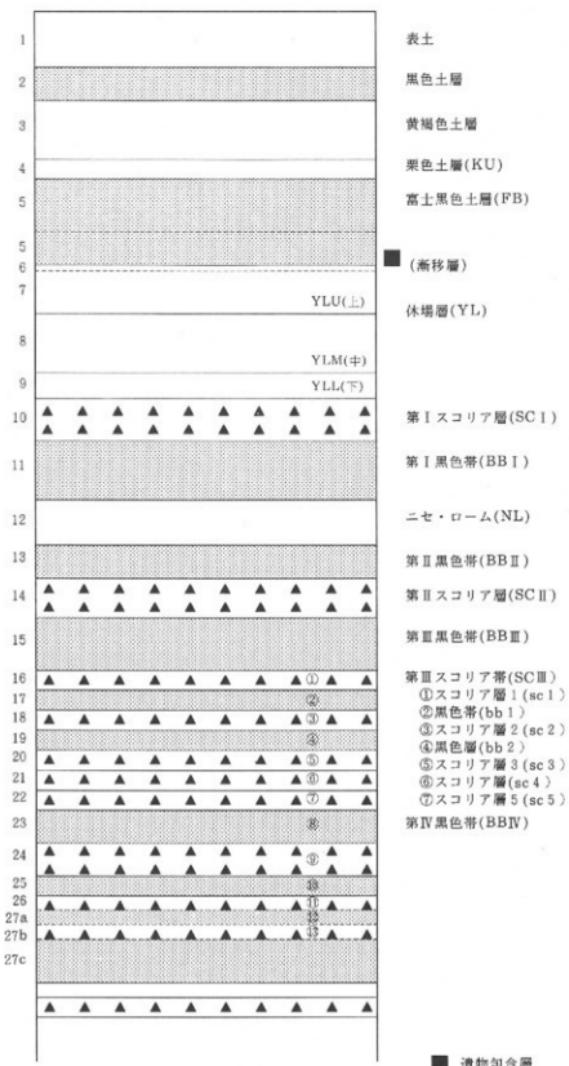


図2 遺跡付近の愛鷹ローム層の標準柱状図

析パラメターは充分な予備実験の上で設定されたもので、大きく変えることは一連の蓄積データと比較する上で好ましくない。

X線の込みは走査電子顕微鏡下で、表面汚染のない新鮮な破断面を選んで電子ビームを照射する。多くの場合上の条件でスペクトラムの獲得に300秒程度を要している。黒曜石中の特定元素の偏折は予備実験ではそれほどの有為差を示さない。それよりも斑晶・微晶部分を避け、ガラス部分を確認することが大切である。

EDX分析の精度として、組成比で0.05%程度が実用限界で、この限りでは黒曜石や火山ガラスに一般的に含まれる構成元素は、Na、Mg、Al、Si、K、Ca、Ti、Feの8種類であることを予備実験から見出した。このうちMgとTiは非常に微量なことがあるが、今回の分析ではこの8元素を対象とする。定量計算はKevex Quantx version 3.2Hにより以下の標準試料を用いて行った。

元素	標準物質	当該酸化物の重量%
Na	ASAMA 71803	4.54
Mg	JB-2	4.76
Al	JA-1	15.50
Si	Braji1 quartz	100.00
K	JG-1	3.95
Ca	JA-1	5.89
Ti	Wako pure G1	98.50
Fe	JA-1	5.08

分析結果はZAF補正のうえ、酸化物の重量パーセントで示した。酸化物の形で表現したのは、黒曜石の岩石学的特徴を知り、黒曜石を放出した火山活動の特徴に将来近づこうとすることにある。Feについては、total FeをFeOとして示した。各試料について、黒曜石片10個のそれぞれの1点についてEDX分析する。黒曜石に含まれるH₂Oについても考慮されるべきであるが、8元素の相対比で示す限り、試料間の差異は少なく、目下のところ問題にならない。

対象元素を8元素に固定し、酸化物として組成比で表現することは、結果の安定さを生み、比較が容易になる。したがって、このEDXによる結果のみで、以下に示すように、かなり的確な判断を下すことができる。

測定結果の処理の過程で、次のことを行う。試料毎の測定値について最高値(Maximum)、最低値(Minimum)、変動範囲(Range)、平均値(Mean)、平方和(Sum of square)、分散(Variance)と標準偏差(Standard deviation)を求める。SiO₂について、その標準偏差がおおよそ1.0を越す試料については、単純な試料とは考えられない場合があり、検討を要する。本報告ではそれぞれの試料について、分析した8元素の

構成比の平均値のみを示す。

また多くの試料については、次の組合せの測定値の散布図を作製し、平均値のみでは比較しにくく点を区別するのに役立てる。 $\text{SiO}_2 / \text{Na}_2\text{O}$ 、 $\text{SiO}_2 / \text{MgO}$ 、 $\text{SiO}_2 / \text{Al}_2\text{O}_3$ 、 $\text{SiO}_2 / \text{K}_2\text{O}$ 、 $\text{SiO}_2 / \text{CaO}$ 、 $\text{SiO}_2 / \text{TiO}_2$ 、 $\text{SiO}_2 / \text{FeO}$ 、 $\text{SiO}_2 / \text{FeO} + \text{MgO}$ 、 $\text{SiO}_2 / \text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$ 、 $\text{K}_2\text{O} / \text{MgO}$ 、 $\text{K}_2\text{O} / \text{CaO}$ の11の組み合わせから、類似した元素組成を示す黒曜石を区別することができる。

6. 分析結果

ア 原石産地の黒曜石について

扱った原石産地の黒曜石は29産地104試料で、それらについてEDX分析が行われた。各試料の10個所についてスポット分析されたので、スペクトラムは1040に達する。産地ごとの試料数は東餅屋3、和田岬8、トンネル南下3、星ヶ塔3、水月公園2、丁子沢2、冷山2、麦草峠5、大石川支流5、大塙沢4、千ヶ滝2、芦ノ湯2、畠宿9、鍛冶屋3、上多賀4、柏崎8、大賀茂3、新島3、恩馳島15、砂糠山9と他は1試料ずつである。産地ごとに試料数が違うのは、黒曜石のみかけの違いによって選んだからで、その試料数は見掛けの異なる黒曜石の試料数である。

表1にはこれらの産地から得た主要構成元素組成比の平均値で示してある。基礎になったスペクトラムの数は産地ごとに異なり、各試料について10スペクトラムを収集し、その試料数倍の平均値である。この他に栃木高原山等の原石産地の試料が追加されている。

イ 化学組成からみた原石産地ごとの特性

表1では原石産地を便宜的に、和田岬系、蓼科系、浅間系、箱根系、伊豆半島系、伊豆七島系の6群に分けた。この分類は、接近したものをまとめたもので、必ずしも地質学的に検討されたものではない。しかし少數の例外を含むものの、大多数は主要構成元素の組成比でかなりの一一致を示す。

すなわち和田岬系としたものは11／星ヶ塔を除いて、蓼科系としたものは16／乳頭を除いて、箱根系としたものは19／芦ノ湯を除いて、各系統ごとに一定の範囲内の組成比をもつ。上記のものを除いて、それぞれの系統の組成比の平均は表2のとおりである。しかし、それぞれの系統の平均値として示したものの、各試料は各々に統計的な有為差をもつて、以下の石片の原石産地推定では29の原石試料を、他に高原山を含めて、独立したものとして扱う。

ウ 化学組成からみた遺跡出土黒曜石石片の原石産地推定

表3には、大仁町長者原大平A(II) 遺跡から出土した黒曜石石片の主要構成元素の組成比及び推定される原石産地を示してある。原石産地の黒曜石とは異に、遺跡出土黒曜石石片を非破壊で、石片そのままを電子顕微鏡下で、汚染のない面を選んでビームを照射した。推定は100倍に拡大した画面で、一定面積を対象にビームを走査する面測定を試み分析した。各片ごとに5つの部分を分析した平均値である。

各石片の原石産地を推定するために、各原石産地の黒曜石の化学組成と遺跡出土黒曜石の化学組

表1 原石産地の黒曜石の化学組成 主要8構成元素の酸化物の百分率で示す。

	原石产地	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	FeO
和田系	1 / 東餅屋	3.93	1.09	10.92	78.88	3.63	0.89	0.09	1.10
	2 / 和田峠	4.09	1.01	11.15	78.81	3.37	0.71	0.04	0.84
	3 / トンネル南下	4.12	0.87	11.22	78.52	3.74	0.75	0.05	1.02
	4 / 採石場	3.96	1.04	10.89	78.69	3.75	0.81	0.05	0.82
	5 / 和田山	4.32	1.27	11.14	78.32	3.52	0.74	0.06	0.65
	6 / 男女倉	4.35	1.47	11.23	78.00	3.17	0.96	0.12	0.70
	7 / 星ヶ台	4.86	1.54	11.36	77.80	3.09	0.77	0.14	0.45
	8 / 星ヶ塔	4.55	1.16	11.12	78.70	2.84	0.82	0.11	0.70
	9 / 丁子沢	4.32	1.11	11.16	78.70	3.35	0.63	0.08	0.68
	10 / 水月公園	4.90	1.38	11.56	77.91	2.84	0.76	0.12	0.55
蓼科系	11 / 星ヶ峰	5.79	1.73	13.84	72.57	2.46	2.34	0.26	1.02
	12 / 冷山	4.29	1.08	11.03	78.69	2.90	0.97	0.12	0.95
	13 / 渋ノ湯	3.04	0.69	10.54	79.88	3.18	1.25	0.14	1.30
	14 / 麦草峠	4.22	1.00	11.03	78.70	2.98	0.97	0.11	0.98
	15 / 大石川支流	3.78	1.01	10.95	79.06	2.94	1.02	0.13	1.10
浅間系	16 / 乳頭	4.51	0.97	12.71	76.98	1.60	1.45	0.25	1.52
	17 / 大窪沢	3.54	1.14	11.14	77.28	2.15	2.12	0.25	2.38
箱根系	18 / 千ヶ瀬	3.26	1.14	11.60	77.25	2.01	2.24	0.26	2.25
	19 / 芦ノ湯	4.49	2.25	12.50	69.29	0.61	4.52	0.46	6.01
	20 / 煙宿	4.37	1.57	10.81	77.29	1.02	2.17	0.19	2.60
伊豆系	21 / 鎌治屋	4.96	1.40	11.08	76.95	1.27	1.99	0.12	2.22
	22 / 上多賀	4.85	1.32	10.85	78.09	1.43	1.71	0.12	1.64
	23 / 柏峠	4.02	1.33	10.68	78.27	1.86	1.95	0.16	1.74
島嶼系	24 / 大賀茂	4.63	1.39	11.40	77.25	2.27	1.43	0.13	1.51
	25 / 新島	4.04	1.06	11.11	79.29	2.63	0.93	0.10	0.84
	26 / 恩馳島	3.12	0.76	10.49	80.80	2.69	1.20	0.11	0.81
七島系	27 / 高処山	4.38	1.23	11.06	78.88	2.58	0.95	0.09	0.83
	28 / 砂摺山	2.88	0.77	10.60	81.14	2.77	1.02	0.09	0.76
	29 / 澤尻湾	3.64	0.95	10.57	80.44	2.74	0.95	0.11	0.60

表2 原石産地黒曜石の化学組成の傾向
各群の平均は直下の試料を除いた値である。
主要8構成の酸化物の百分率で示す。

原石産地群	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	FeO
和田 系 平 均	4.34	1.19	11.18	78.38	3.33	0.78	0.09	0.75
11 / 星 畿 畊	5.79	1.73	13.84	72.57	2.46	2.34	0.26	1.02
蓼 科 系 平 均	3.83	0.95	10.89	79.09	3.00	1.05	0.13	1.08
16 / 乳 頭	4.51	0.97	12.71	76.98	1.60	1.45	0.25	1.52
浅 間 系 平 均	3.40	1.14	11.37	77.27	2.08	2.18	0.26	2.32
箱 棚 系 平 均	4.67	1.49	10.95	77.13	1.15	2.08	0.16	2.41
19 / 芦 ノ 湯	4.49	2.25	12.50	69.29	0.81	4.52	0.46	6.01
伊豆 半島 系 平 均	4.50	1.35	10.98	77.87	1.85	1.70	0.14	1.63
伊豆 七島 系 平 均	3.61	0.95	10.77	80.11	2.68	1.01	0.10	0.77

表3 大仁町長者原大平A (II) 遺跡出土黒曜石片の化学組成と推定原産地一覧
(主要8構成元素の酸化物の百分率で示す。)

SAMPLE	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	FeO	ID-Value	原石産地源石
1 OCOA-01	3.53	0.78	10.37	77.22	2.18	2.21	0.23	3.49	0.915	KASI-B4 柏 畊
2 OCOA-02	3.42	0.62	10.50	78.76	4.19	0.75	0.11	1.65	0.997	HOTO-B1 星ヶ塔
3 OCOA-03	3.17	0.58	11.00	75.42	2.26	2.02	0.30	5.25	1.440	KASI-B5 柏 畊
4 OCOA-04	3.27	0.44	9.90	78.01	2.30	2.28	0.49	3.31	1.324	KASI-CU2 柏 畊
5 OCOA-05	2.13	0.60	10.87	73.80	4.37	2.15	0.31	5.77	1.870	KASI-CU2 柏 畊
6 OCOA-06	3.20	0.45	10.27	77.14	2.36	2.22	0.23	4.13	1.127	KASI-CU2 柏 畊
7 OCOA-07	3.10	0.51	10.54	76.83	2.29	2.05	0.21	4.45	0.978	KASI-B5 柏 畊
8 OCOA-08	2.84	0.09	10.04	76.77	2.39	2.40	0.27	5.20	3.592	KASI-B5 柏 畊
9 OCOA-09	3.11	0.51	10.41	77.10	2.25	2.14	0.26	4.23	1.057	KASI-B5 柏 畊
10 OCOA-10	3.14	0.55	10.44	77.25	2.25	2.18	0.23	3.96	0.953	KASI-B5 柏 畊
11 OCOA-11	3.31	0.52	10.33	77.67	2.52	1.92	0.18	3.54	0.845	KASI-B5 柏 畊
12 OCOA-12	3.20	0.85	11.70	74.18	2.28	2.43	0.31	4.98	1.391	KASI-B4 柏 畊

成を比較する。ここでは、奈良教育大学の西田史朗氏が火山ガラスの同定のために開発したV A I S (Volcanic Ash Identification) を使い、ID-value (類似度) を求め産地推定の手掛かりとした。これは同定しようとする黒曜石の石片と原石産地の黒曜石の主要構成元素の組成をそれぞれの元素について比較し、それらの差の和をID-valueとして表現したもので、類似の程度が高いほど小さく現れる。したがって、この値をみることで原石産地推定の目安が得られ、次いで各元素ごとの比較、あるいは散布図による測定値の散らばり傾向の検討を重ねて、最終的な推定を下すことになる。今回の分析では、カリウム／カルシウム比の値が産地推定に大きな意味を持った。

表3のE D X分析による黒曜石の原石産地推定は、ID-valueを表1の29試料（他数点の試料）のそれぞれの間で計算し、最も小さい値を示した、すなわちこの手法で最も原産地として可能性の高いものを挙げたことになる。さらに、CaO/K₂O比等の検討等から、最終的に表3の結果を得た。

参考文献

- 1) 高橋 豊・西田史朗 (1986) 伊豆半島の縄文遺跡出土黒曜石の原石産地、考古学と自然化学 第19号、29-41。

第VII章 調査総括

第1節 遺構について

1. 住居址について

大平A・B・C遺跡から検出された住居址は、第Ⅰ次・第Ⅱ次調査を合わせても僅かであり、縄文時代早期前半に属するものが7基、同中期中葉に属するものが2基となっている。（B遺跡からは検出されなかった）いずれも、その形状は円形あるいは橢円形を呈する。

◎縄文時代早期前半期

〈規模〉 早期前半では、大平C遺跡第Ⅱ次調査検出の第2号住居址の約11m²（約3.3坪）から、第Ⅰ次調査検出の第2号住居址の約22m²（約6.7坪）と若干の幅はある。その規模の平均値は、長径4.04m×短径3.78m、床面積約15.5m²（約4.7坪）を示している。この数値に最も近い住居址は、第Ⅱ次調査検出の第2号住居址である。次のとおり1類・2類に分けることが出来る。

1類 長径3.50～3.72m、短径3.20～3.68mを測る住居址

大平C第Ⅰ次第4号、大平C第Ⅱ次第1号・2号・3号

2類 長径4.45～4.86m、短径4.22～4.46mを測る住居址

大平A第Ⅱ次第1号、大平C第Ⅰ次第2号・5号

以上のように、1類は4基、2類は3基となっている。

〈分布〉 大平A遺跡：第24図のように、南に伸びる丘陵の高い場所に位置している。確認された住居址は1基だけである。調査中何度となく我々を悩ませたのは、弧状に輪郭を持つ色の変わった部分であり、住居の壁のようにも見えて判断を誤る所であった。さらに、焼土の入った柱穴状ピットなどが隨所に見られた。いずれも、風倒木痕である事が分かった。第Ⅰ次調査区と同様に、大きく天地返しが行われて煙が作られており、遺構や包含層などはかなり消滅したものと思われる。

大平C遺跡：第143図に見るよう、第Ⅰ次・第Ⅱ次調査全体でも6基であり、多くを述べる事は出来ないが、少なくとも早期前半に限って言うならば、台地の北東側に5基、西南側に1基分布と言う配置を見ると、本遺跡が南西に向かって緩やかに張り出した地形であり、いずれも地形に沿って（等高線に平行に立地）構築している事が分かる。そして、住居址間には集石土坑が密集して分布している。住居址全体を見れば、北西ないし西に長軸方位を持って構築しており、占地に当たって地形を考慮した様子が伺える。

◎縄文時代中期中葉期

〈規模〉 中期中葉は、第58・60・62図のように大平C遺跡第Ⅰ次調査検出の第1号・第3号住居址の2基だけであるが、両方とも石囲いの炉を持っている。第1号は長径3.72m、短径3.40m、床面積約13m²（約4坪）と小型である。第3号は長径5.15m、短径4.40m、床面積約23m²（約7坪）で、周溝が巡っている。

〈特徴〉 この住居址には、床面の東部分に大きな石皿と磨石が並び、加えてその横には埋設された土器（曾利Ⅲ式に比定される）があるなど、住居内の作業場所としての位置を想像するに足るもののが見られる。

〈分布〉 2つの住居址との間はおよそ12~3mであるが、この両者間およびその南側には、住居址と同時期と思われる4つの配石遺構が存在する。（第84図）この配置が、果してどのような意味を持つのかは、2基だけの住居址からは予想もつかない。また、該期の住居はこれだけであったとは到底思えず、いささかの疑問が残るところである。ただ、ここより南方約200mには大平D遺跡があり、やはり石囲いの炉を持つ住居址が確認されており、そことの関連が考えられる。

2. 集石土坑について

集石土坑は、大平A遺跡からは第Ⅱ次調査で9基、大平C遺跡からは第Ⅰ次・第Ⅱ次調査で57基検出されている。いずれも縄文時代早期前半のものであり、前述の住居に伴うものである。

◎大平A遺跡の集石土坑

〈形状・規模〉 形状はほとんど楕円形を呈するが、長円形とも言うべきもの（第3号集石土坑）もある。また、長軸のいずれかがやや細く尖る傾向にあり、言わば舟型のプランをなしている。長径1.90m、短径1.03mの第3号集石土坑から、長径0.90m、短径0.52mの第2号集石土坑までの幅がある。堀込みは比較的浅い。

〈分布〉 すべて第1号住居址の南東側に分布しており、第1号～第8号集石土坑は密集して構築されている。また第9号集石土坑は、これらより東に約6mほど離れている。住居との位置関係をみるとはっきり隔絶されており、緩く傾斜した一段低い場所に構築している。

◎大平C遺跡の集石土坑

〈形状・規模〉 形状は、大平A遺跡のものがほとんど楕円形であるのに対して、C遺跡の場合は円形が主体となっている。この違いは割合はっきりしており、またC遺跡で表現している楕円形と言うのも、むしろ不整円形と呼ぶべきもので円形に近い。第Ⅰ次・第Ⅱ次調査で検出された57基のうち、長径1.53m、短径1.15mの第22号集石土坑から、長径0.65m、短径0.60mの第40号集石土坑（いずれも第Ⅰ次調査で検出）まで、かなりの幅を持っている。また、大平A遺跡には見られない切り合った構築もある。

〈分布〉 第Ⅰ次・第Ⅱ次調査で検出された6基の住居址の周辺、とりわけ西南側に密集して分布している。特に第57図に見るよう、B・C-6~8グリッド内には複雑に切り合い関係を見せるものが多く存在する。また、第Ⅱ次調査検出の第2号住居址の周辺には、これを取り囲むように分布しており興味深い。さらにこれとは好対象に、他とは全く離れたA・B-12・13グリッドに位置する第37~41号集石土坑のような例もある。

〈特徴〉 第Ⅰ次調査検出の第7号集石土坑（図版68）のように、多くの焼けた角砾と共に、煮溢れや炭化物が付着した土器が倒置している様は、まさに集石土坑の機能を物語格好的資料と言えよう。この他、底面に焼土が残る集石土坑も幾つか見られる。さらに大きな特徴として、これら集石土坑の多くから磨石が伴出する事で、しかも複雑で検出されるケースが幾つか見られた。特に第22

号集石土坑からは5本も検出されている。

3. 炉穴群について

炉穴は、大平C遺跡第Ⅰ次調査の際に、A-1グリッドの最も北側から検出されている。（図版59）少なくとも4基ほどの炉穴が切り合っていたようである。真っ赤な焼土がびっしりと詰まっている、この焼土の中から土器片（押型文）が検出されている。しかし、この炉穴群については、調査上の不手際により写真撮影のみに止まってしまった。

4. 配石土坑について

配石土坑は、同じく大平C遺跡第Ⅰ次調査の際に、B・C-3グリッドから2基検出されている。（図版54）これは、第Ⅰ次調査概報に掲載の第1土壤と第2土壤の事であり、第101図16～19にある田戸下層式に比定される土器や燃糸文土器などが出土している。これについては、記述する配石遺構を精查する段階で確認されたものである。

5. 配石遺構について

配石遺構は、A～Dの2～4グリッド内から4基検出されている。それらの配置を見ると、東西約20m、南北約10mの範囲に弧状に分布している事が分かる。大きく捕らえれば北東側に開口部を持っており、第58図のように住居址間の空白部分は、広場的な場所であったろうか。このうち、第1配石遺構の立石付近からは、曾利Ⅲ式に比定される深鉢形土器（第119図・図版73）が出土しており、2基の住居址と同時期と思われる。

6. 集石炉について

集石炉は、上記配石土壤の東南側約5mほどの所に位置している。（D-4グリッド内）図版59に示したもので、径30～40cmほどの円形を呈する。比較的浅い堀込みの中に、5～10cm大の板状の礫を同心円状に並べてあった。礫はいずれも火熱を受け焼けた痕跡を示す。縄文時代中期の所産と思われる。

7. 円形土壤について

円形土壤は、大平B遺跡で30基、大平C遺跡第Ⅰ次調査で10基検出されている。前者は、大別すると調査区の北西側、南西側、東南側の3ヶ所に分布しそれぞれ群をなしている。ほとんどの土壤が1m前後野物で、覆土は黒灰色を呈する。遺物は、僅かではあるが土器（壺形土器と环形土器の破片）が検出されている。後者は、その分布もまばらで調査区の北西側と東北側に若干まとまっている程度である。遺物は全く検出されなかった。これに類似した土壤は、仲道A遺跡第Ⅰ次～第Ⅲ次調査で検出された。仲道A遺跡の遺物を見る限り、少なくとも平安時代以降の所産である事が分かっている。

第2節 遺物について

1. 土器について

大平遺跡群から出土した土器は、破片総数1367点であった。（この他復元土器20個体）それらのほとんどは縄文時代早期・前期・中期・後期・晩期に属するものであり、僅かに平安時代の所産と思われる土師器が含まれていた。ここでは縄文時代早期、とりわけ前半の土器について述べる。

1) 大平A遺跡の押型文土器について（第12図1～45・第28図1、図版4・24）

第Ⅰ次調査出土の土器は、山形押型文が施されるものであるが、その原体は小さく、無文部を挟んで帶状に施文される。口縁部を横位、胴上半部を縦位、胴下半部を横位に施文するという構成であり、口唇上および口縁内部にも施文されている。大平B遺跡からも同様の土器が出土している。

（第40図1～7）第Ⅱ次調査出土の山形押型文土器は、口縁部横位、その下の無文部を挟んで再び横位に施文された後、胴部は下半部まで縦位に密接施文されている。この土器には、第28図2・図版23に見るような無文土器が伴出しており、平坂式土器の古い階段に位置するものと考えてよいであろう。従って、第Ⅰ次調査出土のものはこれよりやや遅るものであろう。（立野式と桶沢式土器の前後関係を考え合わせた上で、やはりこのあたりに位置付けられるものであろうか）

2) 大平C遺跡の縄文土器と撫糸文土器について（第106図～第109図・第163図～第165図、図版89～91）

縄文土器のうち、第162図1・2・図版87に見る土器は、斜行する縄文でありこれを帶状に施文してある。口唇上に斜行施文、口縁部から胴下半部にかけて縦位に帶状施文してある。この手法は、前述の大平A遺跡第Ⅰ次調査出土の山形押型文土器の施文に共通するところが多く、即ちこれらの手法を受け継いだものであろう。類例は富士宮市若宮遺跡出土のものがある。

撫糸文土器は、第54図16のように口縁部に横位施文し、口縁下部に斜行あるいは縦位に施文してある。21・22・24・25・27のように、口縁部の表裏に斜行と縦位施文しているものもある。また第50図34・35、第58図1～3あるいは第165図6は、いわゆる稻荷台式土器に酷似したものであり、いかにも関東風な土器である。本遺跡ではこれらの土器を取り入れながら、北伊豆独特の縄文・撫糸文土器を作り上げている。このことは、伊東市三の原遺跡出土の遺物にも言える事であり、稻荷台式期前後の編年を考える上において極めて重要な資料である。

3) 大平C遺跡の押型文土器について（第104図6・第106図1～20・第109図18・第163図1～25・第164図1～7、図版88～89）

バラエティーに富んだ押型文様のうち、第163図19～25・第164図1～7は、格子目押型文を施したものであるが、その形状も菱形に近いもの、平行四辺形に近いもの、細かな格子目のものなどがある。とりわけ第163図25や第164図1～7は、菱形もしくは平行四辺形の格子目が深く印刻されたもので、菊川町三沢西原遺跡を始め、沼津市尾上イラウネ遺跡、長泉町野台遺跡・同中尾遺跡から出土しているがまたその例は少ない。本遺跡群から出土している押型文の中ではやや新しい段階に位置づけられるものであろう。

2. 石器について

大平遺跡群から出土した石器は、第17表に示したように総数495点であった。このうち、表のとおり磨石とりわけ特殊磨石の占める割合が多い。C遺跡第I次調査ではその50%がそうであり、極めて顕著である。ここでは、A・B・C各遺跡に多くみられた特殊磨石について述べる。

特殊磨石と呼ばれる磨石は、これまでに何例か報告されまた種々検討がなされているところであり、その帰属時期や用途についても、様々な考察がなされている。例えば『田中谷戸遺跡』（浅川・安孫子・1976）のような縄文時代早期後半の炉穴群を検出した遺跡からは、これら特殊磨石などを含む156点の磨石が出土した例がある。報告者等は、石器特に磨石についてはその多様な分類と共に使用法が調査できたと言う。つまり、「…気候暖化による自然環境に順応してかなりの植物性食料が採食されたものと思われた…」（原文のまま）

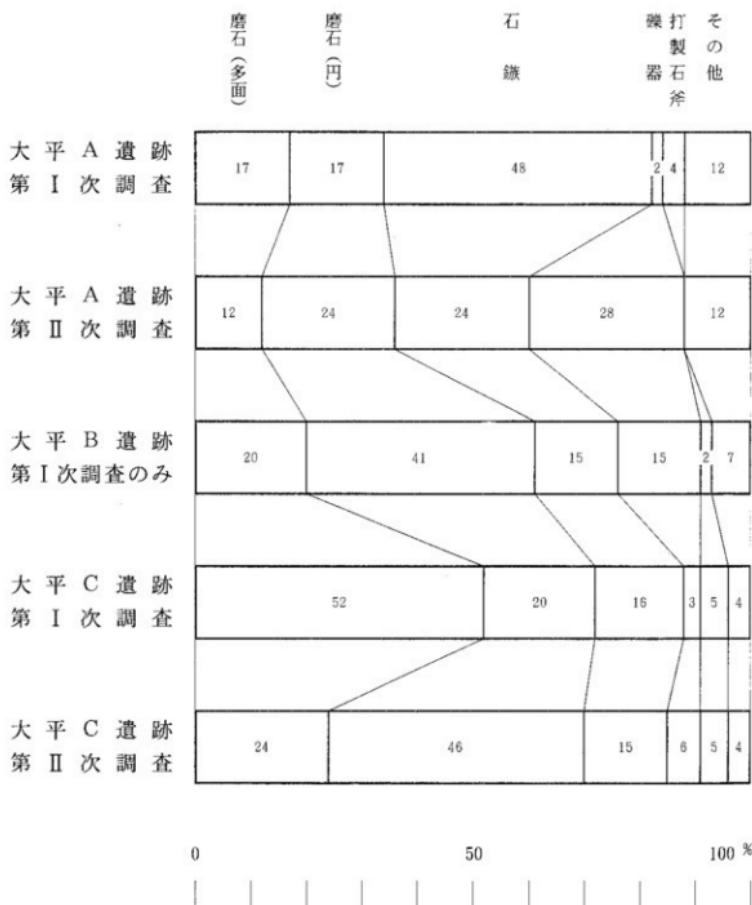
大平C遺跡からは、第I次・第II次調査では271点の磨石が出土した。このうち162点（約60%）が特殊磨石となっている。（この磨石の数に対して、石皿が6点だけと言うのは少々奇異な感じがするが）この特殊磨石については、既に述べたとおり第I類～第III類の3型式に分類し、さらに細分してある。すなわち、第I類は多面の磨面を持つものであり、その断面形状によってa種－柱状を呈するもの、b種－三角形を呈するもの、c種－欠損のものに分けた。第II類は横楕円形を呈するものであり、その磨面が右に位置するものをa種、左に位置するものをb種とし、形状はやや変形であるが、左右いずれかに磨面を持つものをc種とした。第III類は、a種－長円形のもの、b種－やや長円形のもの、c種－円形のもの、d種－楕円形のもの、e種－箱形のもの、f種－おむすび形のもの、g種－その他欠損品。

大平C遺跡の場合、こうした磨石類のかなりの数が縄文時代早期前半の縄文・撚糸文土器を伴う住居址や集石土坑の中から検出されている。第I次調査検出の第2号住居址の床面直上から、また同じく第I次調査検出の第22号集石土坑からは5本、第29号集石土坑からは4本検出されている。また第29号集石土坑からは石皿も出土している。

遺 跡 名	総 数	磨石(多面)	磨 石 (円)	石 錬	礫 器	打 製 石 斧	そ の 他
大平A (I次)	5 2	9	9	2 5	1	2	6
大平A (II次)	1 7	2	4	4	5		2
大平B(I次のみ)	4 6	9	1 9	7	7	1	3
大平C (I次)	2 5 1	1 3 2	4 9	4 0	7	1 2	1 1
大平C (II次)	1 2 9	3 0	6 0	2 0	8	6	5

第17表 各遺跡出土の石器数

大平遺跡群における石器組成



第18表 各遺跡出土石器比較対照表

第3節 まとめ

大仁町の最東端に位置する長者原地区は、更新世に活動が顕著であった多賀火山帯に属している。付近にはこの多賀火山帯の主体をなす、安山岩・玄武岩・火山碎屑岩類等の露頭が多く見られる。これらの噴出物は、本町の東部地域に広く分布しており、本町全体の75~80%を占めている。大平C遺跡の遺構面からは、多くの礫に混じって火山弾やスコリアが混じって検出された。また、長者原周辺には、バミスも多量に分布しており、一部かんらん石玄武岩の溶岩も見られる。

大平A・B・C遺跡の時期については、その出土遺物から縄文時代早期から晩期、さらに平安時代と言うように、断続的に集落が営まれた事が分かった。前述のように、大平遺跡群からは主として縄文時代早期前半の遺構や遺物が検出された。とりわけ、大平C遺跡では撫糸文・縄文土器を伴った住居址6基、集石土坑57基が見つかり、小規模ではあるが集落の一形態を確認する事が出来た。

ここでは特に、早期前半の撫糸文・縄文土器と磨石について触れたい。

◎土器：本遺跡群から出土した土器のうち最古のものは、大平C遺跡で発見された土器である。近年比較的多く使われる「軽しょう」な胎土のもので、いわゆる関東風の撫糸文土器である。おそらく稲荷台式並行であると思われる。これは圧倒的に多い在地型の土器に混在しており、愛鷹山南麓、箱根山西麓、そして北伊豆の諸遺跡からの出土例を比較した上で、その前後関係を探って行かなければならず、しばらくの時間が必要とされよう。出土した在地型の土器の中には、口縁部を見る限り明らかに関東の土器そのものであるが、胎土や焼成を観察するに及んで、やはり「在地」の土器である事が分かる。

次にくるのが、大平C遺跡第II次調査で出土した土器で、縄文を継ぎに帶状旋文したもの、さらに大平A遺跡第II次調査で出土した土器で、山形押型文を帶状旋文したものであろう。稲荷台式の新しい時期および平板式の古い時期に位置付けられるものと考えられる。とりわけ大平A遺跡の場合、この山形押型文土器に伴って無文土器が出土している。これを見ても、平板式により近い要素を持っている土器であると言えよう。

さらに、これに統くものとして大平C遺跡出土の押型文土器がある。とりわけ格子目押型文を施したものは、他の押型文に混在していた。菱形もしくは平行四辺形に深く印刻されたものである。県内においてもその出土例は少ない。

◎石器：上記の土器に伴って多数の磨石が出土している。総数271個のうち、162個は多面の磨石を持つもので、いわゆる「穀磨石」と呼ばれるものであり、その多くは住居や集石土坑に伴っている。とりわけ、集石土坑内から4~5個がまとまって検出される例もあって、両者の機能解明にかかるものである。ただ、これら磨石の量に比して極端に石皿が少ない点も注意されなければならないであろう。

さて、大平遺跡群から出土した黒曜石であるが、このうち大平A遺跡第II次調査で見つかったものを、静岡県立教育研修所の高橋豊氏に分析して頂いたところ、大平とは至近距離の中伊豆柏峰産のものがほとんどであり、僅かに信州星ヶ塔産のものが混在しているとの結果を得た。むろん、これは大平遺跡群の黒曜石のはんの一例に過ぎないが、大変貴重な成果であったと感謝している。

参考文献

- 秋本真澄 1968 『伊豆の後期旧石器文化図録』
- 秋本真澄他 1988 『東大室クズレ遺跡』 伊東市教育委員会
- 浅川利一他 1976 『田中谷戸遺跡』 町田市田中谷戸遺跡調査会
- 愛鷹ローム団研グループ 1969 『愛鷹山麓のローム層—東名高速道路工事現場を中心として—』 第四紀研究第8卷1号
- 綱谷克彦他 1979 『鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査Ⅰ—』 福井県教育委員会
- 石川治夫 1985 『寺林南遺跡発掘調査報告書』 沼津市教育委員会
- 上田典男 1833 『縄文時代焼躰集積遺構の形態的把握』 物質文化第41号
- 今村啓爾 1982 『縄文文化の研究』 3、諸磯式土器 雄山閣
- 江藤千萬樹他 1949 『伊豆伊東町上の坊石器時代遺跡調査報告』 考古学第10卷第8号
- 岡本 勇 1958 『横須賀市平根山遺跡』 横須賀市博物館研究報告(人文科学) 2号
- 岡本 勇 1960 『三浦市大浦山遺跡』 横須賀市博物館研究報告(人文科学) 4号
- 小倉 均 1988 『大宮大地における撫糸文土器の様相』 浦和市立博物館研究報告書第15集
- 神奈川県考古同人会 1984 『シンポジウム縄文時代早期末・前期初等の諸問題』神奈川考古第18号
- 小栗一夫 1979 『縄文時代における焼石遺構』 小田原考古学研究会会報第8号
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1985 『茶木畑遺跡』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第8集
- 杉原莊介・芹沢長介 1957 『神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚』 明治大学文学部研究報告 考古学第二冊 明治大学
- 関野哲夫・渋谷昌彦・鈴木敏中 1983 『静岡県における縄文時代早期末・前期初頭土器集成図集』 神奈川県考古第17号
- 関野哲夫 1988 『縄文早期を考える—押型文化の諸問題—』 東海地方の押型紋段階の様相 帝塚山考古学研究所
- 関野哲夫他 1990 『清水柳北遺跡発掘調査報告書』 その2 沼津市教育委員会
- 関野哲夫他 1992 『尾上イラウネ遺跡調査報告書Ⅱ』 その1 沼津市教育委員会
- 芹沢長介 1957 『神奈川県大丸遺跡の研究』 駿台史学第7号
- 高尾芳之他 1988 『土手上・中見代第Ⅱ・第Ⅲ遺跡発掘調査報告書』 沼津市教育委員会
- 谷口康浩 1986 縄文時代「集石遺構」に関する試論 東京考古4
- 戸田哲也 1988 『表裏縄文土器論。大和のあけばのⅡ』 大和市教育委員会
- 長野康敏他 1989 『函南スプリングスゴルフ場用地内埋蔵文化財発掘調査報告書(I)』 函南教育委員会
- 原田昌幸 1983 『撫糸文期の堅穴住居跡』 土曜考古第7号 土曜考古学研究会
- 平林将信他 1976 『陣場上・平畠遺跡』 静岡県文化財保存協会
- 馬飼野行雄他 1983 『若宮遺跡』 静岡県教育委員会・富士宮市教育委員会
- 宮崎朝雄 1981 『撫糸文系土器群の終末と無文土器群』 土曜考古第3号 土曜考古学研究会
- 山形真理子他 1991 『三の原遺跡』 立教学院三の原遺跡調査団 立教学院健康保健組合

長者原大平遺跡群発掘調査報告書

平成5年3月20日 印刷・発行

編 集 大仁町教育委員会

発 行 大仁町教育委員会

郵便番号 410-23

静岡県田方郡大仁町田京167-7

電 話 0558-76-3600

印 刷 ア サ ダ 印 刷

図 版

図版 1 大平 A 遺跡第 I 次調査区の遠景



遠 景 (東南方より)



遠 景 (調査前 西方より)

図版2 大平A遺跡第I次調査区の近景と土層



近 景（西方より）

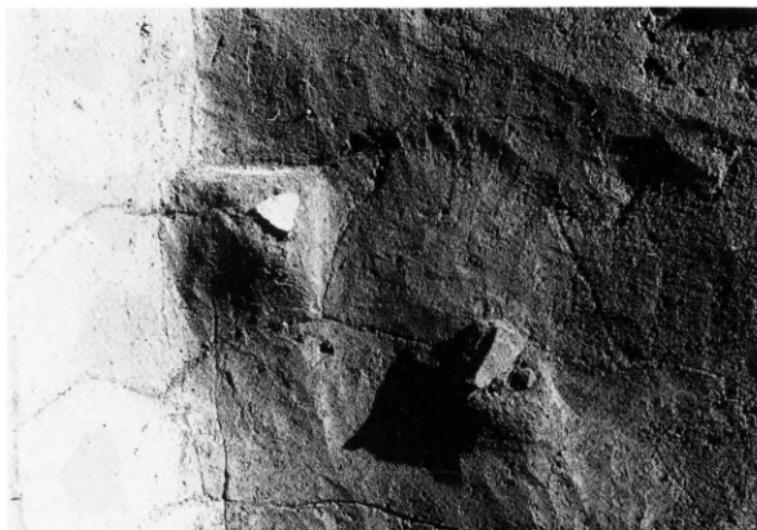


土層と遺物の出土状態

図版3 大平A遺跡第I次調査の遺物出土状態

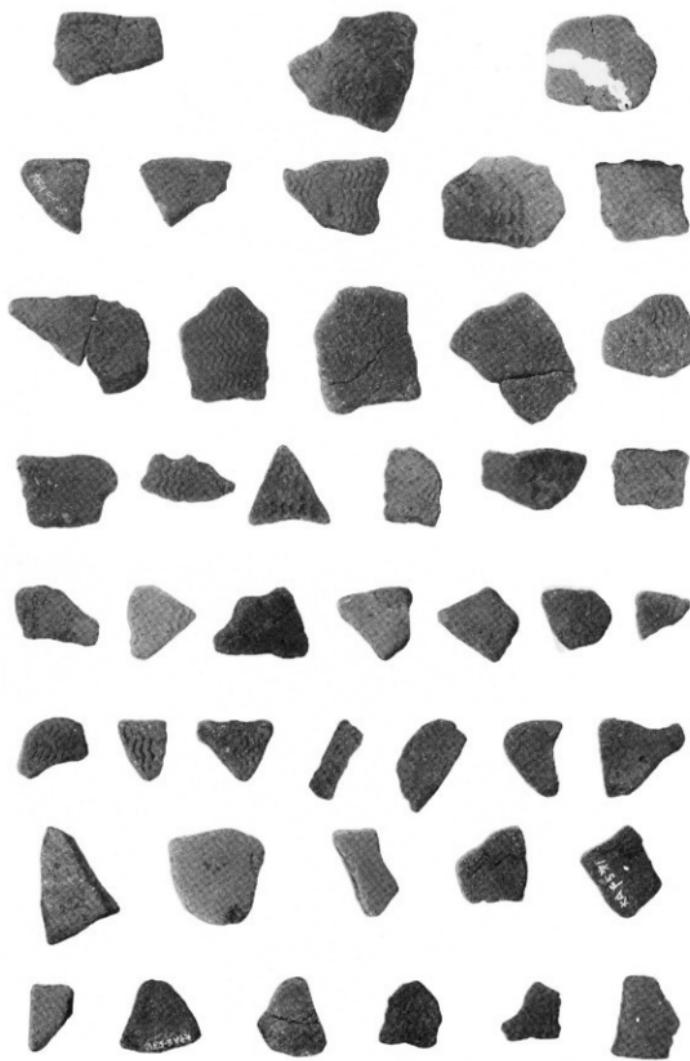


土器の出土状態—1



土器の出土状態—2

図版 4 大平 A 遺跡第 I 次調査の出土遺物(1) 土器(1)



図版5 大平A遺跡第I次調査の出土遺物(2) 土器(2)



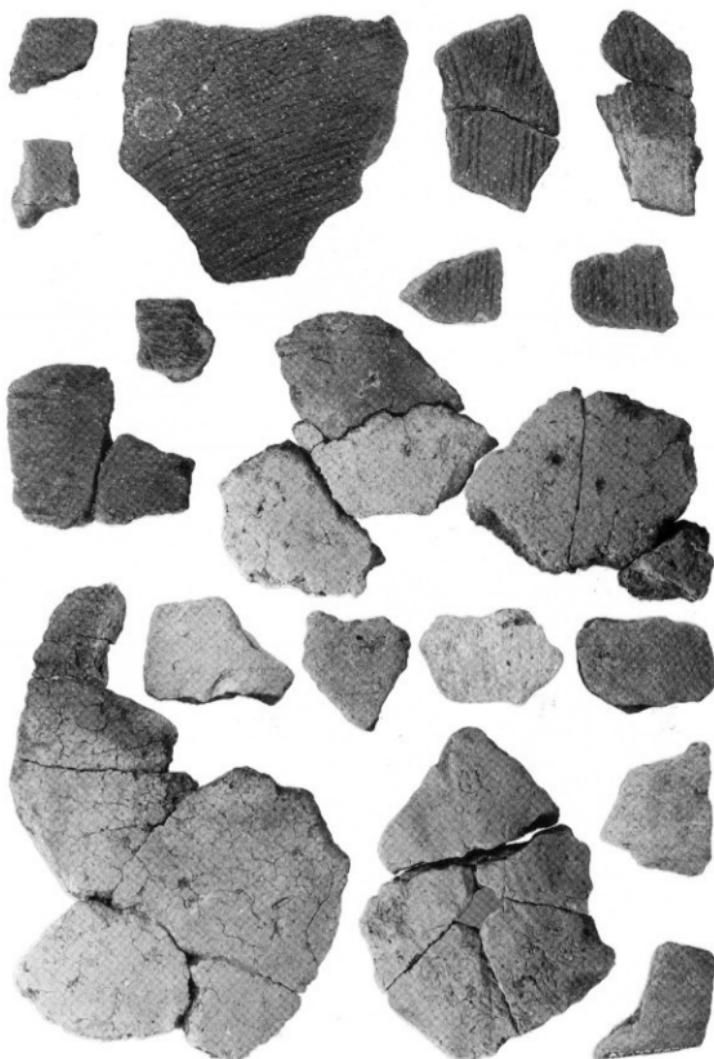
図版6 大平A遺跡第I次調査の出土遺物(3) 土器(3)



図版7 大平A遺跡第I次調査の出土遺物(4) 土器(4)



図版 8 大平 A 遺跡第 I 次調査の出土遺物(5) 土器(5)



図版9 大平A遺跡第I次調査の出土遺物(6) 土器(6)



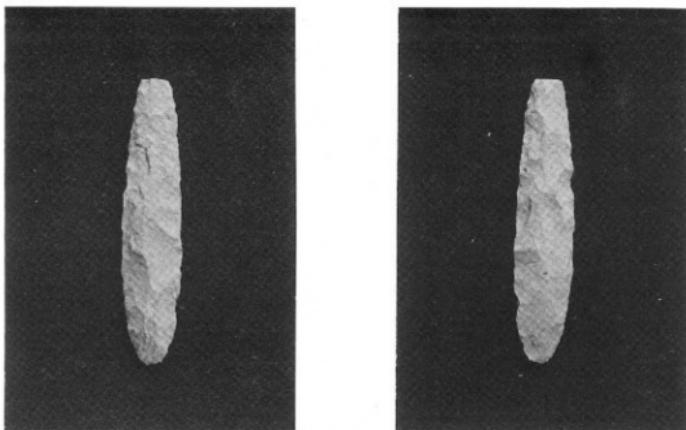
図版10 大平A遺跡第I次調査の出土遺物(7) 土器(7)



図版11 大平A遺跡第I次調査の出土遺物(8) 土器(8)



図版12 大平A遺跡第Ⅰ次調査の出土遺物(9) 石器(1)



石槍・石鎌・石核

図版13 大平A遺跡第I次調査の出土遺物(10) 石器(2)



局部磨製石斧・打製石斧・定型磨製石斧・磨製石斧・磨石

図版14 大平A遺跡第II次調査区の近景



近 景（西方より）



調査状況（東側より）

図版15 大平A遺跡第II次調査区の土層



大平A遺跡第II次調査における層序



調査中の町田 洋先生

図版16 大平A遺跡第II次調査の遺構（1）



第1号住居址（東側より）—1



第1号住居址（西側より）—2

図版17 大平A遺跡第II次調査の遺構（2）

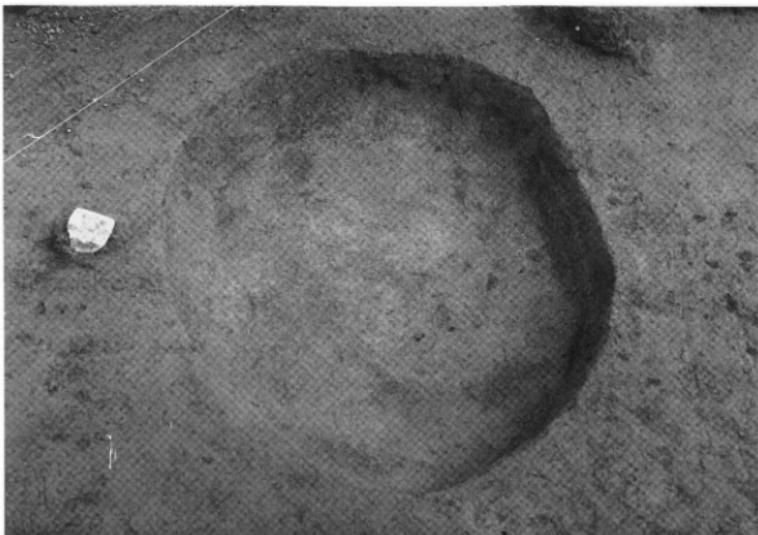


第3号集石土坑-1

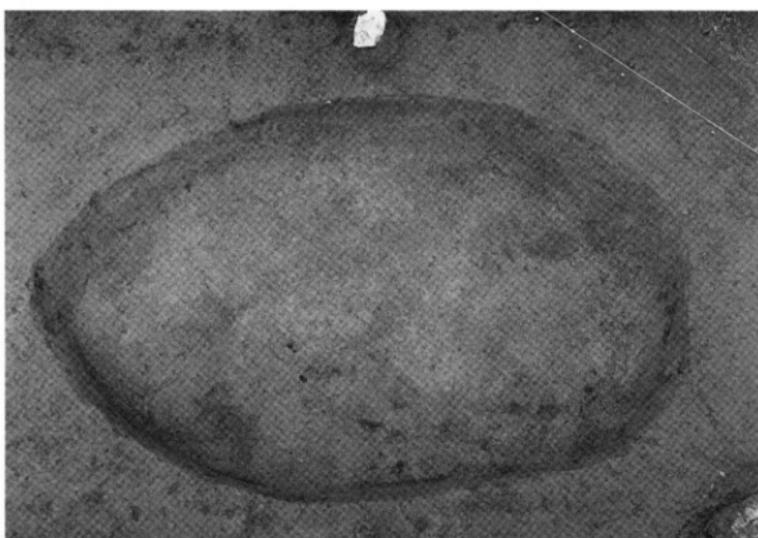


第3号集石土坑-2

図版18 大平A遺跡第II次調査の遺構（3）



第8号集石土坑-1



第8号集石土坑-2

図版19 大平A遺跡第II次調査の遺構 (4)



集石土坑群（南東側より）—1



集石土坑群全景（東側より）—2

図版20 大平A遺跡第II次調査の遺物出土状態（1）



山形押型文土器の出土状態



無文土器の出土状態

図版21 大平A遺跡第II次調査の遺物出土状態（2）

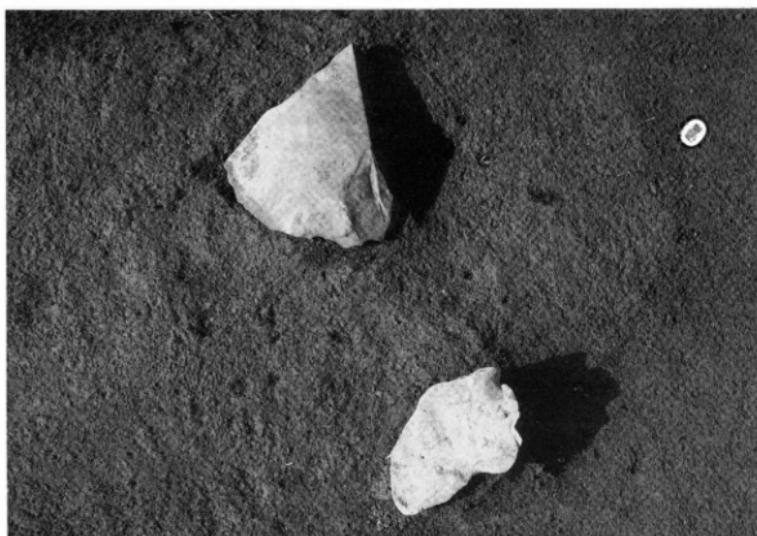


石槍の出土状態



スクレーバーの出土状態

図版22 大平A遺跡第II次調査の遺物出土状態（3）



研器の出土状態



磨石の出土状態

図版23 大平A遺跡第II次調査の出土遺物(1) 土器(1)



山形押型文土器・撚糸文土器・その他



無文土器

図版24 大平A遺跡第II次調査の出土遺物(2) 土器(2)



山形押型文土器



諸機 b 式土器の出土状態



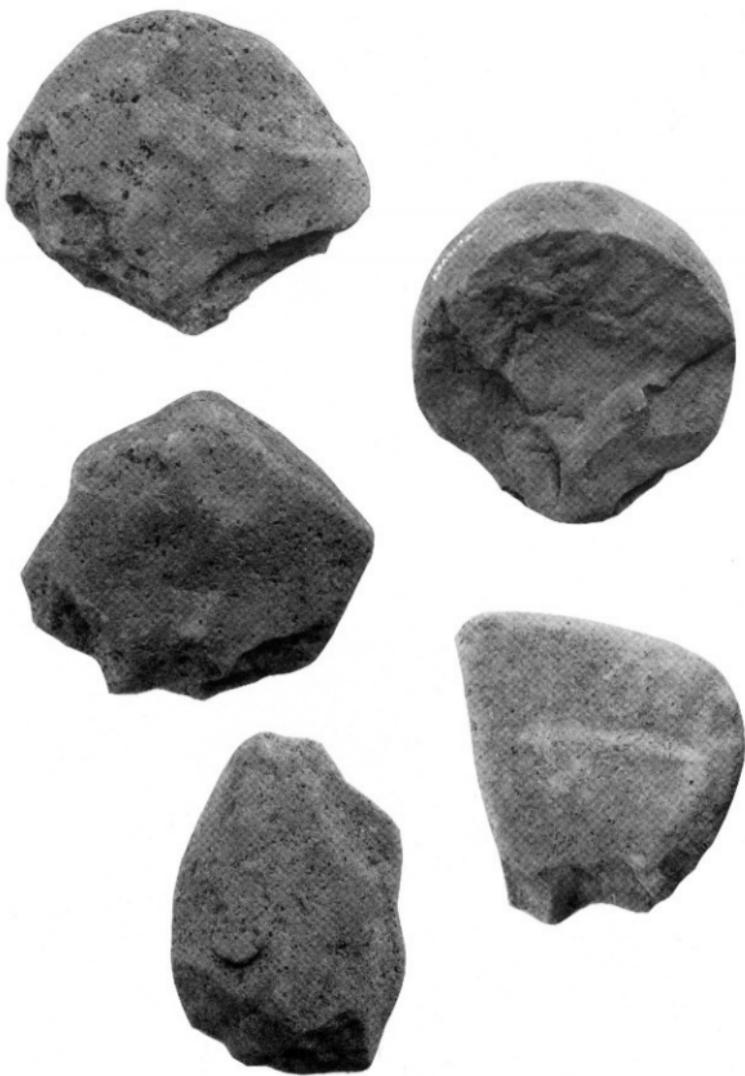
諸機 b 式土器

図版25 大平A遺跡第II次調査の出土遺物(3) 石器(1)



石槍・スクレーバー・石錺・磨石

図版26 大平A遺跡第II次調査の出土遺物(4) 石器(2)



図版27 大平B遺跡の遠景と近景



遠 景（西方より）



近 景（東方より）

図版28 大平B遺跡の調査風景と遺構（1）



調査風景



円形土壌（A群・確認された状態）-1

図版29 大平B遺跡の遺構（2）



円形土壙（A群・南方より）—2



円形土壙（B群・南方より）—3

図版30 大平B遺跡の遺構（3）

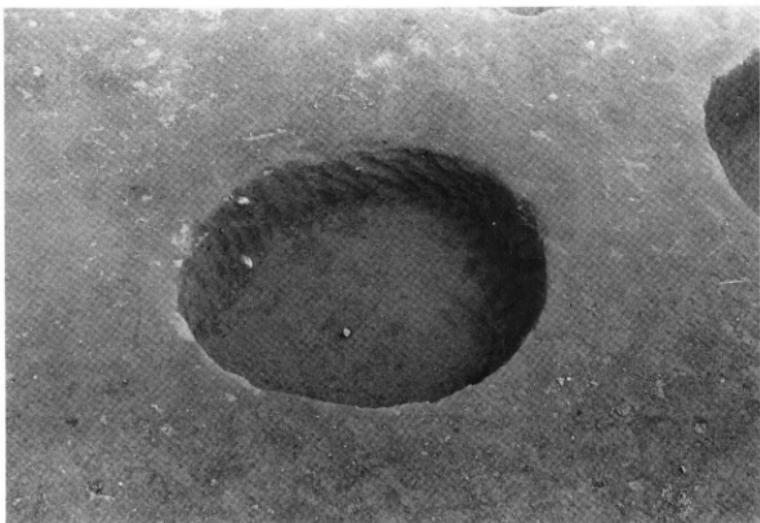


円形土壙（C群・確認された状態）—4

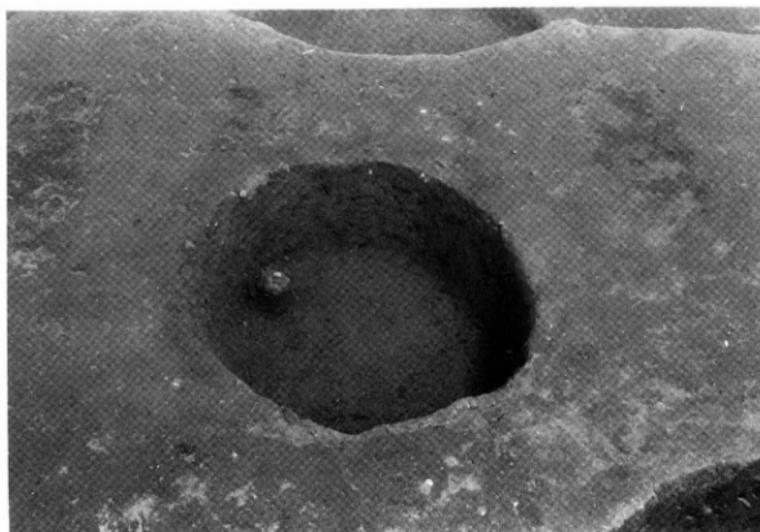


円形土壙（C群・南方より）—5

図版31 大平B遺跡の遺構（4）

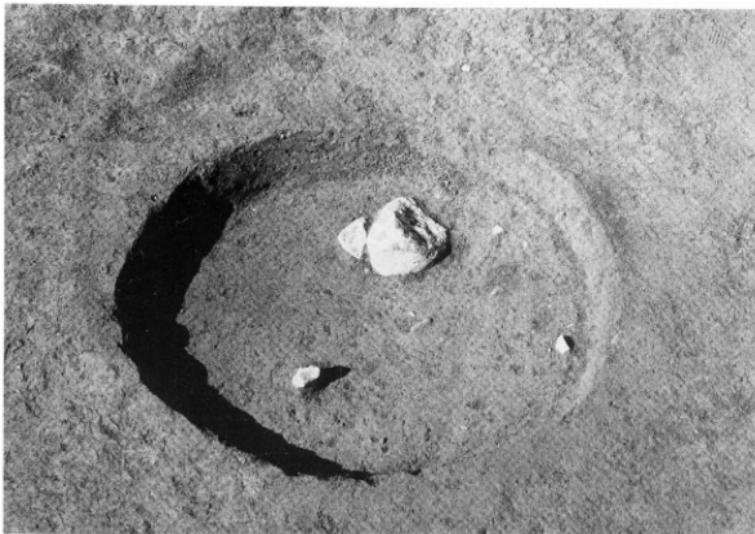


第19号円形土壙（B群・西方より）

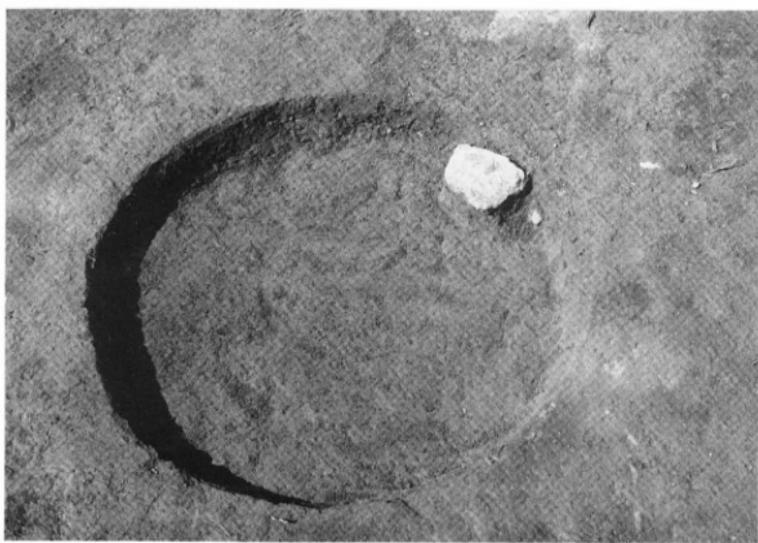


第21号円形土壙（B群・西方より）

図版32 大平B遺跡の遺構（5）



第28号円形土壙（C群・西方より）

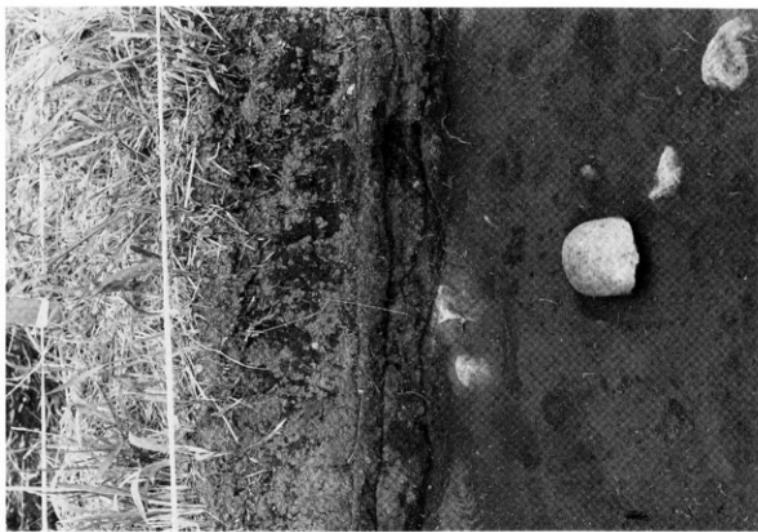


第30号円形土壙（C群・西方より）

図版33 大平B遺跡の土層と出土遺物

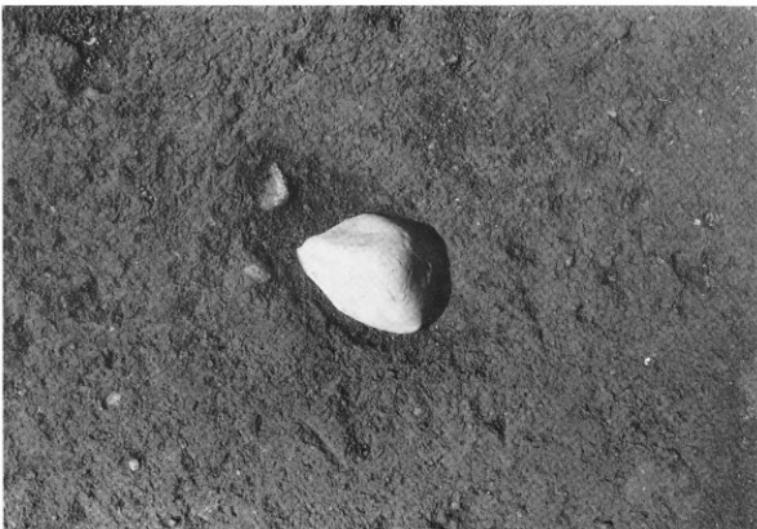


土層の状態



土層と遺物(礫器)の出土状態(Iトレンチ)

図版34 大平B遺跡の遺物出土状態（1）

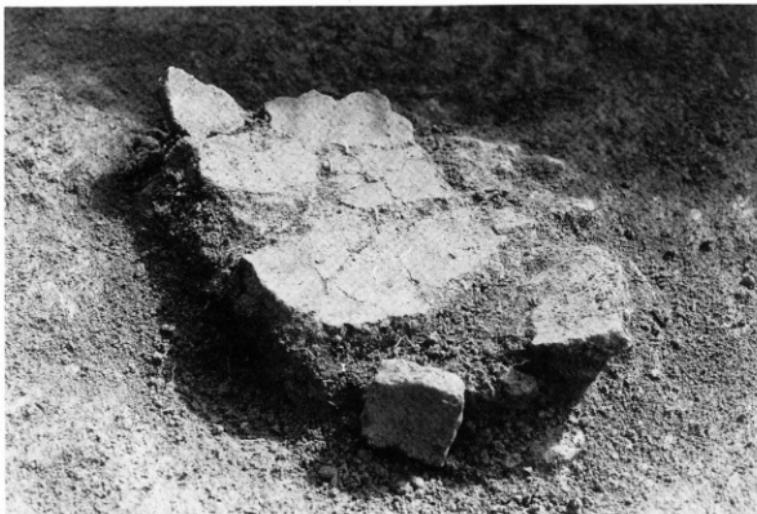


研器の出土状態（M-6グリッド）



磨石の出土状態（E-6グリッド）

図版35 大平B遺跡の遺物出土状態（2）

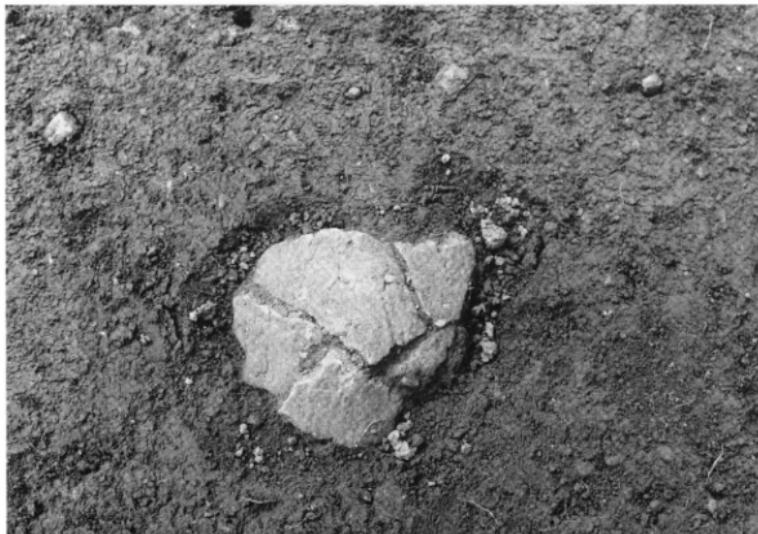


土器の出土状態（0-4グリッド）-1



土器の出土状態（N-6グリッド）-2

図版36 大平B遺跡の遺物出土状態（3）

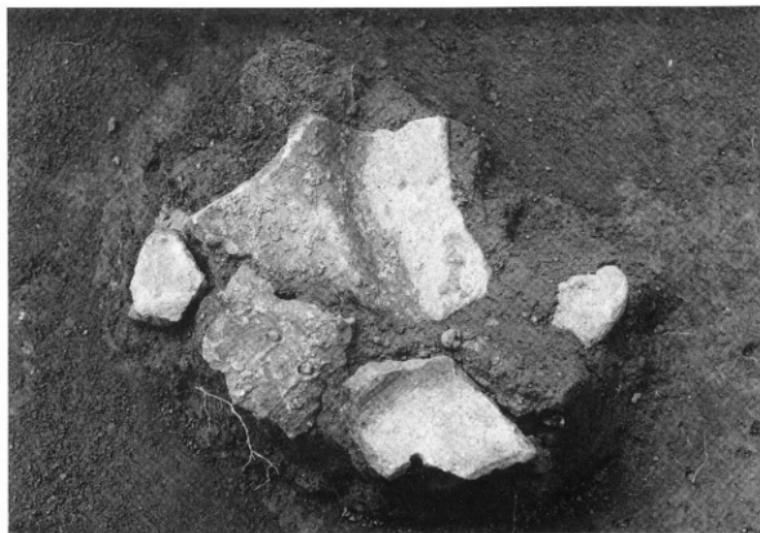


土器の出土状態（E-4グリッド）—3



土器の出土状態（Hトレンチ）—4

図版37 大平B遺跡の遺物出土状態（4）



土器の出土状態（E-3グリッド）—5

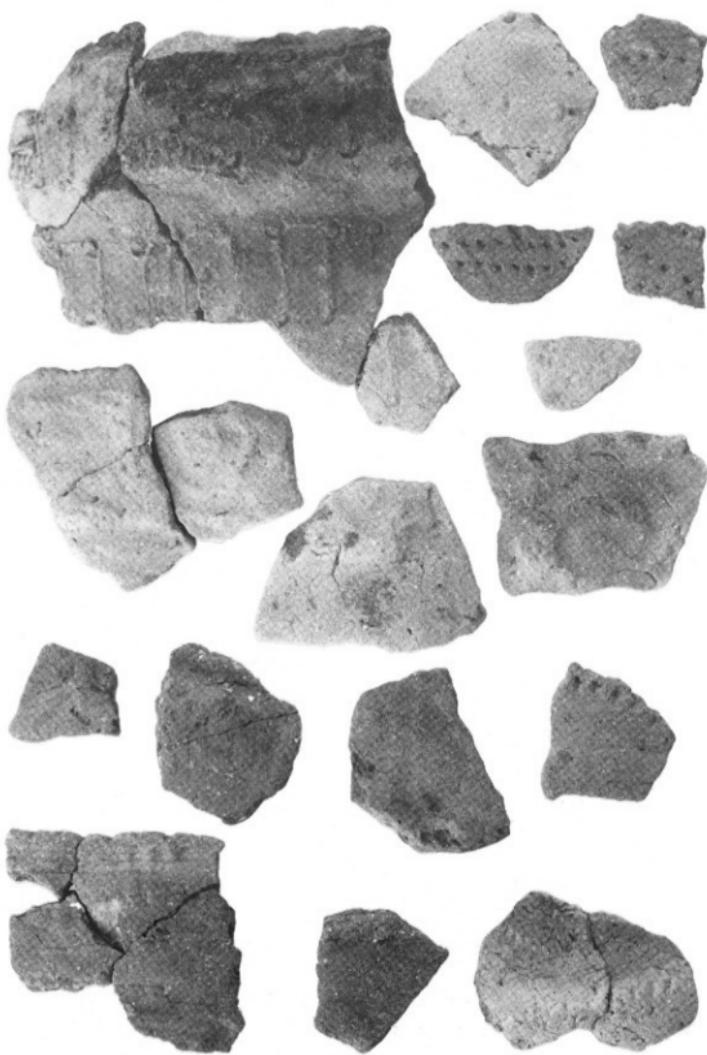


土器の出土状態（F-4グリッド）—6

図版38 大平B遺跡の出土遺物(1) 土器(1)



図版39 大平B遺跡の出土遺物(2) 土器(2)



図版40 大平B遺跡の出土遺物(3) 土器(3)



図版41 大平B遺跡の出土遺物(4) 土器(4)



図版42 大平B遺跡の出土遺物(5) 土器(5)



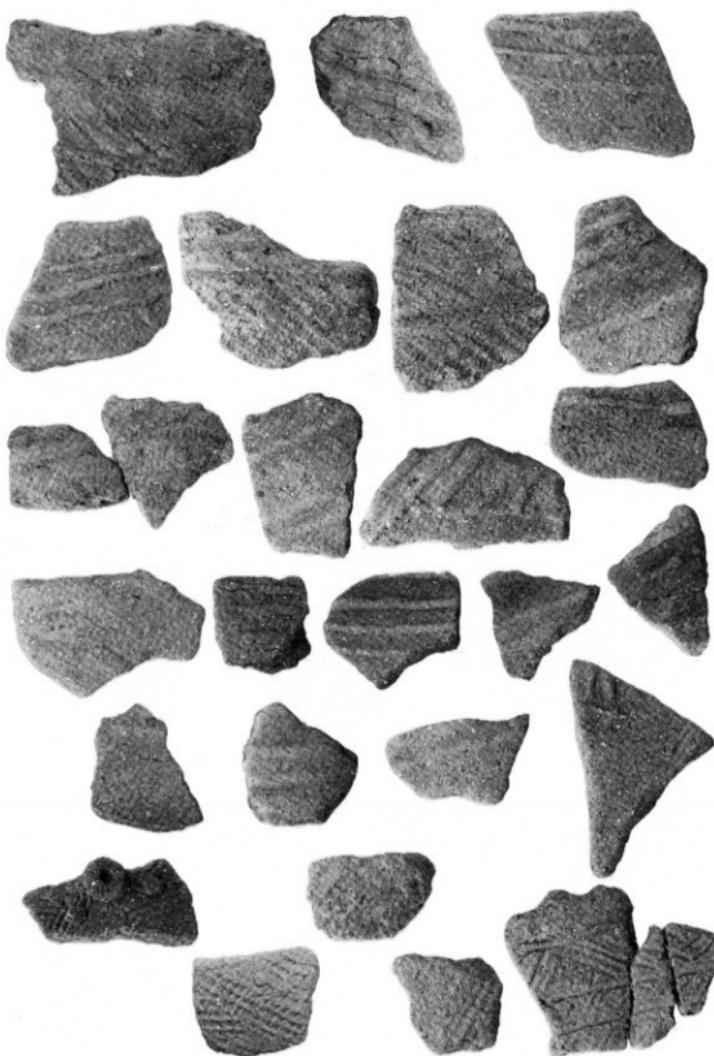
撲糸文土器

諸機b式に比定される土器

図版43 大平B遺跡の出土遺物(6) 土器(6)



図版44 大平B遺跡の出土遺物(7) 土器(7)



図版45 大平B遺跡の出土遺物(8) 土器(8)



図版46 大平B遺跡の出土遺物(9) 土器(9)



図版47 大平B遺跡の出土遺物(10) 石器(1)

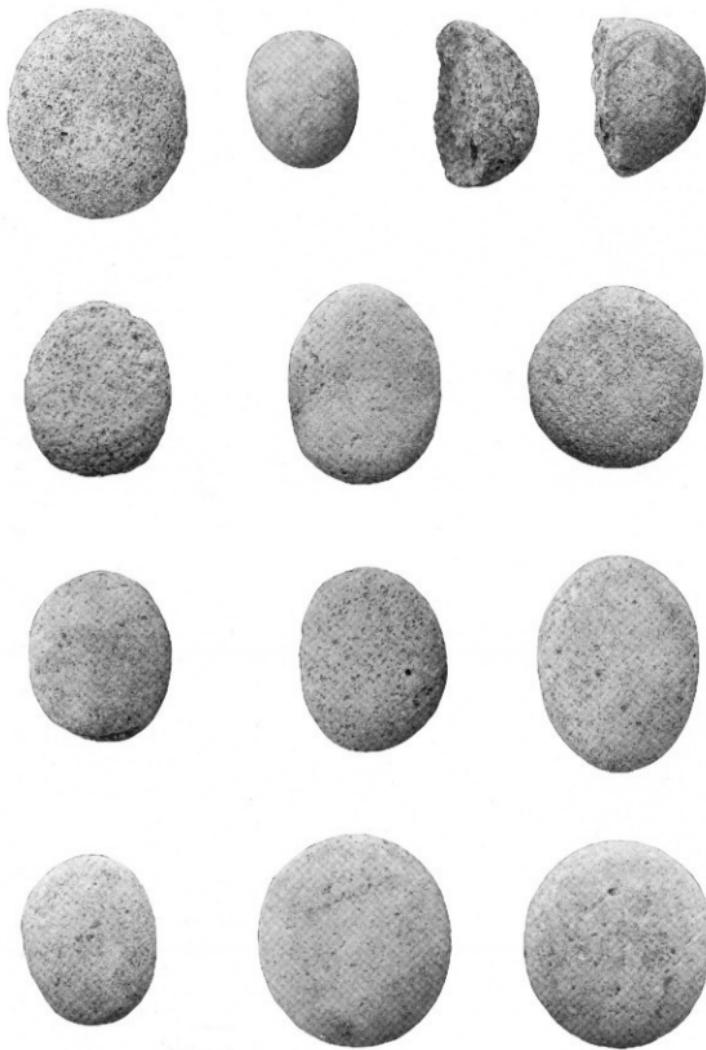


図版48 大平B遺跡の出土遺物(11) 石器(2)



磨石

図版49 大平B遺跡の出土遺物(12) 石器(3)



磨石

図版50 大平C遺跡第I次調査区の遠景と近景

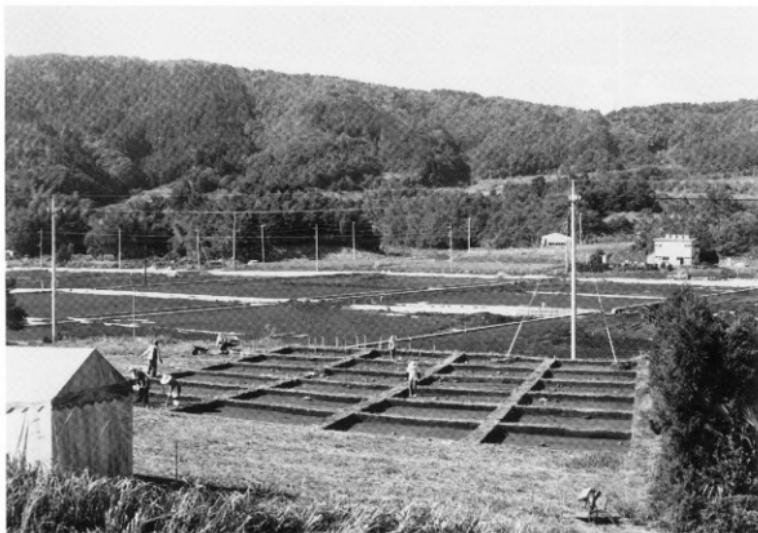


遠 景 (西方より)

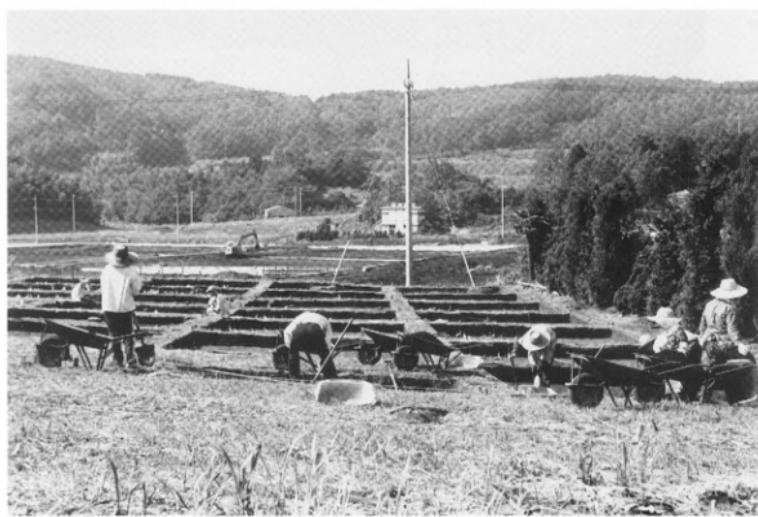


近 景 (東南方より)ー1

図版51 大平C遺跡第I次調査区の近景と調査風景



近 景 (東方より)一2



調査風景

図版52 大平C遺跡第I次調査の遺構（1）

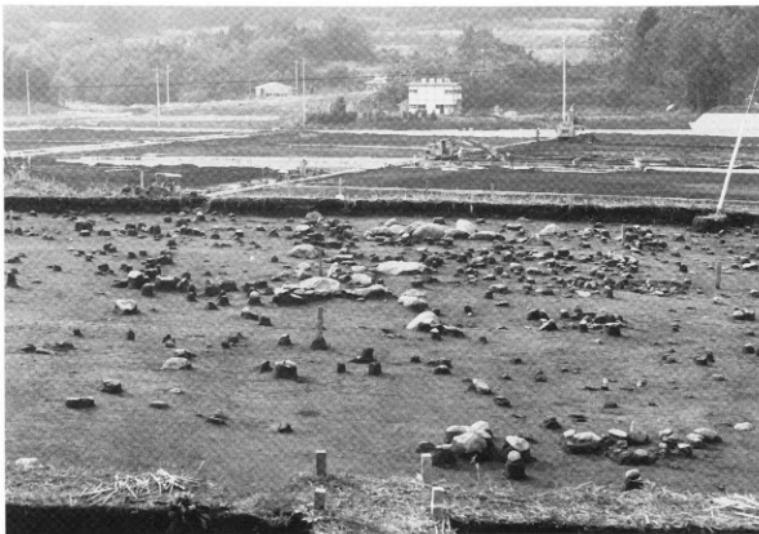


配石遺構（中期・確認された状態・南方より）



配石遺構と円形土壙（歴史時代・南上方より）

図版53 大平C遺跡第I次調査の遺構（2）



配石遺構（東方より）



第1号配石遺構（西方より）

図版54 大平C遺跡第I次調査の遺構（3）



第2号配石遺構と第1号土壙（西方より）—1

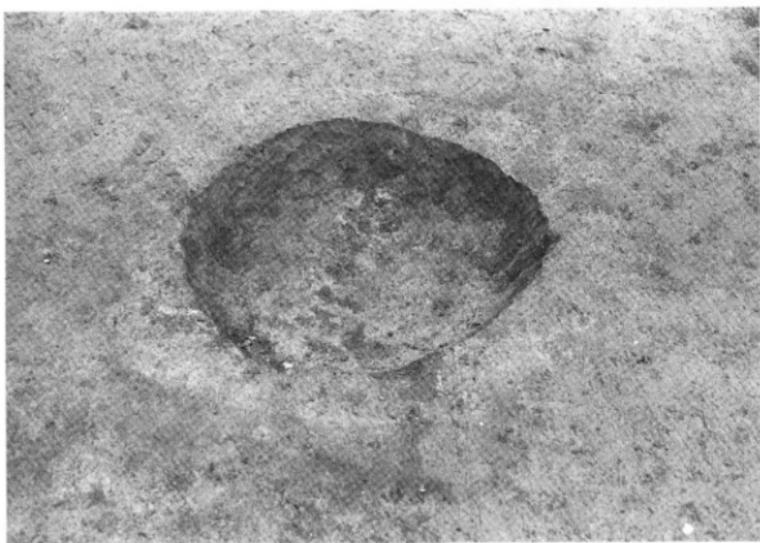


第2号配石遺構と第1号土壙（南方より）—2

図版55 大平C遺跡第I次調査の遺構（4）



第18号集石土坑（確認された状態）—1

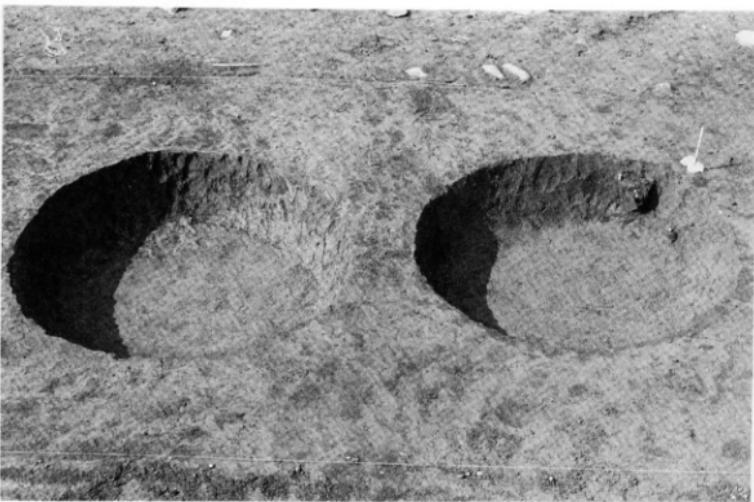


第18号集石土坑（完掘後の状態）—2

図版56 大平C遺跡第I次調査の遺構（5）



第29、30号集石土坑（礫のつまつた状態）—1



第29、30号集石土坑（完掘後の状態）—2

図版57 大平C遺跡第I次調査の遺構（6）



集石土坑（A群・完掘後）と第3号住居址



集石土坑（A群・完掘後）部分一

図版58 大平C遺跡第I次調査の遺構（7）



集石土坑（A群・完掘後）部分一2



集石土坑（A群・完掘後）部分一3

図版59 大平C遺跡第I次調査の遺構 (8)



炉穴群（早期）

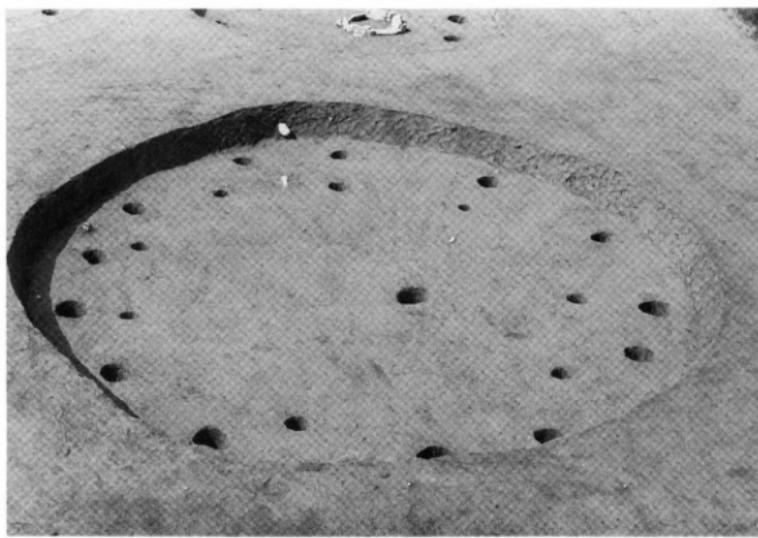


集石炉（中期）

図版60 大平C遺跡第I次調査の遺構（9）

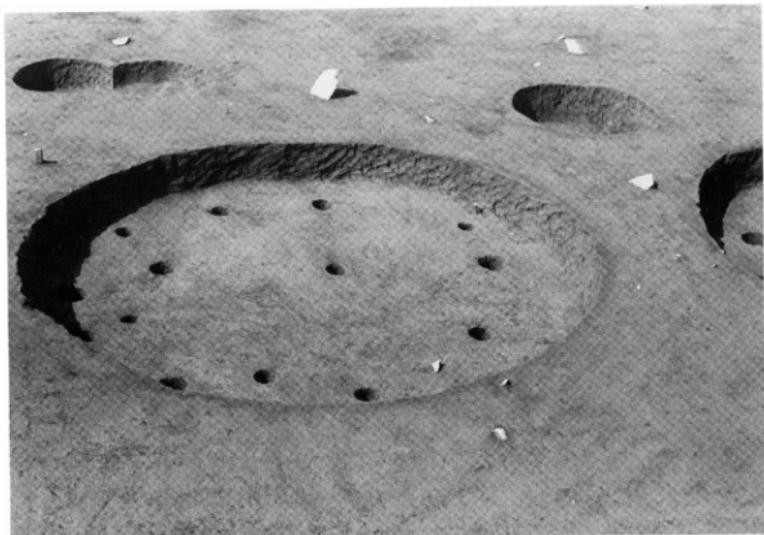


発見された遺構（全体）



第2号住居址（早期・東方より）

図版61 大平C遺跡第I次調査の遺構（10）

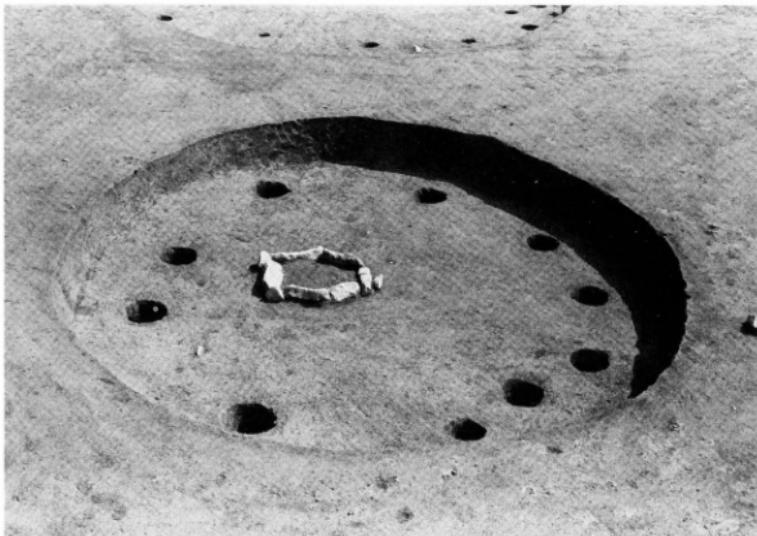


第4号住居址（早期・東方より）

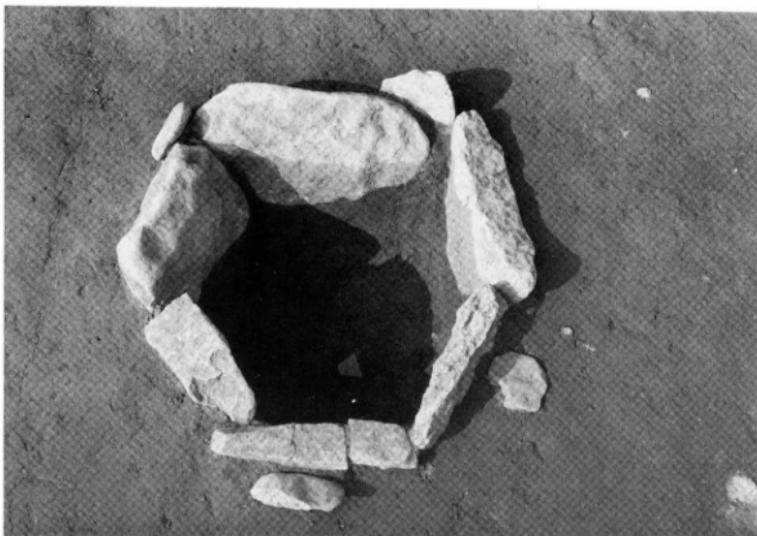


第5号住居址（早期・東方より）

図版62 大平C遺跡第I次調査の遺構（11）



第1号住居址（中期・西方より）



第1号住居址の炉址の状態

図版63 大平C遺跡第I次調査の遺構（12）

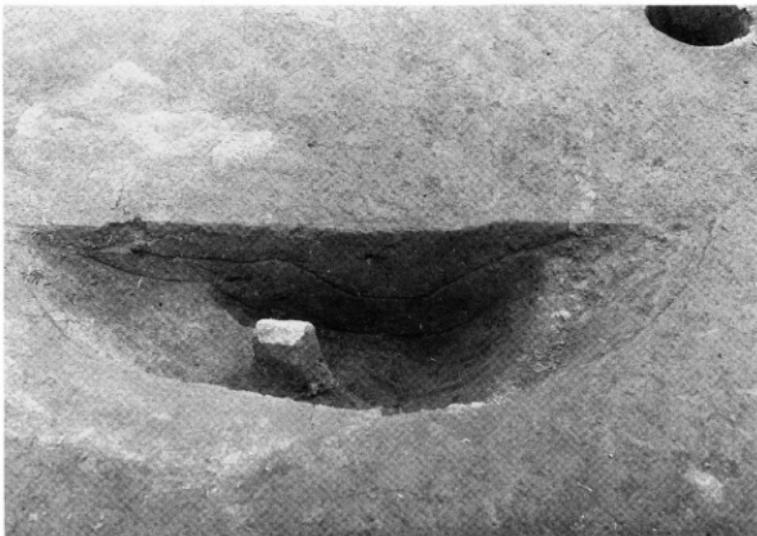


第3号住居址（中期・東方より）

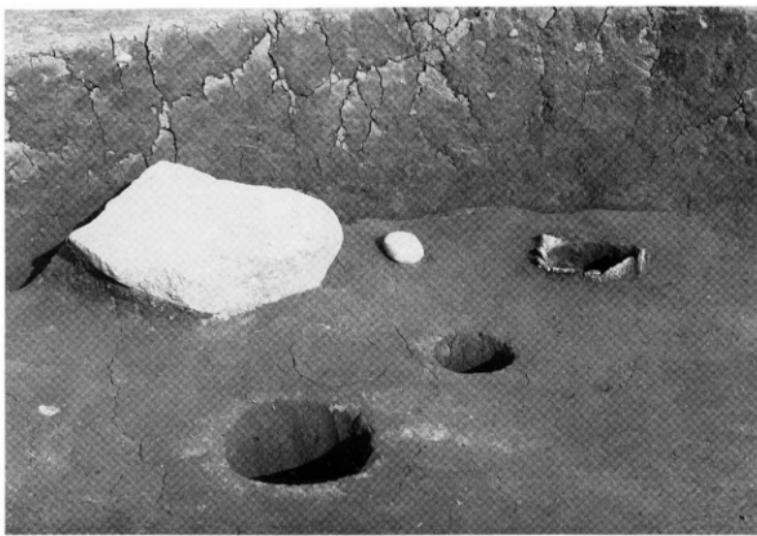


第3号住居址・第1号炉址の状態

図版64 大平C遺跡第I次調査の遺構（13）



第3号住居址・第2号炉址の状態



第3号住居址の埋設土器と石皿・磨石の出土状態

図版65 大平C遺跡第I次調査の遺物出土状態（1）



石槍の出土状態（F-1グリッド）



砾器の出土状態（A-5グリッド）

図版66 大平C遺跡第I次調査の遺物出土状態（2）



局部磨製石斧の出土状態（第3号住居址）—1

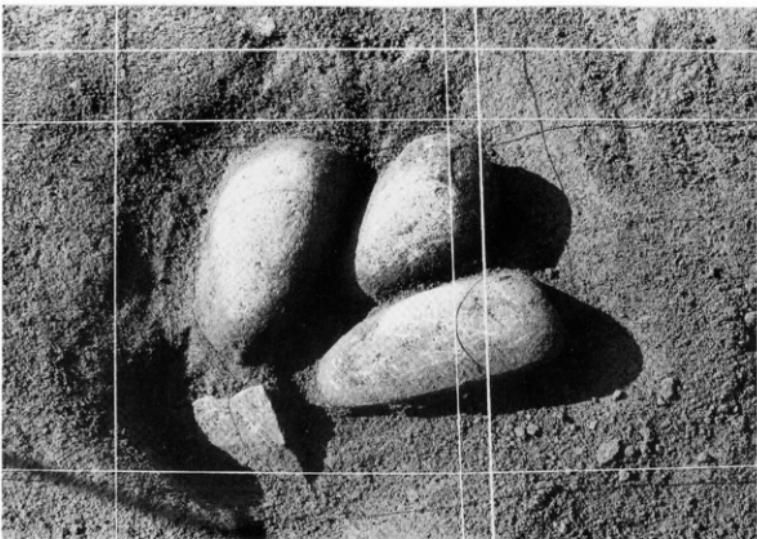


局部磨製石斧の出土状態（A-1グリッド）—2

図版67 大平C遺跡第I次調査の遺物出土状態（3）



磨石の出土状態（第22号集石土坑）—1



磨石の出土状態（第1号集石土坑）—2

図版68 大平C遺跡第I次調査の遺物出土状態（4）



土器の出土状態（第7号集石土坑）—1



土器の出土状態（C-1グリッド）—2

図版69 大平C遺跡第I次調査の遺物出土状態（5）



土器の出土状態（A-3グリッド）-3

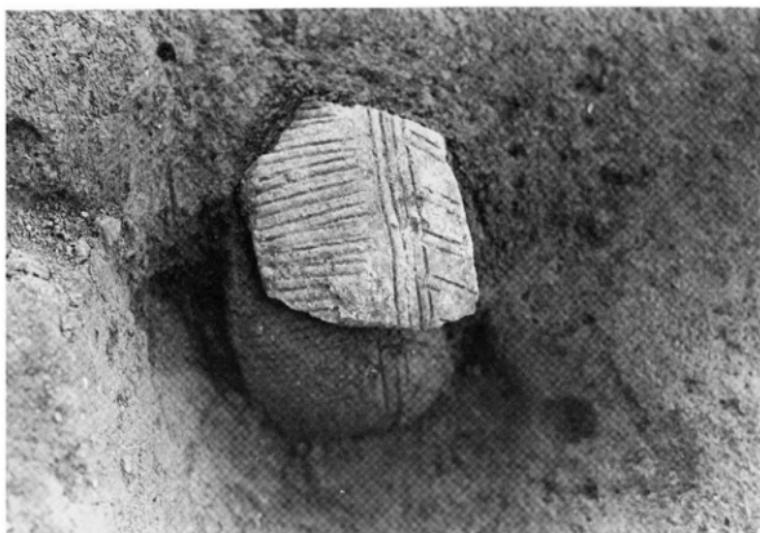


土器の出土状態（第2号配石遺構）-4

図版70 大平C遺跡第I次調査の遺物出土状態（6）

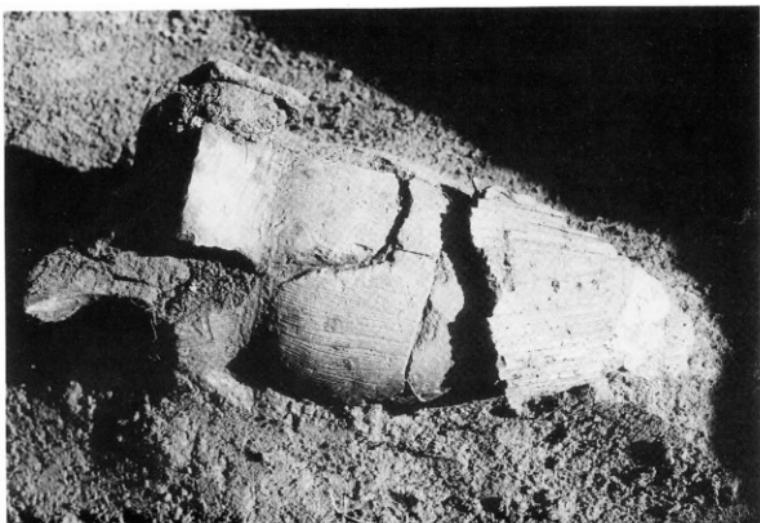


土器の出土状態（B-4グリッド）-5

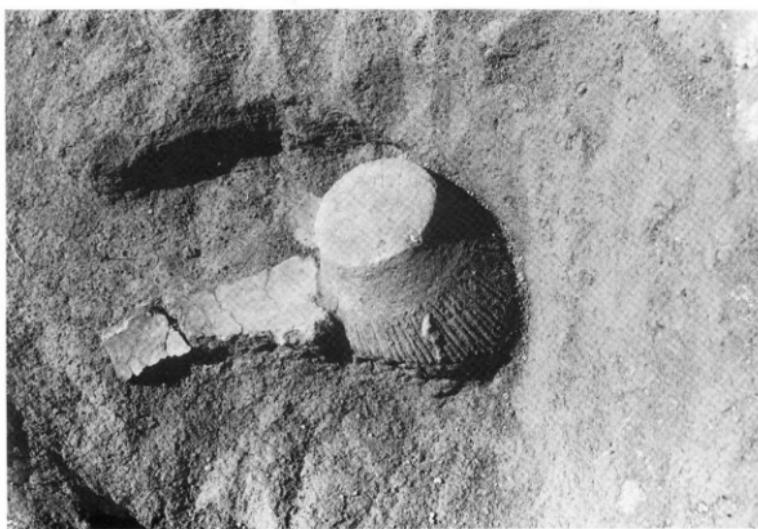


土器の出土状態（D-2グリッド）-6

図版71 大平C遺跡第I次調査の遺物出土状態（7）



土器の出土状態（第3号住居址）—7



土器の出土状態（第3号住居址）—8

図版72 大平C遺跡第I次調査の出土遺物(1) 土器(1)



第1号住居址



第3号住居址



第3号住居址



第3号住居址 A-4グリッド
B-3グリッド C-4グリッド



第3号住居址



第1配石

図版73 大平C遺跡第I次調査の出土遺物(2) 土器(2)



B-4 グリッド、D-2 グリッド

A-3 グリッド



B-4 グリッド、D-2 グリッド

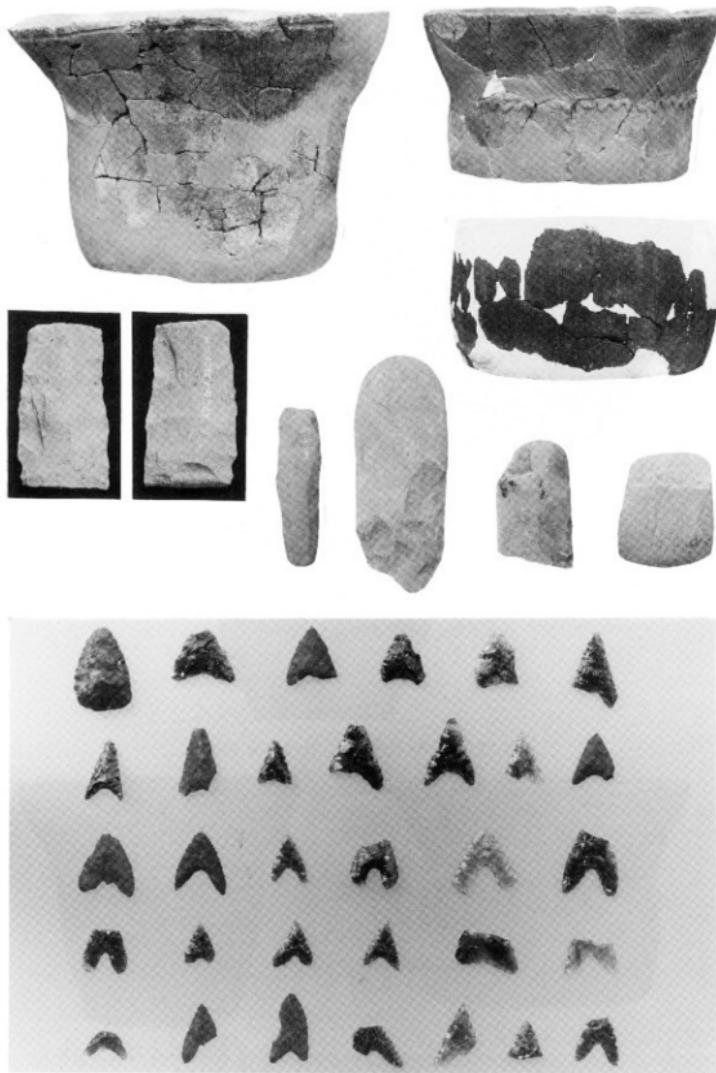


E-2 グリッド



D-2 グリッド、E-1 グリッド
E-2 グリッド

図版74 大平C遺跡第I次調査の出土遺物(3) 土器(3) 石器(1)



石槍・局部磨製石斧・磨製石斧・石鎌

図版75 大平C遺跡第I次調査の出土遺物(4) 石器(2)



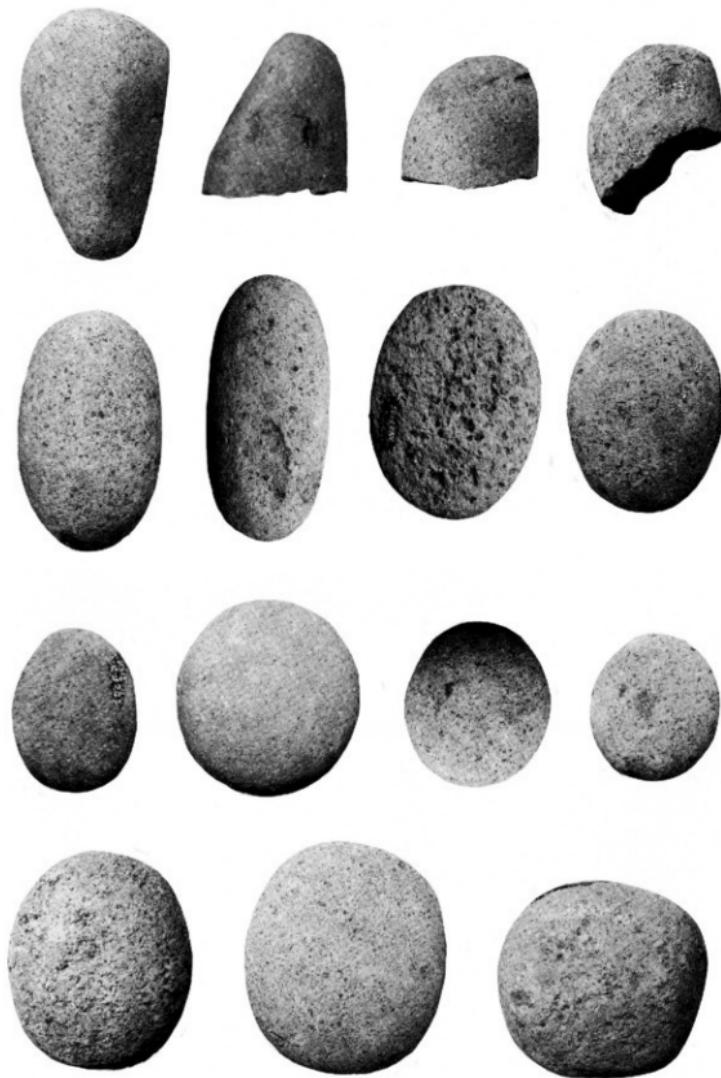
礫器、打製石斧、磨石

図版76 大平C遺跡第I次調査の出土遺物(5) 石器(3)



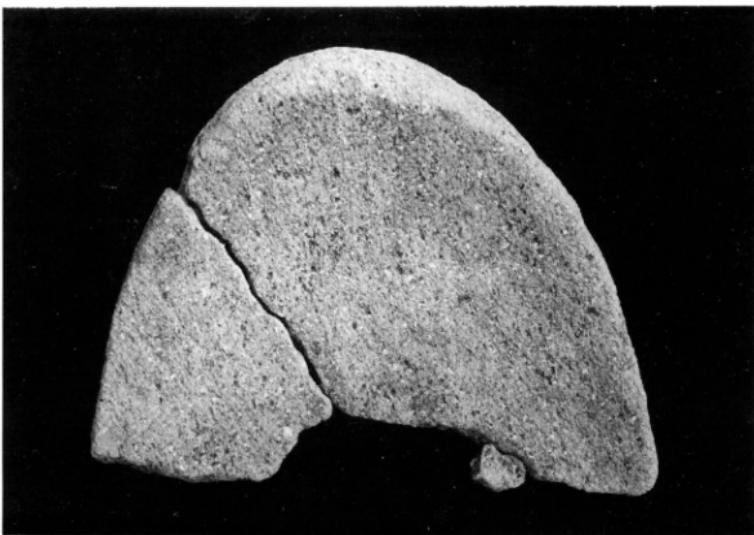
磨石

図版77 大平C遺跡第I次調査の出土遺物(6) 石器(4)

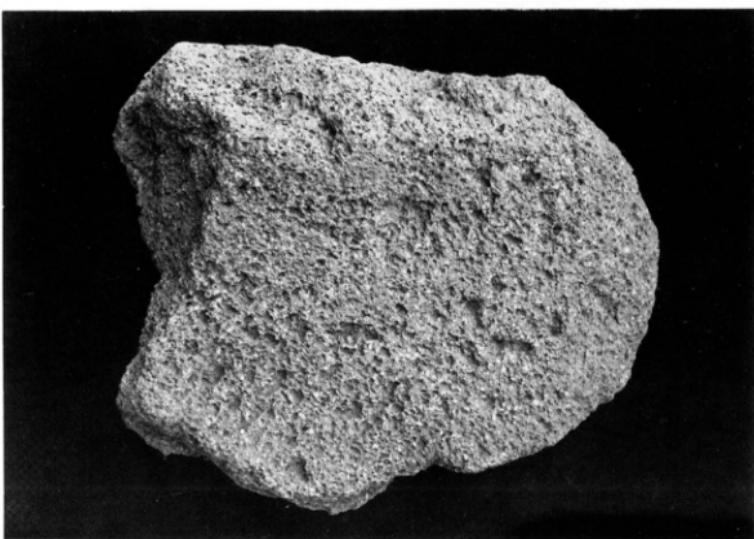


磨石

図版78 大平C遺跡第I次調査の出土遺物(7) 石器(5)



石皿-1



石皿-2

図版79 大平C遺跡第II次調査区の遠景



遠 景（南西方より）—1

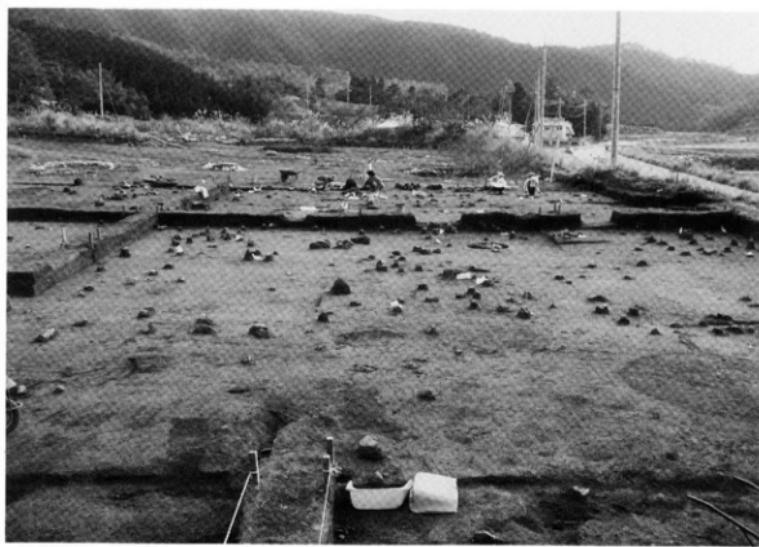


遠 景（西方より）—2

図版80 大平C遺跡第II次調査区の調査風景

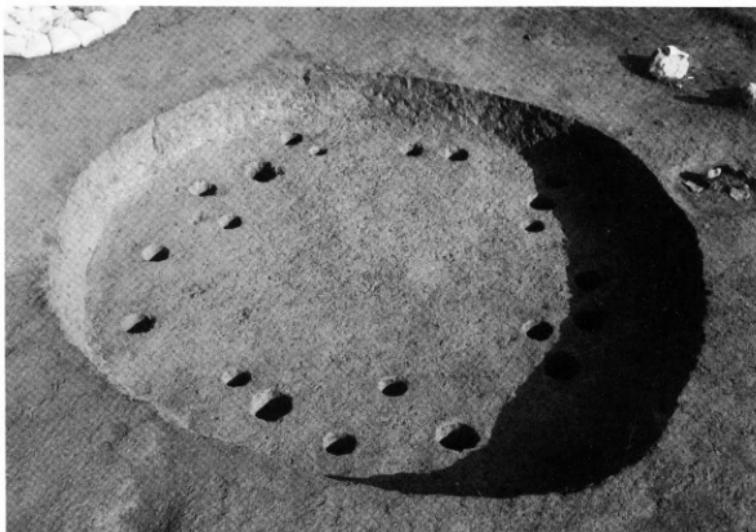


調査状況（北東方より）

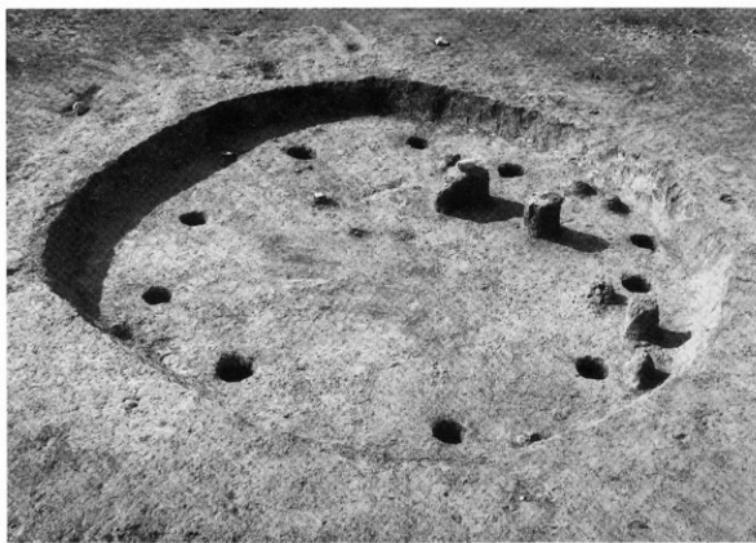


調査風景（北側より）

図版81 大平C遺跡第II次調査の遺構（1）

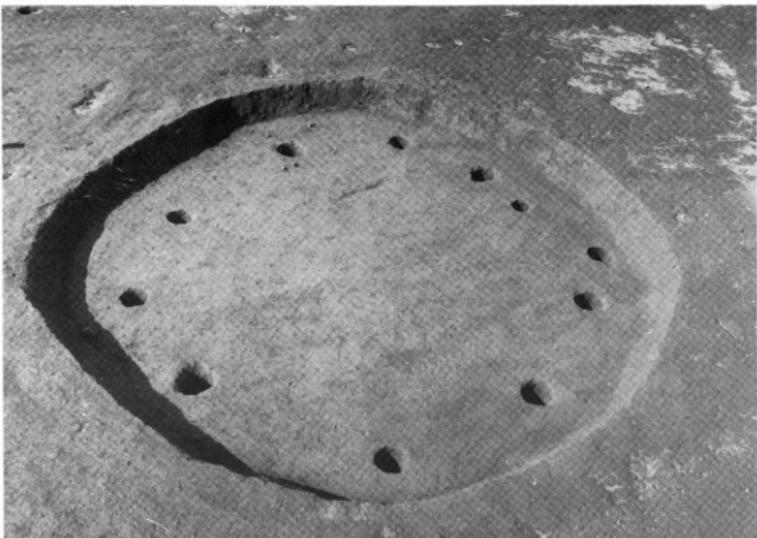


第1号住居址（南側より）



第2号住居址（南側より）—1

図版82 大平C遺跡第II次調査の遺構 (2)

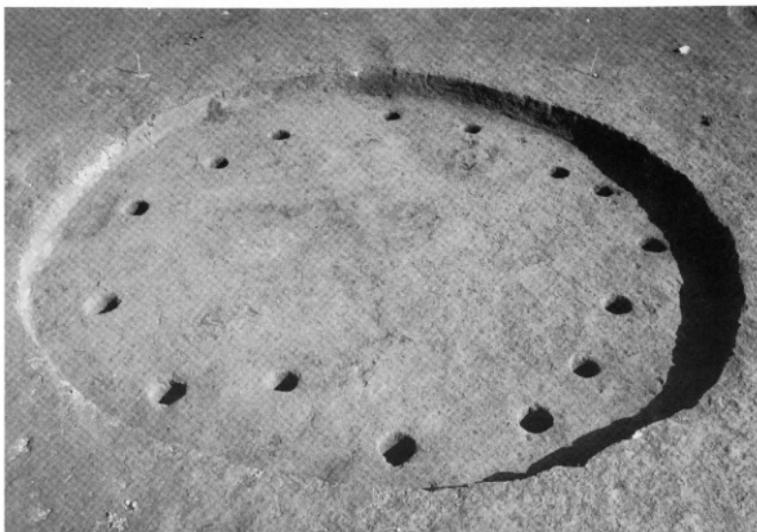


第2号住居址（南側より）—2



第3号住居址（北側より）—1

図版83 大平C遺跡第II次調査の遺構（3）



第3号住居址（北側より）-2

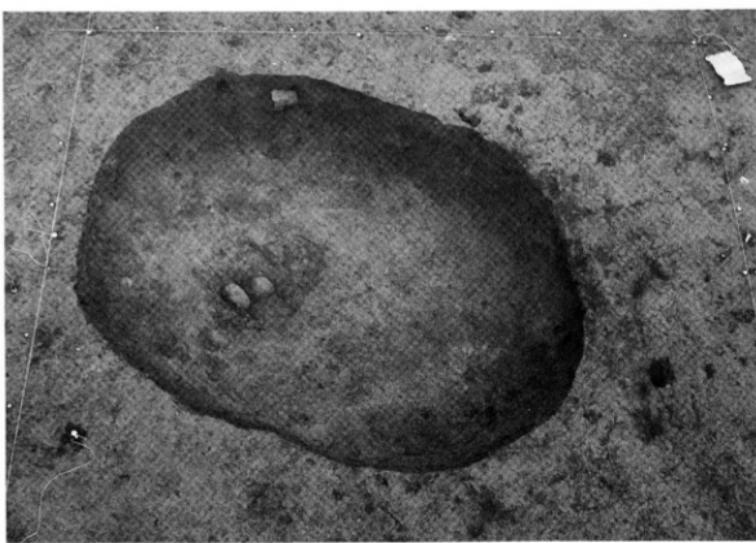


第1・2号集石土坑

図版84 大平C遺跡第II次調査の遺構（4）

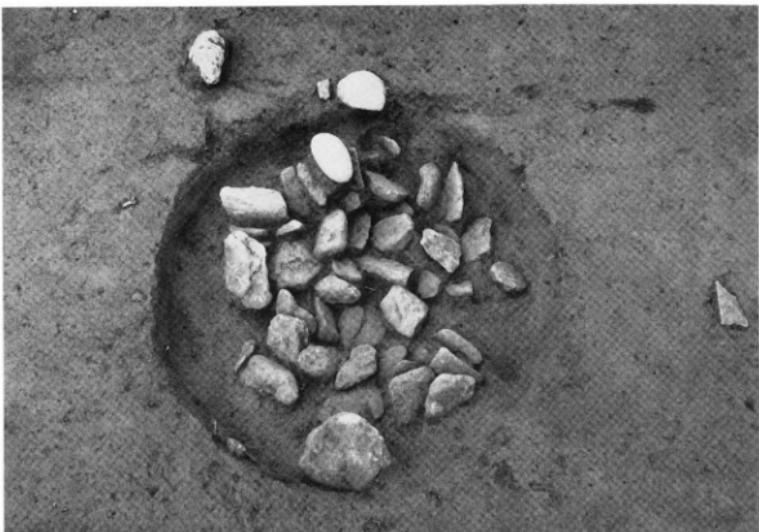


第8号集石土坑—1

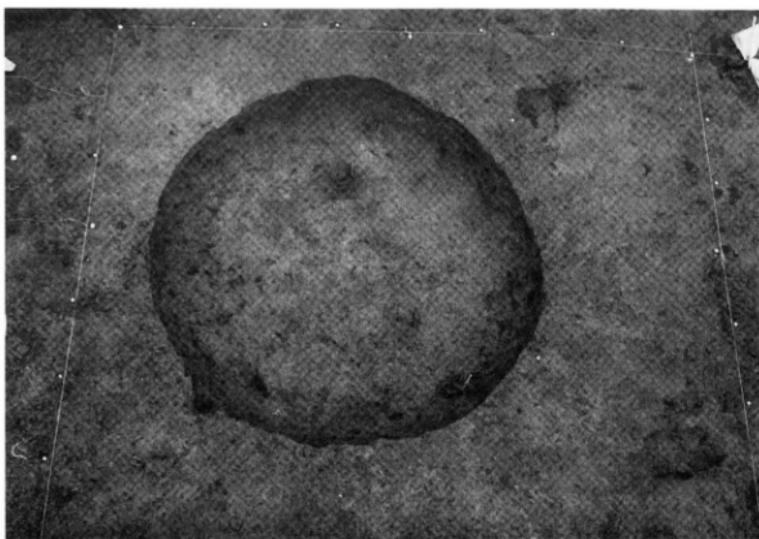


第8号集石土坑—2

図版85 大平C遺跡第II次調査の遺構（5）



第9号集石土坑—1



第9号集石土坑—2

図版86 大平C遺跡第II次調査の遺構(6)と遺構内出土遺物



第12号集石土坑

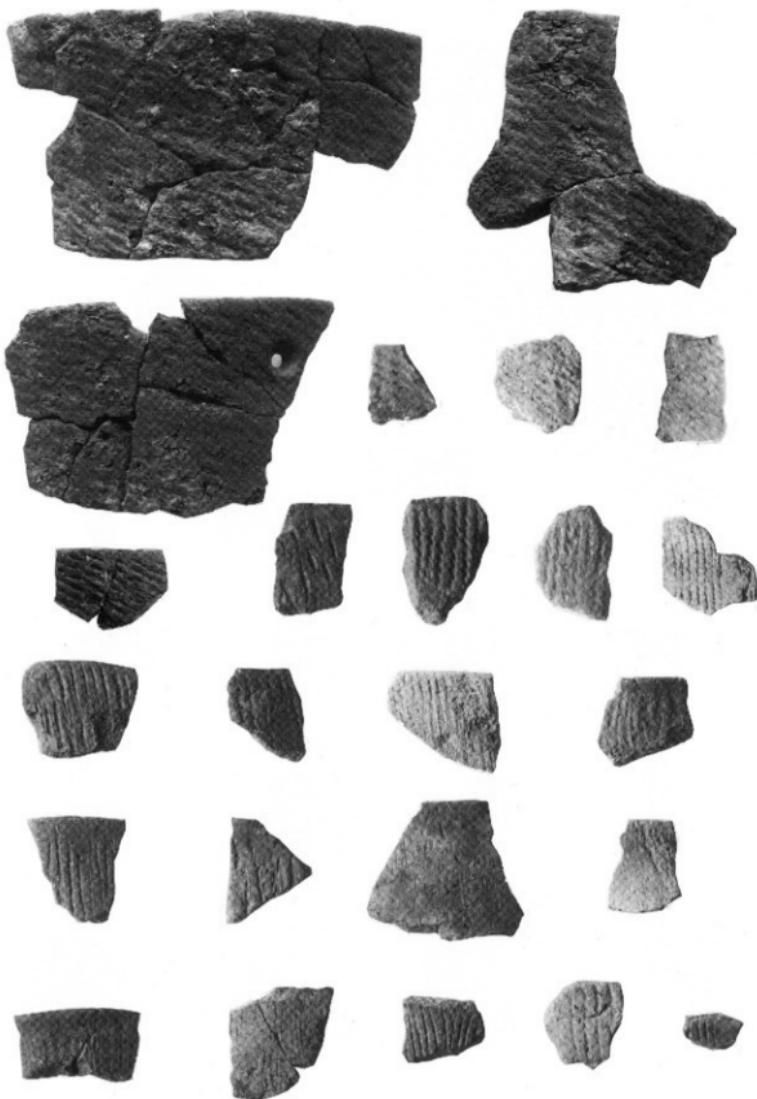


第2号住居址(1~6) 第3号住居址(7~20)

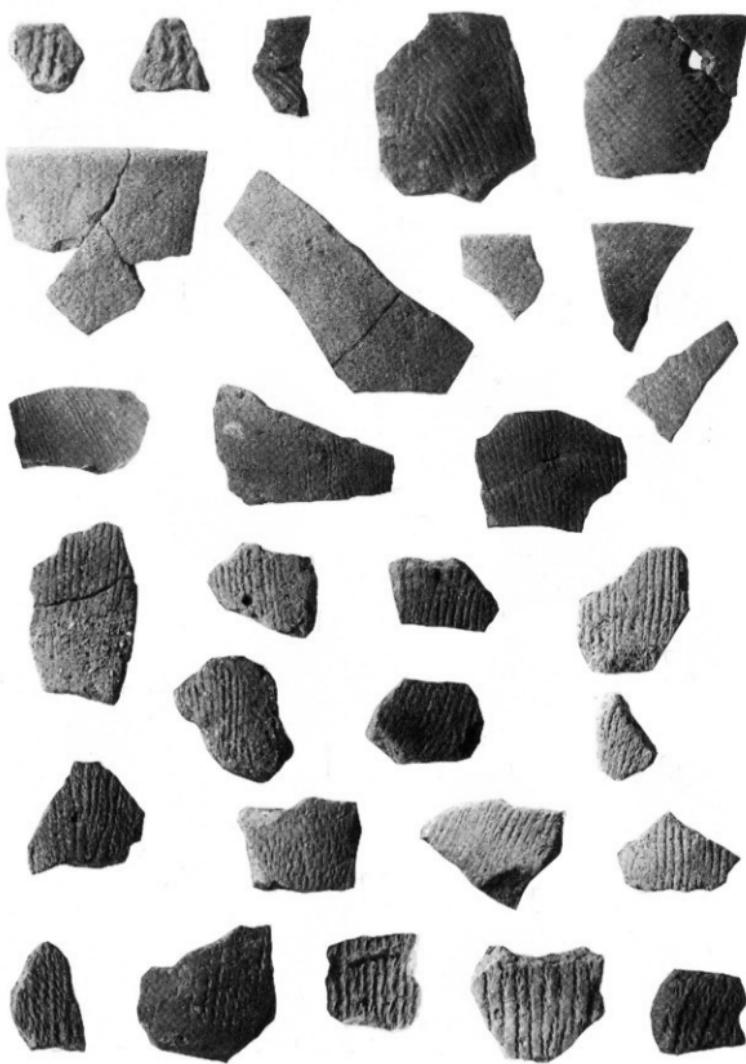
図版87 大平C遺跡第II次調査の出土遺物(1) 土器(1)



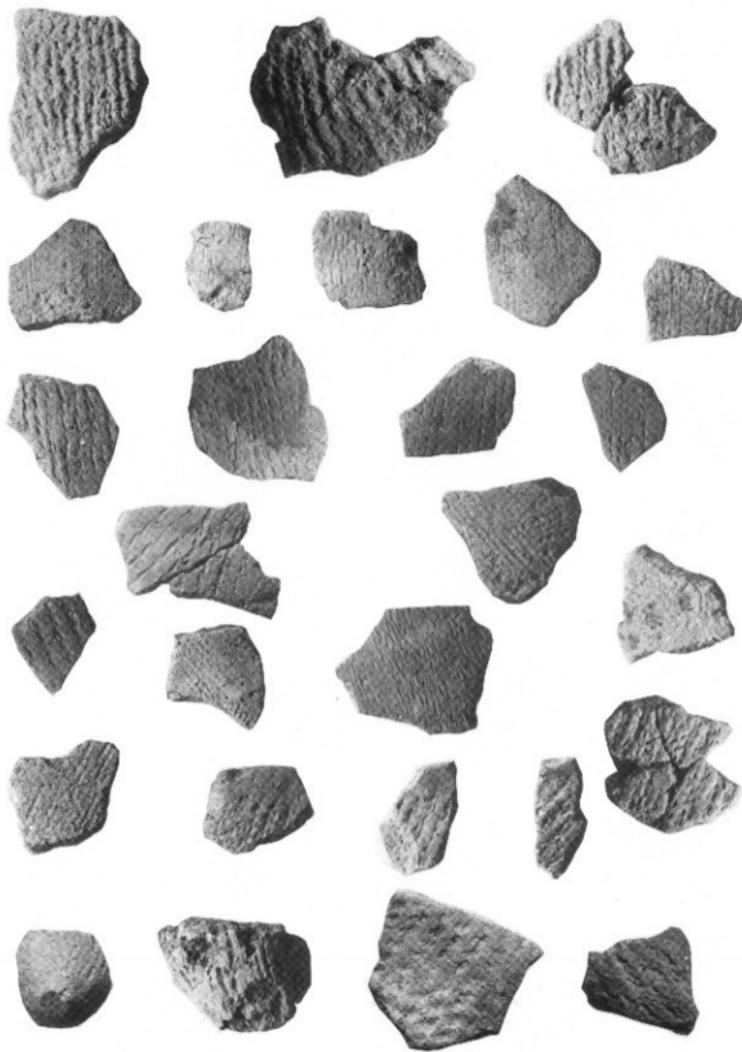
図版88 大平C遺跡第II次調査の出土遺物(2) 土器(2)



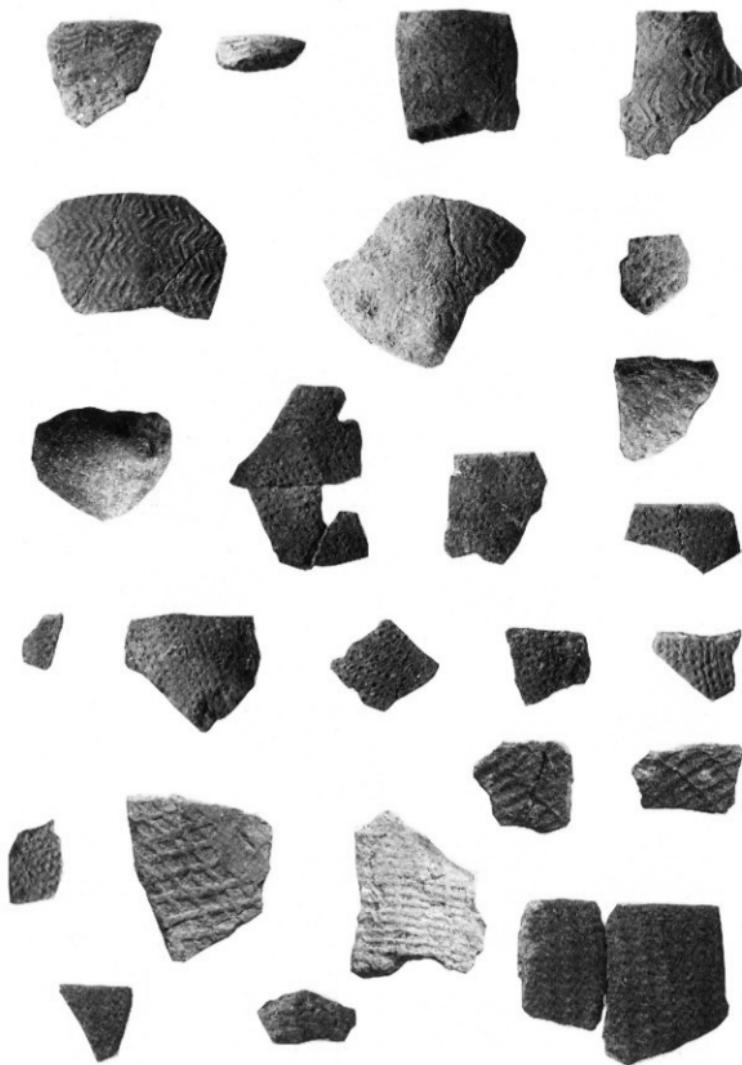
図版89 大平C遺跡第II次調査の出土遺物(3) 土器(3)



図版90 大平C遺跡第II次調査の出土遺物(4) 土器(4)



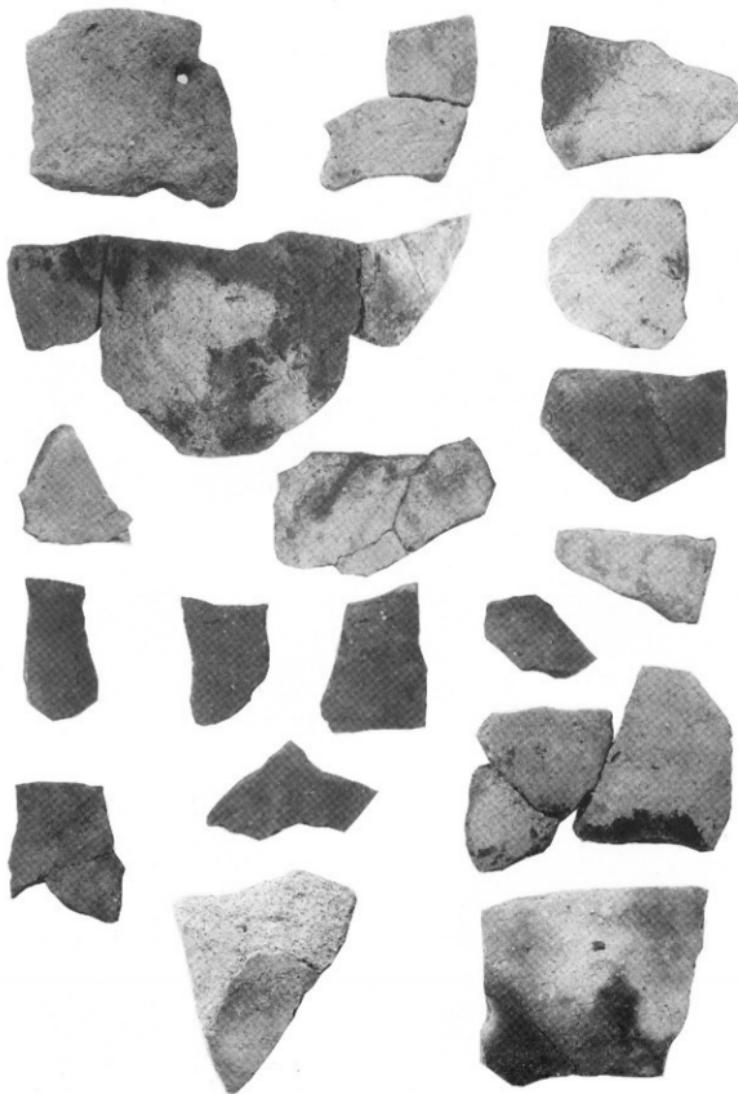
図版91 大平C遺跡第II次調査の出土遺物(5) 土器(5)



図版92 大平C遺跡第II次調査の出土遺物(6) 土器(6)



図版93 大平C 遺跡第II次調査の出土遺物(7) 土器(7)



図版94 大平C遺跡第II次調査の出土遺物(8) 土器(8)



図版95 大平C遺跡第II次調査の出土遺物(9) 土器(9)

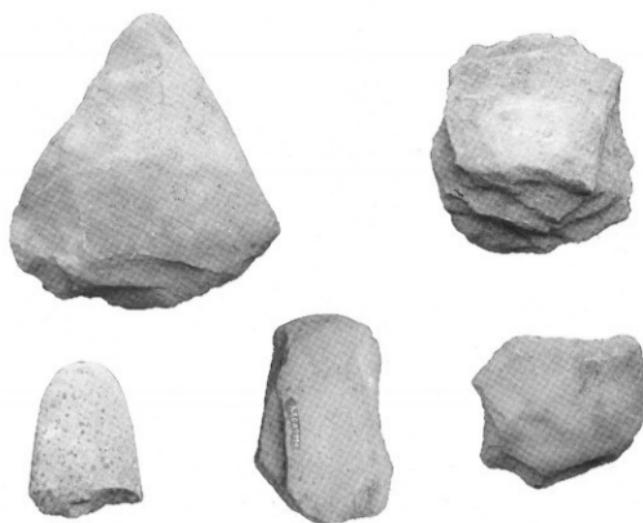
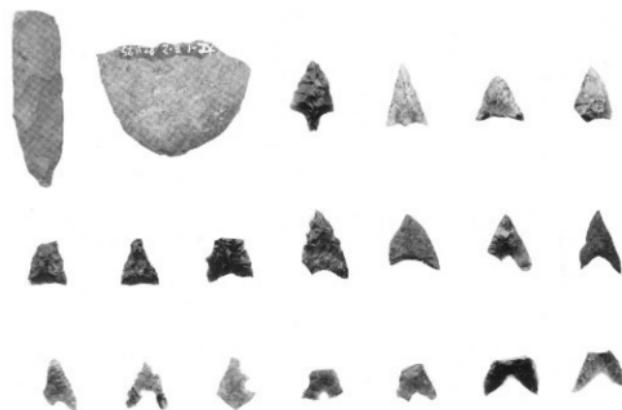


図版96 大平C 遺跡第II 次調査の出土遺物(10) 土器(10)



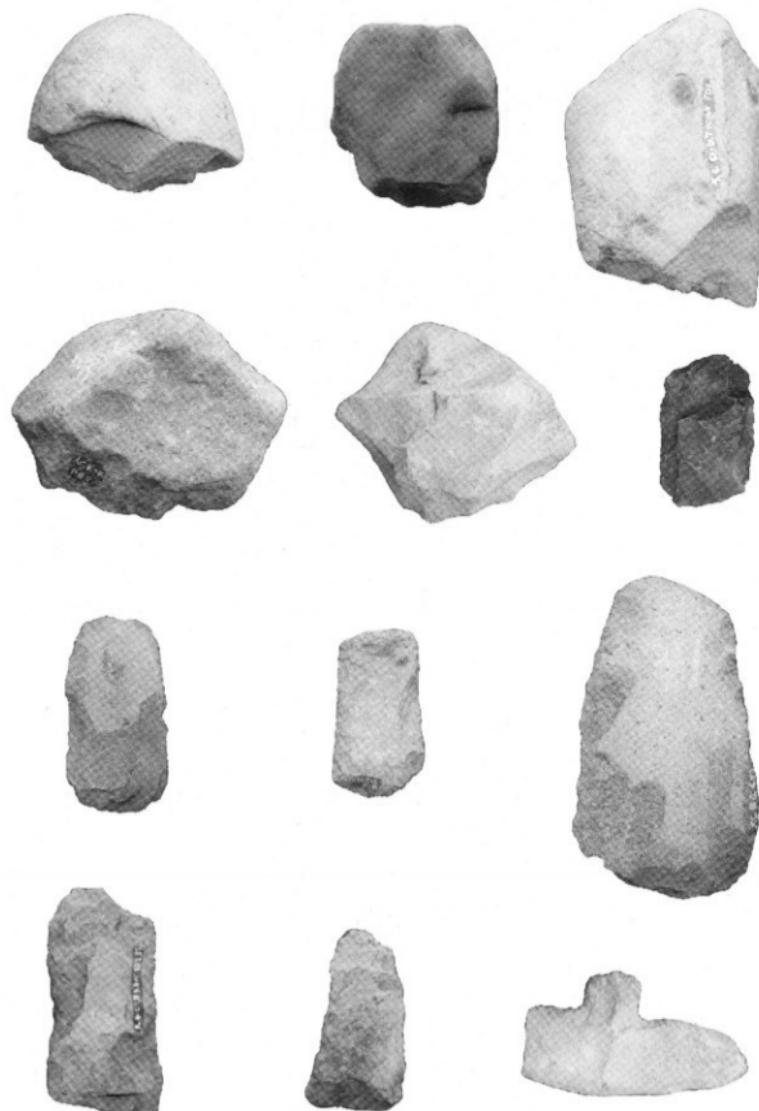
勝坂式土器の出土状態及び復元土器

図版97 大平C遺跡第II次調査の出土遺物(11) 石器(1)



石槍・局部磨製石斧・石鎌・礫器

図版98 大平C遺跡第II次調査の出土遺物(12) 石器(2)



礫器・打製石斧・石匙

図版99 大平C遺跡第II次調査の出土遺物(13) 石器(3)



磨石

図版100 大平D遺跡の遺構



第1号住居址（中期・南方より）



第1号住居址の炉の状態

